永 岡 遺 跡 Ⅱ

福岡県筑紫野市大字永岡所在の遺跡調査 筑紫野市文化財調査報告書

第 26 集

1990

筑紫野市教育委員会

水 岡 遺 跡 Ⅱ



本市は福岡市のベッドタウンとして、近年急速に都市化し、開発の波にあおられております。

今回ここに報告する「永岡遺跡」は弥生時代の墓地で、二列埋葬の甕棺墓として知られており、開発計画が上がるたびにこの貴重な文化財を保存すべく協議してまいりましたが、現況での保存は難しく、昭和55年度および昭和63年度の二度、発掘調査を実施することとなり、記録保存することになりました。この発掘調査の結果、弥生時代の墓地のありかたや埋葬状態、さらに甕棺墓からは、頭の骨だけがない人骨や銅剣の刺さった人骨など多くの貴重な資料が得られました。

昭和55年度の調査に関しては概報が出ていますが、今回、昭和63年度の調査報告にあたり、昭和55年度の調査に関しましても本報告のはこびとなりました。本書が学術研究の一資料として活用され、また、文化財保護の一助となれば幸いに存じます。

なお、調査および報告書の作成にあたりましては、福岡県教育委員会文化課をはじめ、九州大学医学部解剖学第二講座、九州種苗株式会社、西鉄不動産株式会社、地元永岡の皆様など多くの方々に多大のご協力とご理解を得ました。心から感謝の意を表したいと思います。

平成2年3月31日

筑紫野市教育委員会 教育長 永 淵 正 敏

例 言

- 1. 本書は福岡県筑紫野市大字永岡に所在する永岡遺跡の第2次調査(昭和55年度)と第 3次調査(昭和63年度)の発掘調査報告書である。
- 2. 発掘調査は第2次調査が九州種苗株式会社と西鉄不動産株式会社の委託を受けて、筑紫野市教育委員会が実施し、第3次調査は九州種苗株式会社の委託を受けて、筑紫野市教育委員会が実施した。
- 3. 第2次調査にあたっては福岡県教育委員会管理部文化課の協力を得て行った。
- 4. 第2次調査での実測、写真撮影は福岡県教育委員会の浜田信也・橋口達也・川述昭人・中間研志・馬田弘稔・池辺元明・伊崎俊秋各技師と山野洋一および山村淳彦が行い、第3次調査では向田雅彦が行った。
- 5. 本書の執筆は、次のとおりである。

I	雅彦
Ⅱ・・・・・・・・・・山村	淳彦
Ⅲ-1, 2	信也
Ⅲ - 3 ·······池辺	元明
Ⅲ - 4 ~ 7 ·································	雅彦
IV ····································	雅彦
Ⅴ橋口	達也
Ⅵ	信也
¼ ····································	孝博

- 6. 遺物の実測は、山野・向田・奥村俊久と森部順子が行い、写真は向田が撮影した。
- 7. 製図は、九州歴史資料館製図室の豊福弥生氏と森田くみ子・鶴味加代子が行った。
- 8. 出土人骨に関して九州大学医学部解剖学第二講座の中橋孝博氏から写真の提供および 玉稿を頂いた。
- 9. 本書の作成にあたり福岡県教育委員会文化課の浜田信也氏・橋口達也氏・池辺元明氏のご協力を頂いた。
- 10. 本書の編集は、向田が担当した。

本 文 目 次

	₹
I はじめに	Ĺ
1. 調査に至る経過	Ĺ
2. 調査体制	L
Ⅱ 位置と環境	}
Ⅲ 第 2 次調査	;
1. 調査概要	;
2. 甕棺墓の調査	;
3. 木棺墓の調査	8
4. 土壙墓の調査	3
5. 祭祀土壙の調査	6
6. 土壙の調査	1
7. 中世土壙墓の調査	5
№ 第3次調査	8
1. 調査概要	
2. 遺構と遺物	8
V 永岡遺跡出土の甕棺および甕棺墓 ······ 15	6
1. はじめに	6
2. 甕棺の分類	6
3. 墓地の変遷	3
4. 弥生時代における戦闘を示す好資料	1
5. おわりに	3
VI 二列埋葬について ····· 17	5
Ⅲ 永岡遺跡出土の弥生時代人骨 18	3
1. はじめに	3
2. 遺跡・資料	3
3. 観察・計測結果	6
4. 総括・考察	9
挿 図 目 次	
	Į
第1図 永岡遺跡周辺弥生遺跡分布図 (縮尺1/25,000) 4	1

	第2図	調査区周辺地形図(縮尺1/2500)
	(第2)	欠調査)
	第3図	1 号・3 号甕棺墓実測図(縮尺1/20) 7
	第4図	2号・4号甕棺墓実測図(縮尺1/20)
	第5図	1 号・2 号・3 号・4 号甕棺実測図(縮尺1/6) 9
	第6図	5 号・6 号甕棺墓実測図(縮尺1/20)
	第7図	5 号・6 号・8 号甕棺実測図(縮尺1/6)
	第8図	7 号・8 号・11号・12号甕棺墓実測図(縮尺1/20)
	第9図	7 号・16号・82号甕棺実測図(縮尺1/8)
	第10図	9 号・10号・13号・14号甕棺墓実測図(縮尺1/20)
	第11図	9 号・10号・13号甕棺実測図(縮尺1/6)
	第12図	15号・16号甕棺墓実測図(縮尺1/30)
	第13図	17号・18号・24号甕棺墓実測図(縮尺1/20)
	第14図	19号甕棺墓実測図(縮尺1/30)
	第15図	12号・18号・24号・25号甕棺実測図(縮尺1/6)
	第16図	20号・25号・26号甕棺墓実測図(縮尺1/30)
•	第17図	21号・22号・23号甕棺墓実測図(縮尺1/30)
	第18図	14号・17号・27号・28号甕棺実測図(縮尺1/6)
	第19図	19号・22号甕棺実測図(縮尺1/8) 24
	第20図	23号・26号・39号甕棺実測図(縮尺1/8)
	第21図	15号・20号・21号甕棺実測図(縮尺1/12)
•	第22図	27号・28号・29号・31号甕棺墓実測図(縮尺1/20) 28
	第23図	30号・39号甕棺墓実測図(縮尺1/30)
	第24図	32号・33号・34号・35号甕棺墓実測図(縮尺1/20) 30
	第25図	36号・37号・38号・41号甕棺墓実測図(縮尺1/20)
	第26図	29号・31号・33号・38号甕棺実測図(縮尺1/6)
	第27図	34号・35号・37号甕棺実測図(縮尺1/6)
	第28図	30号・40号・55号甕棺実測図(縮尺1/12)
	第29図	40号甕棺墓実測図(縮尺1/30)
		42号・43号甕棺墓実測図(縮尺1/20)
		36号・42号・43号甕棺実測図(縮尺1/6)
		44号・45号・46号甕棺墓実測図(縮尺1/30)
	第33図	44号・45号・46号甕棺実測図(縮尺1/8) 40

	頁	ĺ
第34図	47号・48号甕棺墓実測図(縮尺1/20) 41	l
第35図	47号・48号・50号甕棺実測図(縮尺1/6)42	2
第36図	49号甕棺墓実測図(縮尺1/30) 43	3
第37図	49号・78号甕棺実測図(縮尺1/12) 44	1
第38図	50号・51号・52号甕棺墓実測図(縮尺1/20)45	5
第39図	53号・57号・58号・59号甕棺墓実測図(縮尺1/20) 46	ŝ
第40図	54号・56号・62号・66号甕棺墓実測図(縮尺1/20) 47	7
第41図	51号・54号・56号甕棺実測図(縮尺1/8) 48	3
第42図	52号・53号・57号甕棺実測図(縮尺1/6) 49	9
第43図	55号甕棺墓実測図(縮尺1/30) 50	Э
第44図	60号・61号・63号・64号甕棺墓実測図(縮尺1/20) 51	1
第45図	60号・61号・67号甕棺実測図(縮尺1/6) 53	3
第46図	62号・66号・83号甕棺実測図(縮尺1/8) 54	1
第47図	63号・64号・68号甕棺実測図(縮尺1/6) 55	5
第48図	67号・68号・70号・71号・72号甕棺墓実測図(縮尺1/20) 57	7
第49図	70号・73号・75号・88号甕棺実測図(縮尺1/6)58	3
第50図	73号・75号・76号・77号甕棺墓実測図(縮尺1/20) 55	9
第51図	74号甕棺墓実測図(縮尺1/30) 60	Э
第52図	78号・79号・83号甕棺墓実測図(縮尺1/30) 62	2
第53図	80号・81号・82号・85号甕棺墓実測図(縮尺1/20) 63	3
第54図	77号・81号・85号・86号甕棺実測図(縮尺1/6) 64	4
第55図	79号・101号甕棺実測図(縮尺1/8)65	5
第56図	84号・89号甕棺墓実測図(縮尺1/30) 66	6
第57図	86号・87号・88号甕棺墓実測図(縮尺1/20) 67	7
第58図	90号・91号甕棺墓実測図(縮尺1/30) 68	8
第59図	74号・89号・90号甕棺実測図(縮尺1/12) 69	9
第60図	92号・93号甕棺墓実測図(縮尺1/30) 70	0
第61図	84号・91号・92号甕棺実測図(縮尺1/8) 71	1
第62図	87号・96号甕棺実測図(縮尺1/6) 72	2
第63図	94号甕棺墓実測図(縮尺1/30)	3
第64図	95号甕棺墓実測図(縮尺1/30)	4
第65図	93号・94号・95号甕棺実測図(縮尺1/12) 75	5
第66図	96号・101号甕棺墓実測図(縮尺1/20) 76	6

		頁
第67図	97号甕棺墓実測図(縮尺1/30)	77
第68図	97号甕棺実測図(縮尺1/12)	78
第69図	98号甕棺墓実測図(縮尺1/30)	79
第70図	99号甕棺墓実測図(縮尺1/30)	80
第71図	100号甕棺墓実測図(縮尺1/30)	81
第72図	98号・99号・100号甕棺実測図(縮尺1/12)	82
第73図	100号甕棺墓出土石器実測図(縮尺1/2)	83
第74図	15号・30号・49号号甕棺墓人骨出土状態実測図(縮尺1/15)	84
第75図	55号・78号・90号甕棺墓人骨出土状態実測図(縮尺1/15)	85
第76図	93号・94号・95号甕棺墓人骨出土状態実測図(縮尺1/15)	86
第77図	97号・98号・100号甕棺墓人骨出土状態実測図(縮尺1/15)	87
第78図	1 号木棺墓実測図(縮尺1/30)	108
第79図	2 号・3 号木棺墓実測図(縮尺1/20)	109
第80図	4 号・5 号木棺墓実測図(縮尺1/20)	111
第81図	6 号木棺墓実測図(縮尺1/20)	112
第82図	7号・8号木棺墓実測図(縮尺1/30)	113
第83図	9 号・10号木棺墓実測図(縮尺1/30)	114
第84図	11号・12号木棺墓実測図(縮尺1/30)	115
第85図	13号・14号木棺墓実測図(縮尺1/30)	116
第86図	15号木棺墓実測図(縮尺1/30)	117
第87図	16号・20号木棺墓実測図(縮尺1/30)	118
第88図	17号木棺墓実測図(縮尺1/30)	119
第89図	18号・19号木棺墓実測図(縮尺1/30)	120
第90図	11号木棺墓出土石器実測図(縮尺1/2)	121
第91図	1 号・ 2 号・ 3 号土壙墓実測図(縮尺1/20)	124
第92図	4号・5号土壙墓実測図(縮尺1/20)	125
第93図	1 号・ 4 号祭祀土壙実測図(縮尺1/40)	127
第94図	2号・3号祭祀土壙実測図(縮尺1/60)	128
第95図	1 号・ 2 号祭祀土壙出土土器実測図(縮尺1/3)	129
第96図	3 号祭祀土壙出土土器実測図(縮尺1/4)	130
第97図	3 号祭祀土壙出土土器実測図(縮尺1/3)	131
第98図	5 号祭祀土壙実測図(縮尺1/60)	132
第99図	6 号・ 7 号・11号・12号祭祀土壙実測図(縮尺1/30)	133

			頁
	第100図	8号・9号祭祀土壙実測図(縮尺1/60)	134
	第101図	5号・6号・7号・8号・15号祭祀土壙出土土器実測図(縮尺1/3)	135
	第102図	5 号祭祀土壙出土土器実測図(縮尺1/2)	136
	第103図	6号・9号祭祀土壙出土土器実測図(縮尺1/4)	137
	第104図	9 号祭祀土壙出土土器実測図(縮尺1/2)	137
	第105図	10号・13号・15号祭祀土壙実測図(縮尺1/30)	138
	第106図	14号・16号・17号・18号祭祀土壙実測図(縮尺1/30)	139
	第107図	1号・2号土壙実測図(縮尺1/20)	141
	第108図	3号・4号・5号土壙実測図(縮尺1/30)	142
	第109図	2号・5号土壙出土土器実測図(縮尺1/3)	143
	第110図	1号・2号中世土壙墓実測図(縮尺1/30)	144
	第111図	3 号中世土壙墓実測図(縮尺1/30)	145
	(第3次	調査)	
	第112図	甕棺墓実測図(縮尺1/30)	149
	第113図	甕棺墓人骨出土状態実測図(縮尺1/15)	149
	第114図	甕棺実測図(縮尺1/12)	150
	第115図	木棺墓実測図(縮尺1/30)	151
	第116図	1 号祭祀土壙実測図(縮尺1/40)	152
	第117図	2号・3号祭祀土壙実測図(縮尺1/40)	153
	第118図	2号・3号祭祀土壙出土土器実測図(縮尺1/4)	154
	第119図	K ∏ a 式の甕棺(縮尺1/12) ·······	158
	第120図	K Ⅱ a 式併行期の甕棺(縮尺1/8) ·······	159
•	第121図	K [[b 式の甕棺(縮尺1/12)	160
	第122図	K Ⅱ b 式併行期の甕棺(縮尺1/8) ····································	161
	第123図	K Ⅲ c 式の甕棺(縮尺1/12)	162
	第124図	K Ⅲ c 式併行期の甕棺(縮尺1/8) ····································	
	第125図	K Ⅲ a 式の甕棺(縮尺1/12)	
	第126図	北部九州弥生人を基準とした偏差折線(男)	
	第127図	ペンロースの形態距離 (男・頭蓋 9 項目)	
	第128図	主成分分析 (男・頭蓋 9 項目)	202

表 目 次

		真
表 1		一覧表
表 2		覧表
表 3	木棺墓	一覧表
表 4	永岡遺	跡埋葬遺構一覧表
表 5	永岡遺	跡出土弥生人骨一覧表 184
表 6	永岡遺	跡出土弥生人骨の性・年齢構成 186
表 7	永岡遺	跡出土弥生人骨・頭蓋計測値
表 8	主要頭	蓋計測値の比較(男性)
表 9	主要頭	蓋計測値の比較(女性)
表10	上肢骨	計測値の比較(男性,左)
表11	上肢骨	計測値の比較(女性, 左) 192
表12	下肢骨	計測値の比較(男性,左) 193
表13	下肢骨	計測値の比較(女性, 左)
表14	四肢骨	の長・周径比の比較(男性,左)
	,	
表15	推定身	/長の比較
表15	推定身	·長の比較 ······· 196
表15	推定身	·長の比較 ····································
表15	推定身	
表15	推定身 1(1)	図版目次
		図 版 目 次 本文対照頁
	1(1)	図 版 目 次 本文対照頁 第 2 次調査区全景 (上空から)
図版	1(1)	図 版 目 次 本文対照頁 第 2 次調査区全景 (上空から) 6 第 3 次調査区全景 (上空から) 148
図版	1 (1) (2) 2 (1)	図 版 目 次 第 2 次調査区全景 (上空から) 本文対照頁 第 3 次調査区全景 (上空から) 6 第 3 次調査医全景 (上空から) 148 第 3 次調査整棺墓 (B K - 1) 148
図版図版	1 (1) (2) 2 (1) (2)	図版目次 第2次調査区全景(上空から) 4文対照頁 第3次調査区全景(上空から) 6 第3次調査甕棺墓(上空から) 148 第3次調査甕棺墓(BK-1) 148 第3次調査甕棺墓人骨出土状態 148
図版図版	1 (1) (2) 2 (1) (2) 3 (1)	図版目次 本文対照頁 第2次調査区全景(上空から) 6 第3次調査区全景(上空から) 148 第3次調査甕棺墓(BK-1) 148 第3次調査甕棺墓人骨出土状態 148 第3次調査売棺墓人骨出土状態 150
図版図版図版	1 (1) (2) 2 (1) (2) 3 (1) (2)	図 版 目 次第 2 次調査区全景 (上空から)6第 3 次調査区全景 (上空から)148第 3 次調査甕棺墓 (B K - 1)148第 3 次調査甕棺墓人骨出土状態148第 3 次調査木棺墓150第 3 次調査 1 号祭祀土壙151
図版図版図版	1 (1) (2) 2 (1) (2) 3 (1) (2) 4 (1)	図版目次第2次調査区全景(上空から)6第3次調査区全景(上空から)148第3次調査甕棺墓(BK-1)148第3次調査甕棺墓人骨出土状態148第3次調査木棺墓150第3次調査1号祭祀土壙151第3次調査2号祭祀土壙151
図版 図版 図版	1 (1) (2) 2 (1) (2) 3 (1) (2) 4 (1) (2)	図 版 目 次第 2 次調査区全景 (上空から)6第 3 次調査区全景 (上空から)148第 3 次調査甕棺墓 (B K - 1)148第 3 次調査甕棺墓人骨出土状態148第 3 次調査木棺墓150第 3 次調査 1 号祭祀土壙151第 3 次調査 2 号祭祀土壙151第 3 次調査 3 号祭祀土壙152
図版 図版 図版	1 (1) (2) 2 (1) (2) 3 (1) (2) 4 (1) (2) 5 (1)	図版目次第2次調査区全景(上空から)6第3次調査区全景(上空から)148第3次調査甕棺墓(BK-1)148第3次調査甕棺墓人骨出土状態148第3次調査木棺墓150第3次調査1号祭祀土壙151第3次調査2号祭祀土壙151第3次調査3号祭祀土壙152SK-15甕棺17

	ाज भद	C (1)	CV 20 班 1	
	図版		SK - 30甕棺	
		(2)	SK - 40甕柏 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	
		(3)	SK — 49 甕棺 ···································	
		(4)	SK - 55甕棺 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	
	図版	7(1)	SK - 74 甕棺 · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	
		(2)	SK - 78甕棺 · · · · · · · 60	
		(3)	SK-89甕棺 ······· 74	
		(4)	SK-90甕棺 ······ 77	
	図版	8 (1)	SK-93甕棺 ······ 78	
		(2)	SK-94甕棺 ····································	
	•	(3)	SK-95甕棺 ······ 78	
		(4)	SK-97甕棺 ······ 79	
	図版	9 (1)	SK-98甕棺 ····· 80	
* 4		(2)	SK-99甕棺 ····· 81	
		(3)	SK-100甕棺 ······ 81	
		(4)	BK-1 甕棺 ······ 148	
	図版	10(1)	SK-23甕棺 ······ 19	
	•	(2)	SK-54甕棺 ······ 43	
		(3)	SK-84甕棺 ····· 61	
		(4)	SK-101甕棺 ······ 83	
	図版	11(1)	SK-6 甕棺 ······ 7	
		(2)	SK-8 甕棺 ······10	
		(3)	SK-25甕棺 ······ 27	
		(4)	SK-28甕棺 ······ 27	
	図版	12(1)	SK-35甕棺 ······ 31	
			SK-50甕棺 ······ 41	
			SK-88甕棺 ······ 74	
		(4)	SK-92甕棺 ······ 78	
	図版	13	祭祀土壙出土土器 126・132・134・136	
	図版	14(1)	4	
		(2)	出土石器	
	図版	15(1)	and the second s	
			SK-97出土人骨(頭蓋上面・正面・側面) 186	

図版	16(1)	K-38出土人骨(頭蓋上面・正面・側面)	186
	(2)	顎関節異常 (K-36)	198
	(3)	抜歯 (I ₂) (K-48) ······	197
図版	17(1)	銅剣嵌入例 (SK-100)	199
	(2)	右眼窩上部に傷痕のある人骨 (K-10)	197
図版	18	銅剣切先嵌入例 (SK-95)	198
		付図	

付図1 第2次調査遺構配置図(縮尺1/100)

付図2 第3次調査遺構配置図(縮尺1/100)

付図3 永岡遺跡甕棺の型式分類と出土人骨 (縮尺1/150)

I はじめに

1. 調査に至る経過

永岡遺跡は、九州種苗株式会社の農場内に所在する。本遺跡は、昭和47年に国道3号線バイパス建設にかかる事前の発掘調査(第1次調査)で、その一部が確認され、昭和51・52年に福岡県教育委員会が「福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告第4・5集」で永岡甕棺遺跡として報告し、遺跡は調査区外にも広がることを指摘していた。

昭和54年には、九州種苗株式会社が所有する農場の一部を宅地造成したい旨の協議を筑紫野市教育委員会に申し入れた。市教育委員会は、先の発掘調査の成果から宅地造成計画地に関連する遺構の所在が考えられることから、その保護措置について協議を重ねたが、県教育委員会ならびに造成地の譲渡先である西鉄不動産株式会社を加えた協議の結果、試掘調査を実施して遺跡の有無および規模などを確認することとなった。昭和55年3月に試掘調査を実施した。その結果、遺跡は宅造予定地の東半部に集中して遺存し、甕棺墓などの遺構が確認された。試掘調査の成果と宅地造成計画から事前の発掘調査を実施する必要があることから、事業者と協議を進め、発掘調査は昭和55年度に実施することとなり、昭和55年4月2日から6月7日まで発掘調査を実施した(第2次調査)。この発掘調査に要した経費は、九州種苗株式会社および西鉄不動産株式会社に負担をお願いし、これに市費を加えた。

昭和61年に至ると九州種苗株式会社は、農場の残地の全てを宅地造成することとなり、場内の遺跡の有無やその保護措置について市教育委員会に協議を求めてきた。市教育委員会では試掘調査を実施したが、昭和47年に発掘調査した遺構群の一部が遺存するのみであることが確認され、これについて発掘調査して記録保存の措置を講ずる必要がある旨事業者と協議した。その結果、昭和63年10月17日から11月12日まで発掘調査を実施し(第3次調査)、これに要した経費は九州種苗株式会社にお願いした。

この第3次調査の実施により本遺跡の全容がほぼ明らかとなったことから、市教育委員会では、第2次、第3次調査の成果を報告すべく平成元年度に市の事業として整理・報告書の作成事業を実施した。

2. 調查体制

発掘調査の関係者は次のとおりである。

〔第2次調査〕

総 括 筑紫野市教育委員会

教育長 萩尾 利弘

庶 務 筑紫野市教育委員会 社会教育課

課 長 武藤 久雄

筑紫野市教育委員会 社会教育課 豊福 茂美 係 長 発掘調査 福岡県教育委員会 管理部 文化課 主任技師 浜田 信也 主任技師 橋口 達也 主任技師 川述 昭人 主任技師 中間 研志 馬田 弘稔 主任技師 師 池辺 元明 技 技 師 伊崎 俊秋 筑紫野市教育委員会 社会教育課 主 事 山野 洋一 主 事 山村 淳彦 〔第3次調査〕 総 括 筑紫野市教育委員会 教育長 松田 康男 庶 務 筑紫野市教育委員会 社会教育課 課 長 山村 茂(前任) 川原 孝之 山野 洋一 社会教育課 文化財係 係 長 社会教育課 文化財係 主 事 奥村 俊久 発掘調查 筑紫野市教育委員会 社会教育課 文化財係 嘱 託 向田 雅彦

古家 政利 山内 シゲノ 岡部 孝徳

岡部 清子

現場作業員

室内整理作業員 村上 喜代 井上 惇子 竹田 スミ子 大平 繁子

林田 由美 今石 淳子 中島 清美

平田 トシ子 波多江 加賀夫

室内整理補助員 森部 順子 森田くみ子 鶴味 加代子

また、発掘調査にあたっては、九州種苗株式会社をはじめ、地元永岡の方々に多大のお世話をいただき、記して謝意を表します。

Ⅲ 位置と環境(第1・2図)

永岡遺跡は、福岡県筑紫野市大字永岡に所在する。この遺跡は、西鉄桜台駅から徒歩10分ほどの所にあり長い間大規模な開発の手が加わることもなく、農地のまま地下に保存されてきたが、昭和47年に福岡南バイパスが開通した後は急速に周囲の宅地化が進み、それに伴う調査が余儀なくされた。

さて、永岡遺跡は背振山塊から派生した低丘陵上にあり、東側には朝倉地方へ肥沃な平野が広がっている。平野部からの比高はおおむね12mである。同遺跡は昭和45年・47年・54年の3度にわたる調査で弥生時代中期を主体とした墓地と溝が検出されており、墓地に対峙した集落の存在が推定されている。この丘陵の南には谷を隔てて別の丘陵があり、やはり溝によって区分された弥生時代中期の住居と墓地の存在が確認されている。また、北西には谷を隔てた丘陵上に竹敷町遺跡がある。すなわち、この一帯はあたかも手のひらを広げたような各丘陵上に、それぞれ独立性をもった集団が占拠していた状況が想定されるのである。

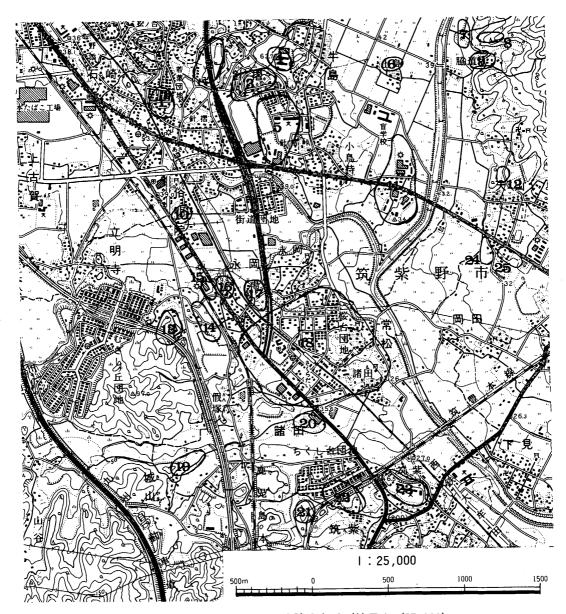
8

註1 「永岡遺跡」『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告書』第1集 1970 福岡県教育委員会 「永岡甕棺遺跡・図版編」『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告書』第4集 1976 福岡県教 育委員会

「永岡甕棺遺跡・本文編」『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告書』第 5 集 1977 福岡県教 育委員会

「永岡遺跡」『筑紫野市文化財調査報告書』第6集 1981 築紫野市教育委員会

- 註 2 「福岡県筑紫郡筑紫野町常松遺跡調査報告書」『別府大学文学部考古学研究報告書』1 1970 別府 大学文学部
- 計3 福岡県遺跡等分布地図(筑紫野市・春日市・大野城市・筑紫郡編) 1980 福岡県教育委員会
- 計4 未報告。現在、築紫野市教育委員会において整理中である。
- 註 5 「道場山遺跡」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』 ХХ V 1978 福岡県教育委員会
- 註 6 「御笠地区遺跡」『筑紫野市文化財調査報告書』第15集 1986 筑紫野市教育委員会
- 註7 『弥生の地宝を掘る』1988 筑紫野市立歴史民俗資料館 なお、報告書は筑紫野市教育委員会において作成中である。



第1図 永岡遺跡周辺弥生遺跡分布図 (縮尺1/25,000)

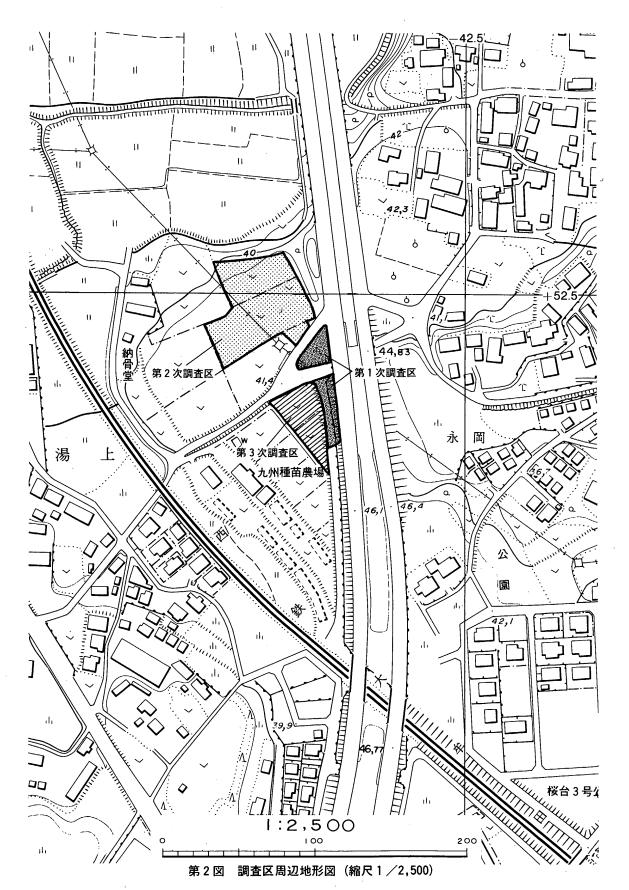
- 1. 針摺遺跡 2. 野黒坂遺跡
- 3. イカリノ上遺跡
- 4. 上ノ浦遺跡
- 5. 峠山遺跡
- 6. 御笠地区G遺跡
- 7. 宮崎遺跡

- 8. シメノグチ遺跡
- 9. 脇道遺跡
- 10. 俗明院遺跡
- 11. 宮崎遺跡
- 13. 大牟田西遺跡
- 14. 大牟田東遺跡
- 16. 竹敷町遺跡

- 17. 永岡遺跡
- 18. 常松遺跡
- 19. 城山遺跡
- 20. 城山遺跡
- 22. 倉吉遺跡
- 23. 矢倉遺跡
- 24. 日焼遺跡

25. 鞭掛遺跡

※12,15,21は散布地



Ⅲ 第2次調査

1. 調查概要

第2次調査では、第1次調査と同じく弥生時代の墓地が検出された。先の調査で検出された 墓地と一連の遺構であり、墓地の構成は第1次調査のそれとほぼ同様である。すなわち、甕棺 墓、木棺墓とこれらの両側に設けられた竪穴から成っている。甕棺墓99基、木棺墓20基、土壙 墓5基、竪穴20基のほか中世代に属する土壙墓3基が検出された。

弥生時代の墓地遺構は北西へやや傾斜する平坦部に配されている。第1次調査と同様に成人 用棺を二列に配し、その間に狭長な空間があり、埋葬墓列の両側には竪穴を列に沿って配して いる。これらの竪穴には、土器やその破片が納められており、墓域を区画すると同時に祭祀と して共用していたものであろう。

墓列は成人用棺が二列に南北にやや弧を描きながら並び、これに小児棺が重複したり、成人 用棺の周辺に埋置されている。成人用棺は、甕棺のほか木棺があり、第1次調査と異なる。

墓域を示す竪穴は不整形の大型のものが多く、これらを連繋する溝状遺構はない。また、埋葬列の両端を区切る(墓域を示す)遺構は特に認められなかった。

第3次調査は、第1次調査地区の北端で西側にあたる部分を発掘調査したもので、第1次調査で検出した遺構群に連続する遺構が検出された。甕棺墓1基、土壙墓1基、竪穴(祭祀)3 基である。

以下、各遺構について報告するが、甕棺墓に使用されている土器の詳細については、表にしてとりまとめている。

2. 甕棺墓の調査

1号甕棺墓(第3・5図)

墓列の最端に位置する小児用棺である。削平によりわずかに遺存するもので、楕円形状の壙に埋置している。下甕は甕で棺底に孔を穿つ。上甕は壺で口頸部を打ち欠き使用している。

2号甕棺墓(第4・5図)

1号木棺墓により墓壙が削られており、木棺墓より古い。小児用棺で墓壙底をさらに掘り下げ棺を納めている。下は甕、上は壺を使用する。上甕の壺は口頸部を打ち欠いている。合せ口部には粘土によって目貼りする。下甕側が高くなっている。

3号甕棺墓 (第3・5図)

89号甕棺墓の墓壙内に埋置された小児用棺である。小さな墓壙に納めたもので、上下とも甕を利用している。削平により上甕は一部が遺存するのみである。89号棺より新しい。

4号甕棺墓(第4・5図)

89号甕棺墓の東に隣接して埋置される。不正方形の墓壙の一辺に傾斜する坑を穿ち棺を納める。壺利用の合口式で下甕は口縁部を上甕は口頭部を打ち欠き、下甕の口を覆うように上甕を利用している。接合部の下端を除き粘土による目貼りを施す。下甕が89号棺の墓壙に達しており、完存することから、89号棺より新しく埋置されたものである。

5号甕棺墓 (第6·7図)

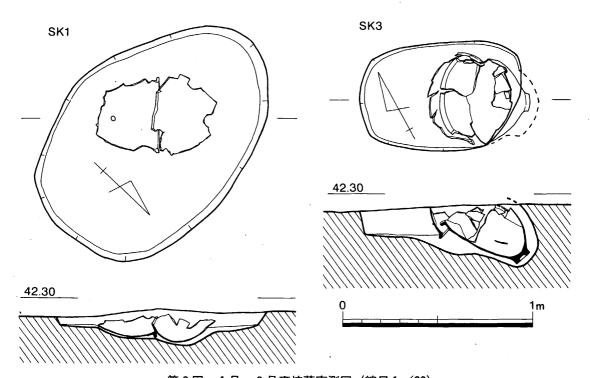
30号甕棺墓の北側に隣接し、これに並行して埋置される小児用棺である。削平により棺の一部が欠けている。楕円形状墓壙の東側に小型甕を合わせた棺を納める。接口部に粘土目貼りを施す。下甕側が高くなっている。

6号甕棺墓 (第6・7図、図版11-1)

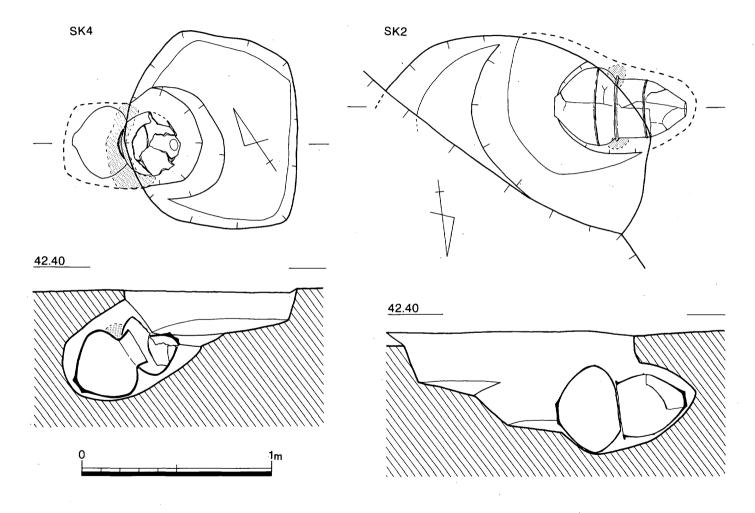
7号甕棺墓、13号木棺墓、5号土壙墓に重複し、これらより新しい。当棺は小児用棺で甕を 用いた合口式である。接口式で当部分に粘土目貼りを施す。下甕側が高くなっている。

7号甕棺墓 (第8・9図)

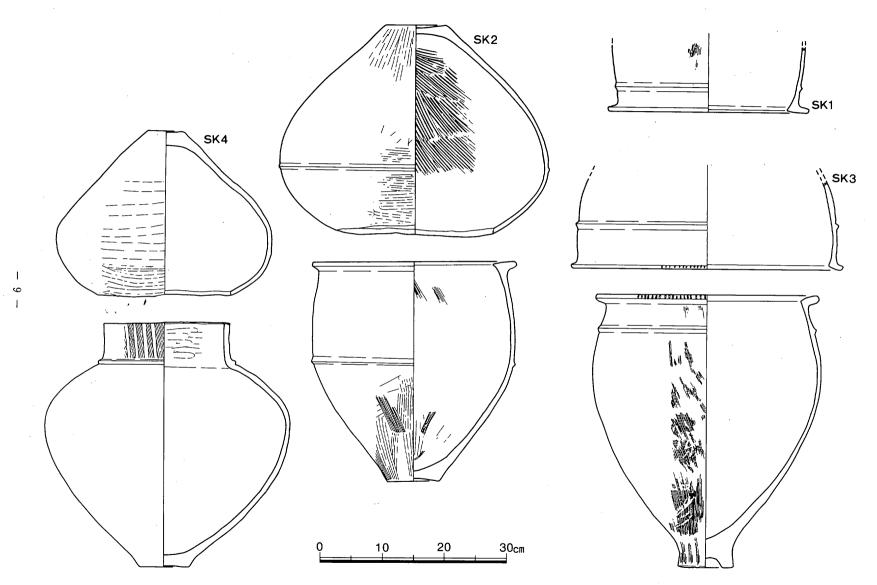
6号甕棺墓により墓壙の一部が削られる。当墓地で唯一の単式棺である。長方形の墓壙の一端に斜位に甕を納める。壙底部に残る粘土からみて、厚さ5~6 cmほどの木板を蓋としていたものと考えられる。13号木棺墓、10号土壙墓より新しい。



第3図・1号・3号甕棺墓実測図(縮尺1/20)



第4図 2号・4号甕棺墓実測図 (縮尺1/20)



第5図 1号・2号・3号・4号甕棺実測図(縮尺1/6)

8号甕棺墓(第7・8図、 図版11-2)

30号甕棺墓の墓壙を切って埋置された小児用棺である。小型甕を用いた合口式であり、下甕側が高くなっている。接口部には粘土目貼りを施す。

9号鞭棺墓 (第10・11図)

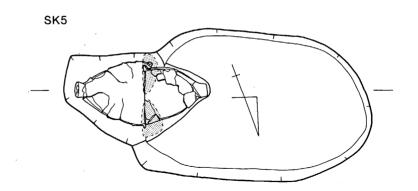
やや離れて埋置される小児用棺である。墓壙底をさらに掘り下げ棺を納める。 上を甕、下が壺の合口式である。甕の外面には煤が付着しており、日常用器の転用である。下甕の壺は胴上部より打ち欠いている。合口部に粘土目貼りを施すが、下面はない。

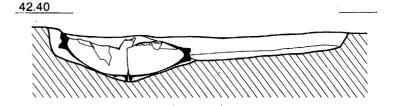
10号甕棺墓 (第10・11図)

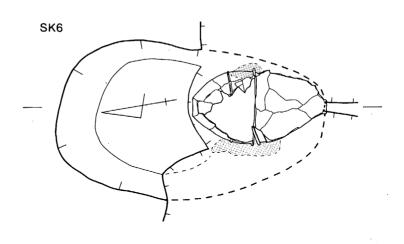
30号と42号甕棺墓の間に 埋置される小児用棺である。 小型甕を利用する合口式で ある。下甕側がやや高くな っている。粘土は接口部下 面を除き厚く目貼りしてい る。

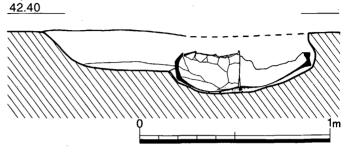
11号甕棺墓 (第8図)

30号甕棺墓壙と重複し埋置されている。削平により棺底側の一部が残るのみである。小さな墓壙いっぱいに甕を利用した合口棺を納

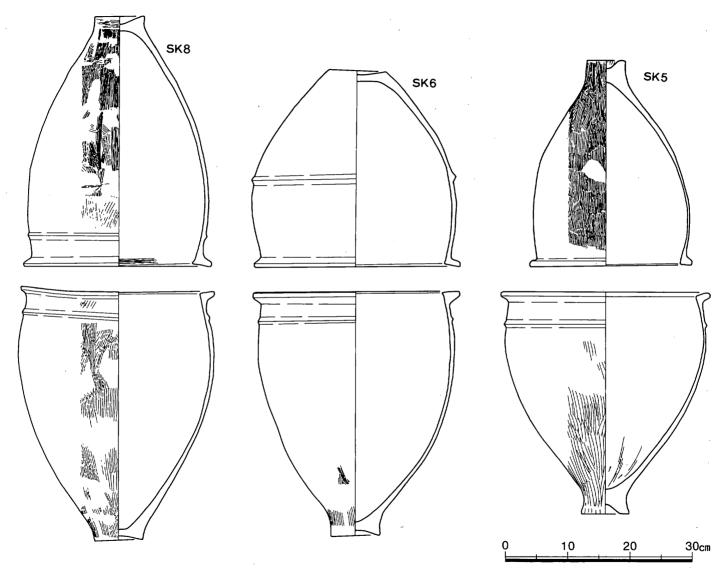




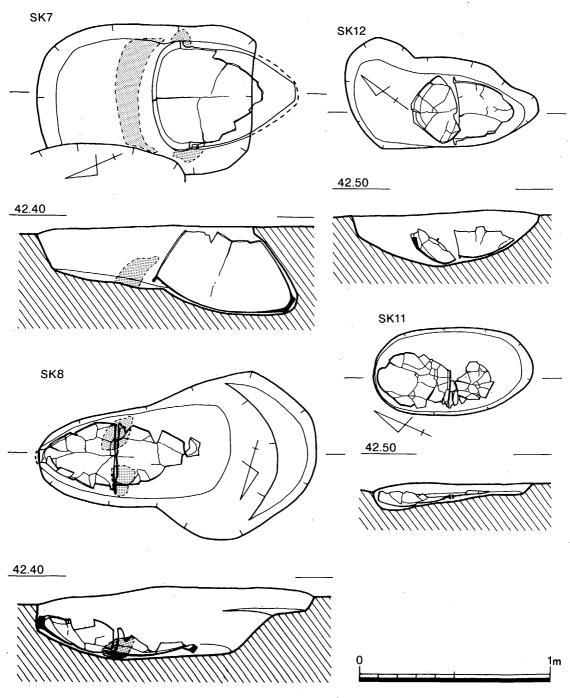




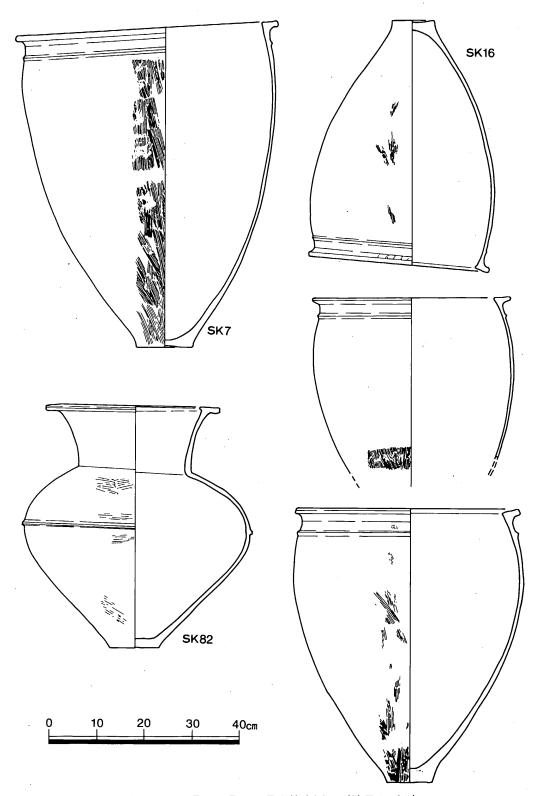
第6図 5号・6号甕棺墓実測図(縮尺1/20)



第7図 5号・6号・8号甕棺実測図(縮尺1/6)



第8図 7号・8号・11号・12号甕棺墓実測図(縮尺1/20)

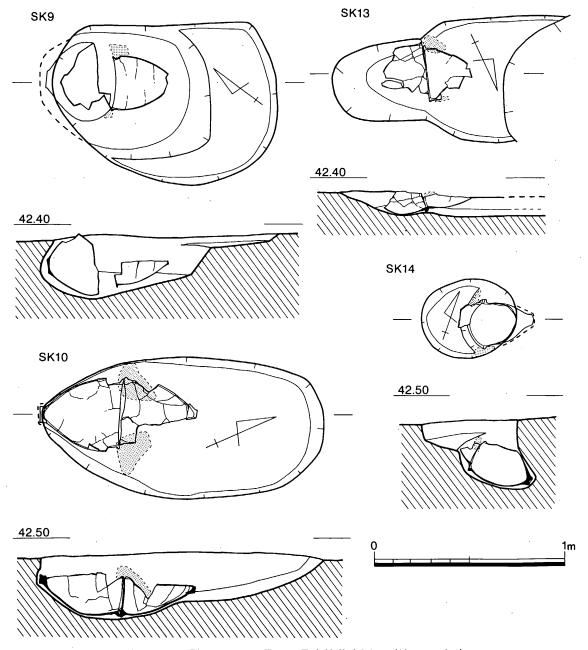


第9図 7号・16号・82号甕棺実測図(縮尺1/8)

める。接合部の粘土目貼りはない。

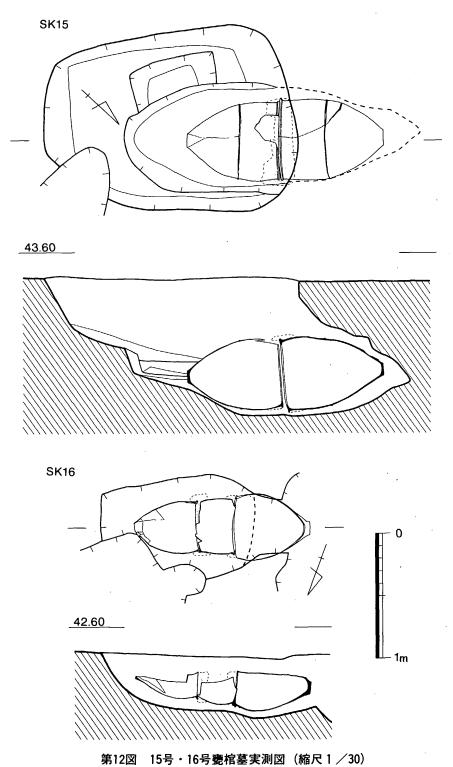
12号甕棺墓 (第8・15図)

11号甕棺墓の東に隣接して埋置される。削平により、棺上面の遺存状態は悪い。上は壺、下が甕の合口式である。壺は胴上部より上を打ち欠き利用する。下甕が高くなっている。



第10回 9号・10号・13号・14号甕棺墓実測図(縮尺1/20)

第11図 9号・10号・13号甕棺実測図(縮尺1/6)



13号甕棺墓 (第10·11図)

3号木棺墓により墓壙が削られる。小型甕を利用する合口式である。削平により棺底部の一部が遺存するのみである。下甕側が高くなっている。接口部には粘土で目貼りする。

14号甕棺墓 (第10・18図)

小さな楕円形壙の東側に深い坑を斜めに穿ち小児用棺を納める。小型甕を利用する合口式で 上甕の遺存状態は良くない。傾斜角の強い埋置方法で当墓地では数少ない例である。粘土目貼 りは接合部の上部のみである。

15号甕棺墓 (第12・21・74図、図版5-1)

成人用棺である。長方形の墓壙の一辺に横穴を穿ち、下甕を納める。上・下とも甕形土器を利用し、接口式の合口棺で、ほぼ水平に棺を置く。接口部には粘土による目貼りを施す。棺内に成年女性の人骨が残るがあまり遺存状態は良くない。両腕は胸に置き、両足は両膝を立てるように安置している。頭部には赤色顔料が塗布されていた。

16号甕棺墓 (第9・12図)

長方形の墓壙に納める三連式の棺で、当墓地で2例のうちの1つである。棺は3つの甕形土器を利用するもので、中間の甕は下胴部を打ち欠く。いわば中型棺といわれる規模のものである。合口部は粘土による目貼りを行う。墓壙の一部が削平される。17号棺より新しい。

17号甕棺墓 (第13·18図)

16号甕棺墓と近世墓により墓壙が削られる。小児用棺で、上は口頸部を打ち欠く壺、下は小型甕を利用する。甕は外面に煤が付着しており日常用器の転用と考えられる。

18号甕棺墓(第13・15図)

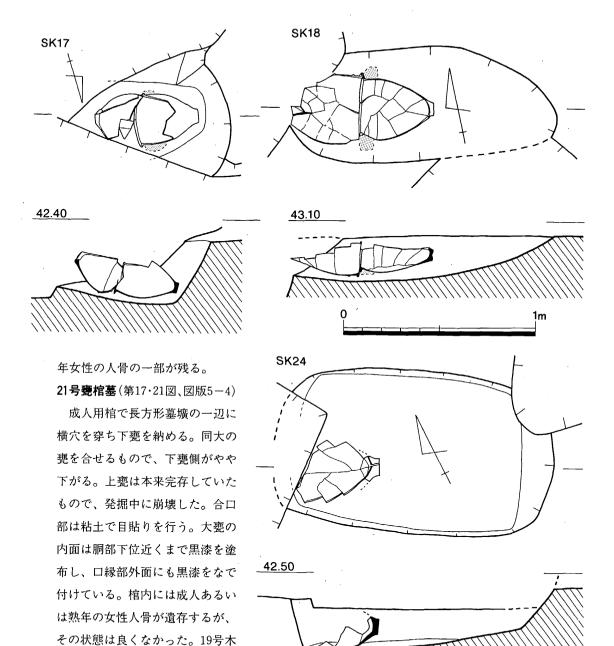
不整な長円形墓壙に小型甕を用いる合口式の小児用棺である。下甕の一部が40号甕棺墓の墓壙に、墓壙の一部が8号木棺墓に削られる。全体に削平を受け棺の上面は欠損する。合口部には粘土による目貼りを行う。下甕の外面の一部に煤が付着し、日常用器の転用と考える。

19号甕棺墓(第14・19図、図版 5 - 2)

墓列の南側で検出された。3基の小児用棺が墓壙に重複して新しく埋置されている。棺は長 方形の深い墓壙の一辺に横穴を穿ち下甕を納める成人用棺である。棺は下甕側がやや高くなっている。合口部には粘土による目貼りを行う。上甕の内面は、胴中央部から口縁にかけて、指 先による黒漆のなで付けがみられる。人骨の保存状態は不良であるが、男性と思われる成人骨である。

20号甕棺墓(第16·21図、図版 5 - 3)

長方形の墓壙の主軸と交差する方向で成人棺を埋置する。墓壙の一辺に横穴を穿ち下甕を納め、これに上甕を覆せる合口式のもので、下甕側がやや下位となる。上下甕とも内面が黒く塗られる。黒漆を塗ったものと考えられる。当墓壙には23号・24号甕棺墓が重複する。棺内に熟



第13図 17号・18号・24号甕棺墓実測図 (縮尺1/20)

棺墓、4号土壙墓と重複するが、

両者より新しい。

22号甕棺墓 (第17・19図)

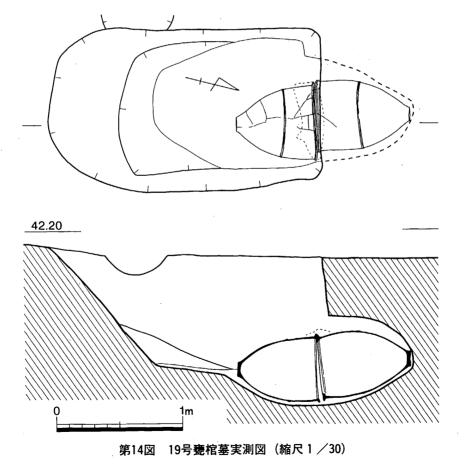
削平により棺の上面が削平されている。不整形墓壙内に納められる小児用棺で、上は口頸部を打ち欠く壺を、下は甕を利用する。下甕側が高くなっている。合口部には下面にも粘土の目貼りを施す。

23号甕棺墓 (第17·20図、図版10-1)

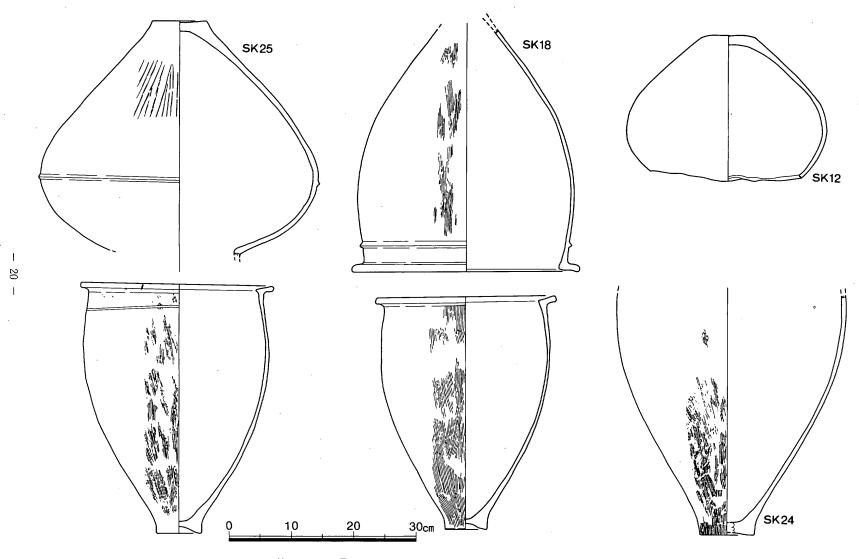
中型の甕を下甕に用いる、いわば中型の棺である。上甕は日常用器の甕の転用と考えられる。 下甕側が高くなっている。墓壙は45号甕棺墓により削られ、形状は不明である。合口部には粘 土目貼りを行うも下面には見られない。20号甕棺墓と重複し、これより新しい。

24号甕棺墓 (第13·15図)

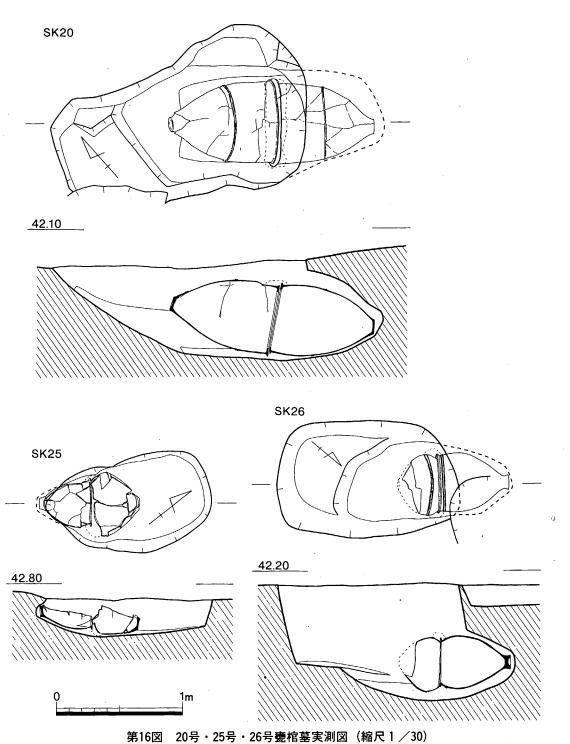
近世墓により棺の大半を欠失する。長方形墓壙に埋納されるも上甕のみが遺存する。甕底径からすると中型棺と考えられる。45号甕棺墓と9号土壙墓と重複するが、両者より新しい。 上甕の底部には若干の煤が付着する。

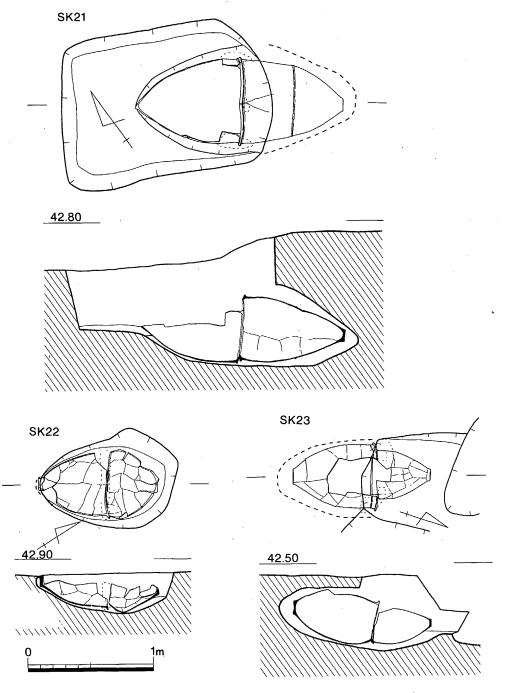


-19-

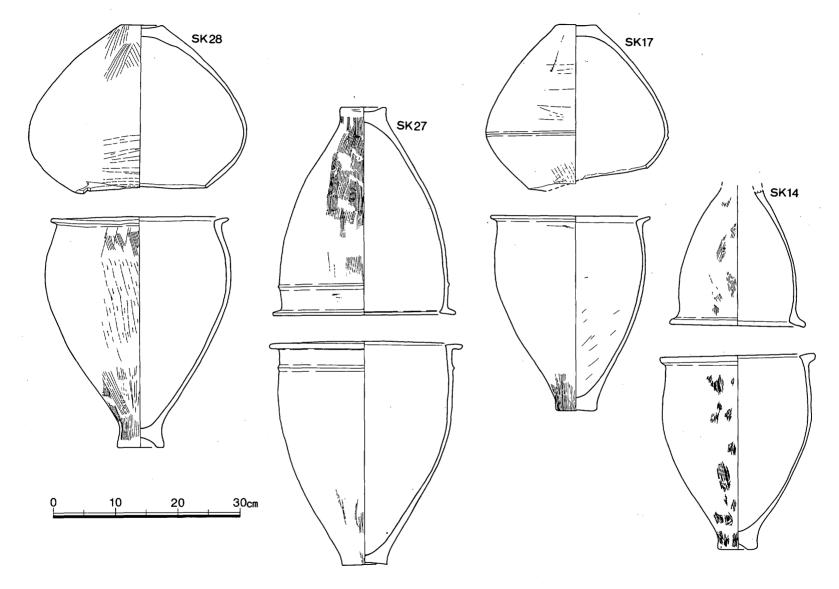


第15図 12号・18号・24号・25号甕棺実測図(縮尺1/6)

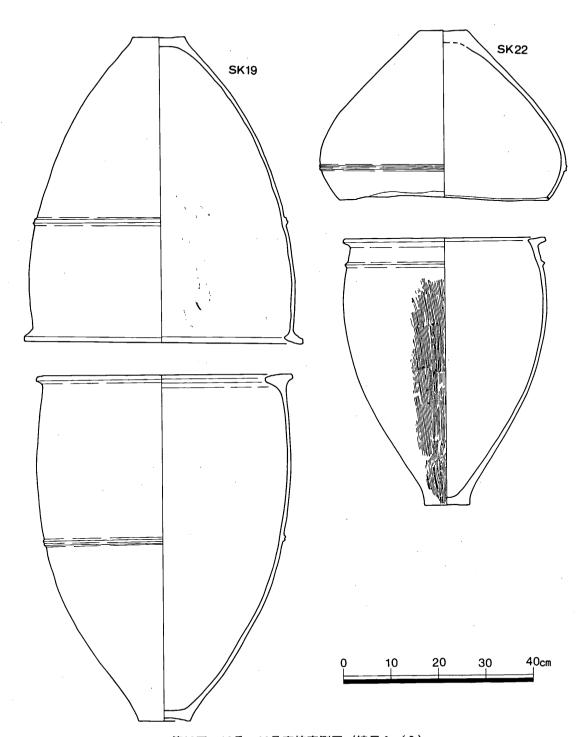




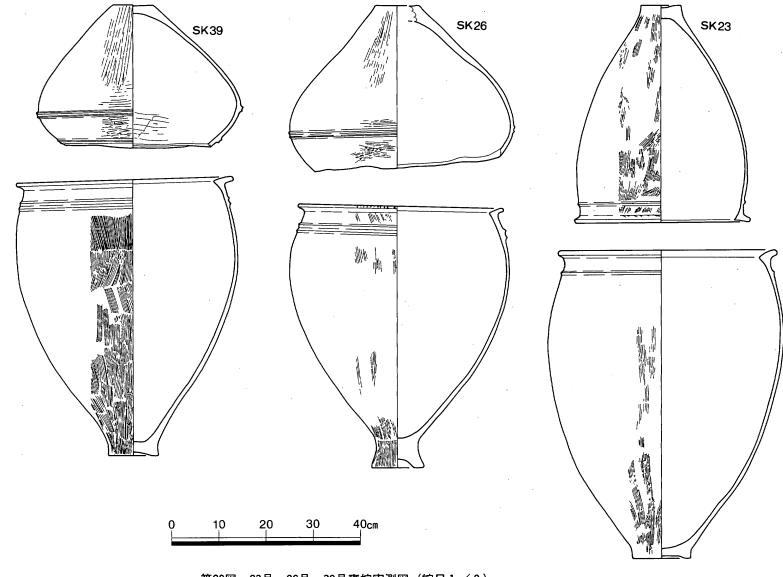
第17図 21号・22号・23号甕棺墓実測図(縮尺1/30)



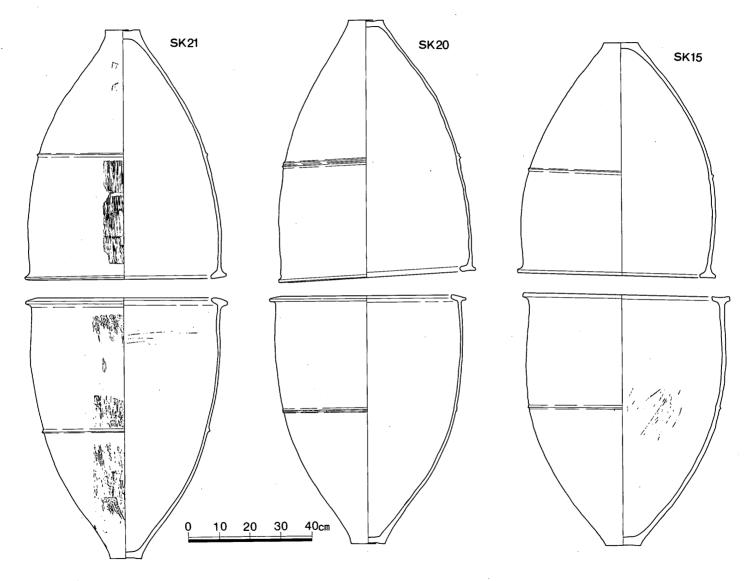
第18図 14号・17号・27号・28号甕棺実測図(縮尺1/6)



第19図 19号・22号甕棺実測図(縮尺1/8)



第20図 23号・26号・39号甕棺実測図 (縮尺1/8)



第21図 15号・20号・21号甕棺実測図 (縮尺 1/12)

25号甕棺墓 (第15·16図、図版11-3)

14号木棺墓の墓壙内上面に重複して埋置されていた。長方形をなす墓壙に横穴を穿ち、ここに下甕を納め、口頸部を打ち欠く壺を上甕とする小児用棺である。棺の傾斜は下甕側が高くなっている。

26号甕棺墓 (第16・20図)

墓列の北端側に所在する。長方形墓壙は深く、一辺に横穴を穿ち下甕を納める。上甕には口 頸部を打ち欠く壺を利用する小児用棺である。遺存状態は良好である。合口部には粘土目貼り を行う。27号・28号、34号甕棺墓と重複するが、27・28号より新しく、34号棺より古い。

27号甕棺墓 (第18·22図)

26号甕棺墓の南に接して所在する。同棺より墓壙の一部が削られる。長方形墓壙内に埋置され、墓壙主軸とは交差する方向で棺を納める。小型甕を利用した小児用で合口式である。下甕は穿たれた横穴にぴったり納まっていた。棺の傾斜は下甕側が低くなっている。合口部には粘土の目貼りを行っている。

28号甕棺墓 (第18·22図、図版11-4)

小児用棺である。墓壙は26号甕棺墓により一部を削られているが、長方形状をなす。合口式で、上に口頸部を打ち欠く壺、下は甕である。合口部には粘土の目貼りを行う。棺の傾斜は下甕側が高くなっている。完存して検出された。

29号甕棺墓(第22・26図)

30号の成人用甕棺墓と重複する。8号甕棺墓により墓壙を削られる。方形状の墓壙内に納められる小児用棺である。小型甕を利用する合口式で、かなり傾斜のある埋置であるので、上甕を固定するために下面に粘土を敷いている。

30号甕棺墓 (第23・28・74図、図版 6-1)

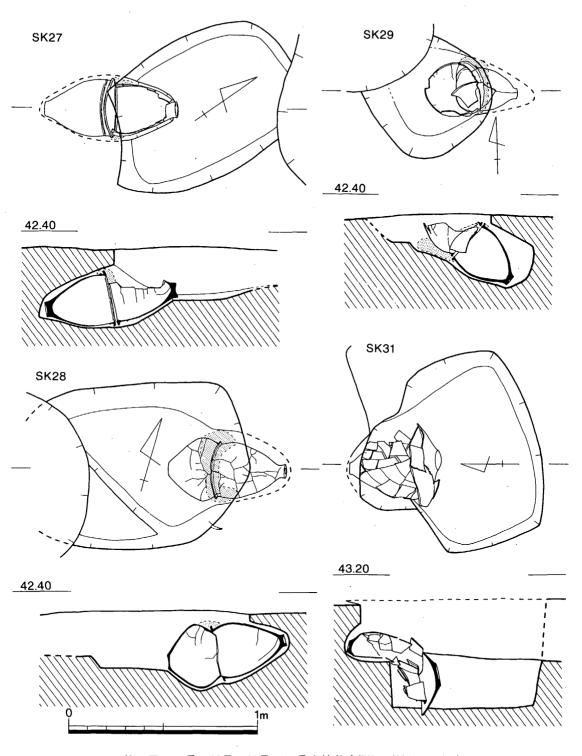
墓列の北端側に位置する成人用甕棺墓である。大きな長方形状の墓壙の一辺に横穴を穿ち、下甕を納める合口式のものである。同径同大の甕を合せるもので合口部には粘土目貼りを行う。棺の傾斜は下甕側が高くなっている。棺内には成人女性の人骨が検出されたが、遺存状態は不良であった。8号、11号、29号の小児用甕棺墓が重複するが、いずれも当棺より新しい。

31号甕棺墓(第22・26図)

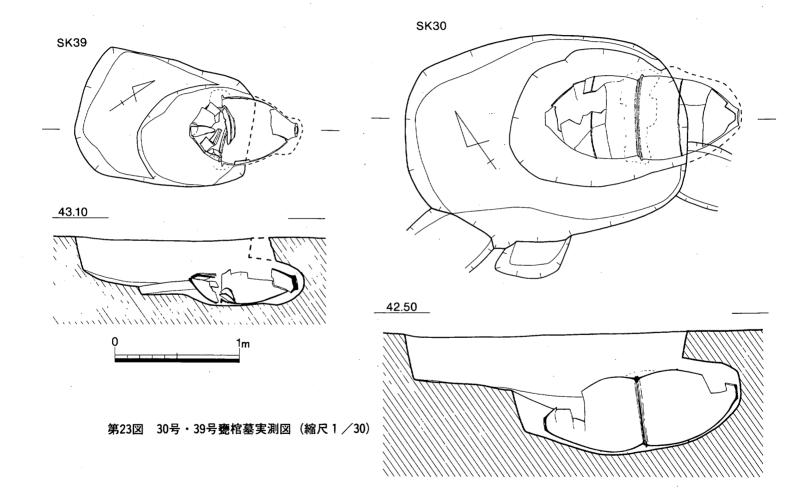
12号木棺墓と重複し、これより新しい。小児用棺で下甕は地山に穿つ横穴に差し込み、大形甕の底部を蓋として利用している。墓壙の大半が12号木棺墓の墓壙埋土中にあるため、埋め土の沈下により壙底も下がり、このため下甕口縁側と蓋が沈下した状況で検出された。

32号甕棺墓 (第24図)

97号甕棺墓(成人用棺)の墓壙内上面に埋置される小児用棺である。当棺の下にさらに50号の小児用甕棺墓がある。小型甕を利用する合口式で合口部に粘土の目貼りを行い、上甕の下面



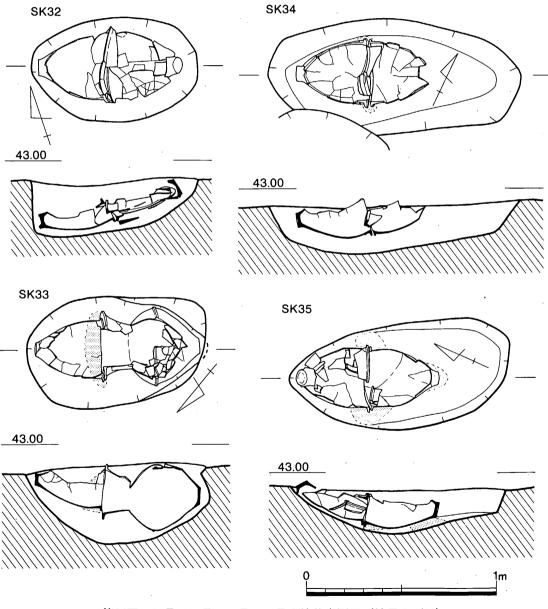
第22図 27号・28号・29号・31号甕棺墓実測図 (縮尺 1 / 20)



の口頸部には粘土を敷いている。

33号甕棺墓 (第24・26図)

34~36号小児用甕棺墓とともに55号成人用甕棺墓と重複し、55号棺よりいずれも新しい。当棺は下を完形の壺とし、口縁径にあう小型甕を上甕としている。合口部は全体に粘土による目貼りを行う。



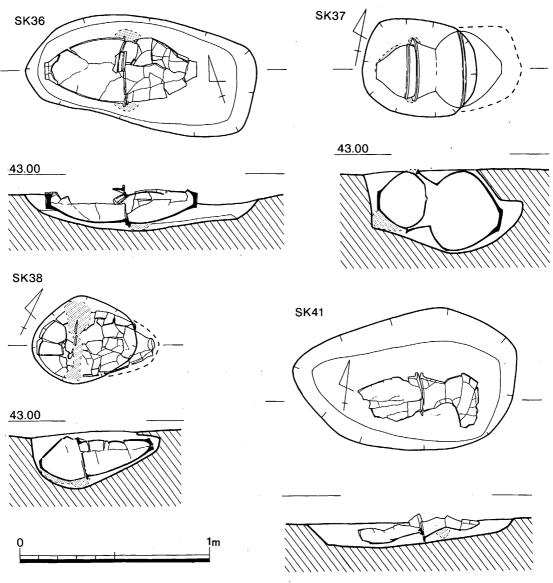
第24図 32号・33号・34号・35号甕棺墓実測図 (縮尺 1 / 20)

34号甕棺墓 (第24·27図)

55号甕棺墓の墓壙を切って埋置する。楕円形状の墓壙内に納める。棺の上部は削平により欠損するが、小型甕を利用する合口式の小児用棺である。棺の傾斜は下甕側がやや低くなる。合口部の両側面のみに粘土を置いている。

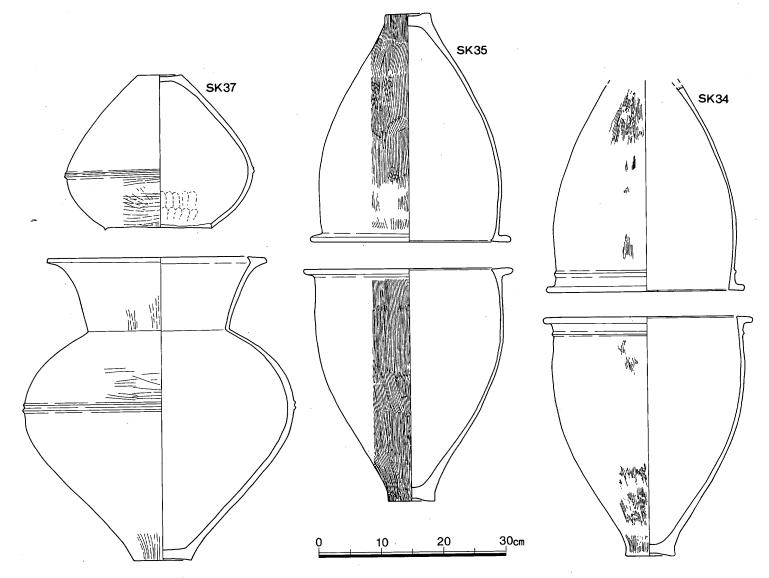
35号甕棺墓 (第24・27図、図版12-1)

55号成人棺の墓壙南隅に重複して埋置される小児用棺である。小型甕を利用する合口式である。合口部には粘土目貼りを行い、上甕の底部下面に粘土を敷いている。棺の傾斜は下甕側が高くなっている。55号棺より新しい。

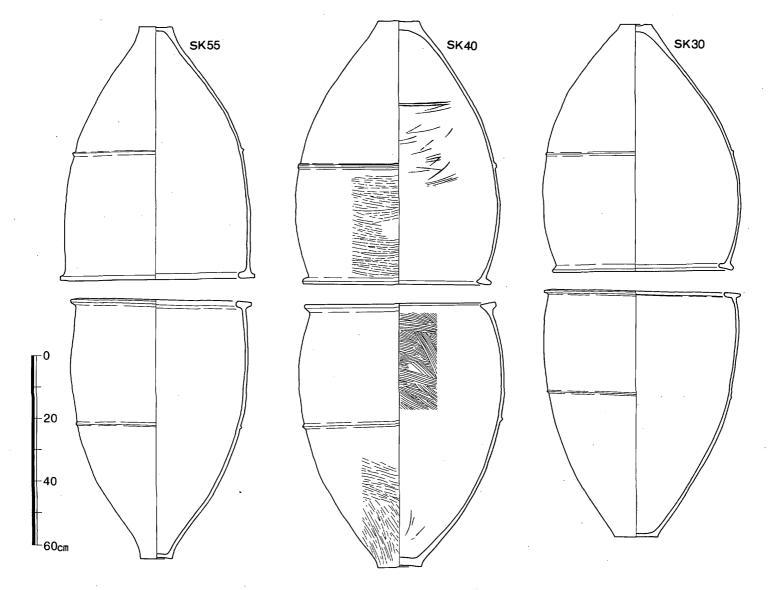


第25図 36号・37号・38号・41号甕棺墓実測図 (縮尺 1/20)

第26図 29号・31号・33号・38号甕棺実測図(縮尺 1 / 6)



第27図 34号・35号・37号甕棺実測図(縮尺1/6)



第28図 30号・40号・55号甕棺実測図 (縮尺1/12)

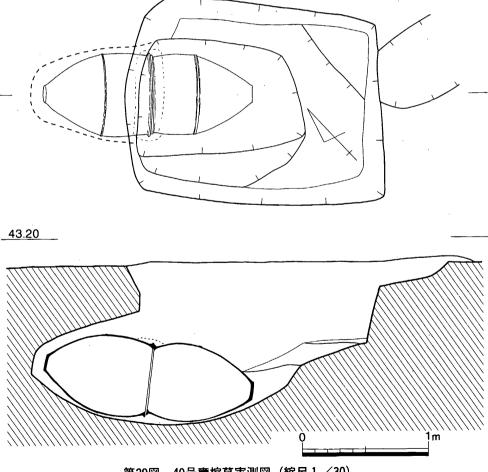
36号甕棺墓 (第25・31図)

35号甕棺墓の北に接し、55号成人棺の墓壙を切って埋置される小児用棺で、小型甕を利用す る。合口部には粘土目貼りをするが、下面は上甕の口頸部下に粘土を敷くようにしている。棺 はほぼ水平に置かれる。

37号甕棺墓 (第25·27図)

墓列のほぼ中央で15号木棺墓の西にある。56号甕棺墓の墓壙を切って埋置される小児用棺で ある。棺は小さな墓壙内に納められ、上下とも壺を利用している。下は壺をそのまま使い、棺 蓋となる方は口頸部を打ち欠き、下棺の口縁部に差し込むように納めている。合口部には粘土 目貼りをするが、上甕の下面には厚く粘土を敷いている。棺の傾斜は下甕側が低くなっている。 38号甕棺墓 (第25・26図)

15号木棺墓の墓壙北西隅に重複して埋置される小児用棺である。小さな不整形墓壙内に納め



第29回 40号甕棺墓実測図(縮尺 1 / 30)

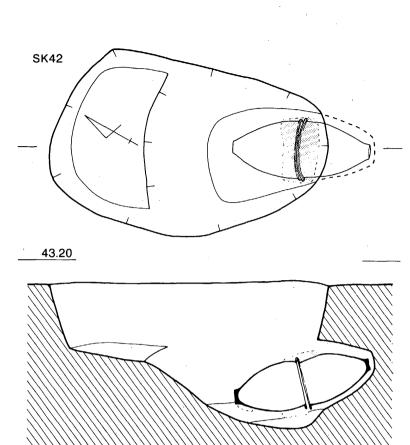
られる。上は胴上部から上 を打ち欠く壺を、下は甕を 利用する。合口部には粘土 を目貼りし、上甕の下面に は粘土を敷いている。棺の 傾斜は下甕側が高くなって いる。

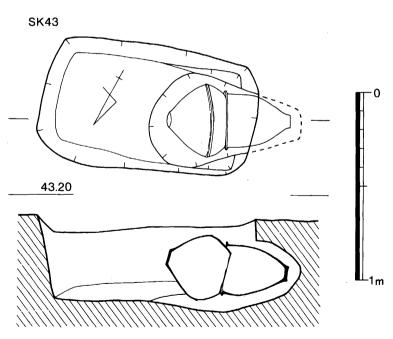
39号甕棺墓 (第20・23図)

15号木棺墓に51号・96号 甕棺墓とともに重複する。 いずれも15号木棺墓より新 しいが、当棺は51・96号甕 棺墓よりも新しい。当棺は 中型の甕を下甕とし、 を下型ので半を使用している。下甕は浅い横穴に 下半部を納め、棺はほぼ水 平に置いている。粘土の目 貼りは合口部の側面から下 面において施している。

40号甕棺墓(第28・29図、 図版 6 - 2)

墓列のほぼ中央に位置する。18号甕棺墓(小児用)の下甕部を壊して墓壙を掘っている。長方形の深いるで、長方形の深いるが、大の一辺に横穴を穿ちる。ほぼ同形同大の甕を合せるもので、合口部に粘土の目貼りを行うが、棺の下甕上面はなずの天井部との空間を埋





第30図 42号・43号甕棺墓実測図(縮尺1/20)

めるように粘土を詰めている。棺の傾斜は下甕側が高くなっている。棺内には性別不明で若年 の人骨の一部が遺存していた。棺底の頭位部分に赤色顔料が確認された。

41号甕棺墓 (第25図)

17号木棺墓の墓壙内上面に埋置される小児用棺である。不整形な墓壙内に壺と甕を利用して棺となす。削平により上面が欠損する。壺は口頸部を打ち欠かずそのまま利用し上甕とする。上甕の下面では壺の肩部に粘土を敷いて安定させている。棺の傾斜は下甕側が低くなっている。42号甕棺墓(第30・31図)

墓列のほぼ中央にあり、11号木棺墓と99号甕棺墓の間にあって、単独に埋置される小児用棺である。小児棺にしては遺りの良い深い墓壙で、これに横穴を穿ち下甕を納める。遺存状態は良好で合口部には厚く粘土を目貼りする。上甕の底部下面にも粘土を敷いて安定させている。棺の傾斜は下甕側が高くなっている。

43号甕棺墓 (第30・31図)

10号木棺墓と98号甕棺墓の間に埋置される小児棺である。長方形墓壙の一辺に横穴を穿ち下甕の下胴部を納め、これに口頸部を打ち欠く壺を上甕とする。小児棺として珍しく完存するもので、合口部の粘土の目貼りは認められず、上甕の両側面下位に粘土を敷いて安定している。

44号甕棺墓 (第32・33図)

98号甕棺墓(成人用棺)の墓壙北隅に重複して埋置される小児用棺である。削平により上面を欠失する。他の小形棺よりやや大きな甕を利用する小児用棺である。合口部には丁寧な粘土目貼りを行う。棺の傾斜は下甕側が高くなっている。

45号甕棺墓 (第32・33図)

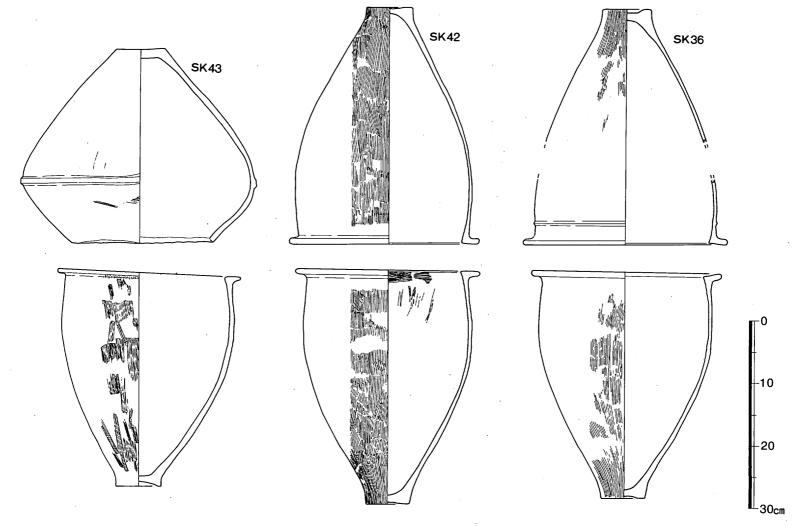
20号甕棺墓の西に接して埋置される。長方形墓に納められる。中型の甕を利用する合口式である。合口部には粘土目貼りを施す。棺の傾斜は上甕側がやや高くなっている。23号、24号甕棺墓より古い。

46号甕棺墓 (第32・33図)

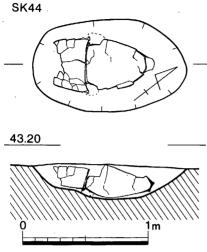
墓列の北端側で18号木棺墓の墓壙内の上面に埋置される中型棺である。中型の甕を利用する 合口式のもので、楕円形状墓壙内に納める。下甕は本来は穿たれた横穴に納められていたと考 えられる。合口部の上面には粘土の目貼りを行う。棺の傾斜は下甕側がやや低くなっている。

47号甕棺墓 (第34・35図)

50号・97号甕棺墓と重なり、墓壙は97号棺墓壙により削られる。100号甕棺墓の発掘中に当棺を確認した。長方形状の墓壙の一辺に横穴を穿ち下甕を納める。小型甕を利用する合口式の小児用棺である。合口部には粘土の目貼りを行うが両側面部を主体とする。棺の傾斜は下甕側が高くなっている。100号棺より新しく、50号・97号棺より古い。



第31図 36号・42号・43号甕棺実測図(縮尺1/6)

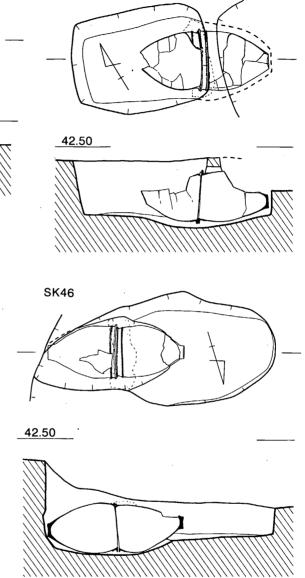


48号甕棺墓 (第34・35図)

100号甕棺墓の墓壙内上面に埋置される小児用棺である。100号棺の墓壙を発掘中に確認した。方形状の墓壙内でも東側に偏って納める。小型の甕を利用する合口式の小児用棺で、下甕は横穴に差し込んでいる。合口部を中心に広く覆うように粘土による目貼りを行う。棺の傾斜は下甕側が高くなっている。

49号甕棺墓(第36・37・74図、図 版 6 - 3)

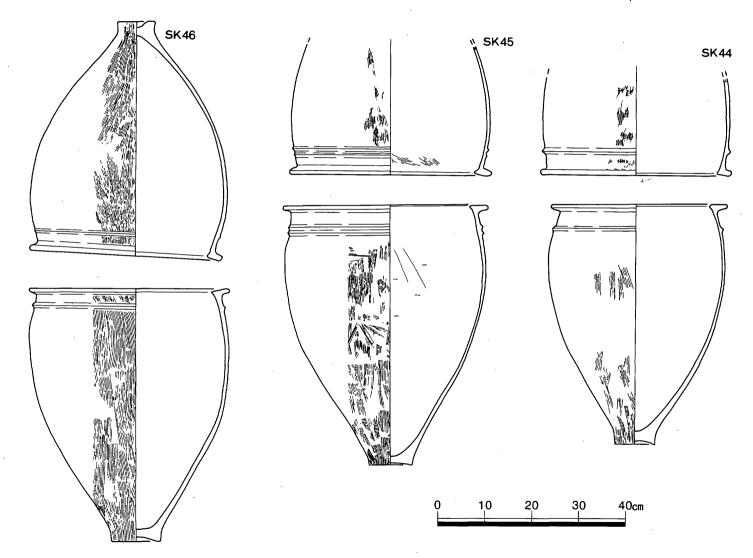
墓列の北側に位置する成人用棺である。長方形状の大きな墓壙を掘っている。壙内には幅30cmほどの中段を設け、壙底をさらに掘り



SK45

第32図 44号・45号・46号甕棺墓実測図 (縮尺1/30)

下げ、横穴を穿ち、下甕の大半をここに差し込んでいる。棺は合口式のもので同形の甕を利用するが、下甕がやや大きい。合口部の上面には粘土で目貼りするものの全体には及んでいない。 下甕と横穴部の空間には厚く粘土を帯状に詰めている。棺の傾斜は下甕側がやや高くなっている。



第33図 44号・45号・46号甕棺実測図(縮尺1/8)

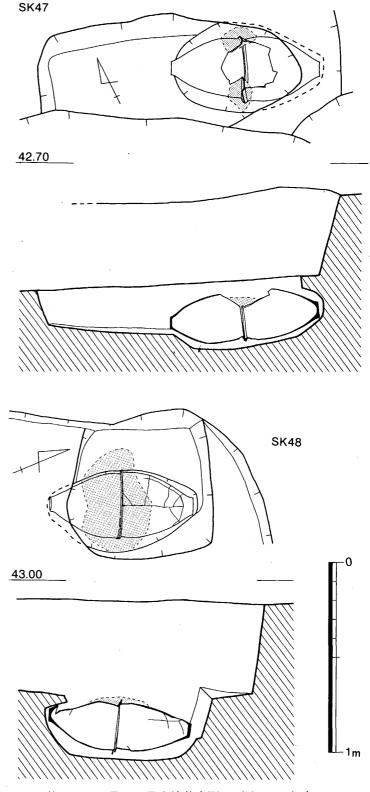
植内には成年女性の人骨が遺存していたが、その状態はあまり良くない。頭位は下甕側で、頭部の遺存状態も良好ではない。腕はどのように組まれていたか不明であるが、両脚は膝を立てていたようである。遺体の右側に倒れていた。

50号甕棺墓(第35・38図、 図版12-2)

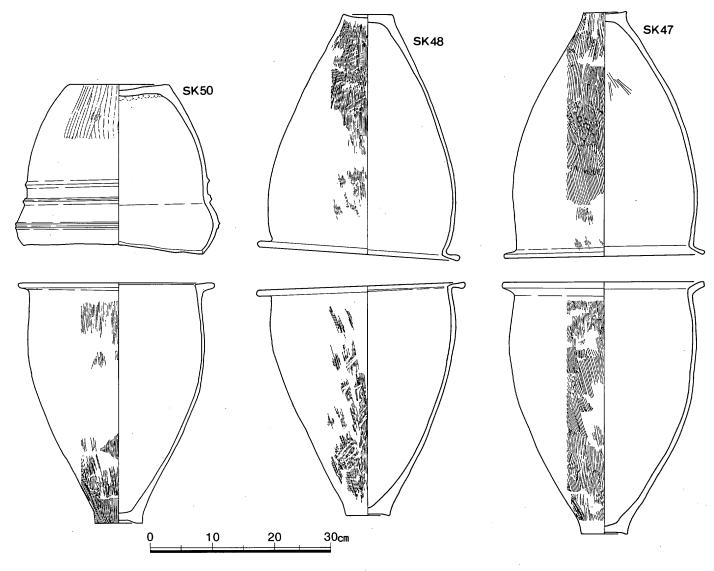
墓列の中央部やや北よりの密集する位置にある。32 号甕棺墓の下位で、97号甕棺墓場を切って埋置している。長方形状の墓壙の一辺に横穴を穿ち下甕を納める。上甕は大径平底の特異な形の壺を口頸部を打ち欠き使用している。小児用棺である。合口部には広く全間して粘土目貼りを施す。棺はほぼ水平に据えられる。

51号甕棺墓 (第38・41図)

15号木棺墓の墓壙内に下 甕が達する。墓壙の一部が 39号甕棺墓に削られる。小 児用棺で長方形状の墓壙の 一辺に横穴を穿ち下甕の大 半を差し込む。上甕として 口頸部を打ち欠く壺を用い ている。吞口式の合口部に は粘土目貼りを行い、上甕



第34図 47号・48号甕棺墓実測図(縮尺1/20)



第35図 47号・48号・50号甕棺実測図(縮尺1/6)

の下面には広く粘土を敷いている。

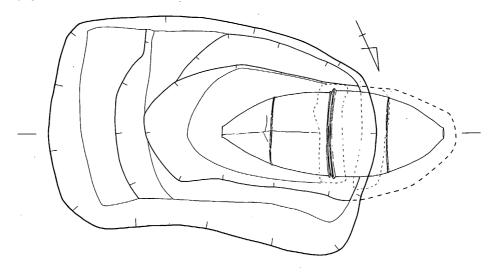
52号甕棺墓 (第38・42図)

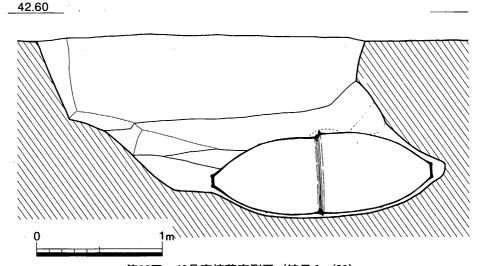
99号甕棺墓壙(成人棺)の北西隅に重複して埋置される。不整円形の墓壙に浅い横穴を穿ち下甕を差し込む。小型甕を利用する合口式の小児用棺である。合口部の上位部に粘土目貼りを施す。棺の傾斜は下甕が高くなっている。

53号甕棺墓(第39·43図)

99号甕棺墓(成人用棺)の上位にあり、54号甕棺墓と重複する。墓壙の形は54号棺との重複で明確に把握できなかったが、長方形状をなすと考えられる。小型甕を利用する合口式で、下甕は壙壁に穿つ横穴に差し込んでいる。合口部に粘土目貼りを施す。棺の傾斜は下甕側がやや低くなっている。

54号甕棺墓 (第40·41図、図版10-2)



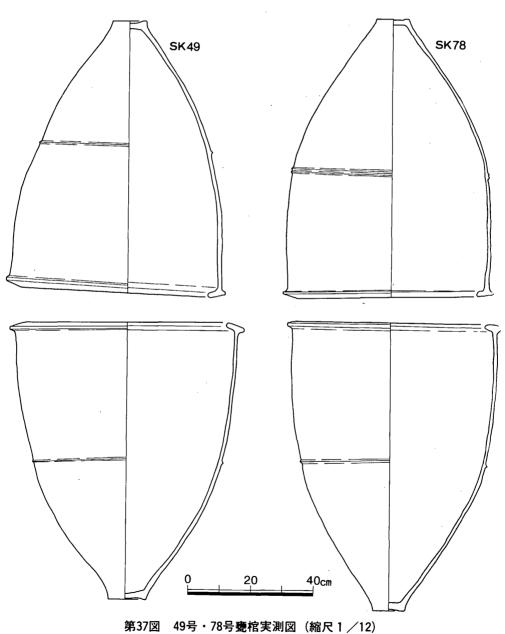


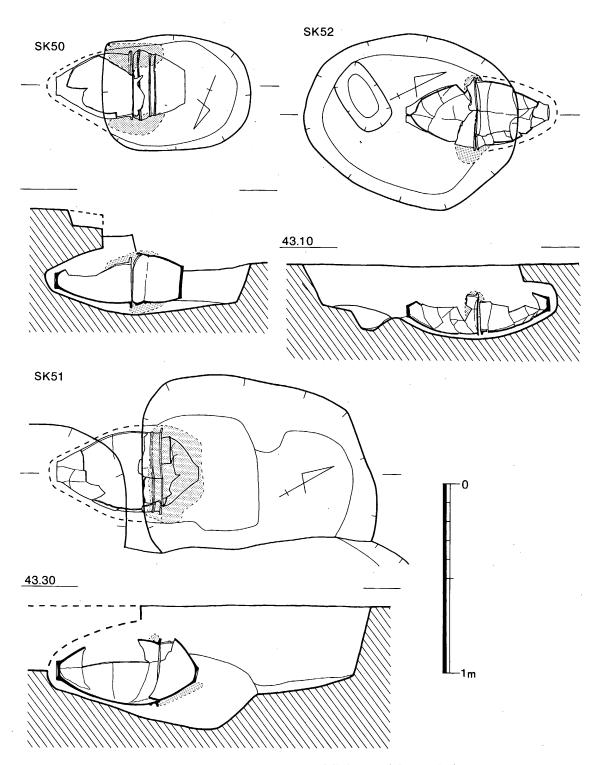
第36図 49号甕棺墓実測図(縮尺1/30)

53号棺の下で重複し、99号甕棺墓の上面にある。中型の甕を利用する合口式で、ほぼ水平に 棺を据えている。下甕は壙壁に穿つ横穴に差し込んでいる。合口部には粘土目貼りをするが下 面にまで及んでいない。中型棺であろうか。上下甕とも黒漆と思われる塗布がみられる。

55号甕棺墓 (第28·43·75図、図版 6 - 4)

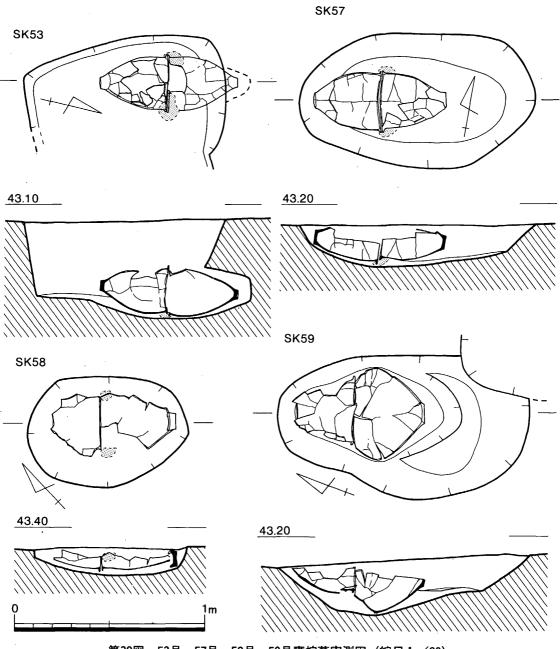
墓列のほぼ中央に位置する。大きく深い長方形状の墓壙を掘り、一辺の壙壁に横穴を穿ち下





第38図 50号・51号・52号甕棺墓実測図(縮尺1/20)

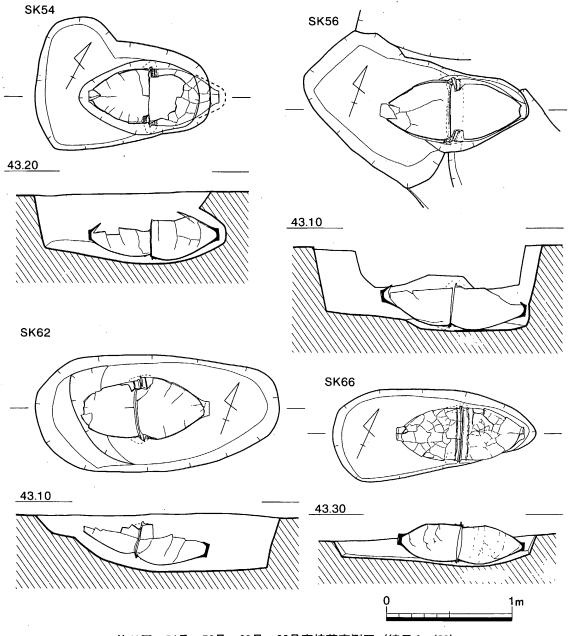
甕を差し込んでいる。成人用棺でほぼ同形同大の甕を使用している。合口部には粘土目貼りを 全周に施し丁寧である。棺の傾斜は下甕が高くなっている。当棺には5基の小児用棺が重複する。 棺内には熟年女性の人骨が遺存するものの、その状態は不良であり、頭蓋と下肢が遺る程度 である。右大腿部に蓆が付着し、骨盤間には蓆が若干量散布する。



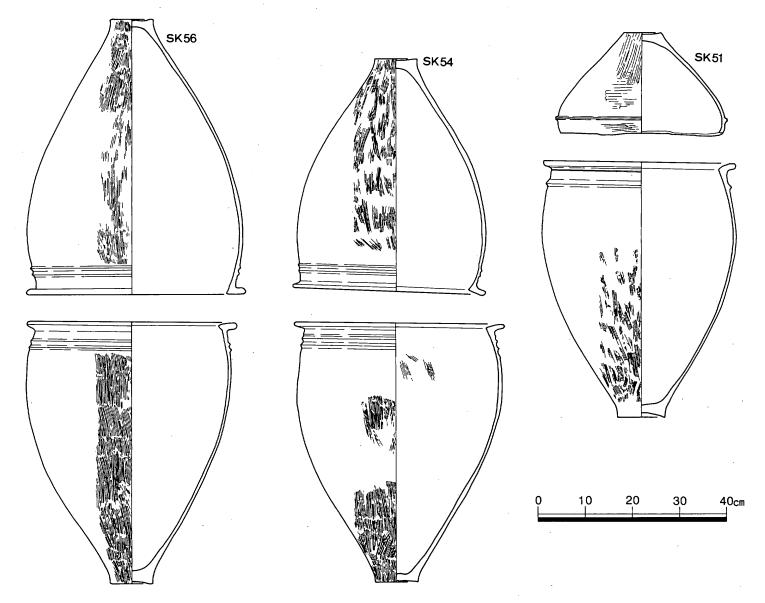
第39図 53号・57号・58号・59号甕棺墓実測図 (縮尺1/20)

56号甕棺墓 (第40・41図)

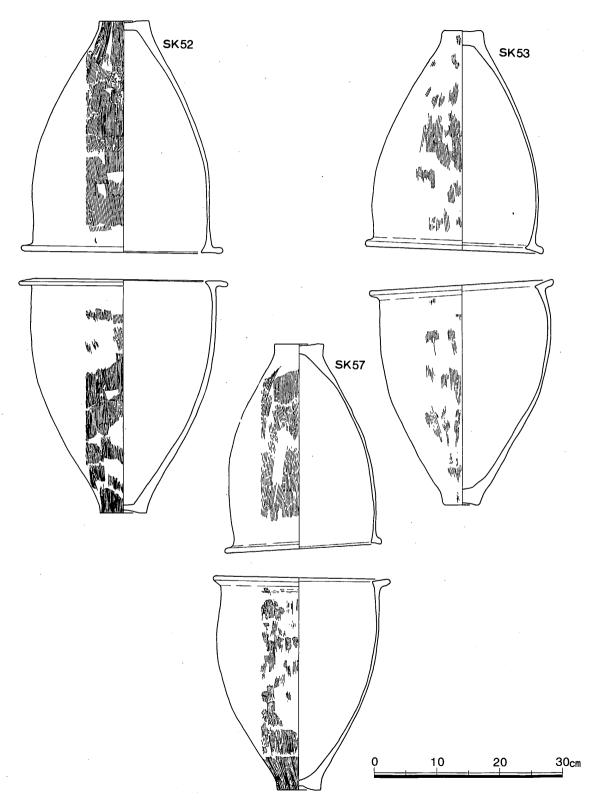
15号木棺墓に隣接して埋置される。37・38・96号甕棺墓が重複する。37・38号より古く、96号より新しい。長方形墓壙の一隅に横穴を穿って下甕を差し込んでいたものと考える。中型の甕を利用する合口式の棺である。合口部には粘土目貼りを行い、下面部は上甕部に限られている。棺の傾斜は下甕側が低くなっている。



第40図 54号・56号・62号・66号甕棺墓実測図 (縮尺 1/20)



第41図 51号・54号・56号甕棺実測図 (縮尺1/8)



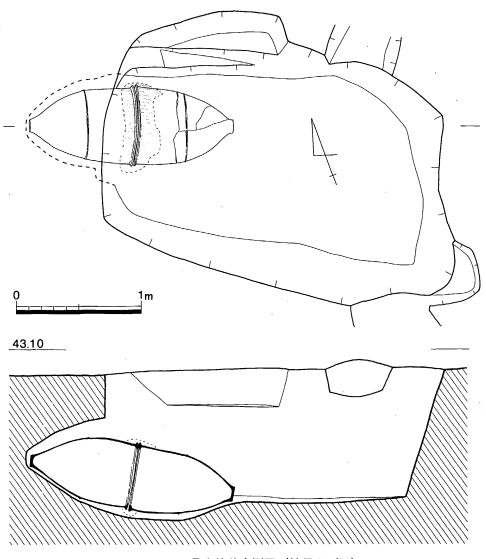
第42図 52号・53号・57号甕棺実測図(縮尺1/6)

57号甕棺墓 (第39·42図)

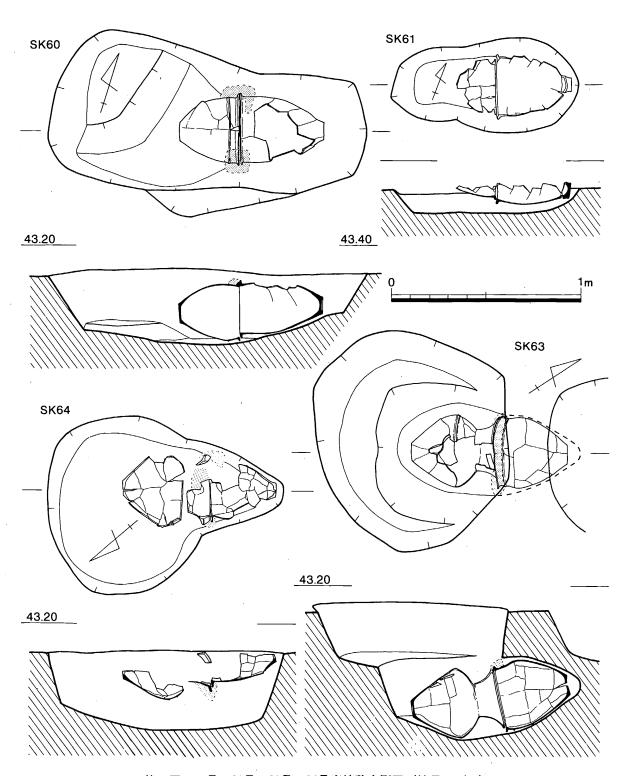
墓列の南側部で94号と98号甕棺墓の間に埋置される。楕円形状の墓壙内に小型甕を利用する 合口式の小児用棺である。合口部には側面から下面にかけて粘土の目貼りを施す。棺の傾斜は 下甕側がやや高くなっている。下甕外面の胴上位に煤が付着しており、日常用器の転用と考え られる。

58号甕棺墓 (第39図)

98号甕棺墓の北側で、その墓壙を切って埋置される。削平により遺存状態は悪く、棺底部分が遺るのみである。小型甕を利用する合口式の小児用棺である。粘土目貼りは下甕の口縁部下



第43図 55号甕棺墓実測図 (縮尺 1/30)



第44図 60号・61号・63号・64号甕棺墓実測図 (縮尺 1 / 20)

の両側面に認められる。

59号甕棺墓 (第39図)

94号甕棺墓と重複し、この棺の墓壙により当棺の墓壙の一部が切られる。削平により上面が 欠損するが、上甕に口頸部を打ち欠く壺を利用し、下甕は甕である。合口部には粘土による目 貼りはない。棺の傾斜は下甕側が高くなっている。

60号甕棺墓 (第44・45図)

墓列の南側にある16号木棺墓と重複する。小児用棺で長方形状の墓壙に納められ、下甕は壙壁に穿たれる横穴に差し込まれていたと考えられるが、削平によりその状況はつかめない。小型甕を利用する合口式のもので、合口部には上半部のみに粘土目貼りを行う。上甕は高さの低い甕形土器を用いている。棺の傾斜は下甕側が高くなっている。

棺内の下甕側に幼児と考えられる頭骨片が遺存していた。

61号聽棺墓 (第44·45図)

60号棺とともに16号木棺墓に重複し、併置される小児用棺である。削平により上部はほとんど欠損する。小型甕を利用する合口式のものであり、合口部に粘土の目貼りは認められない。

62号甕棺墓 (第40·46図)

16号木棺墓の上面に埋置される。当棺も削平により、ことに下甕側の損壊が著しい。上下とも甕を利用する合口式である。合口部の粘土の目貼りは上半部にのみ施す。棺の傾斜は下甕が高くなっている。79号甕棺墓とも重複するが、これより新しい。

63号甕棺墓(第44·47図)

62号甕棺墓の西側に隣接して埋置される。不整円形の墓壙の壙壁の横穴に下甕を深く差し込み、上甕に壺を利用する。小児用棺で合口部の上半部のみに粘土目貼りを施す。棺の傾斜は下甕側が高くなっている。

64号甕棺墓(第44・47図)

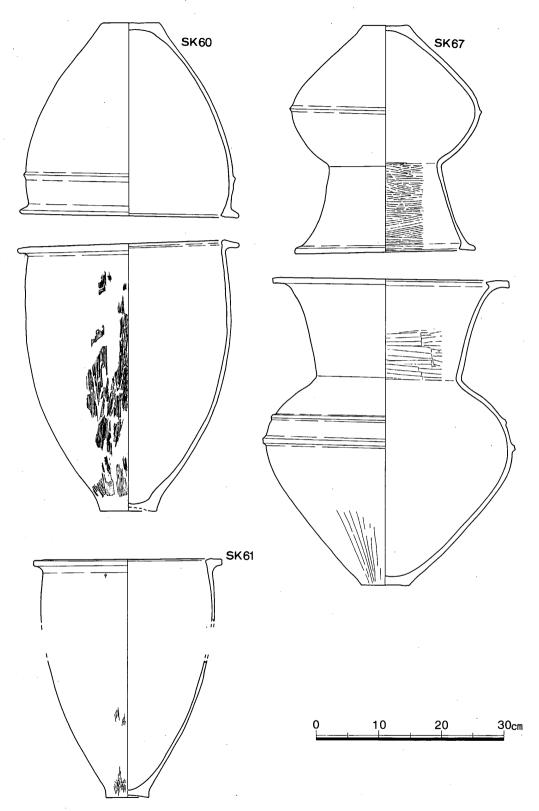
94号甕棺墓の墓壙埋土の上面に埋置される。削平により棺の上面を欠損する。円形状墓壙に置かれる小児用棺で、下は甕、上に壺を利用する。合口部の下面に粘土目貼りが認められる。全体に棺底部が墓壙底よりかなり上部にあるが、これは埋土中に掘られているため壙底の確認がやや困難であり、かつ埋土であるためにある程度の沈下も影響しているものと考えられる。

65号甕棺墓

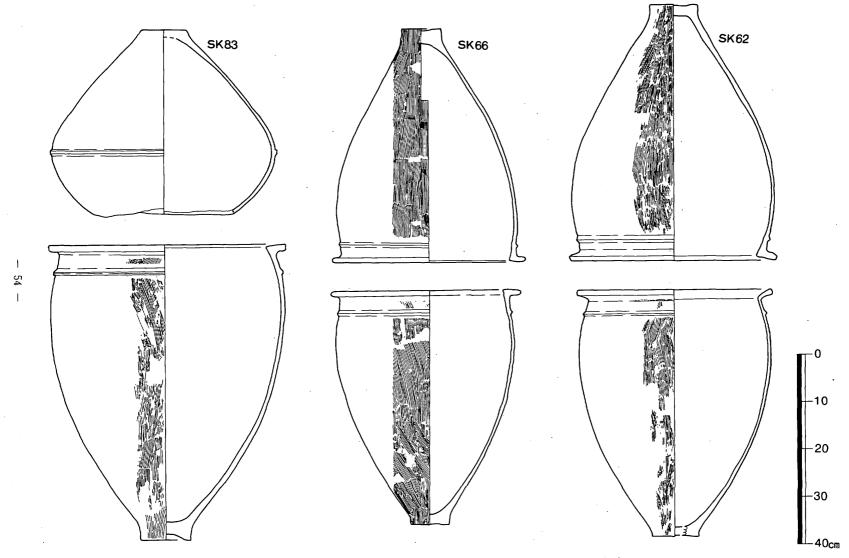
19号甕棺墓の西側に検出されたが、削平による損壊が著しく、棺底がわずかに遺るのみで図化できる状態ではなかった。小児用棺である。

66号甕棺墓 (第40・46図)

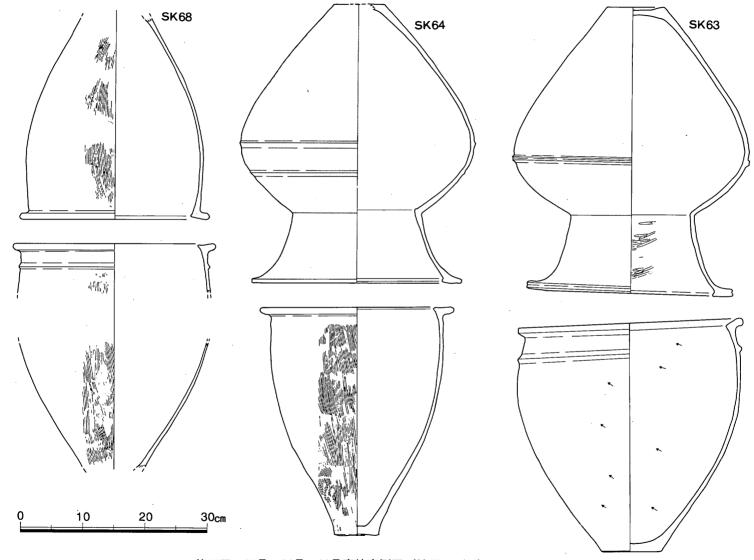
19号・75号甕棺墓と重複し、これらより新しい。削平により墓壙の形状は定かでないが長方形状をなすものであろう。上下とも甕を利用する合口式である。合口部の両側のみに粘土を貼



第45図 60号・61号・67号甕棺実測図(縮尺 1 / 6)



第46図 62号・66号・83号甕棺実測図(縮尺1/8)



第47図 63号・64号・68号甕棺実測図(縮尺1/6)

る。棺の傾斜は下甕側が低くなっている。

67号甕棺墓 (第45・48図)

19号甕棺墓の墓壙を切って重複する。長方形墓壙に横穴を穿って下甕を差し込んだものと思うが、削平によりその状況は把握できない。上下とも壺を利用する合口式で小児用棺である。下甕側が大きく、上下とも口頸部を打ち欠かずに使用している。合口部には上甕に篇って厚く粘土目貼りを施し、全体に巡らしている。棺の傾斜は下甕側が極端に高くなっている。

68号甕棺墓 (第47・48図)

67号甕棺墓の南に埋置される。小児用棺であるが、削平により大半を欠損し、棺底部を遺すのみである。上下とも小型甕を利用するが、下甕の口縁部はない。ほぼ水平に据えられている。

70号甕棺墓(第48・49図)

95号甕棺墓(成人用棺)の墓壙を切って重複する。削平により棺の上面が欠損する。小型甕を利用する合口式の小児用棺である。合口部の粘土目貼りは棺の下面までには至らず、側面から上面にかけて施されていたものと考えられる。95号甕棺墓より新しい。

71号甕棺墓 (第48図)

墓列の南端側で、74号と93号甕棺墓の間に埋置される。棺の上面は削平により欠損する。小型甕を利用する合口式の小児用棺である。上甕はやや小さく、下甕の口縁部内に挿入される。 粘土の目貼りは認められず、棺の傾斜は下甕が高くなっている。

72号甕棺墓 (第48図)

74号甕棺墓の東側に埋置される。削平による損壊が著しい。小型甕を利用する小児用棺である。下甕は若干遺るものの、上甕は口縁の一部が遺るのみである。合口部の両側面に粘土で目 貼りする。

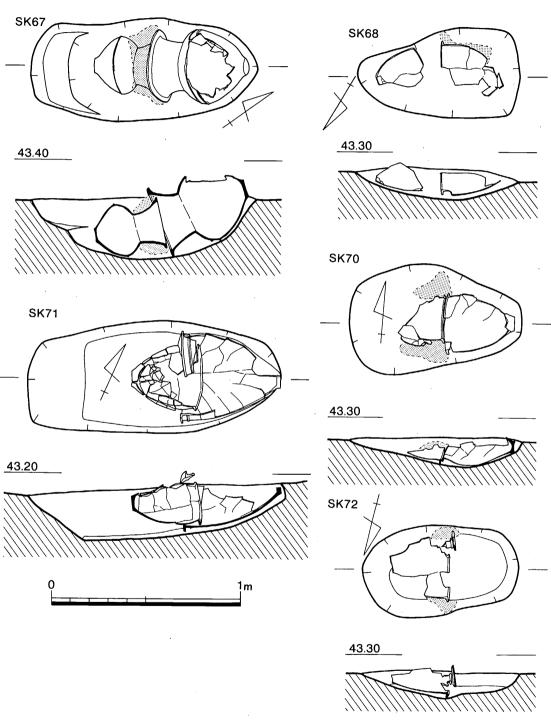
73号甕棺墓 (第49・50図)

93号甕棺墓の墓壙北西隅に重複する小児用棺である。削平を受け棺の上部は欠損するが、不整方形の墓壙の一隅に横穴を穿ち下甕を納めるものである。棺は小型甕を利用するもので、合口部に粘土の目貼りを施す。棺の傾斜は下甕側が高くなっている。

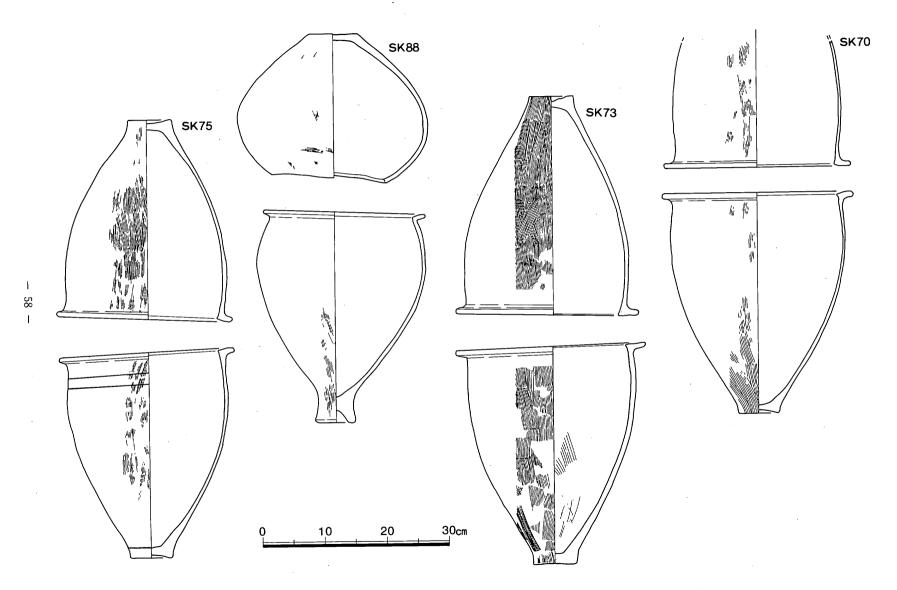
74号甕棺墓 (第51・59図、図版 7 - 1)

墓列の南端側に位置する成人用棺である。長方形の大きな墓壙を掘り、南側の壙壁に横穴を穿ち下甕を差し込んでいる。墓壙底はL字状の平坦部を設け、一段深くし棺を置いている。上下とも甕を利用する合口式で、下甕がやや大きい。合口部には下半部を除き粘土で目貼りを行っている。棺の傾斜は下甕側が高くなっている。

棺内には成年男性の人骨が遺存していたが、その遺存状態は不良であった。



第48図 67号・68号・70号・71号・72号甕棺墓実測図 (縮尺 1 / 20)



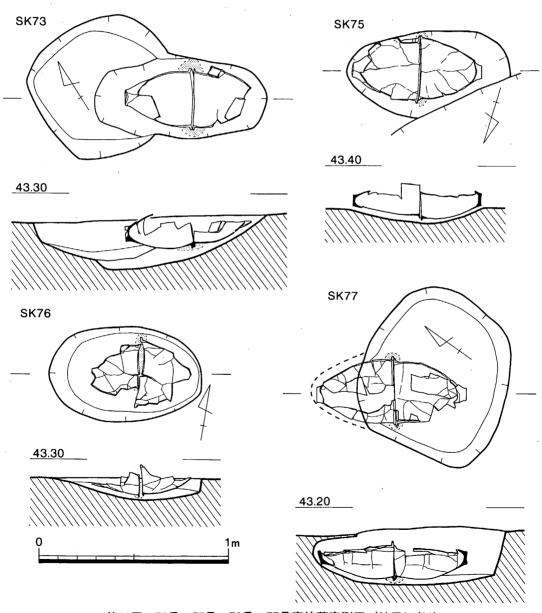
第49図 70号・73号・75号・88号甕棺実測図(縮尺 1 / 6)

75号甕棺墓 (第49・50図)

南端側の19号成人用甕棺墓と重複する小児用棺である。66号小児用甕棺墓とも重複するが、これより古く、19号棺より新しい。小型の甕を利用する合口式のものである。棺の上面は欠損する。合口部は下面を除き粘土の目貼りを行っている。

76号甕棺墓 (第50図)

墓列南端の20号甕棺墓と重複し、これより新しい。棺の上面を欠損するが、小型甕を利用す



第50図 73号・75号・76号・77号甕棺墓実測図 (縮尺1/20)

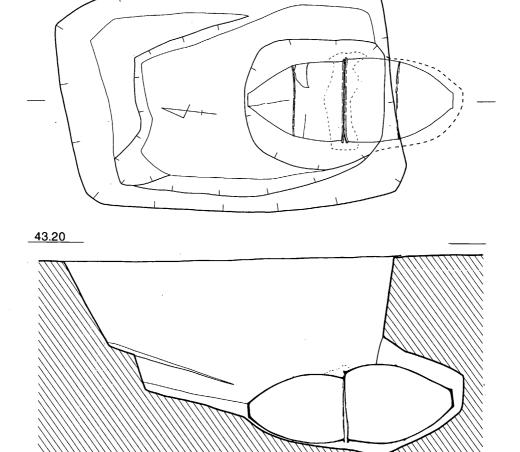
る合口式の小児用棺である。合口部の粘土目貼りは、棺の下面部にも施している。

77号甕棺墓 (第50・54図)

墓列の南側で78号甕棺墓と重複し、これより新しい小児用棺である。不整円形壙の壙壁に横 穴を穿ち下甕を差し込んでいる。棺の上面は土圧により陥没していた。小型の甕を利用する合 口式であり、合口部の粘土目貼りは側面部から下面部に施している。

78号甕棺墓 (第52・37・75図、図版 7 - 2)

墓列の南側部に位置する成人用棺である。当棺は二列に並ぶ成人棺の墓列からはずれ、16号木棺墓に接して埋置される。77号と79号棺と重複し、77号より古く、79号より新しい。墓壙は、他の成人棺とは異なり、やや小さく、楕円形状のプランで壙壁に横穴を穿ち下甕を差し込んで



第51図 74号甕棺墓実測図(縮尺 1 / 30)

いる。合口部には粘土の目貼りを施すが、下面にまでは施していない。棺はほぼ水平に据えている。

棺内には成年男性の人骨が遺存するものの、完存していなかった。両腕は肩に向けて折りまげており、両脚は膝を立てていた。

79号甕棺墓 (第52・55図)

77・78号棺が重複し、16号木棺墓の墓壙を切って埋置している。三連式の合口甕棺墓で、上下はほぼ同大の甕を用い、その間に口頸部と胴下部を打ち欠く壺を利用している特異なものである。長方形状と考える墓壙に納められるもので、ほぼ水平に据えている。それぞれの合口部には粘土目貼りを行うが、中間の壺の下面には粘土を敷きつめていた。小児用というよりもやや大きいものである。

80号甕棺墓 (第53図)

墓列南端の95号甕棺墓と重複する。当棺も三連式の合口棺で、その組合せは特異である。下・中棺に小型甕を利用し、上棺に壺を用いている。中棺の甕は胴部下半を打ち欠き、上棺の壺は口縁部を打ち欠いている。中棺の全体とそれぞれの合口部には丁寧に粘土の目貼りを行っている。特に下面部には厚く敷いている。棺の傾斜は下甕側が高くなっている。

81号甕棺墓 (第53・54図)

80号棺と同様に95号棺と重複し、これより新しい。小児用棺で口頸部を打ち欠く壺を下甕とし、これに鉢形の甕を上甕としている。合口部の下半部と下面に粘土目貼りを施している。棺の傾斜は下甕側が高くなっている。

82号甕棺墓 (第9·53図)

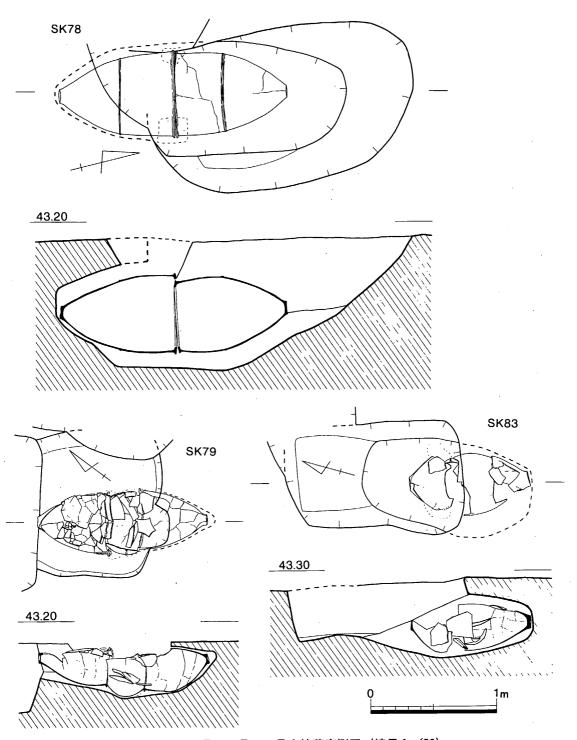
81号・83号棺と重複する。81号より新しく、83号より古い。当棺は墓壙を83号棺により壊されており、さらに上面部を削平されているため定かでないが、下甕に壺を利用するもので、口縁部も打ち欠かれておらず、目貼り用の粘土が認められないことから単棺の可能性のある小児用棺である。

83号甕棺墓 (第46・52図)

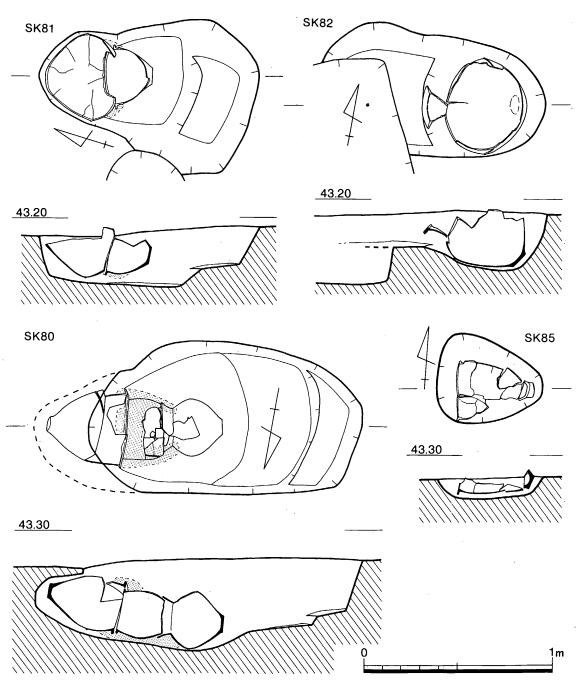
82号棺と重複し、これより新しい。長方形の墓壙の壙壁に横穴を穿ち下甕を差し込んでいる。 上甕は口頸部を打ち欠く壺を用いている。合口部の損壊が著しく、下甕の口縁部は棺内に落ち 込んでいた。合口部には粘土の目貼りを施し、上甕の下面の一部に粘土を敷いている。

84号甕棺墓(第56・61図、図版10-3)

墓列南端の93号成人棺に重複し、これより新しい。楕円形状の墓壙底に平坦部を設け、さらに掘り下げ棺を据えているが、本来は下甕は壙壁に穿たれる横穴に差し込んでいたものと考える。やや大きな日常用の甕を利用する合口式の甕棺で、合口部には粘土の目貼りを施す。棺の傾斜は下甕側が高くなっている。

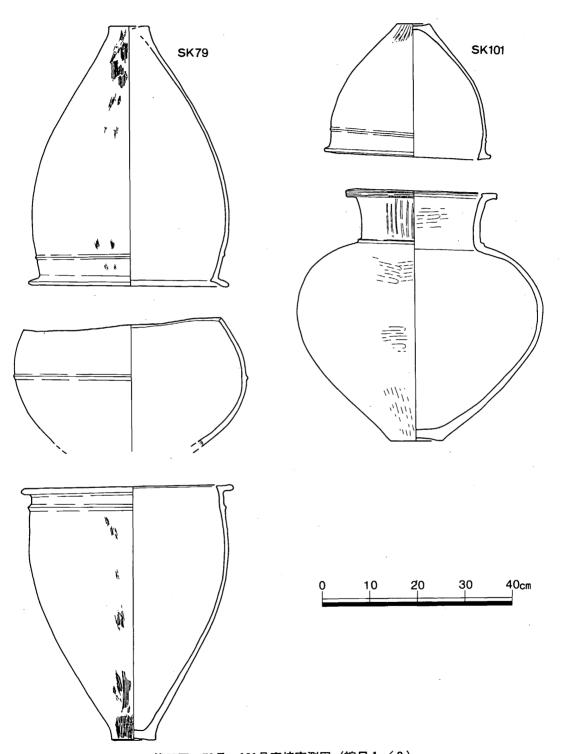


第52図 78号・79号・83号甕棺墓実測図(縮尺 1 /30)

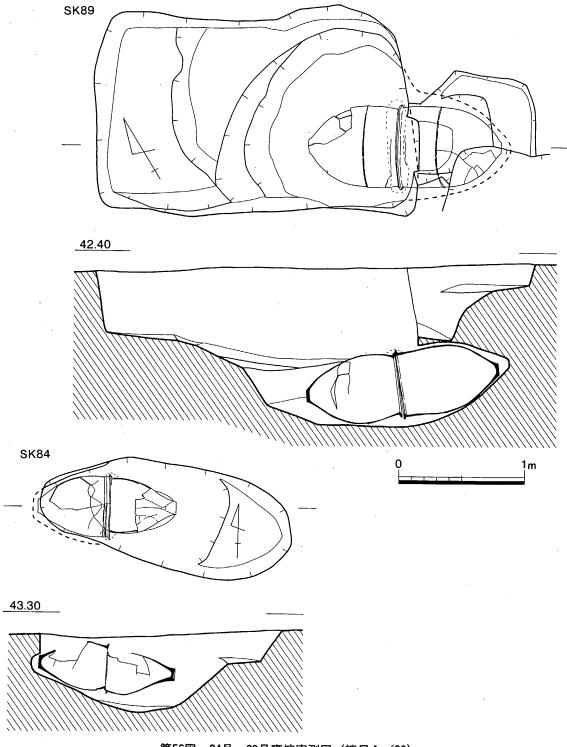


第53図 80号・81号・82号・85号甕棺墓実測図 (縮尺 1 / 20)

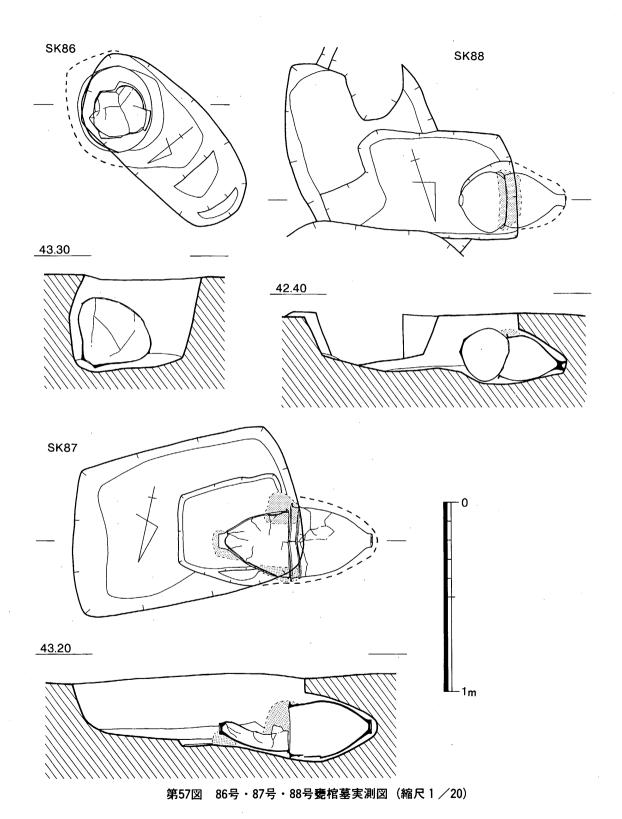
第54図 77号・81号・85号・86号甕棺実測図(縮尺 1 / 6)



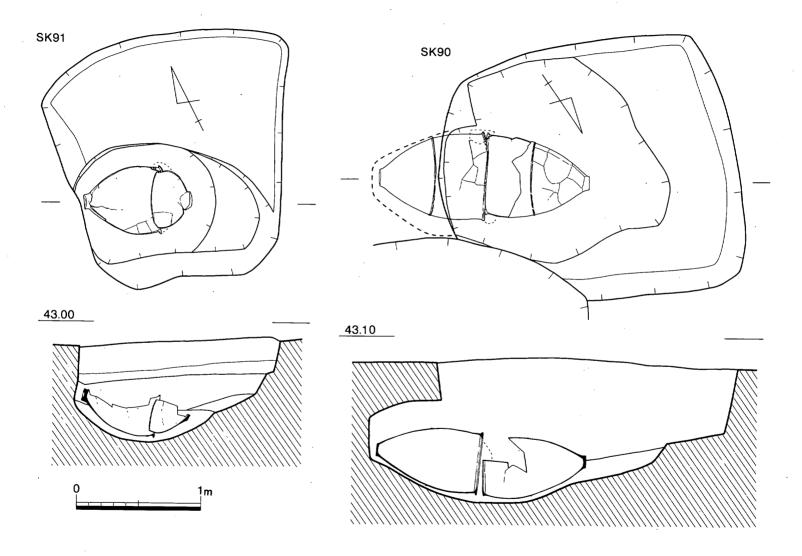
第55図 79号・101号甕棺実測図(縮尺1/8)



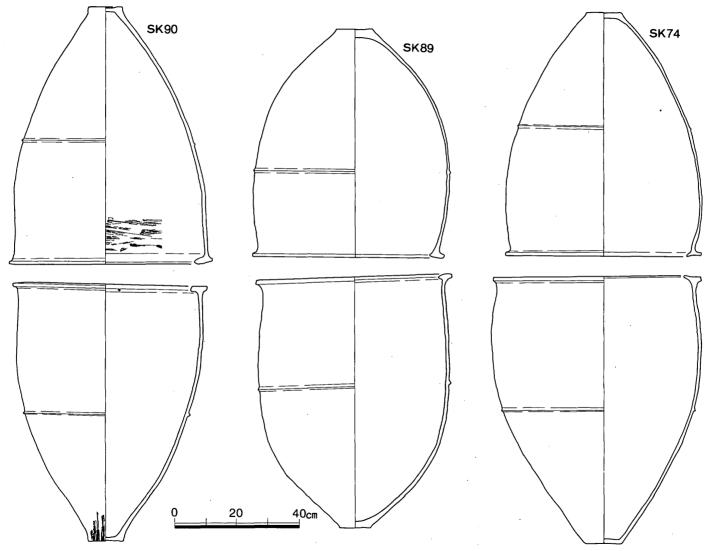
第56図 84号・89号甕棺実測図(縮尺 1 /30)



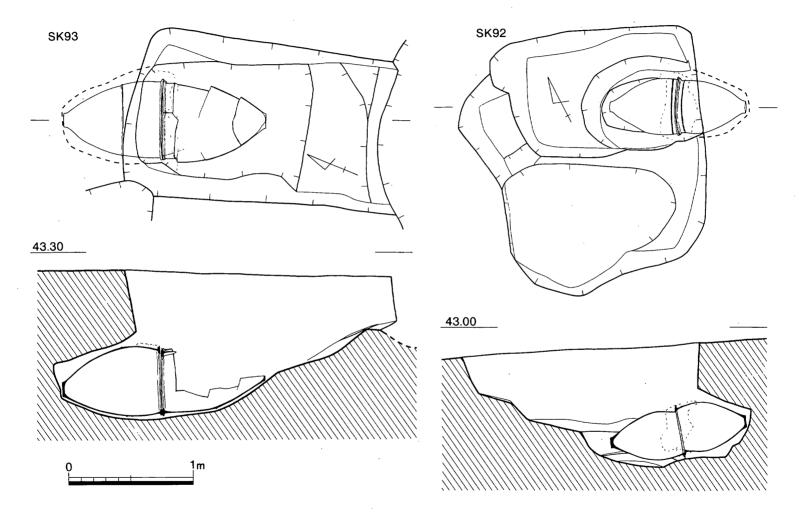
- 67 -



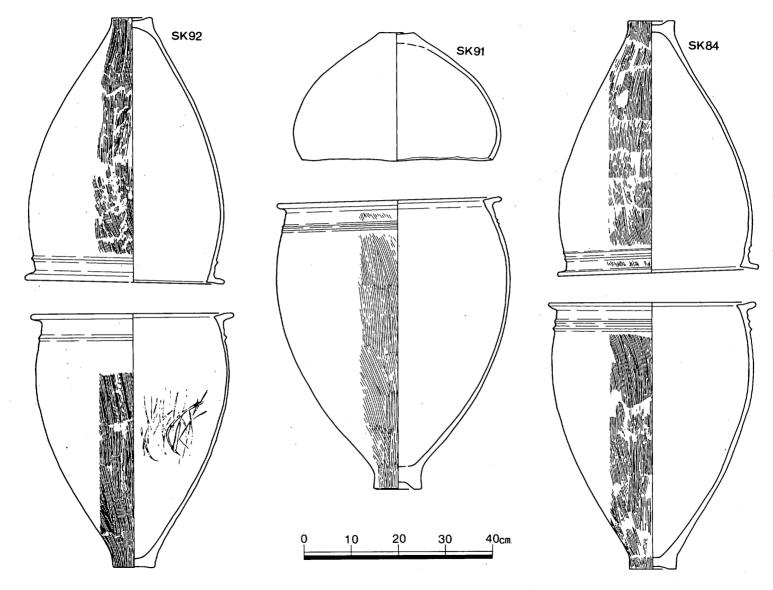
第58図 90号・91号甕棺墓実測図(縮尺1/30)



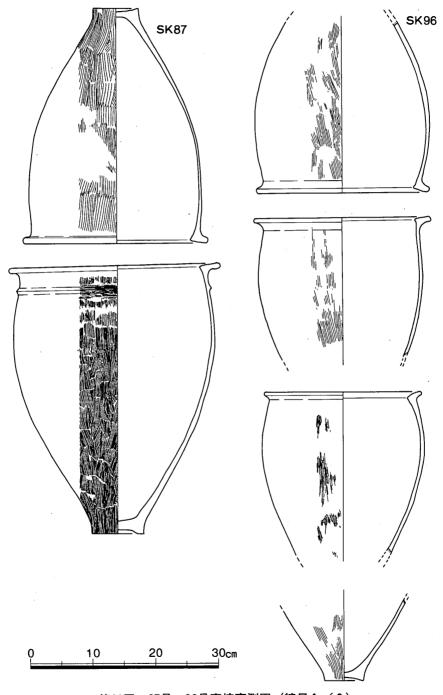
第59図 74号・89号・90号甕棺実測図 (縮尺 1 /12)



第60図 92号・93号甕棺墓実測図 (縮尺 1 / 30)



第61図 84号・91号・92号甕棺実測図 (縮尺1/8)



第62図 87号・96号甕棺実測図(縮尺1/6)

85号甕棺墓 (第53·54図)

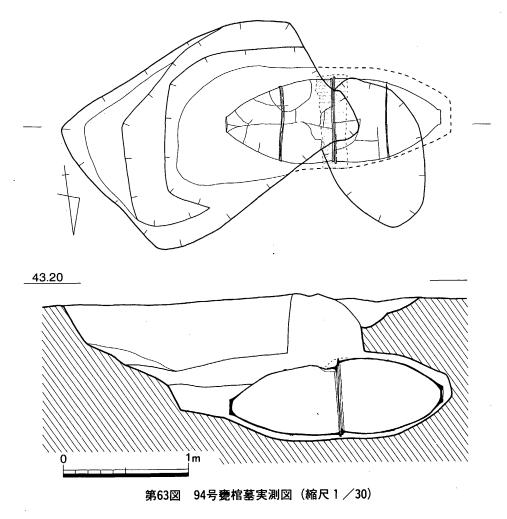
墓列南端に埋置される小児用棺である。削平によりその遺存状態は不良である。小さな墓壙内に小型甕の下面部が遺る。単棺か合口棺は不詳である。

86号甕棺墓 (第54・57図)

墓列南端にあり83号と85号棺の間に位置する。長方形状墓壙の一方を深く掘り下げ、ここに 壺を据える。壺は口頸部を打ち欠き利用するもので、打ち欠いた口のまわりには割り合い厚く 粘土を目貼りとして利用している。蓋となる上甕はなく、おそらく木板によってなされていた ものと考えられる。

87号甕棺墓 (第57·62図)

墓列南半部の98号成人用棺に重複し、これより新しい。長方形墓壙の壙壁に横穴を穿ち下甕を差し込む合口式の小児用棺である。棺はほぼ水平に据えられ、合口部に丁寧な粘土の目貼り



-73 -

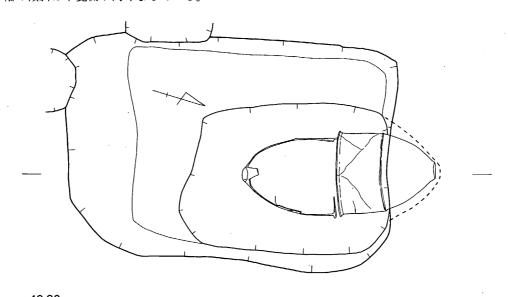
を施す。上甕の底部下面には粘土を敷き固定している。棺内には遺存状態の悪い幼児 (5歳位) の人骨が検出された。

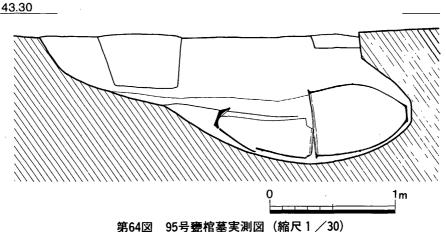
88号甕棺墓 (第49・57図、図版12-3)

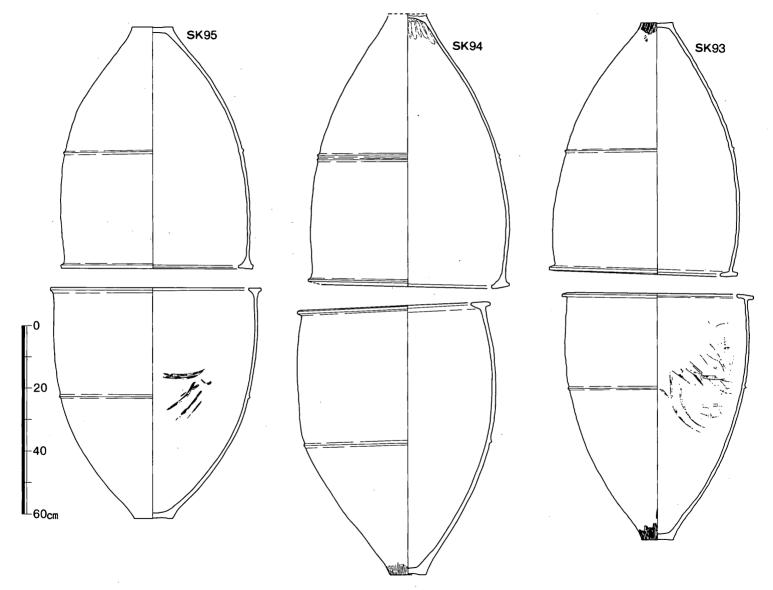
墓列の北側にあり27号棺と重複し、これより古い。長方形状の墓壙の壙壁に横穴を穿ち下甕を差し込む合口式の小児用棺で、遺存状態は非常によい。上甕には口頸部を打ち欠く壺を利用する。合口部には上半部に粘土による目貼りを施す。棺の傾斜は上甕側が高くなっている。

89号甕棺墓(第56・59図、図版7-3)

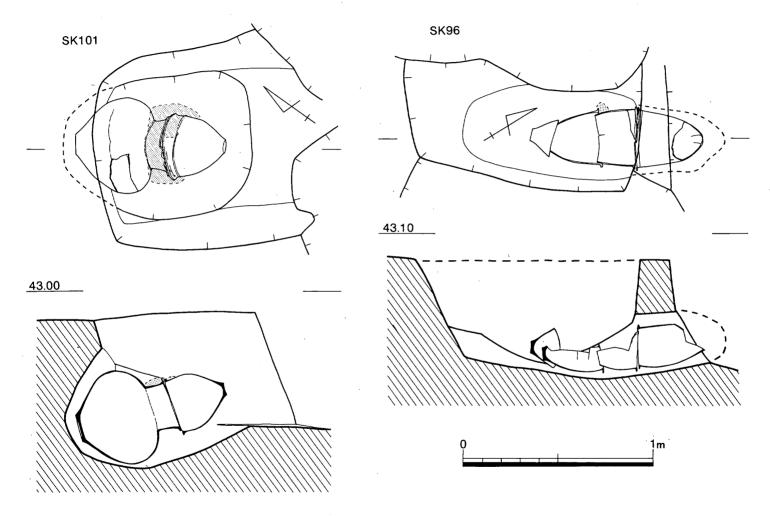
墓列の北端に埋置される成人用棺である。3号・4号の小児用棺が当棺と重複し、これらは当棺より新しい。長方形の大きな墓壙を掘り下げ、壙底には平坦部を設け、壙底は一段と深く掘り壙壁に横穴を穿ち下甕を差し込んでいる。合口式で合口部には丁寧な粘土の目貼りを施す。棺の傾斜は下甕側が高くなっている。







第65図 93号・94号・95号甕棺実測図 (縮尺 1 /12)



第66図 96号・101号甕棺墓実測図 (縮尺 1 / 20)

棺内には成人の人骨が検出されたが一部が遺存するのみである。

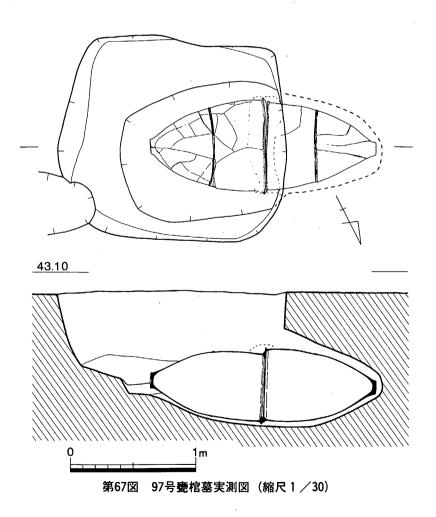
90号甕棺墓 (第58・59・75図、図版 7 - 4)

墓列中央に位置する、14号木棺墓と重複し、これより古い成人用棺である。大きな方形状の墓壙内に埋置されるもので、大型甕を利用する合口式のものであり、下甕は壙壁に穿たれる横穴に納められる。合口部の両側に特に粘土目貼りを行う。棺の傾斜は下甕側が高い。

棺内には成年男性の人骨が遺存するが頭骨や腰部の遺存状態はあまりよくない。遺体は右腕を折り曲げ、左腕は腹部あたりに置いている。両脚は膝を立てていたようだ。

91号甕棺墓 (第58・61図)

90号棺の北西側に隣接して埋置され、22号・92号棺と重複し、22号棺より古く、92号棺より新しい。棺の上面は損壊するが本来完存するものである。小児用棺で下甕に甕、上甕には胴部より上半部を打ち欠く壺を利用している。合口部の両側に粘土の目貼りを施している。



92号甕棺墓 (第60·61図、図版12-4)

22号・91号棺が重複し、これらより古い。長方形墓壙に埋納される小児用棺である。壙底を 一段と深く掘り、壙壁に横穴を穿ち下甕を納める。合口式のもので合口部には厚く粘土目貼り を施す。棺の傾斜は下甕が高くなっている。

93号甕棺墓 (第60・65・76図、図版8-1)

墓列の南端にある成人用棺である。73・84号小児用棺が重複し、いずれも93号棺より新しい。長方形墓壙の壙壁に横穴を穿ち下甕を差し込んでいる。壙底は横穴側へ深くなっている。合口式の棺で、合口部には粘土目貼りを施す。棺内には遺存状態の良好な熟年男性の人骨が検出された。遺体は右腕を折り曲げ、左腕は腹部あたりに置いている。両脚は膝を立てている。

94号甕棺墓 (第63・65・76図、図版8-2)

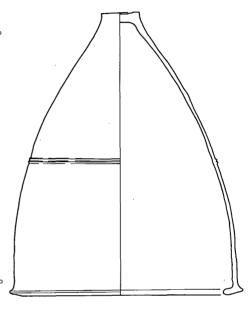
墓列の南半部に位置する。長方形墓壙の一隈 の壙壁に横穴を穿ち、下甕を納める合口式の成 人用棺である。合口部には丁寧な粘土目貼りを 施す。棺の傾斜は下甕側がやや高くなっている。 下甕の内面には稿状に黒漆を塗っている。

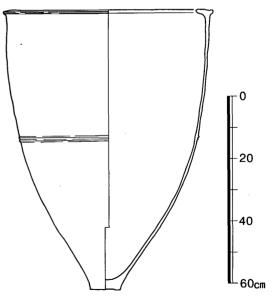
棺内には遺存状態のあまり良くない熟年女性 の人骨が検出された。

95号甕棺墓 (第64・65図、図版8-3)

墓列の南端に位置する成人用棺である。70・80・81号の小児用棺が重複し、いずれも95号棺より新しい。当棺は長方形の大きな墓壙の壙底を一段と深く掘り、さらに壙壁に横穴を穿ち下甕を差し込む合口式の棺である。発掘時に上甕の上面が陥没したため、棺内に多量の土が埋没した。合口部はややずれており、上甕の一部が埋葬時より欠損している。合口部には粘土による目貼りを施している。

棺内には遺存状態の良くない熟年男性の人骨 が検出されたが、発掘時にやや乱れたきらいが





第68図 97号甕棺実測図(縮尺 1 /12)

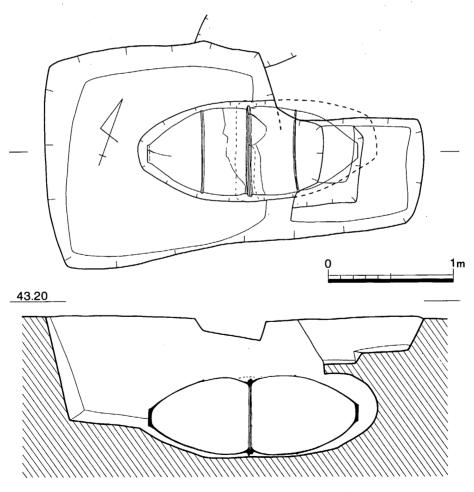
あるが、頭骨がなく、埋葬時よりその状態であったか否かは不詳である。両脚は膝を立てていたものと考える。この人骨の特徴は、右腸骨稜に後下方より銅剣の切先が嵌入していることである。致命的な傷ではないかと考えられ、嵌入部付近に若干の骨増殖が見られる。

96号甕棺墓 (第62・66図)

墓列中央の15号木棺墓と重複する小児用棺である。小型甕を利用する三連式の合口棺である。 中央の甕は胴の下半を打ち欠き、それを上甕の底部を覆うように利用する特異な三連棺である。 棺の傾斜は下甕側が高くなっている。15号木棺墓より新しい。

97号甕棺墓 (第67·68·77図、図版 8-4)

墓列の中央に位置する成人用棺である。32・50号小児用棺が重複する。主要墓列に接するものである。方形状墓壙の壙底をさらに掘り下げ、壙壁に横穴を穿ち、下甕を差し込んでいる。 合口部には丁寧な粘土目貼りを行う。棺の傾斜は下甕側がやや下がっている。



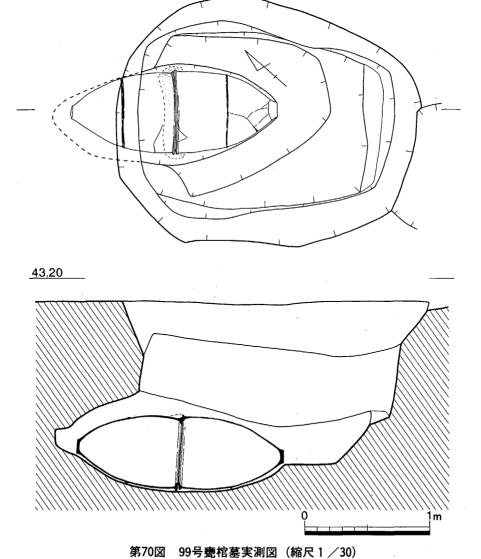
第69図 98号甕棺墓実測図 (縮尺 1/30)

棺内には熟年男性の人骨が検出された。腰部が消失するが、良く遺っているといえよう。両腕は手先を肩部に向けて曲げており、両脚は膝を立てている。

98号甕棺墓 (第69·72·77図、図版 9 - 1)

墓列の南半部に位置する。墓列の方向に直交する方向で棺を埋める成人用棺である。正方形 状の深い墓壙の壙壁に横穴を穿ち下甕を納める合口式のものである。合口部は粘土による目貼 りを施す。棺の傾斜は下甕側がやや高くなっている。

棺内には成年男性の人骨が検出されたが、発掘中に上甕が陥没し、頭蓋骨が損壊した。遺存 状態は良い方で、右腕部と体の間に石が置いてあった。右腕は伸し、左腕は腹部に置いている

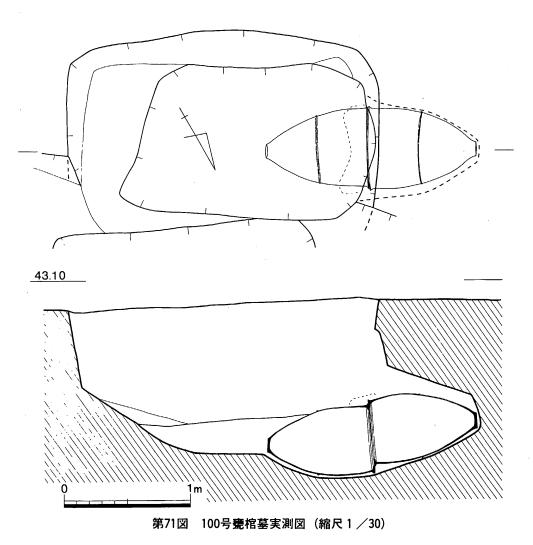


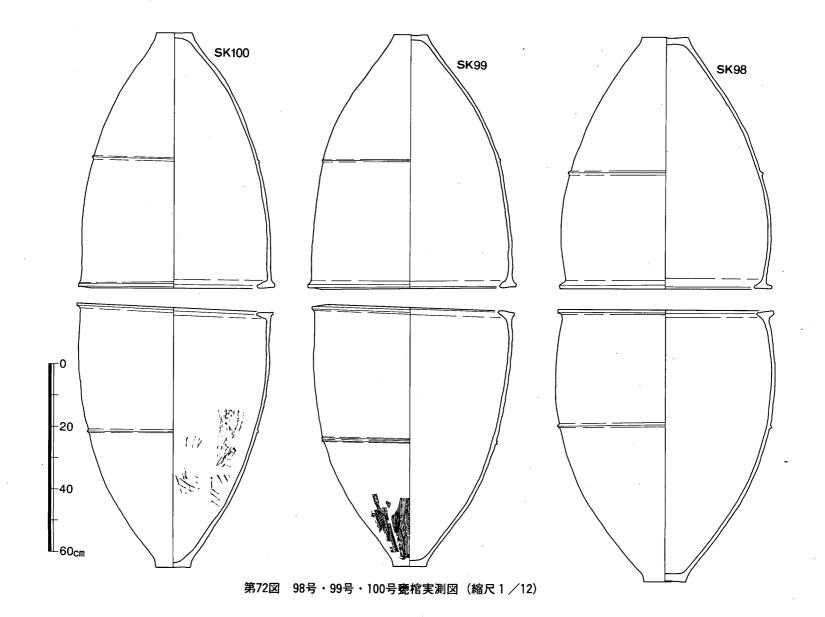
墓列の中央に位置する。52~54号の3基の小児用棺が重複する。長方形状の大きな墓壙に納める。墓壙は深く、壙壁に横穴を穿ち、これに下甕を納める合口式の成人用棺である。合口部には粘土による目貼りを施す。棺の傾斜は下甕側が高くなっている。

棺内には遺存状態の不良な成年女性の人骨が遺存していた。

100号甕棺墓(第71・72・77図、図版 9 - 3)

墓列の中央に位置する。いくつもの棺が重複する。長方形の大きな墓壙は深く、壙壁に横穴を穿ち下甕を納める合口式の成人用棺である。合口部には粘土の目貼りをするが下面部まで施されていない。棺の傾斜は下甕側が高くなっている。

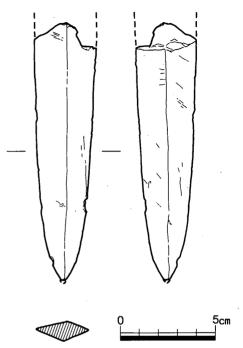




棺内には若年(17~18歳)の男性人骨が検出されたが、その遺存状態は不良である。頭部には赤色顔料が塗布されていたらしく、その部分の棺底には顔料が付着していた。この遺体の特徴は、左仙腸関節部に銅剣の切先が嵌入し、その骨に接して下部より石剣片が発見された。銅剣は後方より刺突されたものらしく、切先が折れて骨に刺さったままに残ったものである。石剣も刺さったままの状態で棺内に安置されたものと推定される。相当の重傷を受けたものであろう。

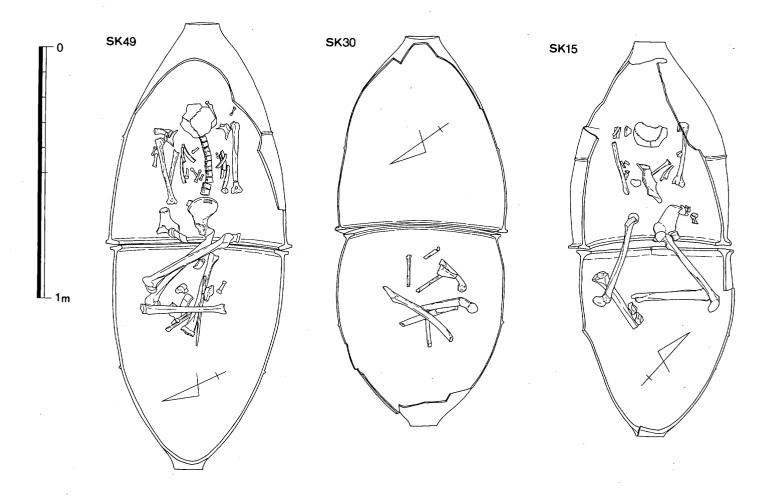
101号甕棺墓 (第55・66図、図版10-4)

墓列の中央に位置する。100号棺と重複し、これより古い。小児用棺であり、長方形状の墓壙底を1段深く下げ、壙壁に横穴を穿ち下甕を納める。下甕は大きな壺をそのまま利用し、上甕には小型の甕を用いている。合口部には幅広くに粘土によ 第73図り目貼りを施しているが、下面までには達していない。

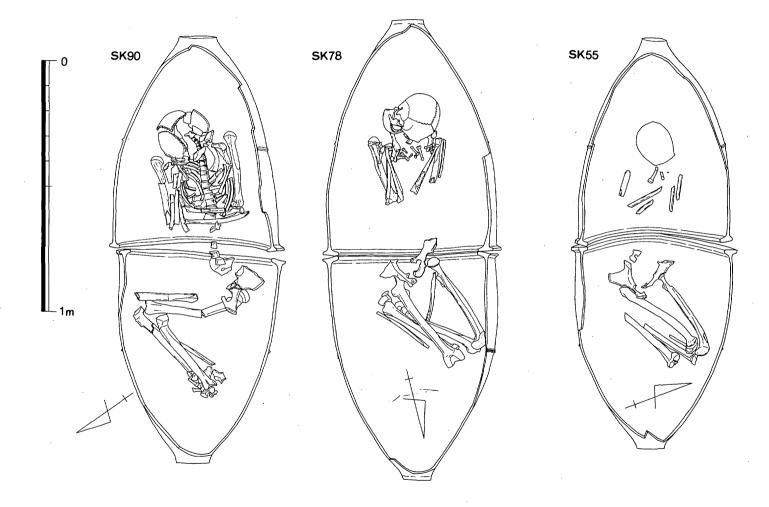


第73図 100号甕棺墓出土石器実測図(縮尺1/2)

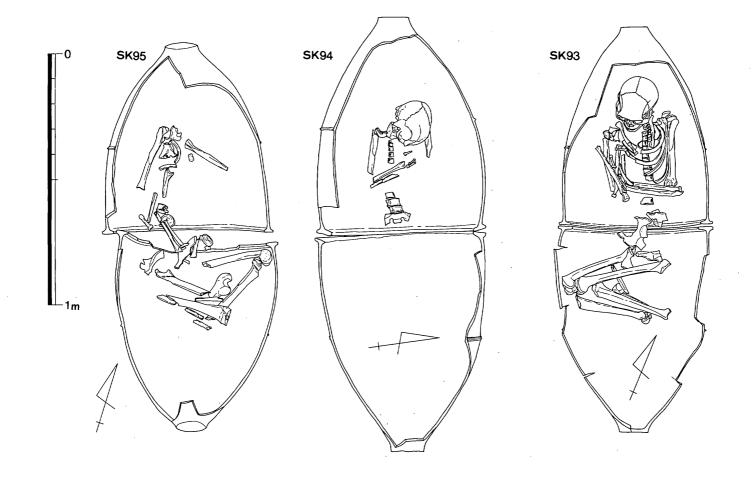
棺内に遺存状態の非常に悪い人骨が検出された。4~5歳の幼児と考えられている。



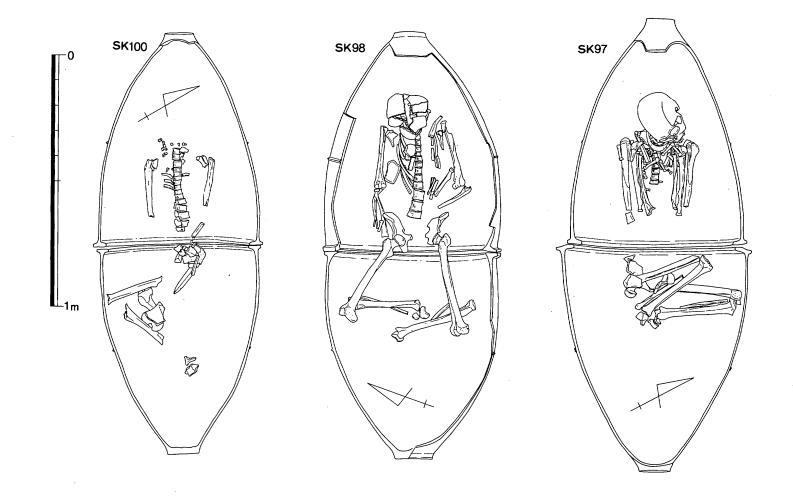
第74図 15号・30号・49号甕棺墓人骨出土状態実測図(縮尺 1 /15)



第75図 55号・78号・90号甕棺墓人骨出土状態実測図(縮尺1/15)



第76図 93号・94号・95号甕棺墓人骨出土状態実測図(縮尺 1/15)



第77図 97号・98号・100号甕棺墓人骨出土状態実測図(縮尺 1 /15)

表一1 甕棺墓一覧表

	'	~,,,,	一見衣	•										_
番号	Z.	5擴形態			見模(cm	-	棺の	器 種	合口	主軸方位	埋置	人骨	時期	備考
田 フ	21	57 與 ハン:ご::	長さ	幅	深さ	奥行	規模		形態	工.和7715.	角度	八月	, ,0,1	- End
1	楕	円 形	140	98	18	_	小児	上 打ち欠き壺 下 小甕	挿入	N -44°-W	水平近い		K∏b併行	
2	楕	円形?	144	-	63	32	小児	上 打ち欠き壺 下 小甕	接口	S -83°- E	- 7°		K Ⅱ b 併行	
3	楕	円 形	84	57	33	10	小児	上 小甕	覆口	N -62°-W	47°		K ∐ a 併行	
4	隅	丸方形	90	101	58	33	小児	上 打ち欠き壺 下 打ち欠き壺	覆口	N -56°-W	33°		K Ⅱ a 併行	
5	楕	円形	124	79	26	39	小児	上 小甕	接口	N -70°+W	-10°		K Ⅱ.a 併行	
6	楕	円形	142	81	32	_	小児	上 小甕 下 小甕	接口	N - 9 °- E	- 4 °		K ∏ a 併行	
7	隅	丸方形	111	78	47	24	中型	中甕	単棺	N -24°- E	34°		KⅡa併行	石蓋をした痕 跡が残る
8	不	整形	145	87	33	_	小児	上 小甕 下 小甕	接口	N -78°- E	- 3°		K∐b併行	
9	不	整形	117	85	34	7	小児	上 小甕 下 打ち欠き壺	_	N -48°-W	6°		KⅡa併行	
10	楕	円形	148	75	32	3	小児	上 小甕 下 小甕	接口	N -24°- E	- 4 °		K∏b併行	
11	楕	円形	83	47	14	_	小児	上 小甕 下 小甕	接口	N -24°-W				
12	不	整形	101	59	27	_	小児	上 打ち欠き壺 下 小甕	接口	N -36°-W	-6°?		K∏a併行	
13	不	整形	_	65	13	_	小児	上 小甕 下 小甕	接口	N -66°-W	11° ?		K∥a併行	,
14	楕	円形	51	42	36	10	小児	上 小甕 下 小甕	接口	S -70°-W	31°		K∏a併行	
15	長	方 形	201	149	110	88	成人	上 大甕 下 大甕	接口	N -42°-W	- 2	成年(♀)	К [] Ъ	
16	不	整方形	_	83	53	_	中型	上 中 要 中 要 下 中 要	接口	N -71°- E	5°		K∐b併行	三連棺
17	不	整形	_	_	33	_	小児	上 打ち欠き壺 下 小甕	接口	N -74°-W	17°		KⅡb併行	
18	楕	円形	_	59	23	_	小児	上 小甕 下 小甕	接口	S -78°- E	- 3 °		K Ⅱ b 併行	
19	長	方 形	216	129	126	75	成人	上 中甕 下 大甕	接口	S -14°- E	- 4 °	成人(含?)	К [] Ь	
20	不	整方形	208	131	79	61	成人	上 大甕 下 大甕	接口	N -49°-W	7°	熟年(♀)	К∏ с	
21	長	方 形	167	117	103	66	成人	上 大甕 下 大甕	接口	N -45°-W	4 °	成 熟年 (♀)	К∏с.	
22	楕	円形	106	80	32	3	中型	上 打ち欠き壺 下 中甕	接口	N -32°- E	- 3 °		K∏b併行	
23	長	方 形?	_	_	50	65	中型	上 中甕 下 中甕	接口	N -19°-W	- 7°		K ∏ b 併行	
24	隅	丸方形	146	87	_	_	中型	上 中甕 下 小甕	_	N -63°-W	_		K∐b併行	
25	不	整形	129	77	30	8	小児	上 打ち欠き壺 下 小甕	接口	N -38°- E	- 7°		K∏b併行	
26	隅	丸方形	144	93	93	44	中型	上 打ち欠き壺 下 中甕	接口	N -41°-W	1°		K∐a併行	
27	楕	円形	108 ?	76	41	39	小児	上 小甕 下 小甕	接口	N -35°- E	8°		KⅡb併行	
28	楕	円形	_	87	42	21	小児	上 打ち欠き壺 下 小甕	接口	N -74°-W	-10°		KⅡa併行	

<u> </u>	-		atr.					棺の			14	合口		埋置	ı m	n+ #9	1:#5	 -bz.
番号	基均	廣形!	馬	長さ	幅	深さ	奥行	規模		器	種 —————	形態	主軸方位	角度	人骨	時期		 考
29	不	整	形		60	39	23	小児	上下	小妻 小妻		接口	N -88°-W	44°		KⅡb併行		
30	楕	円	形	226	161	98	47	成人	上 下	大碧 大碧		接口	N -45°-W	- 9°	成年(♀)	К∏ь		
31	隅メ	七方	形	101	69	54	(23)	小児	上 下	大甕小甕	医底部	覆口	N	_		KⅡb併行		
32	楕	円	形	87	55	30	_	小児	上下	小碧小碧		接口	N -71°-W	13°		К∏ь併行		
33	不	整	形	94	58	40	5	小児	上下	小豐壺	<u>E</u>	接口	N -51°- E	7°		K ∏ b 併行?		
34	楕	円	形	132	59	38	_	小児	上下	小费		接口	N -26°- E	9°		K [] ¢ 併行		
35	楕	円	形	116	56	24	_	小児	上下	小薯		接口	N -24°-W	-10°		K∥¢併行		
36	隅ラ	— t. 方	形	118	57	19	_	小児	上下	小妻 小妻		接口	N -73°-W	1°		К 🛛 ¢ 併行		
37	隅ラ	九方	形	60	50	44	24	小児	上下	打ち壺	欠き壺	挿入	N -77°-W	11°		KⅡb併行		
38	円		形	55	52	30	17	小児	上下	打艺小器	っ欠き小甕 ₹	接口	N -25°- E	-11°		K∥¢併行		
39	隅っ	丸 方	形	137	100	55	(44)	中型	上下	打机中聚	o欠き大甕 ₹	接口	N -34°- E	4 °		KⅡb併行		
40	長	方	形	203	153	128	85	成人	上下	大装		接口	S -49°- E	- 9 °	若年 (不明)	к∏ ь		
41	梢	円	形	116	85	13	_	小児	上下	壺 小雪	ž	接口	N -83°- E	8°				
42	不	整	形	147	93	77	29	小児	上下	小型		接口	N -29°-W	-14°		K∏c併行		
43	長	方 	形	113	68	51	24	小児	上下	打机	ら欠き壺 医	接口	N -62°-W	7°		K [[b 併行		
44	楕	円	形	122	73	21		中型	上下	中型中型		接口	N -38°- E	10°		KⅡb併行		
45	長	方	形	109	82	57	51	中型	上下	中型 中型		接口	N -59°-W	5°		KⅡb併行		
46	不	整	形	191	90	76	3.	中型	上下	中野中野		接口	N -74°-W	4°		KⅡb併行		
47	長	方	形	137	_	39	12	小児	上下	小图		接口	N -34°-W	- 6°		K [] c 併行		
48	方		形	75	74	81	12	小児:	上下	小到小哥	題	接口	N -25°- E	- 6°		KⅡb併行		
49	長	方	形	260	169	140	70	成人	上下	大致	据	接口	S -65°- E	- 3 °	成年(早)	K [] c		
50	隅	丸方	形	77	61	64	30	小児		打机	ち欠き小甕 悪	接口	N -68°- E	ほぼ水平		K∥¢併行		
51	方		形	119	_	65	49	小児	上下	打中	ち欠き壺 甕	接口	N -30°- E	ほぼ水平		KⅡb併行		
52	楕	円	形	109	89	41	30	小児	上下	小到	祖元	接口	N -27°-W	- 3 °		KⅡc併行		
53	不!	整方	形	104	_	53	24	小児	上下	小到	題	接口	N -14°-W	3°		K Ⅱ b 併行		
54	不	整	形	139	106	52	22	中型	上下			接口	S -62°-W	-1°		KⅡb併行		
55	長	方	形	271	189	118	63	成人	上下	大	Æ	接口	S -70°- E	- 9 °	熟年(♀)	К∐ь		
56	不!	整 方	形	126	96	68	(56)	中型	上下	中野	塑	接口	S -70°-W	6 °	小児? (不明)	K Ⅱ b 併行		

番号	曹	壙形	台台	Ž	壙の規	見模(cm)	棺の		뀲	種	合口	主軸方位	埋置	人骨	時 期	備考
田 ク	- 25	州 ルシ	 ——	長さ	幅	深さ	奥行	規模			作里 ————	形態	土鴨万位	角度	八百	一 一 一)佣 · 5
57	梢 ——	円	形	123	70	22		小児	上下	小甕 小甕		接口	N -80°- E	- 3 °		К 🛮 Ь 併彳	Ī
58	梢	円	形	84	58	15		小児	上下	小甕 小甕		接口	N -48°-W	1°			
59	楕	円	形	131	75	21	_	小児		打ち欠き 小甕	壺	接口	N -19°-W	- 5 °		K ∏ b 併行?	
60	不	整	形	. 166	83	38	_	小児	上 下	小甕 小甕		接口	S -73°-W	- 3 °	幼児 ? (不明)	K∏b併行	ī
61	楕	円	形	98	49	12	_	小児	上 下	小甕 小甕		接口	S -69°-W	4°		K [] b 併彳	ī
62	楕	円	形	193	94	44	_	中型	上下	中甕中甕		接口	N -70°- E	12°		KⅡb併行	ī
63	楕	円	形	117	96	67	41	小児	上下	壺 小甕		接口	N -32°-W	9°		K ∐ b併行	ī
64	円		形	93	84	41	(40)	小児	上下	壺 小甕		接口	N -41°- E	7°		K∥c併行	Ť
65		_		_		_	_	小児	_			_					
66	楕	μij	形	161	73	25		中型	上下	中甕 中甕		接口	N -67°- E	3°		K∐c併行	ī
67	不	整 方	形	118	54	33		小児	上下	壺壺		接口	N -36°- E	8°		K II b 併行	ī
68	不	整	形	85	48	15	_	小児	上下	小甕 小甕		接口	S -60°-W	- 2°		K ∏ b 併彳	7
70	不	整	形	91	57	13		小児	上下	小甕 小甕		接口	S -86°-W	4 °		K II b 併彳	ī
71	隅メ	し長ブ	ī形	132	60	30	_	小児	上下	小甕 中甕		挿入or 呑口	w	- 6°			
72	楕	円	形	82	48	13	1	小児	上下	小甕 小甕		接口	S -77°-W	_			
73	方		形	74	71	29	(49)	小児	上下	小甕 小甕		接口	N -58°-W	-18°		K∏¢併行	ī
74	長	方	形	260	180	157	64	成人	上下	大甕 大甕		接口	N - 7 °-W	- 4.°	成年(含)	К∐Ь	
75	楕	円	形	85	47	9	-	小児	上下	小甕 小甕		接口	S -72°-W	ほぼ水平		K II b 併行	ī
76	楕	FIJ	形	80	51	12	_	小児	上下	小甕 小甕		接口	N -81°- E	3°			
77	不!	整方	形	84	79	28	(23)	小児	上下	小甕 小甕		接口	S -36°- E	1°		K [] c 併 í	ī
78	隅メ	し長り	j 形	215	126	107	(73)	成人		大甕 大甕		接口	N -14°- E	1°	成長(含)	K∏c	
79	方		形	_	116	45	35	中型		中甕・下打ち欠き		接口	N -32°-W	ほぼ水平		K I b 併 ⁄	三連棺
80	楕	μŋ	形	143	81	48	25	小児?	きる	壺・下 題 打ち欠き		接口?	N -80°- E	-10°		К∏ b併行	亍 三連棺
81	不	整	形	(88)	84	30	(27)	小児	上	深鉢 壺	,	接口	S -17°- E	- 9 °		К 🛮 Ь 併 і	ī
82	楕	円	形	(119)	64	30	-	小児	壺			単棺?	S -80°-W	44°		K 🏿 b併行	木蓋等の根蹄 は不明
83	長	— 方	形	141	82	63	53	中型	上下	打ち欠き 中甕	壺	挿入?	N-17°-W	ほぼ水平		К∏ Ь併1	ī
84	楕	円	形	203	83	62	6	中型	上下	中甕 中甕		接口	N -89°-W	- 5 °		K ∏ b併1	Ī
85	不	整	形	66	46	12	_	小児	上下	— 小甕		_	N -87°-W			K ∏ c 併行	Ť
86	楕	円	形	106	50	51	13	小児	上下	打ち欠き	壶	接口?	S -37°-W	57° ?		К∏Ь併1	Ť

番号	785	塘形		喜	り	見模 (cm)	棺の		器種	合口	主軸方位	埋置	人骨	時期	備	考
世方	- 基	小	悲	長さ	幅	深さ	奥行	規模		谷 佳	形態	土鴨刀江	角度	八百	h-t- 161	7/用	45
87	長	方	形	121	93	44	38	小児	上 下	小甕 小甕	接口	N -73°- E	ほぼ水平	幼児(含)	K ∏ b併行		
88	長	方	形	79	56	37	15	小児	上下	打ち欠き壺 小甕	接口	S -72°- E	12°		K ∏ a 併行		
89	長	方	形	254	163	130	73	成人	上下	大甕 大甕	接口	N -59°-W	- 9°	成人 (不明)	К∏а		
90	長	方	形	237	205	111	58	成人	ㅗ ド	大甕 大甕	接口?	N -45°-W	- 3°	成年(含)	К∏Ь		
91	不	整	形	161	116	81	_	中型	上 下	打ち欠き壺 中甕	挿入	S -63°- E	-11°		K ∐ b併行		
92	長	方	形	151	102	99	42	中型	上 下	中甕中甕	接口	N -63°-W	-10°	幼児 (不明)	KⅡb併行		
93	長	方	形	(214)	135	118	66	成人	上 下	大甕	接口	S -22°- E	4 °	熟年(含)	К∏ь		
94	長	方	形	203	138	113	73	成人	上 下	大甕 大甕	接口	S -83°- E	- 3 °	熟年(♀)	К∏ь		
95	長	方	形	261	181	105	43	成人	上下	大甕 大甕	接口	S -17°- E	- 5°	熟年(含)	К∏ь		
96	長	方	形	123	_	63	(47)	(中型)		小甕③小甕 小甕④小甕	(接口)	S -31°-W	- 3°		K ▮ b 併行	三連棺	
97	方		形	179	161	107	78	成人	上 下	大甕 大甕	接口	S -63°- E	2 °	熟年(含)	К ∏- с		
98	方		形	(188)	172	112	(76)	成人	上 下	大甕 大甕	接口	S -50°-W	-10°	成年(含)	К∏ь		
99	隅メ	九長ブ	5形	238	194	151	71	成人	上 下	大甕 大甕	接口	N -41°- E	- 3 °	成年(♀)	K Ⅱ b 併行		
100	長	方	形	247	149	144	83	成人	上 下	大甕 大甕	接口	S -61°- E	- 7°	若年(含)	К ∐ с		
101	長	方	形	_	106	19	20	小児	上 下	小甕 壺	接口	S -36°- E	11°	幼児 (不明)	K [] b 併行		

※棺の規模:中形棺とは、下甕の器高が30cm~75cmの土器を棺として使用しているもので、器種分類の結果、数値で区分したもので、棺の規模と被葬者の年令、体格は対応するものではない。 器 種:器高が50cm以下のものを小甕、50cm~75cmのものを中甕、75cmを越えるものを大甕とする。 主軸方位:上甕の方位を主軸方位とする。

表 2 甕棺一覧表

番	号	器種	法 量(c	m)	胎土·色調·焼成	特	微	分	類
1	上	小甕	器 高口線 外径 (3口線 内径 (2胴部最大径底 部径	2.1) (5.2) (5.2)	台土 微粒砂多く混る 丸調 橙色 尭成 良好	胴部上位から口縁部のみが残る。□ る逆 L 字口縁を呈す。口縁下に 1 条の 凸帯部は横ナデ、他はナデ。		K Ⅱ 併行	
2	上	打ち欠き壺	器	f	治土 微粒砂混る 色調 赤褐色 尭成 良好	頸部より上を打ち欠きにより欠損。 径はやや上位にあり、そこに1条の 上げ底を呈す。凸帯部は横ナデ、他 るがヘラミガキ。底部の一部には黒 われる。	三角凸帯を持ち、底部は少し は内外面とも摩滅が進んでい	K ∏ 併行	
2	下	小甕	口緣 外径 口緣 内径 胴部最大径	33.3	治土 微粒砂少し混る 色調 橙色 尭成 良好	口縁は内に低く傾斜する逆L字状口 径と1条の三角凸帯を持ち、底部は末 凸帯部は横ナデ、他は内外面とも摩 帯より上がナデで、下が荒い縦方向 部近くに多少ハケ目が残るがナデで	5干上げ底をなす。口縁内外・ 滅が進んでいるが、外面は凸 のハケ目、内面は胴上位と底	K ∏ 併行	
3	上	小甕	口縁 外径 口縁 内径 胴部最大径	43.5	胎土 微粒砂多く混る 色調 橙色 尭成 良好	胴部中央以下を欠損。口縁は内に低を施す逆し字状口縁を呈す。口縁下 移内外・凸帯部は横ナデ、他はナデ	に1条の三角凸帯を持つ。口	K Ⅱ 併行	
3	下	小甕	口縁 外径口線 内径	35.7	胎土 微粒砂混る 色調 にぶい橙色 焼成 良好	口縁は内に低く傾斜し、口縁端部に 呈す。口縁下に1条の三角凸帯を持 中央上部に最大径を持つ。底部はし なす。口縁内外・凸帯部は横ナデ、 はナデ。胴中央部に煤が付着してお	つ。胴部のハリは比較的強く、 まりが強く、大きく上げ底を 外面は縦方向のハケ目で内面	K Ⅱ 併行	
4	上	打ち欠き壺	器 口縁 外径 口縁 内径 胴部最大径 底 部 径		胎土 微粒砂混る 色調 明赤褐色 焼成 良好	頭部より上を打ち欠きにより欠損。 径はやや上位に持ち、底部はわずか 摩滅が進んでいるが、外面はヘラミ 部の一部には黒斑が残り、日常容器	に上げ底をなす。内外面とも ガキ、内面はナデである。底	K Ⅱ 併行	
4	F	打ち欠き壺	器 高 頸 部 径 胴部最大径 底 部 径	20.5	抬土 微粒砂多く混る 色調 赤褐色 焼成 良好	口縁部を打ち欠きにより欠損。頸部直 胴部は多少球形を呈し、最大径はや わずかに上げ底をなす。形部外面は され、内面ヘラミガキ、凸帯部は横 摩滅が進んでいるがナデである。	や上位にある。底部はしまり、 縦縞状に縦方向のハケ目が施	KⅡ 併行	
5	上	小甕	口縁 外径 口縁 内径	25.8 1	胎土 微粒砂多く混る 色調 没黄橙色 焼成 良好	口縁はあまり発達してなく、内に低す。胴部はハリが強く、上位に胴部がかなり強く、大きく上げ底をなす方向の細かいハケ目で内面はナデ。引日常容器転用と思われる。	最大径を持つ。底部はしまり 。口縁部は横ナデ、外面は縦	K ∏ 併行	
5	F	小甕	口縁 外径 口縁 内径	30.8	胎土 微粒砂混る 色調 浅黄橙色 焼成 やや良	口縁はあまり発達してなく、内に低し、口縁下に1条の三角凸帯を持つ 底部はしまりがかなり強く、大きく 帯部は横ナデ、外面は荒い縦方向の 下位にかけて若干縦のハケ目が残る	。胴部上位に最大径を持ち、 上げ底をなす。口縁内外・凸 ハケ目、内面は底部から胴部	ΚⅡ	
6	上	小甕	口縁 外径 口縁 内径	32.9 1	胎土 微粒砂少し混る 色調 浅黄橙色 焼成 やや良	口縁は内に低く傾斜する逆L字状口径と1条の三角凸帯を持ち、底部は 凸帯部は横ナデ、内外面の調整は摩 に丹が残っており、外面丹塗りと思	告干上げ底をなす。口縁内外・ 滅のため不明であるが、外面	K Ⅱ 併行	
6	下	小甕	口縁 外径 口縁 内径	32.8	胎士 微粒砂多く混る 色調 黄橙色 焼成 やや良	口縁はあまり発達してなく、内に低し、口縁下に1条の三角凸帯を持つ底部はしまりがかなり強く、大きく帯部は横ナデ、外面は摩滅が激しいデ。	。胴部上位に最大径を持ち、 上げ底をなす。口縁内外・凸	K Ⅱ 併行	

番	号	器種	法 量(cm)	胎土·色調·焼成	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	微	分 類
7		中要	器 高 67.5 口緣 外径 55.0 口緣 内径 49.5 胴部最大径 52.8 底 部 径 11.7	色調 橙色	口縁は内に低く傾斜する逆し字状 角凸帯を持つ。胴部は多少ハリが はしまりが強く、若干上げ底をな ては横ナデ、外面は細かい縦方向の	あり上位に最大径を持つ。底部 す。口縁内外から凸帯部にかけ	K ∏ a 併行
8	上	小甕	器 高 39.8 口縁 外径 29.7 口縁 内径 23.8 胴部最大径 29.3 底 部 径 8.0	色調 浅黄橙色	口縁は内に低く傾斜する逆L字状 角凸帯を持つ。胴部最大径は上位 部はしまりが強く、大きく上げ底 ナデ、外面は縦方向のハケ目、内	にあり、胴部のハリも強い。底 をなす。口縁内外・凸帯部は横	K∏b 併行
8	下	小甕	器 高 39.7 口縁 外径 32.4 口縁 内径 26.7 胴部最大径 31.2 底 部 径 7.7	色調 橙色	口縁はあまり発達せず、内に低く 口縁下に1条の三角凸帯を持つ。 のハリも強い。底部はしまり、少 帯部は横ナデ、外面は縦方向のハ	胴部最大径は上位にあり、胴部 し上げ底をなす。口縁内外・凸	K ∏ b 併行
9	上	小甕	器 高 33.9 口縁 外径 27.1 口縁 内径 22.5 胴部最大径 26.5 底 部 径 6.4	色調 橙色	口縁は内に低く傾斜する逆L字状 持ち、最大径をを央部に持つ。底 底をなす。口縁内外は横ナデ、外 はナデ。胴部中央から上位にかけ 転用と思われる。	部はしまりが強く、大きく上げ 面は荒い縦方向のハケ目、内面	K Ⅱ a 併行
9	下	打ち欠き壺	器 高 —— 口緣 外径 —— 口緣 内径 —— 胴部最大径 40.7 底 部 径 7.4	胎土 微粒砂多く混る 色調 にぶい赤褐色 焼成 良好	頸部より上を打ち欠きにより欠損 径はやや上位に持ち、底部はわず にヘラミガキ見られるが、他は丁 底部に煤が付着しており、日常容	かに上げ底を呈す。外面は底部 寧なナデ、内面はナデである。	KⅡa 併行
10	Ŀ	小甕	器 高 44.4 口緣 外径 (35.7) 口緣 内径 (29.6) 胴部最大径 36.2 底 部 径 8.5	胎土 微粒砂少し混る 色調 橙色 焼成 良好	口縁は内に低く傾斜する逆し字状! 角凸帯を持つ。胴部はハリを少し: 底部はしまりが強く、大きく上げ! 横ナデ、外面は縦方向の細かいハ	持ち、最大径を中央部に持つ。 底をなす。口縁内外・凸帯部は	K∏b 併行
10	下	小甕	器 高 37.1 口縁 外径 38.1 口縁 内径 30.2 胴部最大径 36.1 底 部 径 (8.4)	色調 明褐色	口縁はあまり発達せず、内に低く 胴部最大径は上位にあり、底部は 縁内外は横ナデ、外面は口縁下に 位から底部にかけてが縦方向のハ	しまり、少し上げ底をなす。口 指圧痕が残り、上位がナデで下	KⅡb 併行
12	上	打ち欠き壺	器 高 —— 口緣 外径 —— 口緣 内径 —— 胴部最大径 31.9 底 部 径 8.6	胎土 微粒砂多く混る 色調 にぶい黄褐色 焼成 良好	頸部より上を打ち欠きにより欠損、 径はやや上位に持ち、底部は平底 でいるがナデと思われる。底部の 転用と思われる。	をなす。内外面とも摩滅が進ん	K∏a 併行
13	E.	小甕	器 高 — 口緣 外径 (24.6) 口緣 外径 (20.4) 胴部最大径(25.2) 底 部 径 ——	胎土 微粒砂多く混る 色調 黄褐色 焼成 良好	口縁は内に低く傾斜する逆L字状 る。胴部はハリを少し持ち、最大は横ナデ、内外面とも摩滅が進ん ケ目、内面はナデ。	径をやや上位に持つ。口縁内外	K ∏ a 併行
13	下	小甕	器 高 — 口線 外径 (28.8) 口線 内径 (23.6) 胴部最大径(25.0) 底 部 径 ——	胎土 微粒砂多く混る 色調 橙色 焼成 やや良	口縁は内に低く傾斜する逆し字状 る。胴部はハリがあまりなく、最 横ナデ、内外面とも摩滅が進んで 内面はナデ。	大径を上位に持つ。口縁内外は	KⅡa 併行
14	上	小甕	器 高 —— 口線 外径 21.7 口線 内径 16.6 胴部最大径 18.7 底 部 径 ——	胎土 微粒砂多く混る 色調 にぶい橙色 焼成 良好	底部は欠損しており、口縁は内にす。胴部のハリはあまり見られず、つ。底部はしまり、上げ底をなしナデ、外面は縦方向のハケ目、内に	、かなり上位に胴部最大径を持 ていたと思える。口縁内外は横	K Ⅱ a 併行

番	号	器種	法 量(cm)	胎	土·色調·焼成	特	微	分	類
14	下	小甕	器 高 口縁 外径 口縁 内径 胴部最大径 底 部 径			微粒砂多く混る 明赤褐色 良好	口縁はあまり発達せず、内に低く傾終 胴部最大径は上位にあり、胴部のハリ く、大きく上げ底をなす。口縁内外は ケ目、内面はナテ。	りも強い。底部はしまりが強	KⅡ 併行	
15	上	大甕	器 高 口縁 外径 口縁 内径 胴部 最大 底 部 径	52.1 60.8	色調	微粒砂やや混る 黄橙色 良好	口縁は内側に発達し、ほぼ平坦なT与ほまり、やや上位に1条の三角凸帯を底部はしまり、平底をなす。口縁内外外ともナデである。	持ち、最大径は上位にある。	КΠ	b .
15	不	大甕	器 口線 外径 口線 内径 胴部最大径 底 部 径	54.4 63.5	色調	微粒砂やや混る 黄橙色 良好	口縁は内側に発達し、ほぼ平坦な T 字状口 やや上位に 1 条の三角凸帯を持ち、最大 足 平底をなす。口縁内外・凸帯部は横ナデ、に縦方向ないし斜行するナデが施されてい見られ内面は上位に黒色顔料と思われるもその部分以外は全体が黒く塗られている。	は上位にある。底部はしまり、 他も基本的には横ナデで部分的 る。また、外面には煤の付着が	к 🛚	b
16	上	中	器	32.6	色調	微粒砂多く混る にぶい黄褐色 良好	口縁は内に低く傾斜し、口縁端部に亥 呈す。口縁下に1条の三角凸帯を持つ やや上位に最大径を持つ。底部はしま 縁内外・凸帯部は横ナデ、外面は摩源 目が認められ、内面はナデである。	。胴部のハリは比較的強く、 まり、若干上げ底をなす。口	K Ⅱ 併行	
16	中	中	器 外径 口線 内径径 胴部 最大径	35.7 41.5	色調	微粒砂多く混る 浅黄橙色 良好	口縁はほぼ平坦なT字状口縁を呈し、 持つ。胴部のハリは比較さほど顕著で を持つ。底部は打ち欠いているためイ ナデ、外面は摩滅がひどいが、胴中サ 思われ、内面はナデである。	ではなく、やや上位に最大径 下明。口縁内外・凸帯部は横	K ∏ 併行	
16	下	中薨	器 口緣 口緣 內 將 明 部 最 大 径 順 部 最 不 径 径 月 名 名 人 人 名 一 長 五 人 人 天 人 任 名 任 ろ 人 天 在 ろ と ろ と ろ と ろ と ろ と ろ と ろ と ろ と ろ と ろ	47.7 40.1	色調	微粒砂多く混る 橙色 良好	口縁は内に低く傾斜し、あまり発達し し、口縁下に1条の三角凸帯を持つ。 上位に最大径を持つ。底部はしまりか 内外・凸帯部は横ナデ、外面は縦方向	胴部のハリは大きく、中央 が強く、上げ底をなす。口縁	K Ⅱ 併行	
17	上	打ち欠き壺	器 高 口線 外径 口線 内径 胴部最大径 底 部 径	29.8		微粒砂少し混る 明赤褐色 良好	頸部より上を打ち欠きにより欠損。胴 そこに1条の三角凸帯を持ち、底部に はヘラミガキと思われ、内面はナデ、	は若干の上げ底を呈す。外面	Κ ∏ 併行	
17	下	小甕	器 口線 口線 内径 胴部最大径 底 部 径		色調	微粒砂少し含む 浅黄橙色 不良	口縁は内に低く傾斜する逆L字状口絹 やや上位にあり、底部はしまり、若 横ナデ、外面は底部付近に縦方向の/ デ。外面胴中央から下位にかけて煤が と思われる。	F上げ底をなす。口縁内外は >ケ目が多く残り、内面はナ	К ∏ 併行	
18	Jt.	小幾	器 口線 外径 口線 内径 胴部最大径 底 部 径		色調	微粒砂多く混る 褐色 良好	口縁は内に若干低く傾斜する逆し字れの三角凸帯を持つ。胴部は少しハリれ位に持つ。底部は欠損しているがしまから凸帯部にかけては横ナデ、外面にデ。	があり、最大径を中央やや上 まりはかなり強い。口縁内外	K Ⅱ 併行	
18	下	小甕	器 口線 外径 口線 内径 胴部最大径 底 部 径	36.8 29.9 21.4 27.8 6.6	色調	微粒砂多く混る 明赤褐色 良好	口縁は内に低く傾斜する逆 L 字状口線のハリもあまり認められない。底部に縁内外は横ナデ、外面は縦方向のハク部には上位から底部付近まで煤の付り、日常容器転用と思われる。	はしまり、上げ底をなす。口 ヶ目、内面はナデ。外面の一	Κ ∐ 併行	
19	上	中 魏	口緣 外径 口緣 内径	51.0 55.7	色調	微粒砂やや混る 黄白色 良好	口縁は内に低く傾斜する逆し字状口結 作り 1 条見かけ2 条の山形凸帯を持ち 部はわずかに上げ底をなす。口縁内外 外面ともナデ。内面の胴中央部から 顔料の撫で付けが見られる。	ち、最大径は上位にある。底 4・凸帯部は横ナデ、他は内	КΠ	b

番	号	器種	法 量(cm)	胎	土・色調・焼成	特	微	分	類
19	下	大甕	器 高 口線 外径 口線 内径 胴部最大径 底 部 径	43.2 54.6		微粒砂混る 明赤褐色 良好	口縁は内に低く傾斜するT字状口縁 かけ2条の山形凸帯を持ち、最大径 しまり、少し上げ底をなす。口縁内 外面ともにナデ。	はかなり上位にある。底部は	КΙ	b
20	上	大甕	器 口線 外径 口線 内径 胴部最大径 底 部 径	52.2 61.3		微粒砂多く混る 黄橙色 良好	口縁は内側に大きく発達し、外に低く 胴上半はいくぶんすぼまり、やや上 最大径は口縁下にある。底部はしま 口縁内外・凸帯部は横ナデ、他も基 方向ないし斜行するナデが施されて れている。	位に2条の三角凸帯を持ち、 り、わずかに上げ底をなす。 本的には横ナデで部分的に縦	K II	С
20	下	大甕	口縁 外径口線 内径	53.1 60.0	胎土 色開 焼成	徴粒砂混る 橙色 良好	口縁は内側に大きく発達し、外に低く 口縁下はわずかにすぼまり、やや上 最大径はかなり上位にある。底部は す。口縁内外・凸帯部は横ナデ、他 に縦方向ないし斜行するナデが施さ が黒く塗られている。	位に1条の三角凸帯を持ち、 しまり、わずかに上げ底をな も基本的には横ナデで部分的	КΠ	c
21	上	大甕	口縁 外径 口縁 内径	50.4 59.5		微粒砂やや混る 赤褐色 良好	口線は外に低く傾斜するT字状口線 ほまり、ほぼ中央に1条の三角凸帯 る。底部はしまり、わずかに上げ底 横ナデ、外面は凸帯より上部が縦方 ハケ後ナデ、内面はナデ。	を持ち、最大径は口縁下にあ をなす。口縁内外・凸帯部は	К∐	c
21	下	大甕	器 口線 外径 口線 内径 胴部最大径 底 部 径	55.2 60.4	色調		口縁は外に低く傾斜するT字状口縁 ほぼ中央に1条の三角凸帯を持ち、 底部はしまり、わずかに上げ底をな デ、外面は縦方向のハケ目、内面は 黒く塗られており、口縁下には黒色 付けた痕も認められる。	最大径はかなり上位にある。 す。口縁内外・凸帯部は横ナ ナデ。内面は胴下位近くまで	К∏	С
22	上	打ち欠き壺	器 口緣 外径 口緣 内径 胴部最大径 底 部 径			微粒砂多く混る にぶい褐色 良好	頸部より上を打ち欠きにより欠損。 やや上位にある。そこに作り1条見 底部はわずかに上げ底を呈す。凸帯 ナデ。底部に煤が付着しており日常	かけ2条の山形凸帯を持ち、 部は横ナデ、他は内外面とも	ΚⅡ	
22	下	中要	口縁 外径	35.2		微粒砂多く混る 明褐色 良好	口縁部は内に少し低く傾斜する逆し 条の三角凸帯を持つ。胴部最大径は い。底部はしまり、平底をなす。口 ナデ、外面は縦方向のハケ目、内面	上位にあり、胴部のハリも強 縁内外から凸帯部にかけて横	Κ Ⅱ 併行	
23	上	中薨	器 口緣 外径 口緣 内径 胴部最大径 脈 部	30.4		微粒砂少し混る 浅黄橙色 良好	口縁は内に低く傾斜する逆 L 字状口 角凸帯を持つ。胴部最大径はやや上 底部はしまり、少し上げ底をなす。 横ナデ、外面は縦方向のハケ目、内	位にあり、胴部のハリも強い。 口縁内外から凸帯部にかけて	K Ⅱ 併行	
23	下	中甕	口縁 外径	38.2 49.2	胎土 色 焼成	微粒砂多く混る 橙色 良好	口縁は内に低く傾斜する逆し字状口 角凸帯を持つ。胴部最大径は上位に い。底部はしまり、少し上げ底をな けて横ナデ、外面は縦方向のハケ目	あり、胴部のハリはかなり強 す。口縁内外から凸帯部にか	K Ⅱ 併行	
24	下	小甕	器 口線 外径 口線 内径 胴部最大径 底 部 径		胎土 色調 焼成	微粒砂多く混る にぶい褐色 良好	胴部最上位から口縁部を欠損。胴部 部はしまりわずかに上げ底をなす。 はナデ。底部に若干煤が付着してお	外面は縦方向のハケ目、内面	K Ⅱ 併行	
25	上	打ち欠き壺	器 口線 外径 口線 内径 胴部最大径 底 部 径	43.1	胎出調焼成	微粒砂少し混る 明赤褐色 良好	頸部より上を打ち欠きにより欠損。 そこに 1条の三角凸帯を持ち、底部 帯部は横ナデ、他は内外面とも摩滅 部にかけてヘラミガキが認められ、 あったと思われる。	はわずかに上げ底を呈す。凸 れがひどいが、胴部下位から底	K ∏ 併行	
	l	1	<u> </u>				– 95 –		L	

番	号	器種	法 量(cm)	胎土·色調·焼成	特 微	分 類
25	下	小甕	器 高 39. 口縁 外径 31. 口縁 内径 26. 胴部最大径 30. 底 部 径 7.	5 色調 赤褐色 1 焼成 やや良 7	口縁は内に低く傾斜する逆L字状口縁を呈し、口縁下に2本の沈線を持つが凸帯はない。胴部最大径は胴中央部に持ち、底部はかなりしまり、大きく上げ底をなす。口縁内外は横ナデ、外面は口縁から沈線にかけてがハケ目の後横ナデがなされており、他は縦方向のハケ目、内面はナデ。	K ∏ b 併行
26	上	打ち欠き壺	器 高 — 口線 外径 — 口線 内径 — 口線 内径 — 胴部最大径 47. 底 部 径 9.	1	頸部より上を打ち欠きにより欠損。胴部最大径はやや上位にあり、 そこに作り1条見かけ2条の山形凸帯を持ち、底部は平底である。 凸帯部は横ナデ、外面はハケ目で内面はナデと思われる。	K ∏ a 併行
26	下	中薨	器 高 55. 口縁 外径 44. 口縁 内径 37. 胴部最大径 47. 底 部 径 11.	O 色調 橙色 6 焼成 良好	口縁は内に低く傾斜し、口縁端部に刻み目を施す逆L字状口縁を 呈す。口縁下に2条の三角凸帯を持つ。胴部のハリはかなり強く、 上位に最大径を持つ。底部は強くしまり、大きく上げ底をなす。 口縁内外・凸帯部は横ナデ、外面は縦方向のハケ目、内面はナデ。	K [] a 併行
27	上	小甕	器 高 33. 口緣 外径 29. 口緣 内径 23. 胴部最大径 26. 底 部 径 7.	1 色調 黄橙色 3 焼成 良好	口縁は内に低く傾斜する逆L字状口縁を呈し、口縁下に1条の三 角凸帯を持つ。胴部のかなり上位に最大径を持ち、底部はしまり、 上げ底をなす。口縁内外から凸帯部にかけては横ナデ、外面は縦 方向のハケ目、内面はナデ。	K Ⅱ b 併行
27	下	小甕	器 高 35. 口緣 外径 30. 口緣 内径 25. 胴部最大径 27. 底 部 径 7.	5 色調 浅黄橙色 3 焼成 良好 3	口縁は内に低く傾斜する逆L字状口縁を呈し、口縁下に1条の三 角凸帯を持つ。胴部のやや上位に最大径を持ち、底部はしまり、 少し上げ底をなす。口縁内外から凸帯部にかけては横ナデ、他は 内外面はともに摩滅がひどいが、外面には縦方向のハケ目が若干 残る。	K Ⅱ b 併行
28	上	打ち欠き壺	器 高 ———————————————————————————————————	- 一	頸部より上を打ち欠きにより欠損。胴部はかなり丸みを持ち、最大径はやや上位にある。底部は少し上げ底である。胴上位から中央にかけてが横へのヘラミガキ、下位から底部にかけてが縦方向のヘラミガキ。底部付近の一部には煤が付着しており、日常容器転用と思われる。	K Ⅱ a 併行
28	下	小甕	器 高 26.7 口縁 外径 29.1 口縁 内径 23.1 胴部最大径 30.1 底 部 径 7.0	日 色調 明赤褐色 日 焼成 やや良	口縁は内に低く傾斜する逆L字状口縁を呈し、凸帯はない。胴部はハリが強く、上位に最大径を持つ。底部はしまりがかなり強く、大きく上げ底をなす。口縁内外は横ナデ、外面はハケ目の後指ナデ、他は縦方向のハケ目、内面はナデ。	K ∏ a 併行
29	上	小甕	器 高 ———————————————————————————————————	色調 橙色 焼成 良好	口縁はあまり発達しておらず、内に低く傾斜する逆 L字状口縁を 呈す。胴部は少しハリがあり、上位に最大径を持つ。底部は欠損 しているがしまっている。口縁内外は横ナデ、外面は縦方向のハ ケ目、内面はナデ。	K Ⅱ b 併行
29	下	小甕	器 高 30.8 口緣 外径 (29.8) 口緣 内径 (21.3) 胴部最大径 24.9 底 部 径 6	色調 橙色 焼成 やや良	口縁はあまり発達しておらず、内に低く傾斜する逆L字状口縁を 呈す。胴部は少しハリがあり、上位に最大径を持つ。底部のしま りは強く、上げ底をなす。口縁内外は横ナデ、外面は縦方向のハ ケ目、内面はナデ。	K ∐ b 併行
30	上	大甕	器 高 79. 口緣 外径 58.2 口緣 内径 48.2 胴部最大径 63.2 底 部 径 10.2	色調 黄橙色 焼成 良好	口縁は内に低く傾斜するT字状口縁を呈す。胴上半はすぼまり、 胴部のハリも強く、中央やや上位に1条の三角凸帯を持ち、最大 径は上位にある。底部はしまり、少し上げ底をなす。口縁内外・ 凸帯部は横ナデ、他は内外とも横ナデで、部分的に縦方向や斜行 するナデが施されている。	К∏ь
30	下	大甕	器 高 79.3 口緣 外径 62.5 口緣 内径 52.5 胴部最大径 62.4 底 部 径 13.8	色調 橙色 焼成 良好	口縁は内側に発達し、外に少し低く傾斜するT字状口縁を呈す。 胴上半はすぼまり、やや上位に1条の三角凸帯を持ち、最大径は 上位にある。底部はしまり、平底をなす。口縁内外・凸帯部は横 ナデ、他は内外とも摩滅が進んでいるがナデと思われる。	К∏ь

番	号	器種	法 量(cm)	胎土·色調·焼成	特 微	分類
31	下	小甕	器 高 40.6 口緣 外径 31.8 口緣 内径 22.8 胴部最大径 30.6 底 部 径 7.5	色調 黄橙色	口縁はほぼ平坦な逆レ字状口縁を呈し、口縁下に1条の三角凸帯を持つ。胴部は少しハリがあり、やや上位に最大径を持つ。底部はしまり、上げ底をなす。口縁内外から凸帯部にかけては横ナデ、外面は縦方向のハケ目、内面はナデ。	K Ⅱ b 併行
32	上	小甕	器 高 36.5 口縁 外径 31.1 口縁 内径 23.2 胴部最大径 28.0 底 部 径 6.4		口縁は外に発達して、内に低く傾斜する逆L字状口縁を呈す。胴部最大径を胴中央上位に持ち、底部はしまり、わずかに上げ底をなす。口縁内外は横ナデ、外面は細かい縦方向のハケ目、内面はナデ。	K∏ c 併行
32	下	小甕	器 高 37.4 口縁 外径 32.0 口縁 内径 23.9 胴部最大径 28.3 底 部 径 8.8	色調 黄橙色	口縁は外に発達して、内に低く傾斜する逆L字状口縁を呈す。胴 部最大径を胴中央上位に持ち、底部はしまり、少し上げ底をなす。 口縁内外は横ナデ、外面は縦方向のハケ目、内面は胴上位から口 縁にかけて縦方向のハケ目が残り、他はナデ。	K∏ c 併行
34	上	小甕	器 高 —— 口線 外径 31.7 口線 内径 26.2 旧線 大径 29.4 底 部 径 ——		口縁は内に低く傾斜する逆 L 字状口縁を呈す。胴部最大径は上位に持ち、底部は欠損する。口縁内外は横ナデ、外面は縦方向のハケ目、内面はナデ。	K Ⅱ c 併行
34	下	小甕	器 高 38.0 口緣 外径 (33.4) 口緣 内径 (28.6) 胴部最大径(30.8) 底 部 径 7.7	胎土 微粒砂多く混る 色調 橙色 焼成 良好	口縁はほぼ平坦な逆 L 字状口縁を呈し、口縁下に 1 条の三角凸帯を持つ。胴部最大径をかなり上位に持ち、底部は強くしまり、上げ底をなす。口縁内外から凸帯部にかけては横ナデ、内外面とも摩滅がひどいが、外面は縦方向のハケ目、内面はナデと思われる。	K∏ c 併行
35	上	小甕	器 高 36.5 口線 外径 (32.2) 口線 内径 (26.2) 胴部最大径 29.9 底 部 径 7.2	胎土 微粒砂混る 色調 明赤褐色 焼成 良好	口縁はほぼ平坦な逆 L 字状口縁を呈す。 胴部最大径はやや上位に 持ち、底部はしまり、上げ底をなす。 口縁内外は横ナデ、外面は 縦方向のハケ目、内面はナデ。	K∏ c 併行
35	下	小甕	器 高 37.1 口緣 外径 32.5 口緣 内径 26.4 胴部最大径 29.8 底 部 径 7.5	色調 橙色	口縁はわずかに内に低く傾斜する逆し字状口縁を呈す。胴部最大 径は上位にあり、底部はしまり、上げ底をなす。口縁内外は横ナ デ、外面は縦方向のハケ目、内面はナデ。内部の底に黒斑が認め られ、日常容器転用と思われる。	K Ⅱ c 併行
36	上	小甕	器 第 32.6 口緣 外径 26.6 旧新最大径 29.0 底 部 径 7.7		口縁はわずかに内に低く傾斜する逆し字状口縁を呈し、口縁下に 1条の三角凸帯を持つ。胴部はハリがなく直線的で、最大径はか なり上位にある。底部はしまり、上げ底をなす。口縁内外から凸 帯部にかけては横ナデ、内外面とも摩滅がひどいが、外面は縦方 向のハケ目、内面はナデと思われる。	K∥c 併行
36	下	小甕	器	色調 にぶい黄橙色	口縁は内に低く傾斜する逆L字状口縁を呈す。胴部最大径は上位にあり、底部はしまり、少し上げ底をなす。口縁内外は横ナデ、外面は縦方向のハケ目、内面はナデ。外面胴部下位から底部にかけて一部に煤が付着しており、日常容器転用と思われる。	K∏ c 併行
37	上	打ち欠き壺	器	胎土 微粒砂少し混る 色調 浅黄褐色 焼成 良好	頭部より上を打ち欠きにより欠損。胴部最大径はやや上位にあり、 そこに作り1条見かけ2条の山形凸帯を持ち、底部はわずかに上 げ底である。凸帯部が横ナデ、外面はヘラミガキ、内面は頸部の 継目から胴上位にかけて指圧痕強く残り、他はナデである。 胸中 央部から頸部にかけての一部には煤が付着しており、日常容器転 用と思われる。	K∏ b 併行
37	下	壺	器 高 48.3 口縁 外径 34.4 口縁 内径 26.9 胴部最大径 43.0 底 部 径 9.2	色調 橙色	朝顔状に立ち上がる頭部に平坦な口縁部を作った壺形土器。肩の 張る胴部で、その最大径はやや上位にある。凸帯は最大径部分に 2条の三角凸帯を貼りつけ、底部はわずかに上げ底である。口縁 内外・凸帯部は横ナデ、頸部部内外と胴部外面はヘラミガキで調 整してある。	K II b 併行

番	号	器種	法 量(em)	胎土	·色調·焼成	特 微		分	類
38	上	打ち欠き小甕	器 高 口縁 外径 口縁 内径 胴部最大径(i 底 部 径	32.1)		散粒砂多く混る 橙色 良好	頸部より上を打ち欠きにより欠損。胴部は肩が張り、最大や上位にある。底部は平底である。内外面とも壁滅が進が、外面はヘラミガキ、内面はナデと思われる。外面底部に黒斑が認められ、日常容器転用と思われる。	んでいる	ΚⅡ併行	
38	下	小甕	口線 外径 口線 内径 胴部最大径	36.4 30.8 24.9 28.2 7.3		散粒砂多く混る 赤褐色 良好	口縁は内に低く傾斜する逆し字状口縁を呈す。胴部最大行上位にあり、底部はしまり、わずかに上げ底をなす。口線横ナデ、外面は縦方向のハケ目、内面はナデ。外面胴部口縁にかけて一部に煤が付着しており、日常容器転用と思	縁内外は 中央から	K Ⅱ 併行	
39	上	打ち欠き大甕	口縁 外径 口縁 内径 胴部最大径	43.8 8.1		激粒砂多く混る 褐色 良好	頸部より上を打ち欠きにより欠損。胴部は肩が張り、最大 や上位にある。頸部下と最大径部分に作り1条見かけ2% 凸帯を持ち、底部はわずかに上げ底をなす。凸帯部は横 面はヘラミガキ、内面は肩までがヘラ削りの痕跡が残る ナデ。底部付近の一部に煤が付着しており、日常容器転り れる。	条の山形 ナデ、外 が、他は	Κ Ⅱ 併行	
39	下	中	口縁 外径	39.3 48.9		散粒砂少し混る 浅黄橙色 良好	口縁は内に低く傾斜した逆し字状口縁を呈し、口縁下に 角凸帯を持つ。胴部はハリがあり、中央上位に最大径を打 部はしまり、上げ底をなす。口縁内外から凸帯部にかけ デ、外面は縦方向のハケ目、内面はナデ。	寺つ。底	K ∏ 併行	
40	上	大甕	口縁 外径	50.1 65.5		_{数粒砂少し混る} にぶい黄橙色 良好	口線はあまり発達せず、内に低く傾斜した逆し字状口線を呈す。 すぼまり、胴部のハリも強く、やや上位に作り1条見かけ2条の を持ち、最大径は上位にある。底部は強くしまり、わずかに上げ 口縁内外・凸帯部は横ナデ、外面は凸帯部より上部にヘラミガキ 下部はナデ、内面はナデである。内面には黒色顔料と思われるも 撫で付けた痕が認められ、また、口縁には丹が部分的に残ってお り土器の可能性もある。	山形凸帯 民をなす。 が残り、 のを指で	К∐	b
40	7	大甕	口縁 外径	52.4 66.5		般粒砂混る 浅黄橙色 良好	口線はあまり発達せず、内に低く傾斜した逆し字状口線を呈す。 すぼまり、胴部のハリも強く、やや上位に1条の三角凸帯を持ち は上位にある。底部は強くしまり、わずかに上げ底をなす。口総 帯部は横ナデ、外面はヘラミガキの後横ナデであるが、胴下位か かけてヘラミガキが残り、内面は上位がハケ目で他はナデである 底部には黒色顔料と思われるものを指で焦で付けた痕が認められ 口縁には円が部分的に残っており、丹塗り土器の可能性もある。	対内外・凸 いら底部に 。内面の	к∏	b
42	上	小甕	口縁 外径	24.6	色調 相		口緑はほぼ平坦な逆し字状口緑を呈し、胴部は少しハリッ最大径を中央やや上位に持つ。底部はしまり、わずかになす。口縁内外は横ナデ、外面は縦方向のハケ目、内面は	上げ底を	K∏ 併行	
42	下	小甕	口縁 外径口線 内径胴部最大径	34.2	色調		口縁は平坦な逆し字状口縁を呈し、胴部は少しハリがあ 径を中央やや上位に持つ。底部はしまり、少し上げ底を 縁部は横ナデ、外面は縦方向のハケ目、内面は口縁直下。 のハケ目、上部に多少ハケ目が残っているが、他はナデ	なす。ロ が横方向	K ∏ 併行	
43	上	打ち欠き壺	器	37.8 7.8	胎土 行色調 材焼成		類部より上を打ち欠きにより欠損。胴部最大径はやや上位 そこに1条のコの字形凸帯を持ち、底部はわずかに上げ底 凸帯部が横ナデ、外面はヘラミガキ、内面はナデである。	である。	Κ¶ 併行	
43	下	小甕	口縁 外径口縁 内径	34.1 30.0 24.9 29.1 7.4	胎土 行色調 5 焼成 」		口縁は平坦な逆し字状口縁を呈し、胴部はハリがあり、 やや上位に持つ。底部はしまり、上げ底をなす。口縁部 で、外面の口縁直下には口縁貼りつけの際の指圧痕が残 外面は縦方向のハケ目、内面はナデである。	は横ナデ	K Ⅱ 併行	
44	上	中薨	器 口線 外径 口線 内径 胴部最大径 底 部 径	34.2	色調	散粒砂多く混る 赤褐色 良好	口縁は内に低く傾斜した逆L字状口縁を呈し、口縁下に 角凸帯を持つ。胴部はハリがあり、上位に最大径を持ち、 位以下は欠損している。口縁内外・凸帯部は横ナデ、外i 向のハケ目、内面はナデ。	胴部下	K Ⅱ 併行	

番	号	器種	法量((cm)	胎	土・色調・焼成	特 微	分	類
44	下	中 蓌	器 口線 外径 口線 内 所 部 最 大 径 底 部 そ そ 名 名 名 名 名 名 名 名 名 名 名 名 名 名 名 名 名		色調	微粒砂少し混る にぶい橙色 やや良	口縁は平坦な逆し字状口縁を呈し、口縁下に1条の三角凸帯を持つ。胴部はかなりハリがあり、最大径をやや上位に持つ。底部はしまり、上げ底をなす。口縁内外から凸帯部にかけては横ナデ、外面は縦方向のハケ目、内面はナデ。外面の胴部上位に黒斑が認められ、日常容器転用と思われる。	K Ⅱ 併行	
45	上	中	器 口線 外內 口線 用部 最大 化 系 形 子 径 名 形 名 名 名 名 人 人 名 名 人 人 名 名 人 人 名 名 人 人 名 名 人 名 名 ろ 人 名 ろ ろ ろ ろ	35.2	胎 色 焼 成	微粒砂多く混る 橙色 良好	口縁は内に低く傾斜した逆L字状口縁を呈し、口縁下に 2 条の三 角凸帯を持つ。胴部はハリがあり、上位に最大径を持ち、底部は 欠損している。口縁内外から凸帯部にかけては横ナデ、外面は縦 方向のハケ目、内面はナデ。	K Ⅱ 併行	
45	下	中甕	器 口線 外径 口線 内 大 服 部 最 大 径 ((((((((((((((((((54.5 44.1 36.4 42.8 9.3	色調	微粒砂少し混る 浅黄橙色 良好	口縁はわずかに内に低く傾斜した逆L字状口縁を呈し、口縁下に 2条の三角凸帯を持つ。胴部はハリがあり、上位に最大径を持つ。 底部はしまり、少し上げ底をなす。口縁内外から凸帯部にかけて は横ナデ、外面は縦方向のハケ目、内面はナデ。	К ∏ 併行	
46	上	中薨	口縁 外径口縁 内径		胎土 色 焼 成		口縁は内に低く傾斜した逆L字状口縁を呈し、口縁下に1条の三 角凸帯を持つ。胴部はかなりハリがあり、最大径を上位に持つ。 底部は強くしまり、上げ底をなす。口縁内外・凸帯部は横ナデ、 外面は縦方向のハケ目、内面はナデ。	K Ⅱ 併行	
46	不	中甕	器 口線 外径 口線 内径 胴部最大径 底 部 径	35.9 41.9	胎 色 焼 成		口縁は内に低く傾斜した逆L字状口縁を呈し、口縁下に1条の三 角凸帯を持つ。胴部はかなりハリがあり、最大径を上位に持つ。 底部は強くしまり、大きく上げ底をなす。口縁内外・凸帯部は横 ナデ、外面は縦方向のハケ目、内面はナデ。	ΚⅡ併行	
47	上	小甕	器 口緣 外径 口緣 内径 胴部最大径 底 部 径		色調	微粒砂混る 明赤褐色 やや良	口縁は内に低く傾斜する逆し字状口縁を呈す。胴部最大径はやや 上位にあり、底部はしまり、わずかに上げ底をなす。口縁内外は 横ナデ、外面は縦方向のハケ目、内面は底部近くに若干ハケ目が 残るがナデである。	Κ ∏ 併行	
47	下	小甕	器 口線 外径 口線 内径 胴部最大径 底 部 径		色調	微粒砂少し混る 明赤褐色 やや良	口縁は内に低く傾斜する逆L字状口縁を呈す。胴部最大径はやや 上位にあり、底部はしまり、わずかに上げ底をなす。口縁内外は 横ナデ、外面は縦方向のハケ目、内面は底部に若干ハケ目が残る がナデである。	K ∏ 併行	
48	上	小甕	器 口緣 外径 口緣 内径 胴部最大径 底 部 径	38.1 36.5 26.6 30.2 7.6	胎 色 焼 成		口縁は内に低く傾斜する逆L字状口縁を呈す。胴部最大径は上位 にあり、底部はしまり、少し上げ底をなす。口縁内外は横ナデ、 外面は縦方向の細かいハケ目、内面はナデ。底部付近と胴中央部 の一部に煤が付着しており、日常容器転用と思われる。	K ∏ 併行	
48	下	小甕	器 口線 外径 口線 内径 胴部最大径 底 部 径	36.6 33.4 27.7 28.9 7.0	胎土 色焼 焼	微粒砂多く混る にぶい橙色 良好	口縁は内に低く傾斜する逆L字状口縁を呈す。胴部最大径は上位にあり、底部はしまり、わずかに上げ底をなす。口縁内外は横ナデ、外面は縦方向の細かいハケ目、内面はナデ。	K ∏ 併行	
49	Ŀ	大甕	器 口緣 外径 口緣 内径 胴部最大径 底 部 径	83.7 68.6 56.7 64.0 10.6	胎土 色 焼成	微粒砂混る 赤褐色 良好	口縁は内側に発達し、外はかなりに低く傾斜する。胴上半は外に開き、やや下位に1条の三角凸帯を持ち、最大径は口縁下にある。底部は強くしまり、上げ底をなす。口縁内外・凸帯部は横ナデ、他は内外ともナデである。	к∏	c
49	下	大甕	器 口線 外径 口線 内径 胴部最大径 底 部	61.7 70.9	胎土 色 焼 成	微粒砂混る 赤褐色 良好	口縁は内側に発達し、外はかなりに低く傾斜する。胴上半は外に 開き、やや下位に1条の三角凸帯を持ち、最大径は口縁下にある。 底部は強くしまり、上げ底をなす。口縁内外・凸帯部は横ナデ、 他は内外ともナデである。	КΠ	c

番	号	器種	法 量(cn	m)	胎土·色調·焼成	特	分 類
50	上	小甕	器 高 - 口縁 外径 - 口縁 内径 - 口縁 内径 - 胴部最大径 : 底 部 径	31.8	胎土 微粒砂少し混る 色調 橙色 焼成 良好	頸部および口縁部は打ち欠きによって欠損する特異な形の壺である。胴部にはくびれがあり、その部分とその上部にそれぞれ1条の山形凸帯を廻らし、くびれ部の下位にも1条の三角凸帯を持つ。底部は大径でわずかに上げ底をなしている。凸帯部は横ナデで、外面下位にはミガキが残り、内面底部には指圧痕がみられ、その他は内外ともナデである。	K∏ ^c 併行
50	下	小甕	口緣 外径 : 口緣 内径 : 胴部最大径 :	31.4	胎土 微粒砂少し混る 色調 橙色 焼成 良好	縁部はわずかに内に低く傾斜する逆L字状口縁を呈し、中央上部に最大径を持つ。底部はしまり、少し上げ底をなす。口縁内外は横ナデ、外面は摩滅が進んでいるが縦方向のハケ目、内面はナデ。	K Ⅱ b 併行
51	上	打ち欠き壺	口縁 内径 胴部最大径	_	胎土 微粒砂多く混る 色調 橙色 焼成 良好	頸部より上を打ち欠きにより欠損。胴部最大径はやや上位にあり、 そこに1条の山形凸帯を持ち、底部はわずかに上げ底である。凸 帯部が横ナデ、外面はヘラミガキ、内面はナデである。	K ∏ b 併行
51	下	中甕	器 高 ! 口縁 外径 ! 口縁 内径 ! 口縁 内径 ! 胴部最大径 ! 底 部 径	42.7 32.5 40.9	胎土 微粒砂少し混る 色調 橙色 焼成 良好	口縁は内に低く傾斜した逆し字状口縁を呈し、口縁直下に1本の 沈線を廻らし、口縁下に1条の三角凸帯を持つ。胴部はハリがあ り、上位に最大径を持つ。底部はかなりしまり、上げ底をなす。 口縁内外・凸帯部は横ナデ、外面は摩滅が進んでいるが縦方向の 細かいハケ目、内面はナデ。外面の口縁下から胴中央にかけて黒 斑が認められ、日常容器転用と思われる。	K ∏ b 併行
52	上	小甕	口縁 外径 : 口縁 内径 :	21.3	胎士 微粒砂少し混る 色調 浅黄橙色 焼成 良好	口縁はわずかに内に低く傾斜する逆L字状口縁を呈し、やや上位 に最大径を持つ。底部はしまり、少し上げ底をなす。口縁内外は 横ナデ、外面は縦方向のハケ目、内面は丁寧なナデ。	K ∏ c 併行
52	下	小甕	口線 外径 口線 内径 胴部最大径	33.7	胎士 微粒砂少し混る 色調 明赤褐色 焼成 良好	口縁は外に少し低く傾斜する逆し字状口縁を呈し、やや上位に最 大径を持つ。底部はしまり、上げ底をなす。口縁内外は横ナデ、 外面は縦方向の細かいハケ目、内面はナデ。	K II ¢ 併行
53	上	小甕	口縁 外径 : 口縁 内径 :	28.7	胎土 微粒砂多く混る 色調 橙色 焼成 良好	口縁は内に低く傾斜した逆L字状口縁を呈し、胴部最大径をかなり上部に持つ。底部はしまってわずかに上げ底をなし厚い。口縁内外は横ナデ、外面は縦方向のハケ目、内面はナデ。底部には黒斑が認められ、日常容器転用と思われる。	K∏b 併行
53	下	小甕	口縁 外径 口縁 内径	29.1	胎土 微粒砂多く混る 色調 橙色 焼成 良好	口縁は内に低く傾斜した逆L字状口縁を呈し、胴部最大径をやや 上位に持つ。底部はしまって少し上げ底をなし厚い。口縁内外は 横ナデ、外面は摩滅が進んでいるが縦方向のハケ目、内面はナデ。	K Ⅱ b 併行
54	上	中	口線 外径 口線 内径 胴部最大径	40.7 32.5	胎士 微粒砂少し混る 色調 黄橙色 焼成 良好	口縁は内に低く傾斜した逆L字状口縁を呈し、口縁下に2条の三 角凸帯を持つ。胴部はハリがあり、かなり上位に最大径を持つ。 底部は強くしまり、少し上げ底をなす。口縁内外から凸帯部にか けては横ナデ、外面は縦方向のハケ目、内面はナデ。内面の胴中 央部と外面の一部に黒色顔料によるものと思われる黒斑が多く認 められ黒塗りと思われる。	K ∏ b 併行
54	下	中	口縁 外径 口縁 内径	45.3	胎士 微粒砂少し混る 色調 浅黄橙色 焼成 良好	口縁は内に低く傾斜した逆L字状口縁を呈し、口縁下に2条の三 角凸帯を持つ。胴部はハリがあり、かなり上位に最大径を持つ。 底部は強くしまり、わずかに上げ底をなす。口線内外から凸帯部 にかけては横ナデ、外面は摩滅が進んでいるが縦方向のハケ目、 内面はナデ。外面の胴中央部に黒色顔料によるものと思われる黒 斑が多く認められ黒塗りと思われる。	K ∏ b 併行
55	£	大甕	口縁 外径	60.3 51.1 57.2	胎士 微粒砂混る 色調 赤褐色 焼成 良好	口縁は少し内側に発達し、平坦なT字状口縁を呈す。胴上半はいくぶんすぼまり、ほぼ中央に1条の三角凸帯を持ち、最大径はやや上位にある。底部は強くしまり、わずかに上げ底をなす。口縁内外・凸帯部は横ナデ、他は内外ともにナデである。	К∏ь

番	号	器種	法 量(cm)	胎土·色調·焼成	特 微	分 類
55	下	大甕	器 高 83.3 口縁 外径 59.7 口縁 内径 49.5 胴部最大径 58.2 底 部 径 10.7	色調 橙色	口縁は少し内側に発達し、平坦なT字状口縁を呈す。胴上半はいくぶんすぼまり、ほぼ中央に1条の三角凸帯を持ち、最大径は上位にある。底部は強くしまり、わずかに上げ底をなす。口縁内外・凸帯部は横ナデ、他は内外ともナデである。	К [] ь
56	上	中甕	器 高 36.7 口縁 外径 59.6 口縁 内径 52.5 胴部最大径 —— 底 部 径 9.6	色調 にぶい黄褐色	口縁は平坦な逆L字状口縁を呈し、口縁下に2条の三角凸帯を持つ。胴部はハリがあり、かなり上位に最大径を持つ。底部は強くしまり、わずかに上げ底をなす。口縁内外から凸帯部にかけては横ナデ、外面は摩滅が進んでいるが縦方向のハケ目、内面はナデ。内面は黒色顔料によるものと思われるもので黒く塗られており、黒塗りと思われる。	K∏b 併行
56	下	中薨	器 高 55.4 口縁 外径 44.4 口縁 内径 33.8 胴部最大径 44.6 底 部 径 9.4	色調 橙色 焼成 良好	口縁はわずかに内に低く傾斜した逆し字状口縁を呈し、口縁下に 2条の三角凸帯を持つ。胴部はハリがあり、かなり上位に最大径 を持つ。底部は強くしまり、少し上げ底をなす。口縁内外から凸 帯部にかけては横ナデ、外面は摩滅が進んでいるが縦方向のハケ 目、内面はナデ。内面胴上位は黒色顔料によるものと思われるも ので黒く塗られており、黒塗りと思われる。	K∏ b 併行
57	上	小甕	器 高 33.4 口線 外径 25.6 口線 内径 20.1 胴部最大径 24.1 底 部 径 7.8	色調 黄橙色 焼成 良好	口縁はあまり発達しておらず、内に低く傾斜した逆し字状口縁を 呈し、胴部最大径をやや上位に持つ。底部はしまって少し上げ底 をなし厚い。口縁内外は横ナデ、外面は壁滅が進んでいるが縦方 向のハケ目、内面はナデ。	K∥b 併行
57	下	小甕	器 高 34.2 口緣 外径 28.8 口緣 内径 21.7 胴部最大径 25.8 底 部 径 6.8	色調 浅黄橙色	口縁は内に低く傾斜した逆し字状口縁を呈し、胴部最大径をやや 上位に持つ。底部はしまって、わずかに上げ底をなす。口縁内外 は横ナデ、内外面とも摩滅が進んでいるが、外面は縦方向の細か いハケ目、内面はナデ。胴上位には一部に煤が付着しており、日 常容器転用と思われる。	K ∏ b 併行
60	上	小甕	器 高 30.8 口縁 外径 34.1 口縁 内径 28.5 胴部最大径 32.8 底 部 径 8.9	焼成 やや良	口縁はわずかに内に低く傾斜した逆し字状口縁を呈し、口縁下に 1条の三角凸帯を持つ。胴部は短く最大径をかなり上位に持つ。 底部はわずかにしまり平底をなす。口縁内外から凸帯部にかけて は横ナデ、内外面とも摩滅が進んでいるが、ナデと思われる。底 部の一部に煤が付着しており、日常容器転用と思われる。	K ∏ b 併行
60	下	小甕	器 高 42.7 口縁 外径 34.3 口縁 内径 28.8 胴部最大径 32.2 底 部 径 (9.0)	色調 橙色	口縁は外に低く傾斜した逆L字状口縁を呈し、胴部最大径をやや 上位に持つ。底部はしまって、少し上げ底をなす。口縁内外は横 ナデ、内外面とも摩滅が進んでいるが、外面は縦方向の細かいハ ケ目、内面はナデ。	KⅡb併行
61	下	小甕	器 高 — 口線 外径 (30.0) 口線 外径 (24.8) 胴部最大径 (27.9) 底 部 径 (6.8)	胎土 微粒砂多く混る 色調 明褐色 焼成 良好	口縁は平坦な逆 L 字状口縁を呈し、胴部は少しハリがあり、上位に最大径を持つ。底部は強くしまり、わずかに上げ底をなす。口縁内外は横ナデ、外面は摩滅が進んでいるが縦方向のハケ目、内面はナデ。	K ∏ b 併行
62	上	中薨	器 高 54.0 口縁 外径 46.8 口縁 内径 36.9 胴部最大径 45.2 底 部 径 10.0		口縁は内に低く傾斜した逆L字状口縁を呈し、口縁下に1条の三 角凸帯を持つ。胴部はハリがあり、上位に最大径を持つ。底部は 強くしまり、わずかに上げ底をなす。口縁内外から凸帯部にかけ ては横ナデ、外面は縦方向の細かいハケ目、内面はナデ。	K ∏ b 併行
62	下	中喪	器 高 (52.2) 口緣 外径 (41.2) 口緣 内径 (34.6) 胴部最大径 (40.4) 底 部 径 (9.8)	胎士 微粒砂多く混る 色調 橙色 焼成 良好	口縁は内に低く傾斜した逆し字状口縁を呈し、口縁下に1条の三 角凸帯を持つ。胴部はハリがあり、上位に最大径を持つ。底部は 強くしまり、平底かわずかに上げ底をなす。口縁内外・凸帯部は 横ナデ、外面は縦方向の細かいハケ目、内面はナデ。	K∏ b 併行
63	上	電	器 高 45.4 口縁 外径 33.1 口縁 内径 27.9 胴部最大径 37.8 底 部 径 9.1 頸 部 径 19.6	胎土 微粒砂多く混る 色調 橙色 焼成 良好	朝顔状に立ち上がる頸部に平坦な口縁部を作った壺形土器。肩の 張る胴部で、その最大径はやや上位にある。凸帯は最大径部分に 1条の山形凸帯を貼りつけ、底部は少し上げ底である。口線内外・ 凸帯部は横ナデ、外面はナデ、内面は頸部がヘラミガキで他はナ デ。また、頸部内面は黒色顔料によるものと思われるもので黒く 塗られており、黒塗りと思われる。	K ∏ b 併行

番	号	器種	法 量(cm)	胎土·色調·焼成	特 微	分 類
63	下	小甕	器 高 36.3 口縁 外径 36.4 口縁 内径 30.9 胴部最大径 35.6 底 部 径 9.3	胎土 微粒砂多く混る 色調 にぶい橙色 焼成 やや良	口縁は内に低く傾斜した逆し字状口縁を呈し、口縁下に1条の三 角凸帯を持つ。胴部は短く最大径を上位に持つ。底部はわずかに しまり、平底をなす。口縁内外から凸帯部にかけては横ナデ、内 外面とも塵滅が進んでいるが、ナデと思われる。底部の一部に煤 が付着しており、日常容器転用と思われる。	K [] b 併行
64	上	壺	器 高 44.2 口緣 外径 (33.6) 口緣 内径 (27.4) 胴部最大径(37.1) 底 部 径 (8.1) 頸 部 径 (20.6)	胎土 微粒砂多く混る 色調 赤褐色 焼成 良好	朝顔状に立ち上がる頸部に平坦な口縁部を作った壺形土器。肩の張る胴部で、その最大径はやや上位にある。凸帯は肩に1条と最大径部分に1条の山形凸帯を貼りつけ、底部は平底である。口縁内外・凸帯部は横ナデ、他は内外面とも摩滅が進んでいるが、ナデと思われる。また、外面は黒色顔料によるものと思われるもので黒く塗られており、黒塗りと思われる。	K ∏ b 併行
64	下	小甕	器 高 36.2 口緣 外径 (31.0) 口緣 内径 (24.2) 胴部最大径(27.4) 底 部 径 7.3	胎士 微粒砂多く混る 色調 明赤褐色 焼成 良好	口縁はほぼ平坦な逆し字状口縁を呈し、かなり上位に最大径を持つ。底部はしまり、わずかに上げ底をなす。口縁内外は横ナデ、外面は縦方向のハケ目、内面はナデ。	K ∏ c 併行
66	上	中甕	器 高 48.8 口縁 外径 41.0 口縁 内径 33.9 胴部最大径 38.4 底 部 径 8.6	胎土 微粒砂少し混る 色調 黄褐色 焼成 やや良	口縁はほぼ平坦な逆L字状口縁を呈し、口縁下に1条の三角凸帯を持つ。胴部はハリがあり、上位に最大径を持つ。底部は強くしまり、わずかに上げ底をなす。口縁内外から凸帯部にかけては横ナデ、外面は縦方向の細かいハケ目、内面はナデ。	K [] c 併行
66	下	中甕	器 高 49.6 口縁 外径 40.4 口縁 内径 32.8 胴部最大径 38.1 底 部 径 8.4	胎土 微粒砂少し混る 色調 黄橙色 焼成 良好	口縁はほぼ平坦な逆L字状口縁を呈し、口縁下に1条の三角凸帯を持つ。胴部はハリがあり、上位に最大径を持つ。底部は強くしまり、わずかに上げ底をなす。口縁内外・凸帯部は横ナデ、外面は縦方向の細かいハケ目、内面はナデ。	K∏ c 併行
67	上	壺	器 高 36.5 口線 外径 28.9 口線 内径 23.3 胴部最大径 30.1 底 部 径 7.2 頸 部 径 17.8	胎土 微粒砂少し混る 色調 浅黄橙色 焼成 良好	朝顔状に立ち上がる頸部に平坦な口縁部を作った壺形土器。肩の 張る胴部で、その最大径はやや上位にある。凸帯は最大径部分に 1条の山形凸帯を貼りつけ、底部は少し上げ底である。口縁内外・ 凸帯部は横ナデ、外面はナデ、内面は頸部がヘラミガキで他はナ デ。また、頸部内面は黒色顔料によるものと思われるもので黒く 塗られており、黒塗りと思われる。	K ∏ b 併行
67	下	壺	器	胎土 微粒砂少し混る 色調 黄橙色 焼成 良好	朝顔状に立ち上がる頭部に平坦な口縁部を作った壺形土器。肩の張る胴部で、その最大径はやや上位にある。凸帯は肩に1条と最大径部分に1条のコの字形凸帯を貼りつけ、底部は平底である。口縁内外・凸帯部は横ナデ、他は内外面とも摩滅が進んでいるが、頸部内面と外面底部にヘラミガキが残る。また、頸部内面は黒色顔料によるものと思われるもので黒く塗られており、黒塗りと思われる。	K ∏ b 併行
68	上	小甕	器 高 —— 口緣 外径 (30.4) 口緣 内径 (27.1) 胴部 取大径(28.2) 底 部 径 ——	胎土 微粒砂多く混る 色調 明赤褐色 焼成 良好	口縁は内に低く傾斜した逆L字状口縁を呈す。胴部最大径をやや上位持ち、底部は欠損している。口縁内外は横ナデ、内外面とも 摩滅が進んでいるが、外面は縦方向の細かいハケ目、内面はナデ。 また、外面は黒色顔料によるものと思われるもので黒く塗られて おり、黒塗りと思われる。	K ∏ b 併行
68	下	小甕	器 高 —— 口線 外径 (32.3) 口線 内径 (26.6) 胴部最大径 —— 底 部 径 ——	胎土 微粒砂多く混る 色調 明赤褐色 焼成 良好	口縁は内に低く傾斜した逆し字状口縁を呈し、口縁下に1条の三 角凸帯を持つ。胴部最大径をやや上位に持ち、底部は欠損してい る。口縁内外から凸帯部にかけては横ナデ、内外面とも摩滅が進 んでいるが、外面は縦方向の細かいハケ目、内面はナデ。	K ∏ b 併行
70	上.	小甕	器 高 35.2 口縁 外径 (30.3) 口縁 内径 (25.2) 胴部最大径(28.0) 底 部 径 6.2	胎土 微粒砂多く混る 色調 橙色 焼成 良好	口縁はほぼ平坦な逆し字状口縁を呈す。胴部最大径を上位に持ち、底部は欠損している。口縁内外は横ナデ、内外面とも摩滅が進んでいるが、外面は縦方向の細かいハケ目、内面はナデ。	К [] b 併行
70	下	小甕	器 高 —— 口線 外径 (29.8) 口線 外径 (24.6) 胴部最大径(26.9) 底 部 径 ——	胎土 微粒砂多く混る 色調 橙色 焼成 良好	口縁はわずかに内に低く傾斜した逆し字状口縁を呈し、胴部最大 径を上位に持つ。底部はしまり、上げ底をなす。口縁内外は横ナ デ、外面は縦方向のハケ目、内面はナデ。底部には煤の付着が認 められ、日常容器転用と思われる。	K ∏ b 併行

番	号	器種	法 量(cm)	胎	土·色調·焼成	特	分	類
73	上	小甕	器 高 口縁 外径 口縁 内径 胴部最大径 底 部 径	23.7	色調	微粒砂混る 明赤褐色 良好	口縁はほぼ平坦な逆L字状口縁を呈し、胴部最大径を上位に持つ。 底部はしまり、上げ底をなす。口縁内外は横ナデ、外面は縦方向 のハケ目、内面はナデ。	K ∏ 併行	
73	下	小甕	器 高 口縁 外径 口縁 内径 胴部最大径 底 部 径	24.6	色調	微粒砂多く混る 明赤褐色 やや良	口縁はわずかに内に低く傾斜した逆 L 字状口縁を呈し、胴部最大 径をかなり上位に持つ。底部はしまり、わずかに上げ底をなす。 口縁内外は横ナデ、外面は縦方向のハケ目、内面は一部にハケ目 が残るがナデである。	K Ⅱ 併行	
74	上	大甕	器 口 線 口 線 内 経 胴 部 最 大 径 底 部 番 大 径	51.1 60.3	色調	微粒砂混る 赤褐色 良好	口縁は内外ともに発達し、わずかに外へ低く傾斜する。胴上半はすぼまり、胴部は少しハリがあり、やや上位に1条の三角凸帯を持ち、最大径は上位にある。底部はしまり、平底をなす。口縁内外・凸帯部は横ナデ、他は内外ともナデである。内面は薄いが黒く塗られている。	κП	b
74	下	大樂	口縁 外径	53.2 64.5	色調	微粒砂混る 赤褐色 良好	口縁は内外ともに発達し、わずかに外へ低く傾斜する。胴上半はすぼまり、胴部は少しハリがあり、中央に1条の三角凸帯を持ち、最大径は上位にある。底部はしまり、平底をなす。口縁内外・凸帯部は横ナデ、他は内外ともナデである。内面は薄いが黒く塗られている。	к∏	b
75	上	小甕	器 高 口緣 外径 口緣 内径 胴部最大 底 部	22.3	色調		口縁は内に少し低く傾斜した逆し字状口縁を呈し、胴部最大径を やや上位に持つ。底部はしまり、少し上げ底をなす。口縁内外は 横ナデ、外面は縦方向のハケ目、内面はナデ。底部の一部には煤 の付着が認められ、日常容器転用と思われる。	К ∏ 併行	
75	下	小甕	器 口線 口線 内径 胴部最大 底 部 径	24.0			口縁は内に少し低く傾斜した逆レ字状口縁を呈し、口縁下に2本と底部に1本の沈線を廻らしている。胴部最大径をやや上位に持ち、底部はしまり、少し上げ底をなす。口縁内外は横ナデ、内外面とも摩滅が進んでいるが、外面は縦方向の細かいハケ目、内面はナデ。底部の一部には煤の付着が認められ、日常容器転用と思われる。	Κ∥	
77	上	小甕	器 口線 外径 口線 内径 胴部 最大 底 部 径	26.3	色調	微粒砂混る 黄橙色 良好	口縁はほぼ平坦な逆し字状口縁を呈し、胴部最大径を上位に持つ。 底部はしまり、わずかに上げ底をなす。口縁内外は横ナデ、外面 は縦方向のハケ目、内面はナデ。	K Ⅱ 併行	
77	下	小甕		37.7 32.4 25.4 28.1 7.3	色調	微粒砂少し混る にぶい黄橙色 良好	口縁はわずかに内に低く傾斜した逆L字状口縁を呈し、胴部最大径を上位に持つ。底部はしまり、わずかに上げ底をなす。口縁内外は横ナデ、外面は縦方向のハケ目、内面口縁下に横方向のハケ目を施し、他はナデである。	К ∐ 併行	
78	上	大甕	器 口線 外径 口線 内径 胴部最大径 底 部 径			微粒砂混る 黄橙色 良好	口縁は内側に発達し、外へ低く傾斜する。口縁下はすぼまり、胴部やや上位に2条の三角凸帯を持ち、最大径は上位にある。底部はしまり、わずかに上げ底をなす。口縁内外・凸帯部は横ナデ、外面は磨滅が進んでいるがナデと思われ、内面はナデである。	к [[С
78	下	大甕	器 口緣 外径 口緣 内径 胴部最大径 底 部 径		胎土 色 焼成	微粒砂混る 明黄褐色 良好	口縁は内側に発達し、外へわずかに低く傾斜する。口縁下はややすばまり、胴部中央に1条の三角凸帯を持ち、最大径はかなり上位にある。底部は強くしまり、少し上げ底をなす。口縁内外・凸帯部は横ナデ、他は内外ともナデである。内面は薄いが黒く塗られている。	К∏	c
79	上	中薨	器 高 口緣 外径 口緣 内径 胴部 最大 底 部	54.9 42.9 33.2 42.2 8.6	胎土 色 焼成	微粒砂多く混る 橙色 良好	口縁は内に低く傾斜した逆L字状口縁を呈し、口縁下に1条の三 角凸帯を持つ。胴部はハリがあり、最大径をやや上位に持つ。底 部は強くしまり、わずかに上げ底をなす。口縁内外・凸帯部は横 ナデ、内外面とも摩滅が進んでいるが、外面は縦方向の細かいハ ケ目、内面はナデ。	K Ⅱ 併行	

番	号	器種	法 量(cm)	胎土·色調·焼成	特	分 類
79	. 	打ち欠き壺	器 高 —— 口線 外径 —— 口線 内径 —— 胴部最大径(47.1) 底 部 径 ——	胎土 微粒砂多く混る 色調 橙色 焼成 やや良	頸部より上と底部は打ち欠きにより欠損。胴部最大径はやや上位にあり、そこに1条の山形凸帯を持つ。凸帯部が横ナデ、外面はヘラミガキ、内面はナデである。胴部の一部には煤の付着が認められ、日常容器転用と思われる。	K∏b 併行
79	ド	中甕	器 高 53.9 口縁 外径 45.6 口縁 内径 38.6 胴部最大径 43.0 底 部 径 9.2	胎土 微粒砂多く混る 色調 橙色 焼成 良好	口縁は内に低く傾斜した逆L字状口縁を呈し、口縁下に1条の三 角凸帯を持つ。胴部はハリがあり、最大径をやや上位に持つ。底 部は強くしまり、わずかに上げ底をなす。口縁内外・凸帯部は横 ナデ、内外面とも摩滅が進んでいるが、外面は縦方向の細かいハ ケ目、内面はナデ。	К∏ b 併行
81	上	深鉢	器 髙 21.9 口線 外径 (32.3) 口線 内径 (27.2) 胴部最大径(28.5) 底 部 径 8.4	胎土 微粒砂多く混る 色調 にぶい褐色 焼成 良好	口縁はわずかに内に低く傾斜した逆し字状口縁を呈し、口縁下に1条の三角凸帯を持つ。胴部は短く、ハリがあり、最大径を上位に持つ。底部は強くしまり、少し上げ底をなす。口縁内外から凸帯部にかけては横ナデ、外面底部にはヘラミガキが施され、内面底部には指厚痕が残り、その他は内外面とも摩滅が進んでいるがナデ。わた、外面底部の一部には煤の付着が認められ、日常容器転用と思われる。	K ∏ b 併行
81	下	壺	器 高 —— 口縁 外径 —— 口縁 内径 —— 胴部最大径(44.4) 底 部 径 ——	胎土 微粒砂多く混る 色調 明褐色 焼成 良好	頸部より上は打ち欠きにより欠損。胴部最大径はやや上位にあり、 そこに1条の三角凸帯を持ち、底部は欠損している。凸帯部が横 ナデ、内外面とも摩滅が進んでいるが、外面はヘラミガキ、内面 はナデである。胴部下位には一部に黒斑が認められ、日常容器転 用と思われる。	K∏b 併行
82	下.	壺	品 51.2 口縁 外径 36.9 口縁 内径 28.6 胴部最大径 48.4 底 部 径 10.2 類 部 径 23.6	胎土 微粒砂多く混る 色調 褐色 焼成 良好	朝顔状に立ち上がる頸部に平坦な口縁部を作った壺形土器。肩の 張る胴部で、最大径はやや上位にある。最大径部分に1条の山形 凸帯を貼りつけ、底部は平底である。口縁内外・凸帯部は横ナデ、 他は内外面とも摩滅が進んでいるが、外面はヘラミガキ、内面が ナデと思われる。	K ∏ b 併行
83	上	打ち欠き壺	器 高 —— 口線 外径 —— 口線 内径 —— 胴部最大径(48.3) 底 部 径 (10.0)	胎土 微粒砂多く混る 色調 明赤褐色 焼成 良好	頸部より上は打ち欠きにより欠損。胴部最大径はやや上位にあり、 そこに1条の山形凸帯を持ち、底部はしまり、平底をなす。凸帯 部が横ナデ、内外面とも摩滅が進んでいるが、外面は底部にヘラ ミガキが残り、内面はナデである。底部には一部に黒斑が認めら れ、日常容器転用と思われる。	K [] b 併行
83	7.	中	器 高口線 外径 (50.0) 口線 内径 (41.5) 胴部最大径(49.4) 底 部 径 10.6	胎土 微粒砂多く混る 色調 橙色 焼成 良好	口縁は内に低く傾斜した逆し字状口縁を呈し、口縁下に1条の三 角凸帯を持つ。胴部はハリがあり、最大径を上位に持つ。底部は 強くしまり、かなり上げ底をなす。口縁内外・凸帯部は横ナデ、 内外面とも摩滅が進んでいるが、外面は縦方向の細かいハケ目、 内面はナデ。	K∏b 併行
84	上	中	器 高 58.2 口緣 外径 43.1 口緣 内径 35.6 順部最大径 40.8 底 部 径 10.0	胎土 微粒砂少し混る 色調 黄橙色 焼成 良好	口緑は内に少し低く傾斜した逆レ字状口縁を呈し、口縁下に2条の三角凸帯を持つ。胴部はハリがあり、上位に最大径を持つ。底部は強くしまり、上げ底をなす。口縁内外・凸帯部は横ナデ、外面は縦方向の細かいハケ目、内面はナデ。	K ∏ b 併行
84	下	中薨	器 高 56.2 口線 外径 44.8 口線 内径 35.5 胴部最大径 43.3 底 部 径 9.8	胎土 微粒砂少し混る 色調 黄橙色 焼成 良好	口縁は内に少し低く傾斜した逆L字状口縁を呈し、口縁下に2条の三角凸帯を持つ。胴部はハリがあり、上位に最大径を持つ。底部は強くしまり、上げ底をなす。口縁内外から凸帯部にかけては横ナデ、外面は縦方向の細かいハケ目、内面はナデ。	K ∏ b 併行
85	下	小甕	器 高 35.4 口緣 外径 (29.2) 口緣 内径 (22.4) 胴部最大径(26.3) 底 部 径 7.5	胎土 微粒砂多く混る 色調 明褐色 焼成 良好	口縁は内に低く傾斜した逆し字状口縁を呈し、胴部最大径をやや 上位に持つ。底部はしまり、わずかに上げ底をなす。口縁内外は 横ナデ、内外面とも摩滅が進んでいるが、外面は縦方向のハケ目、 内面はナデ。	KⅡb 併行
86	下.	打ち欠き壺	器 高 —— 口線 外径 —— 口線 内径 —— 胴部最大径 43.6 底 部 径 11.3	胎土 微粒砂多く混る 色調 赤褐色 焼成 良好	頸部より上は打ち欠きにより欠損。胴部最大径はやや上位にあり、そこに1条の三角凸帯を持つ。底部はしまり、平底をなす。凸帯部が横ナデ、内外面とも壁滅が進んでいるが、外面は底部にヘラミガキが残り、内面はナデである。	K ∏ b 併行

番	号	器種	法 量(c	cm)	胎	土・色調・焼成	特	微	分	
87	上	小甕	口線 外径 口線 内径	37.5 29.4 25.7 27.8 7.3	胎 色 焼 成	橙色	│す。胴部最大径を上位に持ち、原 │内外・凸帯部は横ナデ、外面は網	に低く傾斜した逆L字状口縁を呈 長部はしまり上げ底をなす。口縁 従方向のハケ目、内面はナデ。ま が残っており、外面丹塗りと思わ	K∏ 併行	
87	下	小甕	口縁 外径 口縁 内径	43.1 35.1 28.6 32.6 8.2	胎土 色焼成	にぶい黄橙色	角凸帯を持つ。胴部はハリがあり	大口縁を呈し、口縁下に1条の三)、最大径をやや上位に持つ。底 口縁内外・凸帯部は横ナデ、外 耳はナデ。	K ∏ 併行	
88	上	打ち欠き壺	口線 外径 口線 内径 胴部最大径	_	胎土 色調 焼成	微粒砂少し混る にぶい黄橙色 良好	類部より上は打ち欠きにより欠抗 をや上位にある。底部は平底をなるが、内面はナデと思われる。 庭 日常容器転用と思われる。	よす。内外面とも摩滅が進んでい	K∏ 併行	
88	下	小甕	口縁 外径口縁 内径	25.4	胎土 色調 焼成	微粒砂多く混る 橙色 良好	口縁は内に低く傾斜した逆し字状 最大径を上位に持つ。底部は強く 口縁内外は横ナデ、内外面とも馬 向のハケ目、内面はナデ。	【しまり、大きく上げ底をなす。	Κ∏ 併行	a
89	上	大甕	口縁 外径 口縁 内径	60.2 51.8 63.9	色調	微粒砂やや混る 赤褐色 良好	口縁は内に低く傾斜した逆 L 字状 胴部はハリがあり、上位に 1条の径は上位にある。底部はしまり、他は内外ともナデである。)三角凸帯と最大径を持ち、最大	К∏	a
89	不	大甕	口縁 外径 口縁 内径	62.0		微粒砂混る 赤褐色 良好	口縁はあまり発達せずに内に低く 胴部はやや上位に1条の三角凸帯 にある。底部はしまり、わずかに デ、外面はナデで、内面は胴部下 他は横ナデ後縦方向のナデを加え	らと最大径を持ち、最大径は上位 上げ底をなす。口縁内外は横ナ 「位から底部にかけてがナデで	КΠ	a
90	十	大甕	器 高 (口縁 外径 ! 口縁 内径 ! 胴部最大径 ! 底 部 径	59.2 47.3 57.6	色調	微粒砂混る 橙褐色 やや良	口縁は内側に発達し、外へわずか 多少開き、やや上位に1条の三角 ある。底部はしまり、少し上げ底 ナデ、内外とも摩滅が進んでいる ハケ目が残り、他はナデと思われ	3凸帯を持ち、最大径は口縁下に そをなす。口縁内外・凸帯部は横 が、内面の口縁下には横方向の	К∏	b
90	下	大甕	器 高 8 口緣 外径 6 口緣 内径 5 胴部最大径 6 底 部 径	62.3 50.6 60.7	色調	微粒砂混る 褐色 やや良	口縁は外へ低く傾斜するT字状口り、ほぼ中央に1条の三角凸帯に 部は強くしまり、わずかに上げ底 ナデ、外面は摩滅が進んでいるが 目が残り、他はナデと思われ、内 いくぶん黒ずんでおり、黒塗りの	持ち、最大径は上位にある。底をなす。口縁内外・凸帯部は横、外面の底部には縦方向のハケー面はナデである。また、内面は	к []	b
91	上 ·	打ち欠き壺	器 高 - 口縁 外径 - 口縁 内径 - 加線 内径 - 胴部最大径(43底 部径 (7	_	色調	微粒砂多く混る 明褐色 良好	頸部より上は打ち欠きにより欠損 やや上位にある。底部はわずかに 進んでいるが、内面はナデと思わ	平底をなす。内外面とも塵滅が	K∏1	ס
91	下		口緣 内径 4 胴部最大径 4	49.3 41.8	色調	微粒砂多く混る 明褐色 良好	口縁は内に低く傾斜した逆し字状 角凸帯を持つ。胴部はハリがあり 部は強くしまり、かなり上げ底を デ、外面は縦方向のハケ目、内面 ては一部に黒斑が認められ、日常	、最大径をやや上位に持つ。底 なす。口縁内外・凸帯部は横ナ はナデ。胴中央から底部にかけ	K ∐ I)
92	上	樂	口縁 外径 4 口縁 内径 3 胴部最大径 4	14.9 1	色調	微粒砂多く混る 明褐色 良好	口縁はわずかに内に低く傾斜した 1条の三角凸帯を持つ。胴部はハ 底部は強くしまり、少し上げ底を けては横ナデ、外面は縦方向のハ	リがあり、最大径を上位に持つ。 なす。口縁内外から凸帯部にか	K∏ t)

番	号	器種	法 量(cm)	胎土·色調·焼成	特	分	類
92	下	中甕	器 高 63.6 口縁 外径 42.1 口縁 内径 33.4 胴部最大径 40.9 底 部 径 8.7	色調 黄橙色	口縁は内に低く傾斜した逆し字状口縁を呈し、口縁下に1条の三 角凸帯を持つ。胴部はハリがあり、最大径をやや上位に持つ。底 部はしまり、わずかに上げ底をなす。口縁内外から凸帯部の下位 までは横ナデ、その他の外面は縦方向の細かいハケ目、内面はナ デ。内面胴中央部には指先による黒色顔料の撫でつけ痕が認めら れる。	K Ⅱ b 併行	1
93	上	大甕	器 髙 81.2 口縁 外径 58.4 口縁 内径 48.3 胴部最大径 58.1 底 部 径 10.2	色調 赤褐色	口縁は内側へ大きく発達し、わずかに外へ低く傾斜するT字状口 緑を呈す。口縁下は多少すぼまり、ほぼ中央に1条の三角凸帯を 持ち、最大径は上位にある。底部はしまり、わずかに上げ底をな す。口縁内外・凸帯部は横ナデ、外面は底部に縦方向のハケ目が 残り、他はナデで、内面はナデである。また、内面はいくぶん黒 ずんでおり、黒塗りの可能性がある	К∏ь	
93	下	大甕	器 高 99.0 口縁 外径 58.7 口縁 内径 49.6 胴部最大径 56.4 底 部 径 10.1	胎土 微粒砂混る 色調 赤褐色 焼成 良好	口縁は内側に大きく発達し、外へ低く傾斜するT字状口縁を呈す。胴上半は多少すぼまり、やや上位に1条の三角凸帯を持ち、最大径は上位にある。底部はしまり、わずかに上げ底をなす。口縁内外・凸帯部は横ナデ、外面は底部に縦方向のハケ目が残り、他はナデで、内面はナデである。また、内面は一部を除いて黒く塗られており、塗られていない部分には黒色顔料と思われるものを指先にて撫で付けた痕も認められる。	K∏b	
94	上	大甕	器 高 87.3 口線 外径 64.2 口線 内径 52.8 胴部最大径 61.7 底 部 径 12.4		口縁は内側へ発達し、外へ低く傾斜する。胴上半は多少すぼまり、 ほぼ中央に2条の三角凸帯を持ち、最大径は上位にある。底部は 欠損しているが、しまっている。口縁内外・凸帯部は横ナデ、外 面はナデで、内面は底部が横ナデの後に縦方向のナデが施され、 それ以外は丁寧な横ナデである。	К∏ Ь	
94	下	大甕	器 高 86.9 口縁 外径 64.6 口縁 内径 52.9 胴部最大径 64.9 底 部 径 11.6		口縁は内側へ発達し、わずかに外へ低く傾斜する。胴上半はすぼまり、やや下位に1条の三角凸帯を持ち、胴部は多少ハリがあり、最大径はやや上位にある。底部はしまり、わずかに上げ底をなす。口縁内外・凸帯部は横ナデ、外面は底部に縦方向のハケ目が残り、他はナデ、内面はナデである。	К∏ь	
95	.	大甕	器 高 77.3 口縁 外径 60.1 口縁 内径 50.2 胴部最大径 58.9 底 部 径 12.8	色調 黄灰色	口縁はわずかに内に低く傾斜したT字状口縁を呈す。胴上半はすばまり、ほぼ中央に1条の三角凸帯を持ち、胴部は多少ハリがあり、最大径は上位にある。底部はしまり、平底をなす。口縁内外・凸帯部は横ナデ、その他の器表はナデである。また、内面の一部には薄いが黒く塗った痕が残っており、黒塗りと思われる。	К∐ь	
95	下	大甕	器 高 73.6 口縁 外径 62.2 口縁 内径 53.9 胴部最大径 60.1 底 部 径 12.1		口縁は平坦なT字状口縁を呈す。口縁下は多少すぼまり、ほぼ中 央に1条の三角凸帯を持ち、胴部は多少ハリがあり、最大径は上 位にある。底部はしまり、わずかに上げ底をなす。口縁内外・凸 帯部は横ナデ、その他の器表はナデで、内面の中央部には黒色顔 料と思われるものを指先で撫で付けた痕が認められる。	К [] Ь	
96	1	小甕	器 高 —— 口線 外径 (27.4) 口線 内径 (22.6) 胴部最大径(27.9) 底 部 径 ——	胎土 微粒砂多く混る 色調 にぶい橙色 焼成 良好	口縁はあまり発達しておらず、内に低く傾斜した逆し字状口縁を 呈す。多少胴部はハリがあり、最大径を上位に持ち、口縁内外は 横ナデ、内外面とも摩滅が進んでいるが、外面は縦方向のハケ目、 内面はナデ。	K∏a 併行	
96	2	小甕	器 高 — 口線 外径 (25.0) 口線 内径 (20.6) 胴部最大径(25.8) 底 部 径 —	胎土 微粒砂少し混る 色調 にぶい橙色 焼成 良好	口縁はあまり発達しておらず、内に低く傾斜した逆し字状口縁を 呈す。多少胴部はハリがあり、最大径を上位に持ち、底部は打ち 欠きにより欠損。口縁内外は横ナデ、内外面とも摩滅が進んでい るが、外面は縦方向の細かいハケ目、内面はナデ。	K Ⅱ a 併行	
96	3	小甕	器 高 ———————————————————————————————————	胎土 微粒砂多く混る 色調 にぶい黄橙色 焼成 良好	口縁はわずかに内に低く傾斜した逆L字状口縁を呈す。多少胴部はハリがあり、最大径を上位に持ち、底部は打ち欠きにより欠損。口縁内外は横ナデ、内外面とも摩滅が進んでいるが、外面は縦方向のハケ目、内面はナデ。	K Ⅱ b 併行	
96	4	小甕	高 —— 口線 外径 —— 口線 内径 —— 胴部最大径 —— 底 部 径 6.4	胎土 微粒砂少し混る 色調 にぶい黄橙色 焼成 良好	胴下位から底部にかけてのみ残る。底部は強くしまり、上げ底をなす。内外面とも壁滅が進んでいるが、外面は縦方向のハケ目、内面はナデ。(SK-96②の下部で、同一固体の可能性がある。)	K Ⅱ a 併行	

番	号	器種	法 量(c	em)	胎土·色調	·焼成	特	微 .	分	類
97	上	大甕	器 口線 外径 口線 内径 胴部最大径 底 部 径	62.1 66.9	胎土 微粒砂 色調 赤褐色 焼成 良好		口縁は内側へ大きく発達し、外へはは中央に2条の三角凸帯を持ち、底部は強くしまり、わずかに上げ 横ナデ、その他の器表はナデであげてある。)	最大径はかなり上位にある。 底をなす。口縁内外・凸帯部は	К∏	c .
97	下	大甕	口縁 外径 口縁 内径	90.3 66.4 55.6 64.9 9.7	胎土 微粒砂 色調 黄褐色 焼成 良好		口縁は内側へ大きく発達し、外へはは中央に2条の三角凸帯を持ち、底部は強くしまり、少し上げ底をなデ、その他の器表はナデである。ある。)	最大径はかなり上位にある。 なす。口縁内外・凸帯部は横ナ	к∏	c
98	上	大甕	口縁 外径 口縁 内径	55.0 66.4	胎土 微粒砂色調 浅黄橙焼成 良好		口縁は内側へ発達し、わずかに内でまり、やや上位に1条の三角凸帯で最大径は上位にある。底部はしまり緑内外・凸帯部は横ナデ、その他全体に丁寧に仕上げてある。)	を持ち、胴上位はハリがあり、 り、わずかに上げ底をなす。口	кⅡ	b
98	下	大甕	器 口線 外径 口縁 内径 胴部最大径 底 部 径	56.5 69.6	胎土 微粒的 色調 黄褐色 焼成 良好		口縁は内側へ多少発達し、内へ低く やや上位に1条の三角凸帯を持ち、 は上位にある。底部はしまり、わず 凸帯部は横ナデ、その他の器表は 寧に仕上げてある。)	胴上位はハリがあり、最大径 かに上げ底をなす。口縁内外・	КΠ	b
99	上	大甕	口縁 外径	53.2 63.8	胎土 微粒砂 色調 赤橙色 焼成 良好		口縁は内側へ少し発達し、わずかけ 開き、ほぼ中央に1条の三角凸帯 ある。底部は強くしまり、わずかけ 帯部は横ナデ、その他の器表はナラ底部にかけて黒塗りが施されてい	を持ち、最大径はかなり上位に に上げ底をなす。口縁内外・凸 デである。内面は胴やや上位か	к∏	b
99	下	大甕	口縁 外径	53.2 61.8	胎土 微粒砂 色調 赤褐色 焼成 良好		口縁は内側へ少し発達し、外へ少し やや下位に2条の三角凸帯を持ち、 底部は強くしまり、わずかに上げ 横ナデ、外面は底部近くが細かな る。内面は口縁下から底部にかけて	、最大径はかなり上位にある。 底をなす。口縁内外・凸帯部は 縦方向のハケ目で他はナデであ	К∏	b
100	上	大斃	口縁 外径口縁 内径	50.7 59.1	胎土 微粒砂色調 黄白色焼成 不良		口縁は内側へ大きく発達し、わずれは開き、ほぼ中央に1条の三角凸にある。底部は強くしまり、少し部は横ナデ、内外面とも摩滅が進る。	帯を持ち、最大径はかなり上位 上げ底をなす。口縁内外・凸帯	К∐	С
100	下	大甕	口縁 外径口縁 内径	50.9 60.1	胎土 微粒砂色調 黄白色焼成 不良		口縁は内側へ大きく発達し、わず は開きほぼ中央に1条の三角凸帯 ある。底部は強くしまり、少し上 は横ナデ、内外面とも摩滅が進んで 内面の胴中央から下位にかけて黒 撫で付けた痕が認められる。	を持ち、最大径はかなり上位に げ底をなす。口縁内外・凸帯部 でいるが器表はナデと思われる。	КΙ	С
101	上	小斃	器 口 線 内 経 内 経 順 部 最 大 径 底 部 子 径 経 一 経 一 経 一 経 一 経 一 、 一 経 一 任 全 一 任 任 任 任 任 任 任 任 任 任 任 任 任 任 任 任	28.1 34.1 28.7 31.7 6.9	胎土 微粒砂 色調 赤褐色 焼成 良好		口縁は外に低く傾斜した逆L字状I 角凸帯を持つ。胴部はハリがあり、 しまり、上げ底をなす。口縁内外 摩滅が進んでいるが、外面の底部 面はナデと思われる。	、最大径を上位に持つ。底部は ・凸帯部は横ナデ、内外面とも	K □ 併行	
101	下	壺	口緣 外径 口緣 内径 胴部最大径	52.7 31.1 24.6 51.2 10.2 25.0		多く混る * 黄褐色	少し外に立ち上がる頭部に平坦な口縁に刻み目を廻らす。胴部は大きく肩がりや上位にあり、頭部直下に1条の三角にをなす。頸部外面には暗紋が施され、「外面とも摩滅が進んでいるが、外面底も面は横のミガキ、内面頸部は横のミガキ	張り、丸味を持つ。その最大径はや 凸帯を貼りつけ、底部は少し上げ底 口縁内外・凸帯部は横ナデ、他は内 部は縦方向のミガキで、その他の外	K ∏ 併行	

※器種:甕の器高が60cm以下のものを小甕50~75cmまでのものを中甕75cm以上のものを大甕とする。分類・橋口氏の編年による。

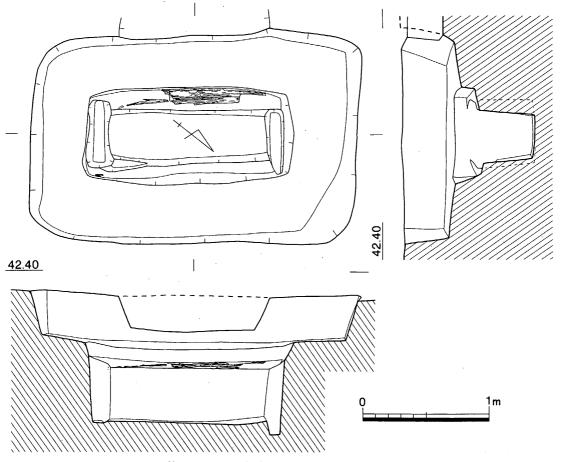
3. 木棺墓の調査

木棺墓は20基出土した。主軸方向は、大形の甕棺と同方向に並ぶもの(1・3・4・5・11・12・13・14・15・16・18・19・20号木棺墓)と、直行するもの(2・6・7・8・9・10・17木棺墓)とがある。この内、2・3・6号木棺墓は規模の点から小児棺と考えられる。甕棺墓との重複関係で、大形甕棺より新しいものは90号甕棺墓と切合う14号木棺墓だけで、小児棺より新しいものは18号甕棺墓を切る8号木棺墓だけである。

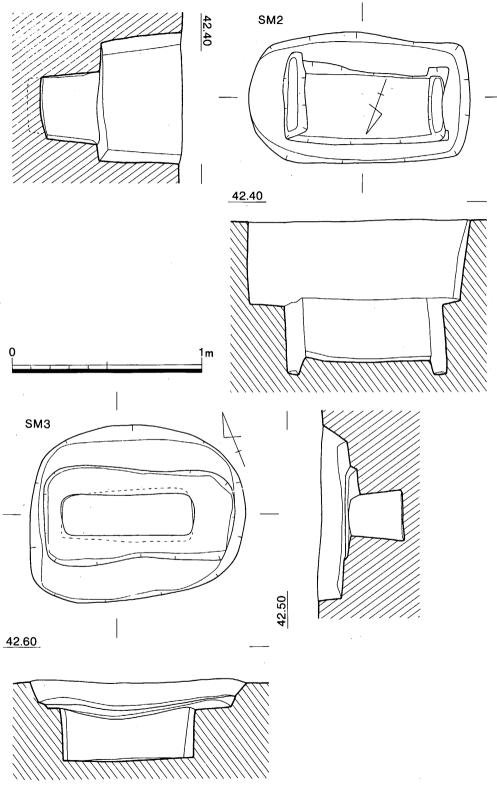
木棺墓の作り方は、次の2通りの方法がある。

- I、まず長方形の墓壙を掘り、その中央部に棺を組立てる壙を掘込む二段掘込みのもの。
- Ⅱ、直接木棺を組立てる壙を掘込む一段掘込みのもの。

木棺の組合せ方には、木口板・側板の掘込みなどから、次の4通りが考えられる。木口板を両側板で挟みこむもの (A型式・工工)、木口板で両側板を挟みこむもの (B型式・二二)、



第78図 1号木棺墓実測図 (縮尺 1/30)



第79図 2号・3号木棺墓実測図(縮尺1/20)

1号木棺墓 (第78図)

B型式の二段掘込みの木棺墓である。墓壙は隅丸長方形を呈し、第16号木棺墓に次ぐ大きさである。西側を2号甕棺墓の墓壙で破壊されている。三段に掘られたが、二段目は蓋板のレベルまで地山と同様の土で叩き締めた裏込めであることがわかった。この段の西側には、蓋材の一部が炭化した状態で残存していた。木口板の掘込みは、南側で2~3 cm、北側で約10 cmを測る。両側板の掘込みはない。頭位は、幅も広く、床もやや高い南側と考えられる。

2号木棺墓 (第79図)

小児用の二段掘込みの木棺墓である。一段目の墓壙は隅丸長方形を呈し、深さ約43~45cmを測る。両木口板の掘込みは、明瞭に残り、深さ約8cmを測る。側板の掘込みはないが、西北隅にわずかな切込みが認められた。木棺の組合わせ方は、東側木口が南側板より10cmほど外側まで延びておりC型式と考えられる。

3号木棺墓(第79図)

小児用の二段掘込みの木棺墓である。一段目の墓壙は楕円形を呈する。この中央に隅丸長方形の2段目の墓壙を掘込む。側壁面は上端から斜めに掘込まれており底幅の方が広い。木口板・側板の掘込みは認められない。二段目には、蓋板を固定するためのものと考えられる2~4 cmほど浅い段が削り出されている。

4号木棺墓 (第80図)

東側の大半を新しい土壙で破壊され詳細は不明であるが、西側木口部の残存状態から、二段 掘込みのA型式の木棺墓と考えられる。木口面には段を作らず、一段目上端から斜めに掘り込 まれている。側壁面の二段目の高さも一定ではなく、全体にだれた感じである。

5 号木棺墓 (第80図)

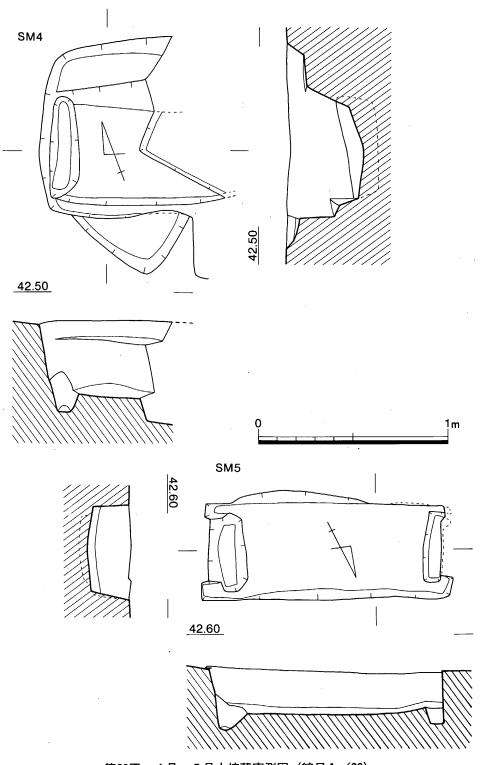
20号・49号甕棺墓の間に並んで出土した一段掘込みでA型式の典型的な木棺墓である。木口面・側面ともにほぼ直に掘込まれている。両木口側の壁には、側板の切込みが縦に明瞭に残り、木口板の掘込みはこの内側に収まる。床面は西側がやや高い。

6 号木棺墓 (第81図)

一段掘込みのA型式の木棺墓である。墓壙は隅丸長方形を呈し、壁面は斜めに掘込まれている。壙底に両木口板と両側板の掘込みが明瞭に残る。掘込みは一定で水平を保ち、両木口がやや深く掘込まれている。床面も水平である。

7号木棺墓 (第82図)

二段掘込みの木棺墓である。一段目の掘込みは隅丸長方形を呈する。二段目の高さは一定ではなく、木口側が高く、側壁側が低い。木口板の掘込みは北側だけに認められた。南側の木口



第80図 4号・5号木棺墓実測図(縮尺1/20)

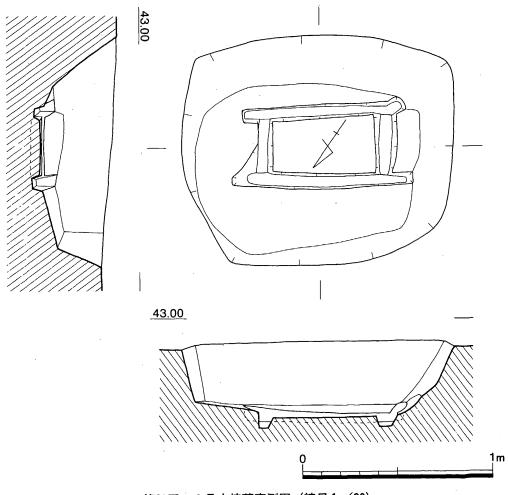
部は床面から8cm上部に段が設けられる。木棺の組合せ方は、B型式あるいはD型式が考えられるが南側木口部の段の使用法がわからず判然としない。床面は北側が高く、南側に向かって傾斜している。

8号木棺墓 (第82図)

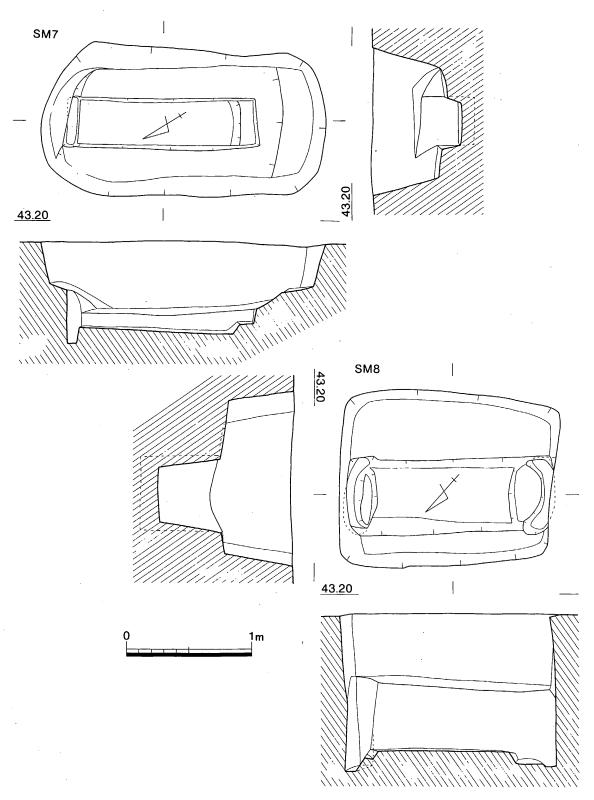
18号甕棺墓の墓壙の一部を破壊して作られている。二段掘込みのB型式の木棺墓である。一段目の掘込みは、隅丸長方形を呈するが、他に比べて方形に近い。50数cmの深さで長方形の二段目の墓壙が掘込まれるが、両木口部には段を作らない。両木口部の掘込みは二段で、外側の掘込みは湾曲している。使用された木材の部位、あるいは加工法が他とは異なるものと考えられ興味深い。床面はほぼ水平である。

9 号木棺墓 (第83図)

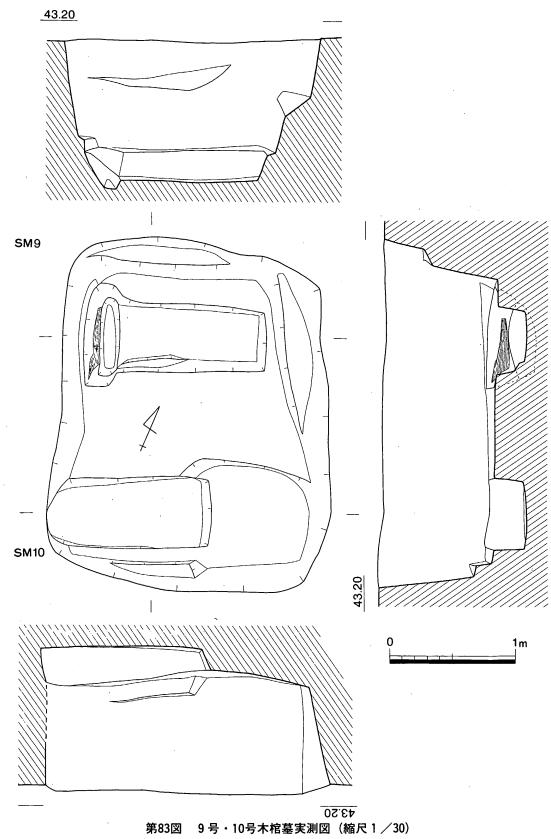
二段掘込みの木棺墓で、一段目の墓壙は隅丸長方形を呈し、10号木棺墓と共有する。木口の



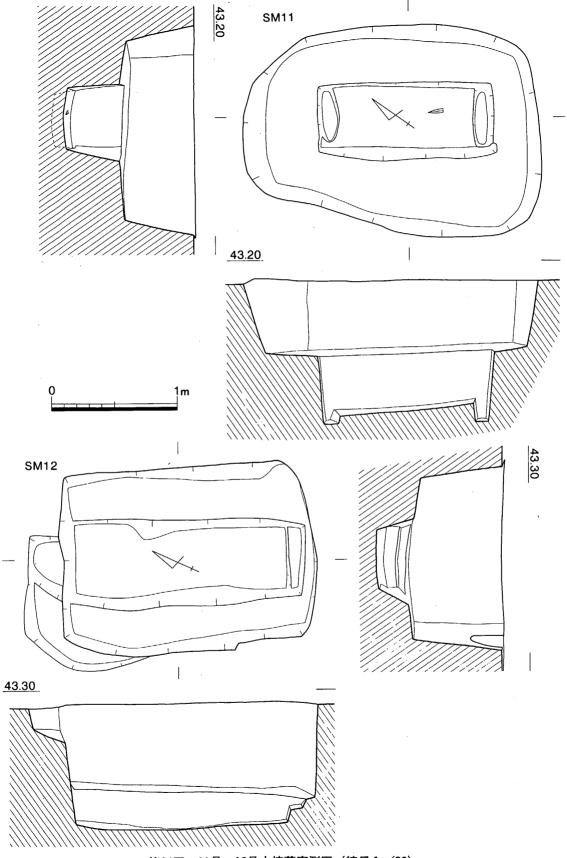
第81図 6号木棺墓実測図 (縮尺1/20)



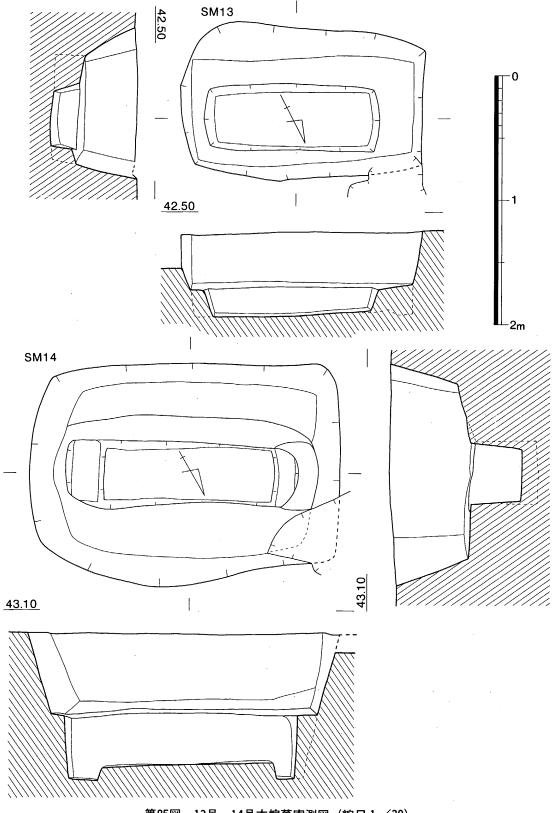
第82図 7号・8号木棺墓実測図(縮尺1/30)



- 114 -



第84図 11号・12号木棺墓実測図(縮尺 1 /30)

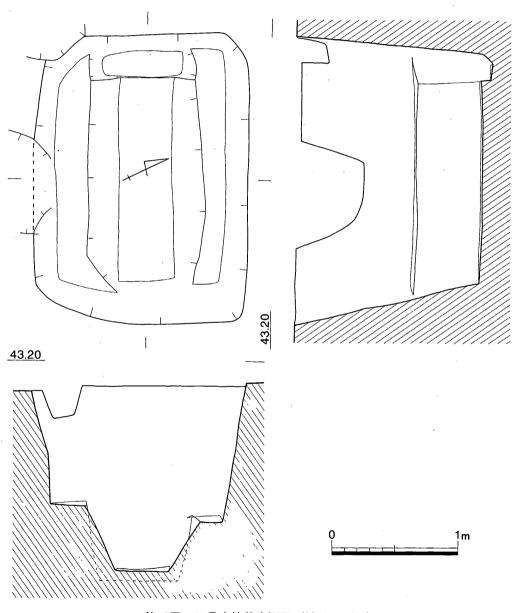


第85図 13号・14号木棺墓実測図(縮尺 1 /30)

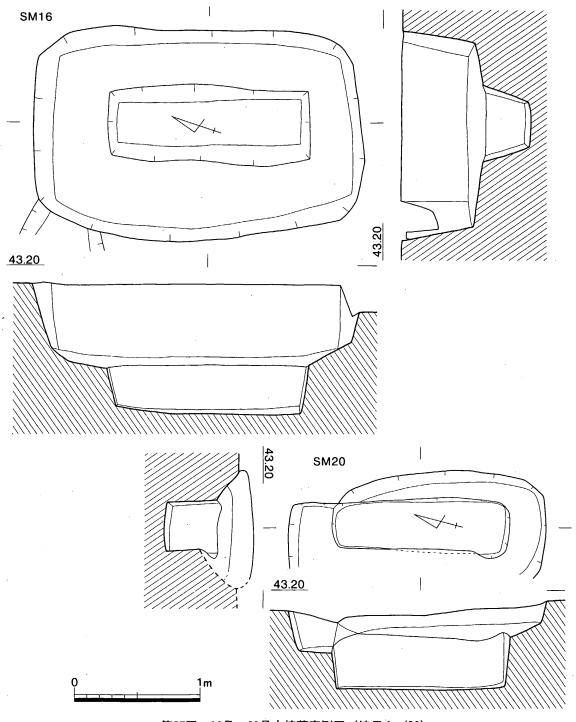
掘込みは西側だけに認められた。この掘込みの外側に棺材が炭化した状態で検出された。木口板あるいは蓋板の一部と考えられるが判定できない。棺の組合せはB型式と思われる。床面中央から石剣の切先片が出土している。

10号木棺墓 (第83図)

木口板・側板の掘込み、木材の痕跡も認められず組合せは不明である。西側の木口幅は、西側の半分ほどしかなく、掘込みの形状から、木蓋土壙墓の可能性もある。



第86図 15号木棺墓実測図 (縮尺 1 / 30)



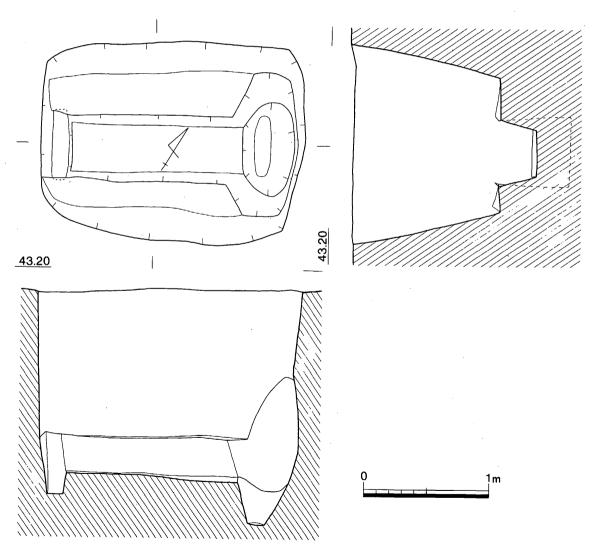
第87図 16号・20号木棺墓実測図 (縮尺 1 /30)

11号木棺墓 (第84図)

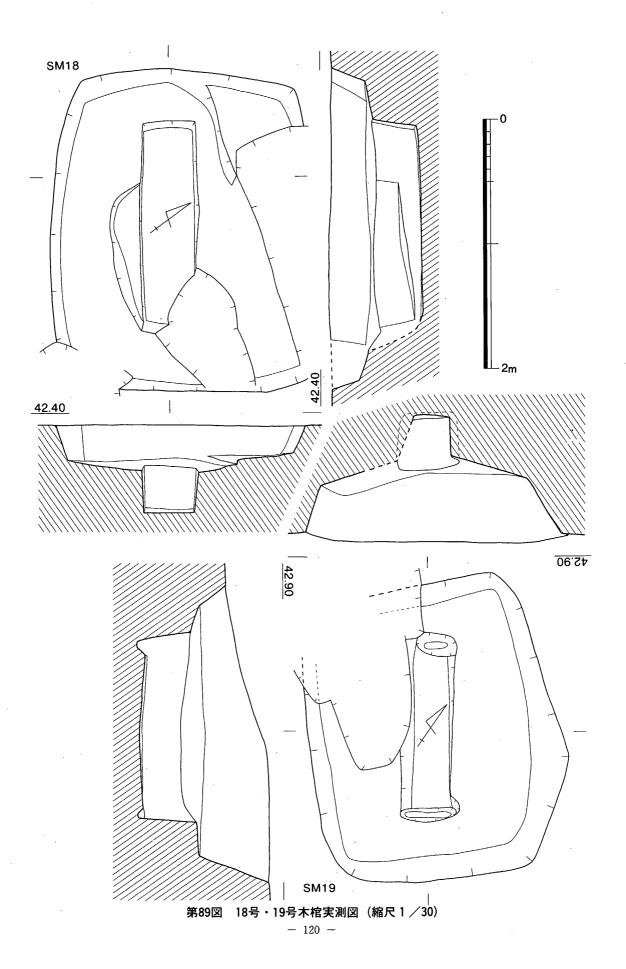
典型的なA型式の二段掘込みの木棺墓である。一段目の墓壙は隅丸の不整長方形を呈する。 木口面は二段目上端からやや斜めに掘込まれている。床面からの深さは、南側木口で15cm、北側木口で5cmを測る。西側板の切込みが両木口の壁に残るが、棺材の痕跡は認められなかった。 床面は南側が高く北に向かって傾斜している。床面中央部からやや南よりで石剣の切先部が出土した。床面の傾斜、遺物の出土地点からみて、頭位は南側と考えられる。

石剣 (第90図、図版14-2)

現存長13.2cm、最大幅3.7cmを測る切先部片で先端部を欠損する。断面はにぶい菱形を呈する。色調は緑灰色で、材質は粘板岩質である。



第88図 17号木棺墓実測図 (縮尺 1 / 30)

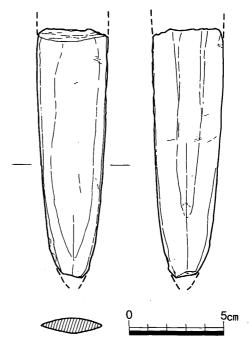


12号木棺墓 (第84図)

二段掘込みの木棺墓で、31号甕棺墓と不明 遺構に北側および西側の墓壙上端を破壊され る。墓壙は長方形を呈する。木口面は一段目 上端から斜めに掘込まれている。木口板・側 板の掘込み・切込みは認められず、棺材の痕 跡もない。南側木口は、7号木棺墓と同様に、 床面から10cmほど上部に段を有する。木棺の 組合せ方は不明である。

13号木棺墓(第85図)

一段掘込みのD型式の木棺墓である。墓壙は長方形を呈する。北側を6号甕棺墓、東側を7号甕棺墓によって破壊されている。壙底まで掘込み、棺を箱式に組合せ蓋板のレベルまで裏込めを行っている。木口板・側板の掘込みはない。西側木口部外側の壙底にわずかな段があるが木材の組合せと直接関係ない。



第90図 11号木棺墓出土石器実測図(縮尺 1 / 2)

14号木棺墓(第85図)

二段掘込みのB型式の木棺墓である。25号・55号・90号甕棺墓と切合い、90号より新しく、25号・55号より古い。一段目の墓壙は隅丸長方形で大形である。上端から約1 mの深さから二段目を掘込んでいる。両木口板に10~15cmの掘込みが残り、西側では裏込めの一部を確認できた。床面は傾斜し、西側が高く頭位と考えられる。

15号木棺墓 (第86図)

二段掘込みのB型式の木棺墓である。墓壙の南西側を51号・96号・39号甕棺墓で破壊されている。一段目の上端から50~60cmの深さで、木棺の輪郭を確認して掘下げたが、床面までは85cmもあり、棺の高さとしては不自然な状況であった。裏込めの土を除去したところ約30cm下で二段目の掘込みを確認した。このレベルで蓋板を固定するために用いられた粘土も検出できた。木口板の掘込みは北西側だけに認められた。床面はほぼ水平を保つ。

16号木棺墓(第87図)

墓壙の西側を、60号・61号・79号小児甕棺墓で破壊されている。二段掘込みの木棺墓である。 二段目は斜めに掘込まれている。床面には木口板、側板の掘込みは認められないが、直線的な 長方形を呈し、幅もほぼ一定しており、木棺は箱式(D型式)に組合せたものと考えられる。 直に板を立てると棺の上端部での裏込めは10cm前後の幅になる。

17号木棺墓 (第88図)

41号甕棺墓と重複していた。二段掘込みのB型式の木棺墓である。一段目墓壙の上端から約50cmの深さで棺の輪郭を確認したが、蓋板のレベルではないようだ。木口板の掘込みは深く、東側木口で床面から33cm、西側木口で17cmを測る。この掘込みや墓壙の深さからみて、蓋板の位置は二段目の上端では低すぎる。裏込めの土を丹念に掘下げたが蓋板の位置は確定できなかった。床面は西側が高い。

18号木棺墓 (第89図)

3号土壙墓を切り、13号木棺墓と46号甕棺墓に大半を破壊される。二段掘込みのD型式の木棺墓である。木口板・側板の掘込みは認められない。側面は直に立上り、床面は北西側が高い。 19号木棺墓(第89図)

21号甕棺墓に北西側から大きく破壊される。二段掘込みのB型式の木棺墓である。両木口板の掘込みが確認されたが、北西側木口部および南西側面は明確ではない。北東側壁は直に立上がる。床面は中央部がやや低い。

表 3 木棺墓一覧表

-sr. co.	形豆	<u> </u>	主軸方位	墓壙	の規模	(cm)	棺の	規模	(cm)	木口板 の 掘	側板 の掘	側板の切	備考
番号	形工		土粬刀以	長さ	幅	深さ	長さ	幅	深さ	込み	込み	込み)HI 15
1	2段掘り	В	N -38°-W	259	167	46	155	42	43	0			棺材の痕跡あり
2	2段掘り	С	N -71°- E	116	69	43	84	38	31	0		. 🛆	
3	2段掘り	?	N -68°-W	113	93	15	70	21	29				
4	2段掘り	A	N -69°-W	_	95	22	_	64	16	△?			
5	1段掘り	A	N -63°-W		_		121	50	22	0	0		
6	1段掘り	A	N -56°- E	142	121	33	73	44	7	0	0		
7	2段掘りI	В?	N -32°- E	226	118	60	151	41	13				
8	2段掘り	В	N -48°- E	167	140	54	165	59	50	0			
9	2段掘り	В	N -66°- E	204	(153)	88	132	55	22	Δ			棺材の痕跡あり 石剣片出土
10	2段掘り	?	N -66°- E	229	(101)	87	135	58	25				
11	2段掘り	Α	N -36°-W	234	170	57	141	61	47	0		Δ	石剣片出土
12	2段掘り	A	N -24°-W	202	147	71	191	68	29				
13	1段掘り	D	N -63°-W	190	121	47	139	53	23				
14	2段掘り	В	N -61°-W	247	177	63	185	49	41	0			
15	2段掘り	В	N -62°-W	231	169	96	231	92	52	Δ			
16	2段掘り	D	N -19°-W	261	167	65	161	61	38				
17	2段掘り	В	N -58°- E	210	157	120	204	53	29	0			
18	2段掘り	Ď	N -54°-W	257	202	33	161	45	38				
19	2段掘り	В	N -36°-W	236	203	56	151	41	41	O			
20	2段掘り	D	N -14°-W	168	(94)	28	140	43	41				

○:両側 △:片側

20号木棺墓 (第87図)

南側を76号甕棺墓で破壊される。二段掘込みのD型式の木棺墓と考えるが、一段目の墓壙の 北側、西側は明確にできなかった。壁面は直に掘込まれ、床面は水平である。木口板・側板の 掘込みは認められない。

4. 土壙墓の調査

土壙墓は列埋葬の北西部に5基出土した。ここでは木口の掘込みなどがないので土壙墓として、列埋葬の並びにあることや、土壙墓が木棺墓の集中しているところに出土していることなどから考えて、木棺墓である可能性が高い。この内、SD1・2・3・5は規模の点から小児用と考えられる。また、主軸方位は、SD5だけが大型甕棺の列埋葬に直交し、その他は同じ方向に並ぶ。

1号土壙墓 (第91図)

1号祭祀土壙の南側に位置し、平面形態は長方形を呈し、長軸長 $1.04\,\mathrm{m}$ 、短軸長 $0.38\,\mathrm{m}$ 、深 $\mathrm{20.21\,m}$ を測り、主軸方位は $\mathrm{N}-71^{\circ}-\mathrm{W}$ である。

2号土壙墓 (第91図)

2号祭祀土壙の南側に位置し、墓壙は隅丸長方形を呈し、長軸長 $1.08\,\mathrm{m}$ 、短軸長 $0.58\,\mathrm{m}$ 、深 $\mathrm{20.56\,m}$ を測り、主軸方位は $\mathrm{N}-\mathrm{54}^{\circ}\mathrm{-W}$ である。

3号土壙墓 (第91図)

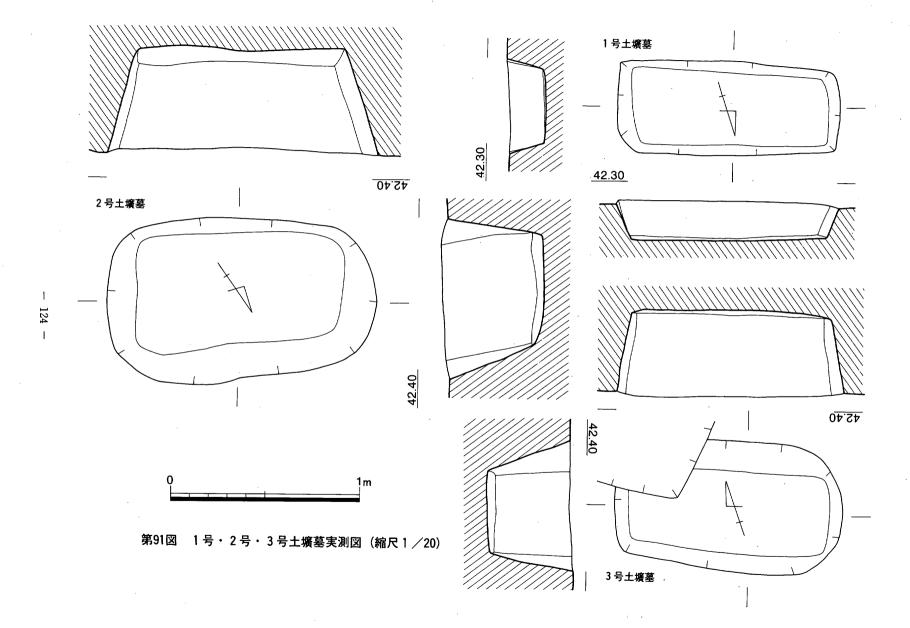
18号木棺墓の南側に位置し、墓壙の一部は18号木棺墓によって破壊されている。平面形態は隅丸長方形で、長軸長1.07 m、短軸長0.43 m、深さ0.43 mを測り、主軸方位はN-67°-Wである。

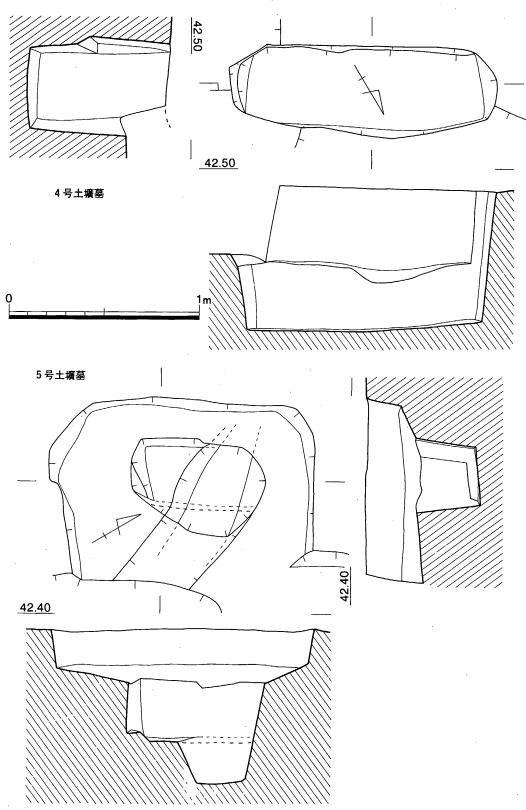
4号土壙墓 (第92図)

24号甕棺墓の南側、19号木棺墓の西側に位置し、墓壙の一部は24号甕棺墓と19号木棺墓によって破壊されている。平面形態は隅丸長方形を呈し、長軸長1.39m、短軸長0.48m、深さ0.72mを測り主軸方位はN-59°-Wである。墓壙は二段掘りをなしており、木蓋をしていた可能性が大きい。

5号土壙墓 (第92図)

13号木棺墓の北側に位置し、墓壙は二段掘りであるが、大半を6号甕棺墓と7号甕棺墓および13号木棺墓によって破壊されている。平面形態は長方形を呈し、一段目の墓壙は、長軸長1.31m、深さ0.26mを測る。二段目は幅0.39m、深さ0.32mを測り、主軸方位はN-31°-Eである。





第92図 4号・5号土壙墓実測図(縮尺1/20)

5. 祭祀土壙の調査

墓地に伴う遺構として祭祀土壙がある。これらは墓域を示すものと考えられ、甕棺・木棺墓群の両側に位置し、ほぼ成人用甕棺墓の二列埋葬に平行する形で造られている。北ないし東側に8基、南ないし西側に10基を検出した(付図1・2)。特に2号祭祀土壙は墓域を表す意味合いが強いと思われる。

1号祭祀土壙(第93図)

調査区の北西端に位置し、東西長約2.2m、南北長約3.6m、深さ約1.3mを測る平面形態楕円形で、二段掘りをなす。南側に1号土壙があるが、近くに他に遺構がないことから考えて、墓域の終わりを意味しているものと思われる。

出土土器(第95図1)

朝顔状に立ち上がる頸部に平坦な口縁部を作った壺形土器で、器高29.6cm、口径22.3cm、頸部15.3cmを測る。胴部は肩が張り、その最大径はやや上位にあり、そこに1条の三角凸帯を貼る。内外とも摩滅が進み調整痕は不明瞭であるが、口縁内外・凸帯部は横ナデ、胴部外面にハケ目が残り、その他はナデと思われる。

2号祭祀土壙(第94図)

平面形態は不整円の土壙で、東西長約4.2m、南北長約3.8m、深さ約1.2mを測る。南から西へと続いてきた甕棺・木棺墓群の西端に位置し、二列埋葬の列を切る形で造られている。これより西には甕棺墓がないことから、列埋葬の終わりを意味しているものと思われる。

出土土器(第95図2)

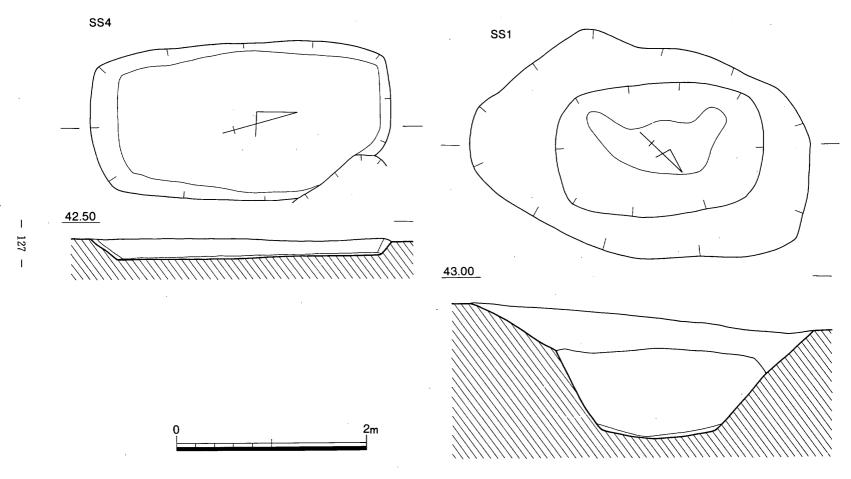
口縁部を欠損し、底部は一部が欠損し、外面は剝落している壺形土器である。径部下に三角 凸帯を貼り、頸部は垂直に立ち上位が少し外反し、頸部径11.9cmを測る。胴部は張りが大きく 丸みを持ち、内面胴上位には指圧痕が残る。

3号祭祀土壙(第94図)

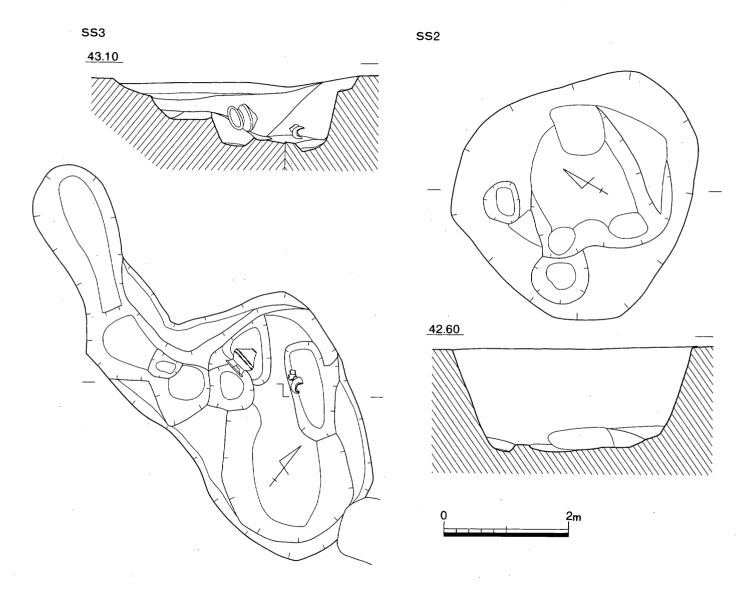
21号甕棺墓の南側に位置し、平面形態は楕円形の土壙の西に溝がくっついた形をとり、東西 長約7.4m、南北長約3.2m、深さ約1.2mを測る。

出土土器(第96図・97図)

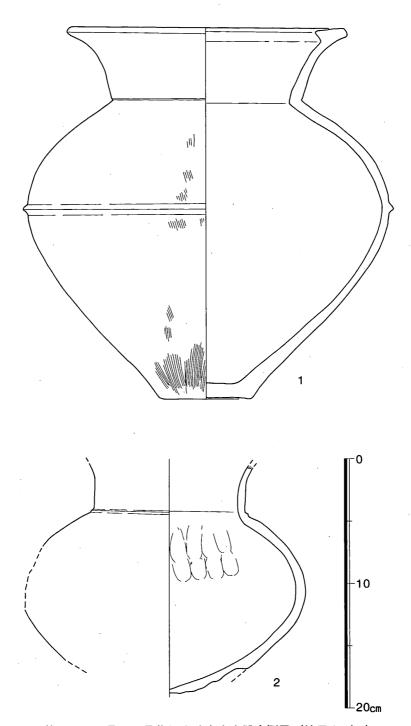
3・5・6 は朝顔状に立ち上がる頸部に平坦な口縁部を作った壺形土器で、頸部から上だけが出土し、その口径はそれぞれ29.1cm、35.6cm、32.7cmを測る。また、5 には口縁下に暗紋が施され、6 には頸部下位に1条の山形凸帯が貼られている。4 も朝顔状に立ち上がる頸部に平坦な口縁部を作った壺形土器で、胴部の肩が張り、その最大径はやや中央やや下位にあり、そこに2条の三角凸地を貼る。器高44.6cm、口径34.4cm、頸部径22.2cmを測る。内外とも摩滅がひどく調整痕等は不明。7 は頸部から上位を欠損した壺形土器で、底部はわずかに上げ底で、



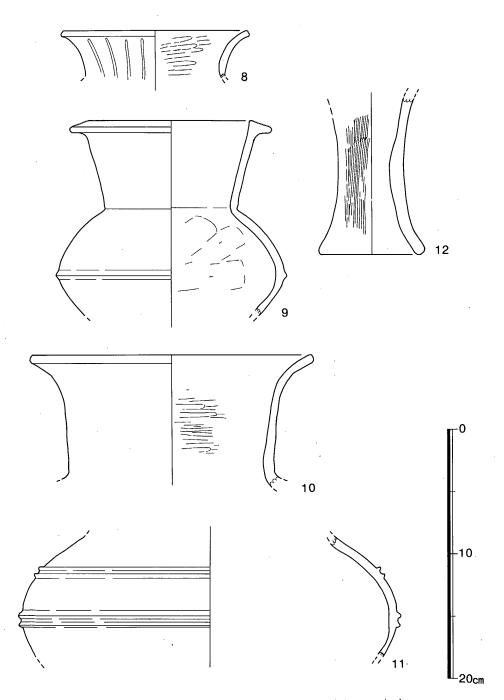
第93図 1号・4号祭祀土壙実測図(縮尺1/40)



第94図 2号・3号祭祀土壙実測図(縮尺1/60)



第95図 1号・2号祭祀土壙出土土器実測図(縮尺1/3)



第97図 3号祭祀土壙出土土器実測図(縮尺1/3)

底部径7.3cmを測る。外面は底部近くに縦方向のミガキが施され、他は横ないし斜めのミガキで、内面はナデである。8・10はともに外反する口縁を持つ壺形土器の頸部から上で、口径14.9cmおよび22.4cmを測り、8には外側口縁下に暗紋が施されている。9は外反する頸部に逆し字状の口縁を貼りつけた壺形土器で底部は欠損している。胴部の肩が張り、その最大径はやや中央やや下位にあり、そこに1条の三角凸帯を貼り、口径15.9cm、頸部径10.4cmを測る。11は胴部だけではあるが、壺形土器の一部で、最大径部に2条の三角凸帯と、そのやや上位に上がコの字凸帯で、下が三角凸帯をなす2条の組み合わせ凸帯を貼る。12は器台で上部を欠損し底部径8.4cmを測る。

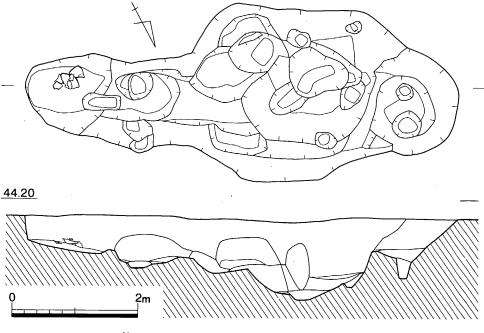
4 号祭祀土壙(第93図)

東西長約1.6m、南北長約3.2m、深さ約0.2mを測り、2号と3号祭祀土壙との間に位置し、平面形態は長方形を呈す。なお出土遺物などはない。

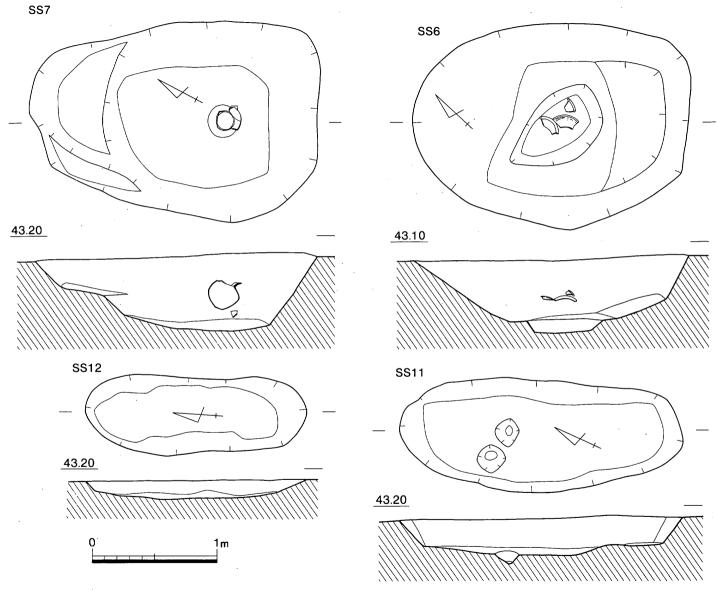
5 号祭祀土壙(第98図)

55号・90号甕棺墓の南側に位置し、土壙の規模は大きく、東西長約6.9m、南北長約2.8m、深さ約1.2mを測る。東西に長く走る溝状の土壙にピットをいくつか掘り込んだ形状をとる。 出土土器(第101図13、14、図版13)

13・14はともに朝顔状に立ち上がる頸部に平坦な口縁部を作った壺形土器で、13は頸部から上だけが出土し、その口径14.7cmを測る。14は胴部の肩が張り、その最大径はやや中央やや下位にあり、そこに1条の三角凸帯を貼る。器高18.1cm、口径15.7cm、頸部径10.4cmを測る。口



第98図 5号祭祀土壙実測図 (縮尺1/60)



第99図 6号・7号・11号・12号祭祀土壙実測図(縮尺1/30)

縁内外・凸帯部は横ナデ、外面は胴下位が縦方向のミガキの他は横へのミガキが施され、内面はナデである。

出土石器(第102図)

1は約1/2が現存する石包丁で、現存長9.5cm、最大幅4.8cm、厚さ0.5cmを測り、石材は灰黒

色の粘板岩製である。2は 石剣の一部で、切先と基部 を欠損する。現存長5.9cm、 最大幅3.4cm、最大厚1.0cm で、石材は淡灰色の粘板岩 製であり、刃部の研ぎだし はなく、利器として使用さ れたとは考えにくい。

6 号祭祀土壙(第99図)

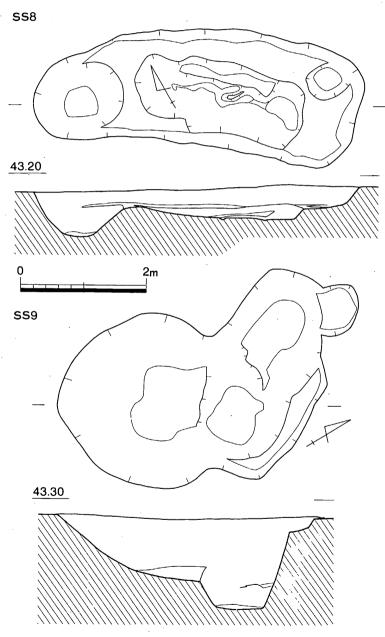
9号・10号木棺墓の西側 に位置し、平面形態は楕円 形を呈す。東西長約1.7m、 南北長約2.2m、深さ約 0.6mを測り、二段掘りを なす。中央部の落ち込みの 上から壺形土器の口縁部が 出土した。

出土土器 (第101図15・第103図20)

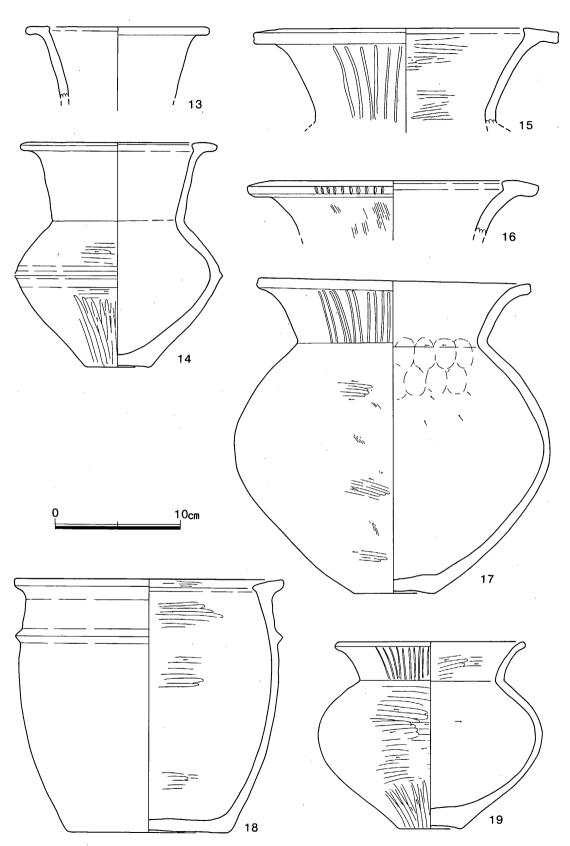
壺形土器の頸部から口縁 部にかけての薄片が出土し、 その内、15は口径29.4cm、 頸部径14.5cmを、20は口径 . 33.8cm、頸部径22.7cmを測 る。外面口縁下にはヘラで 彫り込んだ暗紋が施されて いる。

7号祭祀土壙(第99図)

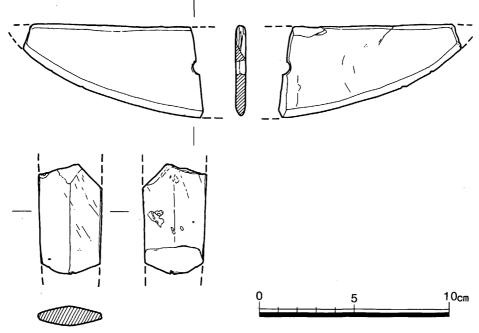
10号木棺墓の西側、6号



第100図 8号・9号祭祀土壙実測図(縮尺1/60)



第101図 5号・6号・7号・8号・15号祭祀土壙出土土器実測図(縮尺1/3)



第102図 5号祭祀土壙出土石器実測図(縮尺1/2)

祭祀土壙の南側に位置し、二段掘りで平面形態は不整方形を呈す。東西長約1.6m、南北長約2.3m、深さ約0.6mを測る。

出土土器(第101図16、17図、図版13) 16は口径23.5cmを測る壺形土器の口縁部で、口縁はいくぶん外へ低く傾斜し、口縁端部には刻み目が施されている。17は器高25.1cm、口径21.7cm、頸部径15.1cmを測るまるみをおびた壺形土器で、外面の口縁下には暗紋が、内面の頸部下には指圧痕が残る。

8号祭祀土壙(第100図)

15号木棺墓の北側に位置し、東西長約5.2m、南北長約1.9m、深さ約0.7mを測る。平面形態は、東西に長い二段掘りの長方形土壙の西に、円土壙をくっつけた形を呈する。

出土土器(第101図、図版13)

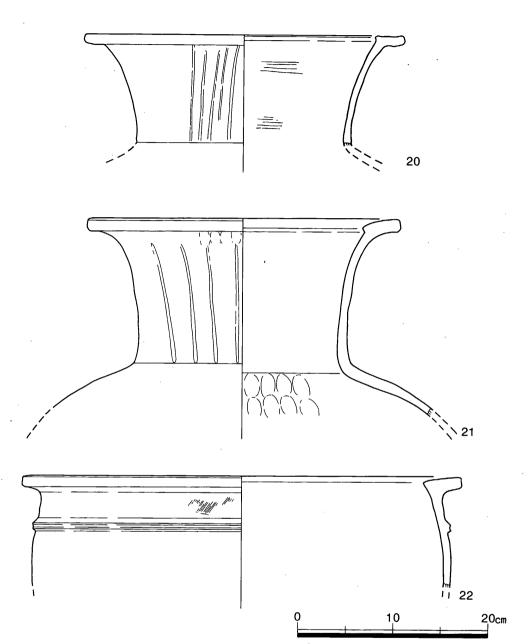
内に低く傾斜する逆L字状の口縁を呈する甕で、胴上位に1条の三角凸帯を貼り、底部はわずかに上げ底で広い。内外とも摩滅が進んでいるが、口縁内外・凸帯部は横ナデ、内面は全体的に横方向のナデで、外面はナデと思われる。器高20.4cm、口径21.4cm、底部径21.8cmを測る。

9 号祭祀土壙(第100図)

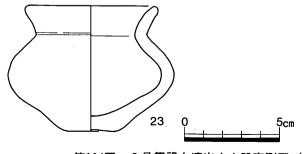
SK-99の東側に位置し、円形の土壙と楕円形の土壙をくっつけたような平面形態を呈す。 東西長約3.3m、南北長約4.3m、深さ約1.4mを測る。

出土土器(第103図21、22・第104図23図、図版13)

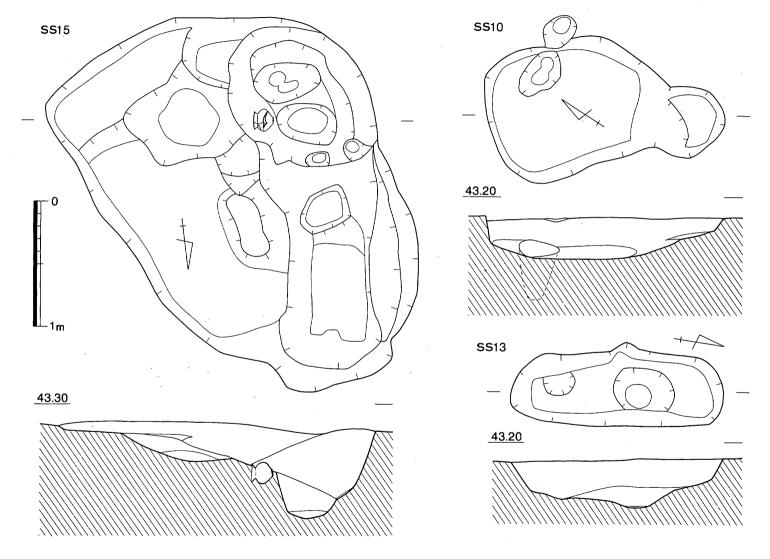
21は壺形土器の頸部から口縁にかけてで、口径33.1cm、頸部径22.2cmを測る。外面の口縁下には暗紋が、内面の頸部下には指圧痕が残る。22は内に低く傾斜する逆L字状の口縁を呈する甕の口縁部で、口径46.4cmを測る。口縁下に1条の三角凸帯を貼り、内外とも摩滅が進んでいるが、口縁内外・凸帯部は横ナデ、内面はナデで、外面は縦方向のハケ目と思われる。23は器



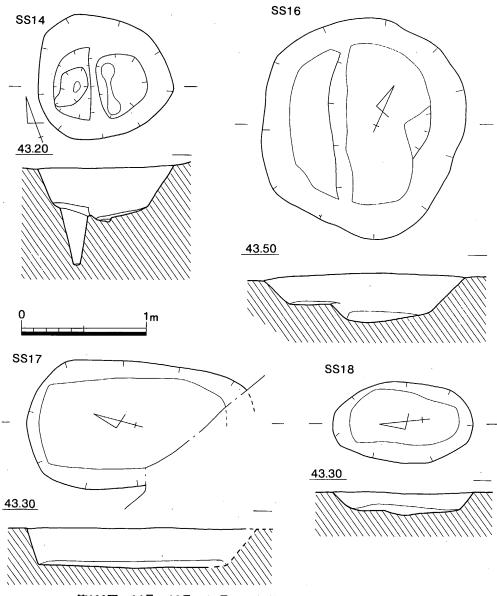
第103図 6号・9号祭祀土壙出土土器実測図(縮尺1/4)



第104図 9号祭祀土壙出土土器実測図(縮尺1/2)



第105図 10号・13号・15号祭祀土壙実測図 (縮尺 1 / 30)



第106図 14号・16号・17号・18号祭祀土壙実測図(縮尺 1 /30)

高6.7cm、口径6.9cmを測る壺形土器である。

10号祭祀土壙(第105図)

9号祭祀土壙のすぐ東に位置し、平面形態は不整形で東西長1.9m、南北長約1.0m、深さ約0.3mを測る。出土遺物はない。

11号祭祀土壙(第99図)

平面形態は長楕円で東西長約0.9m、南北長約2.3m、深さ約0.3mを測る。12号木棺墓の東側に位置し、出土遺物はない。

12号祭祀土壙(第99図)

78号甕棺墓の北側、16号祭祀土壙の西側に位置する長楕円の土壙で、東西長約0.6m、南北 長約1.8m、深さ約0.1mを測る。出土遺物はない。

13号祭祀土壙(第105図)

94号・98号甕棺墓の西側に位置し、東西長約0.6m、南北長約1.7m、深さ約0.4mを測る。 平面形態は長方形を呈し、出土遺物はない。

14号祭祀土壙(第106図)

二段掘りの不整円の土壙で、94号甕棺墓の西側に位置する。東西長約1.0m、南北長約1.0m、 深さ約0.4mを測り、出土遺物はない。

15号祭祀土壙(第105図)

74号甕棺墓の西側にある不整形の土壙で、東西長約2.4m、南北長約3.2m、深さ約0.7mを 測る。

出土土器(第101図19図・図版14-1)

器高14.9cm、口径15.2cm、頸部径11.7cm、底部径4.9cmを測る壺形土器で、底部は少し上げ底をなす。外面の口縁下には暗紋を施し、底部近くにはミガキがみられる。

16号祭祀土壙(第106図)

78号甕棺墓の北東側、12号祭祀土壙のさらに東側に位置し、二段掘りで、東西長約1.6m、南北長約1.7m、深さ約0.4m、平面形態は円形を呈する。なお、出土遺物はない。

17号祭祀土壙(第106図)

93号甕棺墓の南側、20号木棺墓の南東に位置し、平面形態は長方形を呈する。東西長約1.0m、南北長約1.8m、深さ約0.3mを測る。近くには成人用甕棺墓もなく、また、列埋葬の並びに位置しており、墓域の終わりを意味しているものと思われる。

18号祭祀土壙(第106図)

12号木棺墓の東側、11号祭祀土壙との間に位置する。平面形態は楕円形を呈し、東西長約 0.6m、南北長約1.1m、深さ約0.2mを測り、出土遺物はない。

6. 土壙の調査

1号土壙(第107図)

1号木棺墓の南側、2号木棺墓の北西に位置し、平面形態は 楕円形、東西長約1.0m、南北 長約0.7m深さ約0.5mを測る。

2号土壙(第107図)

5号甕棺墓の北側に位置し、 平面形態は楕円形、東西長約 1.5m、南北長約0.8m、深さ約 0.4mを測る。

出土土器(第109図1)

外反する口縁を持つ壺形土器 で、胴部は肩が張り、まるみを 持つ。外面頸部には縦方向のハ ケ目が残り、胴部はヘラミガキ、 内面はナデである。口径18.8cm、 頸部径14.9cmを測る。

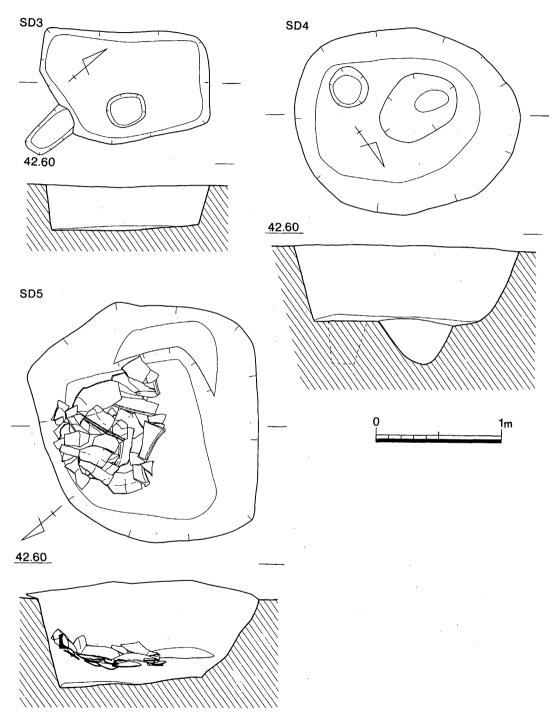
3号土壙(第108図)

4号土壙の北側、8号祭祀土 壙の西側に位置し、東西長約 0.9m、南北長約1.4m、深さ約 0.5mを測り、平面形態は長方 形を呈す。祭祀土壙の並びにあ り、その可能性もある。出土遺 物はない。

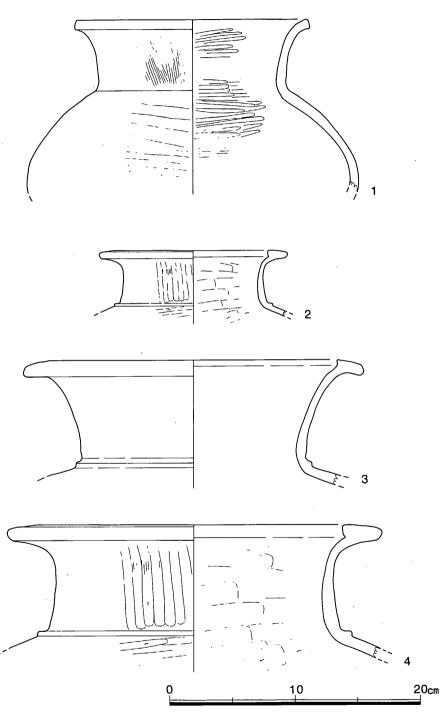
4号土壙(第108図)

6 号木棺墓の北側に位置し、 二段掘りで、平面形態は円形に 近く、東西長約1.6m、南北長 42.40

約1.7m、深さ約0.9mを測る。祭祀土壙の並びにあり、祭祀遺構とも考えられる。出土遺物はない。



第108図 3号・4号・5号土壙実測図 (縮尺1/30)

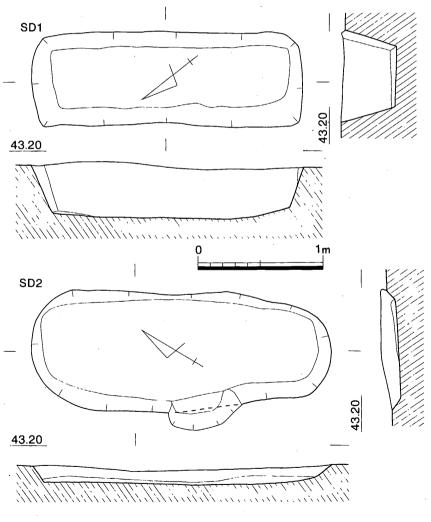


第109図 2号・5号土壙出土土器実測図(縮尺1/3)

5号土壙(第108図)

49号甕棺墓の北側に位置し、平面形態は方形に近く二段掘りで、東西長約2.0m、南北長約1.7m、深さ約0.8mを測る。祭祀土壙の並びの西端にあり、祭祀遺構とも考えられる。 出土土器(第109図2、3、4)

ともに朝顔状に立ち上がる頸部に平坦な口縁を作る壺形土器で、胴部より下を欠損する。頸部下には凸帯を1条持ち、2と4との頸部外面にはミガキが施されている。2は口径14.9cm、頸部径11.4cmを、3は口径27.1cm、頸部径18.0cmを、4は口径29.7cm、頸部径22.1cmを測る。



第110図 1号・2号中世土壙墓実測図(縮尺1/30)

7. 中世土壙墓の調査

調査区の東端近くに、残りは浅いが3基検出した。

1号中世土壙墓(第110図)

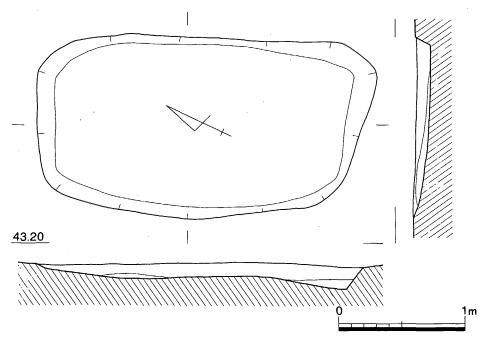
16号祭祀土壙の東側に位置し、平面形態は長方形を呈する。長軸長約2.2m、短軸長約0.8m、深さ約0.4mを測り、主軸方位はN-39°-Eである。

2 号中世土壙墓(第110図)

3号中世土壙墓のすぐ西側に位置し、平面形態は隅丸長方形を呈する。長軸長約 $2.4\,\mathrm{m}$ 、短軸長約 $1.0\,\mathrm{m}$ 、深さ約 $0.1\,\mathrm{m}$ を測り、主軸方位は $N-31\,\mathrm{m}$ -Wである。図化はできなかったが青磁片が出土している。

3号中世土壙墓(第111図)

調査区の東端に位置し、平面形態は長方形を呈する。長軸長約 $2.7 \,\mathrm{m}$ 、短軸長約 $1.5 \,\mathrm{m}$ 、深さ約 $0.2 \,\mathrm{m}$ を測り、主軸方位は $N-25 \,\mathrm{^{\circ}}-W$ である。



第111図 3号中世土壙墓実測図 (縮尺 1/30)

D D 3
$$\rightarrow$$
 S M18 \rightarrow S M13 \rightarrow D D 5 \rightarrow S K 7 \rightarrow S K 6 S K 46

, S K 11

S K 30

`S K 29→S K 8

 $S K 2 \rightarrow S M 11$

S K 49→ S K 10

S M12→ S K 31

S M13→ S K 13

S K 89→ S K 3

 \sim S K 4 \rightarrow S K 26 \rightarrow S K 28

S K 88→ S K 27 ~

S K 16→ S K 15

`S K 17

 $S K 20 \rightarrow S K 45 \rightarrow S K 23 \rightarrow S K 24$

D D $4 \rightarrow S K 21$

S M19

S K 92 \rightarrow S K 91 \rightarrow S K 22

✓ S K 48

S K 101 \rightarrow S K 100 \rightarrow S K 47 \rightarrow S K 97 \rightarrow S K 50 \rightarrow S K 32

 $S K 90 \rightarrow S M 14 \rightarrow S K 25$

S K 331

S K 34 +S K 55

S K 35-

S K 36-J

S K 99→ S K 54→ S K 53

S K 52

S M17→ S K 41

S K 18→ S K 40

S M 8

S K 98→ S K 44

`S K 87

→ S K 51

S M15→ S K 96→ S K 39

S K 56 → S K 37

S K 38

S K 59→ S K 94→ S K 58

S K 64

S K 79→S K 62→S K 63

S M 16→ S K 60 S K 78→ S K 77

S K 61

S K 19→ S K 75→ S K 66

S K67

S K 70

S K 95 - S K 80

S K 81→ S K 82→ S K 83

S K 93→ S K 84

S K 73

SK:甕棺墓

SM:木棺墓

DD:土壙墓

Ⅳ 第3次調査

1. 調查概要

1. 調査に至る経過

永岡遺跡は、昭和47年の国道3号線南バイパスの建設に伴う事前の発掘調査と、昭和55年の宅地開発に伴う事前の発掘調査で、その大半が確認されている。昭和61年、九州種苗株式会社から筑紫野市教育委員会に筑紫野市大字永岡949-1外を開発したい旨の申し出があり、これに基づき試掘調査を実施したところ、開発予定地の北東部隅1200㎡に埋蔵文化財が確認された。この結果を基に現状保存のための計画変更などを含め度重なる協議を行ったが、現状での保存は難しく、最終的に発掘調査による記録保存を実施することとなった。最終計画では10109.37㎡の造成工事を行い、外食産業などの店舗を建設するというものである。発掘調査に当たっては、筑紫野市と九州種苗株式会社との間に埋蔵文化財発掘調査契約書を締結し、市教育委員会が昭和63年10月17日から11月12日にかけて発掘調査を実施した。

2. 遺構(図版1-2、付図2・3)

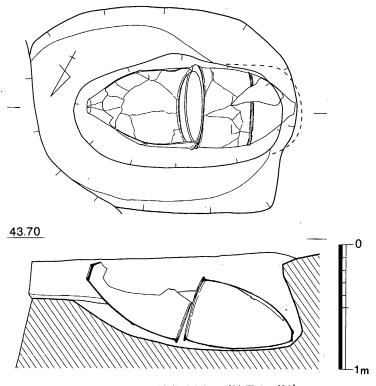
造成地の北東部約1200㎡の発掘調査を行い、調査区の北東部の端近くに昭和47年の国道バイパスの側道部の調査で確認された弥生時代中期前半の一連の甕棺・木棺墓群の一部とみられるものとして、甕棺墓1基、木棺墓1基、祭祀土壙3基を検出した。他には遺構はなく、最近掘られた溝状のものが数条あるだけである。また、調査区の西側および南側は谷になっており、東側は昭和47年度に調査済みである。

2. 遺構と遺物

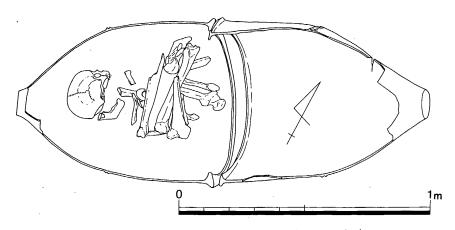
1. 甕棺墓(第112図、図版2)

調査区の北東端に位置し、平面形態は楕円形で、北東側の一部は削平を受けている。成人用の大型棺で長軸長約2.1m、短軸長約1.7m、深さ約0.8mを測る。主軸方位はN-62°-E、埋置角度は20°である。これまで2回の調査で確認された二列に並ぶ成人用甕棺墓の列埋葬群の南端に位置し、列埋葬に直交して埋置され、甕棺の形式からきれいに並ぶ列埋葬の甕棺よりも新しいことがいえる。

甕棺の中の人骨は熟年の男性で、頭骨や四肢骨などが主だが、遺存状況は比較的よく、過去 に調査した永岡の甕棺と同様に、下甕の底部方向に頭位を置く形で埋葬されていた (第113図)。 また、膝関節部には蓆の付着も確認された。



第112図 甕棺墓実測図(縮尺1/30)



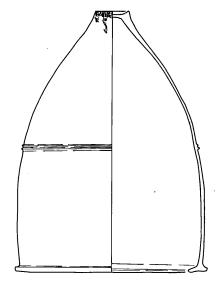
第113図 甕棺墓人骨出土状態実測図(縮尺 1 / 15)

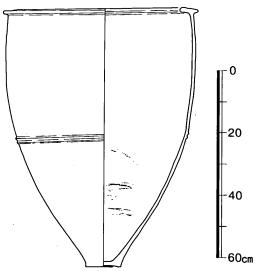
上甕 (第114図、図版 9 - 4)

器高83.7cm、口縁外径61.8cm、口縁内径59.6cm、胴部最大径49.8cm、底部径10.5cmを測る橙褐色の大型の甕で、胎土には微粒砂が少し混じり、焼成は良好である。口縁は外に低く傾斜し、内側に大きく発達したT字状口縁を呈す。胴部は、ハリが少なく、胴上半はいくぶん外に開き、胴中央部に2条の三角凸帯を貼り、その最大径はかなり上位にある。底部は強くしまり、少し上げ底をなす。内外とも摩滅が進んでいるが、口縁内外・凸帯部は横ナデ、外面は底部近くに縦方向のハケ目が残るが、その他はナデ、内面はナデである。

下甕 (第114図、図版 9 - 4)

器高84.4cm、口縁外径61.1cm、口縁内径49.2cm、胴部最大径58.7cm、底部径11.2cmを測る橙褐色の大型の甕で、胎土には微粒砂が若干混じり、焼成は良好である。口縁は外に低く傾斜し、内側に大きく発達したT字状口縁を呈す。胴部は、ハリをあまり持たずに、胴上半はいくぶん外に開き、胴中央部に2条の三角凸帯を貼り、その最大径はかなり上位にある。底部はしまり、わずかに上げ底をなす。内外とも摩滅が多少進んでいるが、口縁内外・凸帯部は横ナデ、その他は内外面とも丁寧なナデで、内面の胴部下位には黒色顔料と思われるものを指先でナデつけた痕が確認できる。





第114図 甕棺実測図 (縮尺 1 /12)

2. 木棺墓 (第115図、図版 3 - 1)

発掘区の北東部の端、甕棺墓のすぐ南側に位置し、平面形態は、上が隅丸長方形で下が長方形を呈する二段掘りで、長軸長約1.9m、短軸長約1.3m、深さ約0.9m(二段目~長軸長約1.2m、短軸長約0.6m、深さ約0.6m)を測る。主軸方位はN-38°-Wである。小口部および側壁部の掘り込みはなく、2次調査で分類した[二段掘りA]に属する。出土遺物などはない

が、この木棺墓が一連の甕棺・木棺墓群の南端に位置していること、すぐ西側に祭祀土壙があることなどから考えて弥生時代中期前半の遺構だといえる。

3. 祭祀土壙

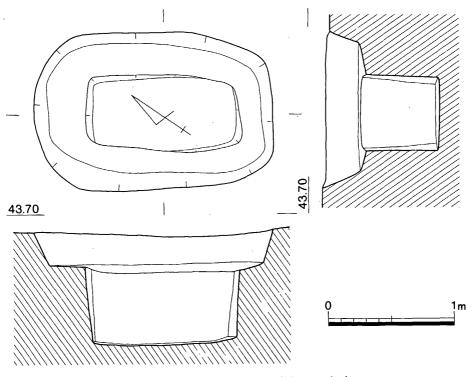
調査区の北東部、甕棺墓・木棺墓の西に3基、北から南に並んだ形で検出した。出土遺物と しては2号、3号祭祀土壙から壺形土器が出土している。

1号祭祀土壙(第116図、図版 3 - 2)

木棺墓の西側に位置し、平面形態は楕円形に近く、長軸長約3.0m、短軸長約2.0m、深さ約1.4mを測る。土壙の北端部は新しいピットによって削平を受けている。出土遺物などはない。なお、これより南には列埋葬の甕棺・木棺墓群に伴う祭祀土壙はなく、ここで墓域が終わるものと思える。

2号祭祀土壙(第117図、図版 4 - 1)

甕棺墓の南西側、1号祭祀土壙の北側に位置し、長軸長約2.4m、短軸長約2.2m、深さ約



第115図 木棺墓実測図(縮尺 1 /30)

0.8mを測り、平面形態は不整形を呈している。土壙中央部にはピット状の掘り込みがあり、 その上部から、壺形土器の口縁部が、口縁を下にした状態で出土した。

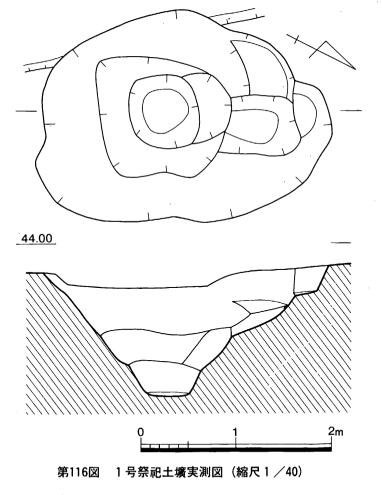
出土土器(第118図1)

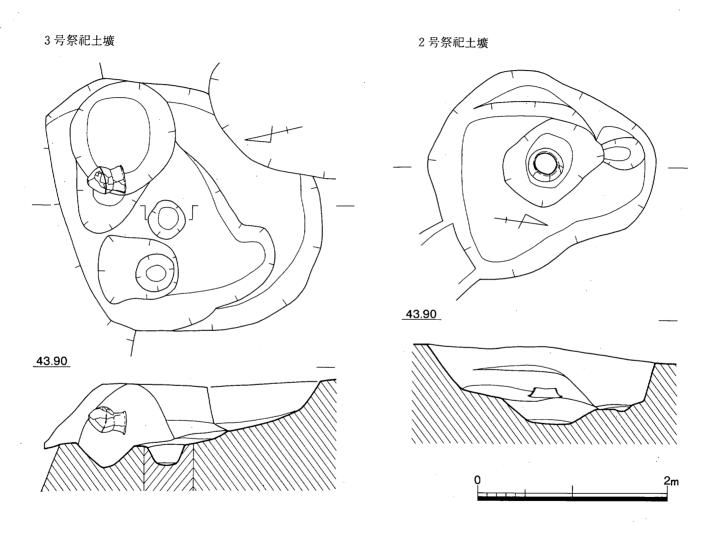
朝顔状に立ち上がる頸部に平坦な口縁部を作った壺形土器で、胴下位から底部にかけては欠損している。口縁径36.1cm、頸部径23.4cm、胴部最大径40.7cmを測る。胴部は、ハリが大きく、まるみを持つ。その最大径はやや下位にあり、最大径部とその上部にそれぞれ1条ずつ計2条の三角凸帯を貼る。内外とも摩滅が進んでいるが、口縁内外・凸帯部は横ナデ、その他は内外ともナデである。

3号祭祀土壙

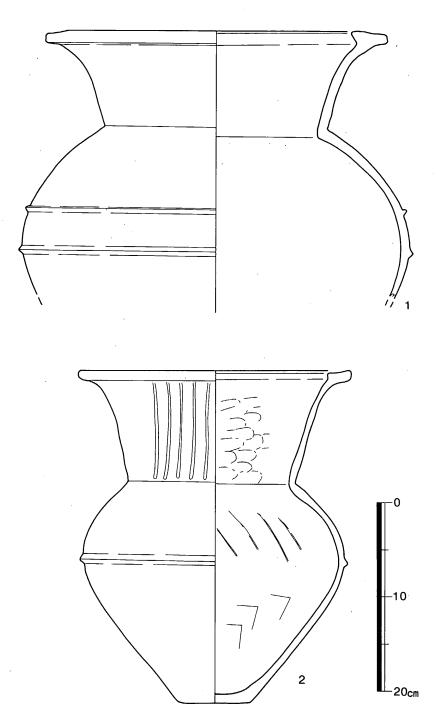
(第117図、図版 4 - 2) 2 号祭祀土壙のすぐ 北側、2 号祭祀土壙に一 部切られた形で位置し、 北端は削平されている。 平面形態は楕円形に近い と思われ、残存する部分 ではあるが、長軸長約 2.9 m、短軸長約2.4 m、 深さ約0.9 mを測る。土 壙の底部にはピットが 出た。

出土土器 (第118図 2) 器高 35.1cm、口線径 28.3cm、頸部径17.6cm、胴部最大径27.2cm、底部径7.6cmを測る。朝顔状に立ち上がる頸部に平坦な口縁部を作った壺形土器で、頸部外面には沈線による暗紋が施されている。胴部は肩が張り、その最大径は中央やや下位





第117図 2号・3号祭祀土壙実測図 (縮尺1/40)



第118図 2号・3号祭祀土壙出土土器実測図(縮尺1/4)

にあり、そこに1条の三角凸帯を貼る。底部はしまり、平底をなす。口縁内外・凸帯部は横ナ デ、頸部内面にはヘラ削りが施されている。

註

- 註1 『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告書』第1集 1970 福岡県教育委員会 『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告書』第4集 1976 福岡県教育委員会 『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告書』第5集 1977 福岡県教育委員会
- 註2 『永岡遺跡』筑紫野市文化財調査報告書第6集 1981 筑紫野市教育委員会
- 註3 『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告書』第4集 1976 福岡県教育委員会 『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告書』第5集 1977 福岡県教育委員会

表 4 永岡遺跡埋葬遺構一覧表

種別	調査	E次等	1 次	2次	3 次	計	成人棺	小児棺	計
甕	棺	墓	53	99	1	153	44 (28.8%)	109 (71.2%)	153
木	棺	墓	. 0	20	1	21	15 (71.4%)	6 (28.6%)	21
土	壙	墓	4	5	0	9	1 (11.1%)	6 (88.9%)	9
合		計	57	124	2	183	60 (32.8%)	123 (67.2%)	183

V 永岡遺跡出土の甕棺および甕棺墓

橋 口 達 也

1. はじめに

永岡遺跡は1972年、1980年、1988年の3回にわたる発掘調査が実施され、第1次調査については報告書が、第2次調査については概報が刊行されている。甕棺の編年的位置、二列埋葬という特徴的な墓地配列、乳幼児棺の多さ、保存良好な人骨と銅剣切先の嵌入したものなど傷害のある人骨等々、いくつかの興味深い問題が所在している。これらのうち埋葬法として北部九州の弥生前期末から中期前半にかけてみられる二列埋葬に関しては春成秀爾氏、田中良之・土肥直美氏らが永岡遺跡を中心的にとりあげつつ婚後居住規定の問題を論じている。

筆者も第1次、第2次の発掘調査にかかわり前述の諸問題に深い関心をいだいている。ここでは、甕棺の分類・墓地の変遷・銅剣嵌入人骨をはじめとする傷害のある人骨、すなわち弥生時代に戦闘が存在したことを示す実例について論及してみたい。

2. 甕棺の分類

1)成人棺と乳・幼児棺 ——棺の規模—

従来、甕棺の大きさについては成人棺・小児棺に 2 分されることが一般的である。また大形棺と小児棺との中間のものを中形棺とする場合もある。筆者はかつて大形棺・小形棺・小児棺の3 者に分類した。大形棺としたものは一般的には器高80~120cmほどのもので成人・若年の埋葬に使用されたこと、小児棺は甕棺専用に製作されたものではなく、そのほとんどが日常容器を転用した甕棺で器高50cm以下のもので乳・幼児の埋葬に使用されたとし、用語としては不適確であるが小児棺とする通例に従った。しかしながら、この規模の甕棺に小児(6~11歳)の埋葬例は皆無に等しくやはり乳・幼児棺とすべきと考える。小形棺としたものは器高50~80cmの間にあり大形棺と乳・幼児棺の中間にあるものであるが、弥生前期の大形甕棺発生時の甕棺、中期前半に未だ大形棺が導入されていない遠賀川流域の日常容器の大形器を甕棺に転用し、成人を埋葬したと考えられる場合をのぞき、この規模の甕棺の数が少ない中期においては小児を埋葬するものが主体であろうとした。永岡遺跡の第 2 次調査においてもこの規模の甕棺が18基ほど存在するが、大部分は人骨が存在せず不明な点が多い。 S K 56は小児が、 S K 92は5~6歳の幼児が埋葬されており、小児用もしくは幼児用の甕棺とすべきである。

弥生時代の甕棺墓地からの小児人骨の出土例はきわめて少なく、幼児の段階を生きのびたら、

多くは成人に達したものと考えられるが、小児の場合いかなる規模の甕棺に埋葬されたか若干 ふれてみよう。小郡市ハサコの宮 K 7 は K II a式の大形棺であるが 9~10歳の小児が埋葬されていた。福岡市金隈遺跡では367基の甕棺のうち 5 基に小児骨が残存し、それらは全てこの規模のすなわち小形棺に埋葬されていた。この中には10歳もしくは10~11歳位の者もあり、小児の多くは小形棺に埋葬されるが、一部は大形棺を用いる場合もあったことがわかる。また、この規模の甕棺に幼児が埋葬されている場合も存在することは S K 92例が示している。先述したように弥生時代の死亡年齢は乳・幼児の段階で 1 つのピークを示し、その時期を過ぎると小児・若年の段階ではきわめて少なくほとんどが成人に達している。したがって永岡遺跡の18基の小形棺もそのほとんどは幼児用の甕棺と把握してよかろう。

以上のことから弥生時代にはすでに成人と認められたと考えられる若年の者も含めて成人棺は153基中44基で28.8%、乳・幼児・小児棺は153基中109基で71.2%であり、弥生時代における平均的な乳・幼児の死亡率は30~50%であるのに比してきわめて高い比率であることがわかる。後に詳述するが、永岡遺跡では傷害のある人骨が多く、その点とも関連するものかもしれない。

2) 甕棺の編年

筆者はすでに甕棺の型式を $KI \sim KV$ 期に大別し、それぞれをKIからKIV期については a \sim c \sim c

永岡遺跡は第1次、第2次、第3次調査において153基の甕棺が出土しており、KⅡa式~KⅢa式にわたっている。以下順を追ってみていこう。

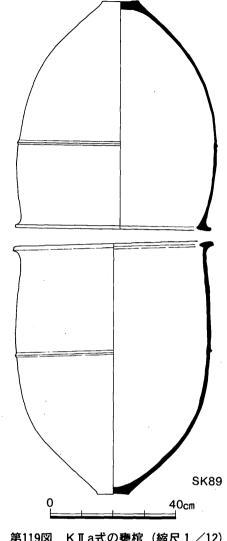
a. K I a 式の甕棺 (第119図)

K Ⅱ a 式の大形甕棺としては S K 89一基のみである。口縁は内に低く傾斜し、外側への張り出しは小さい。上甕は逆 L 字状を呈し、下甕は口縁上端に粘土帯を貼付するものである。上・下ともに口縁下でややすぼまり、胴部最大径は K Ⅰ 期の甕棺の肩の段・沈線の位置にあたる胴部上位にあり、その部分に細いシャープな三角凸帯を貼付している。器面調整は内外ともにナデ仕上げである。

KⅡa式併行期の甕棺(第120図) としては、 図示したSK3、SK28・SK88などのようにロ 縁は幅が狭く未発達な逆L字状をなし、内に低く 傾斜し、胴部は上位で大きく張り、底部 は細くひきしまり、かなりの上底を呈するものが 典型的といえるが、SK6下甕の口縁にみられる ような筑後の三角口縁と折衷したような形態のも のも存在する。上甕として使用されている壺は肩 部以上を打ち欠いたものが多く、完形のものがな 61

b. K II b 式の甕棺 (第121図)

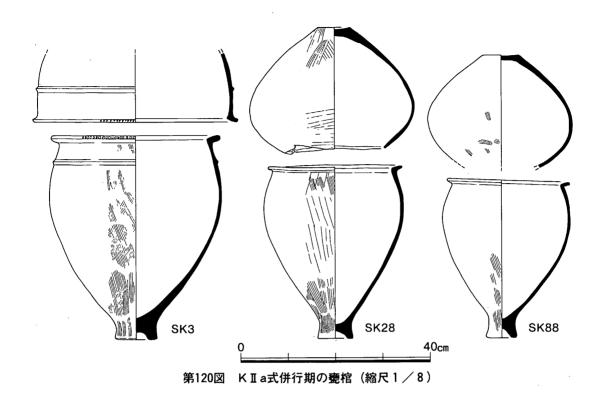
第121図に示したSK15が典型的なものである。 口縁はほぼ平坦となり、外側には未だほとんど発 達しないが、内側に大きく張り出す傾向が生じる。 口縁下はややすぼまりKⅡa式に近いが、胴部の ほぼ中位に細いシャープな三角凸帯、稀に見かけ 2条造り1条の凸帯を貼付する。凸帯の位置もK Ⅱa式よりは下位、KⅡc式よりは上位にあり両 者と区別できる。調整法は内外ともにハケ目の後 ナデて仕上げるが、一部底部付近にハケ目が残存 するものがある。典型的なものは上述のとおりで あるが、SK40上・下甕(第121図)のように口 縁は未だ発達せず、内に低く傾斜し、口縁下のす ぼまり方もきわめてK Ⅱ a 式に近いものもあるが、 凸帯の位置が胴部中位にあり K II b 式としては古 い形態を示すもの。 S K 99上・下甕 (第121図)



第119図 KII a式の甕棺(縮尺 1 /12)

のように口縁は外に低く傾斜し、口縁下のすぼまりもなく次のK Ic 式に近い形態のものがあ り、同一型式内での漸次的形態変遷がとらえられる。古い形態のものはSK19、特にその上甕、 新しい形態のものとしてはSK90上甕、SK94上甕などがあげられる。

KID式併行期の甕棺(第122図) としてはSK8上・下甕、SK25下甕に用いられた甕に 示されるように、口縁はKⅡa式併行期のものに比し、やや発達した逆L字状を呈し、内に低 く傾斜する。胴部の張りはやや小さくなり、底部のひきしまり具合、上底の度合も弱い。SK 25上甕もしくはSK67下甕などに用いられた壺は、胴部最大径はやや上位にあり、口縁上端に

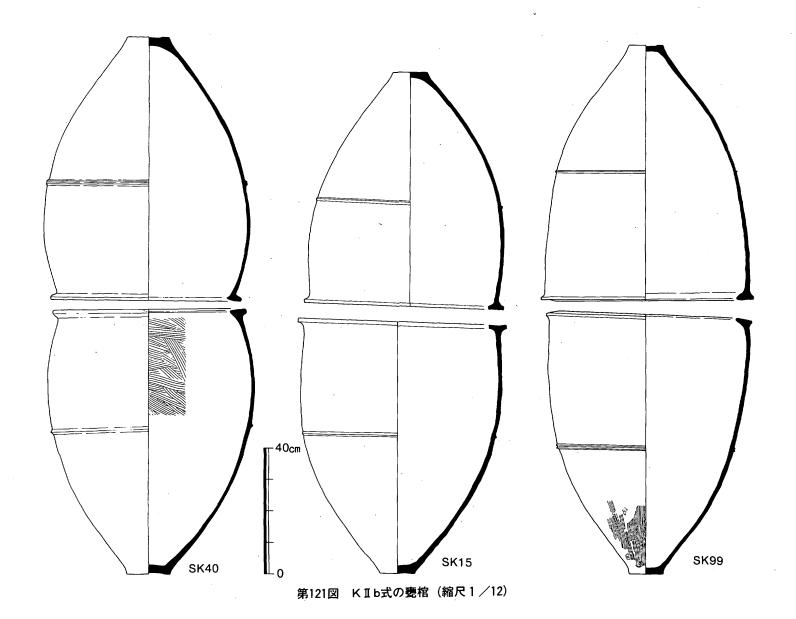


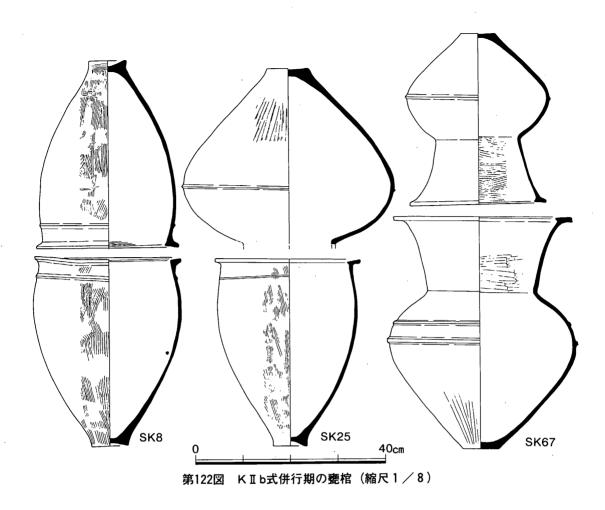
粘土帯を貼付した鋤先を呈する口縁はわずかに内に低く傾斜する傾向が認められる。大形棺同様、同一型式内における古い形態・新しい形態のものが存在する。

c. KIC式の甕棺(第123図)

□縁は内側に大きく張り出し、外側への発達はまだなく、外に低く傾斜する。典型的なものは□縁下のすぼまりはなく、胴部上半は外に開き気味である。胴部のやや下位に細い三角凸帯 1条もしくは2条を貼付する。調整はハケ目の後ナデて仕上げる。この型式でも□縁下がややすぼまりがちの古い形態を示すもの、また、□縁外側もやや発達し、□縁下がややすぼまり□縁下に凸帯を貼付すれば III a 式としてもよいほど III a 式に近い形態を示す新しい要素のものもある。永岡遺跡第2次調査出土のこの型式の甕棺 S K 21、 S K 78などは古い要素を残しているといえよう。

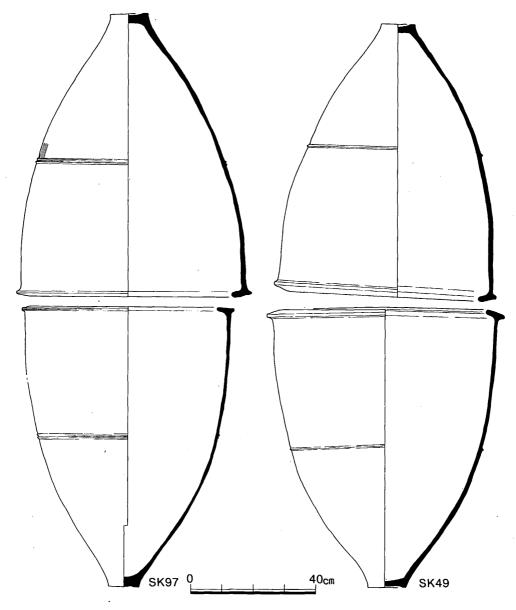
KIC式併行期の甕棺(第124図) としては図示した SK35上・下、SK50下、SK64下甕に用いられた甕に示されるように口縁はわずかに内に低く傾斜する逆 L字状を呈し、胴部の張りはない。底部は先行する K \blacksquare b式併行期のものと大差はない。 SK64上甕に用いられた壺はいずれかというと K \blacksquare b式併行期の特徴を示しており、一時期古いものが残ったものと解されよう。



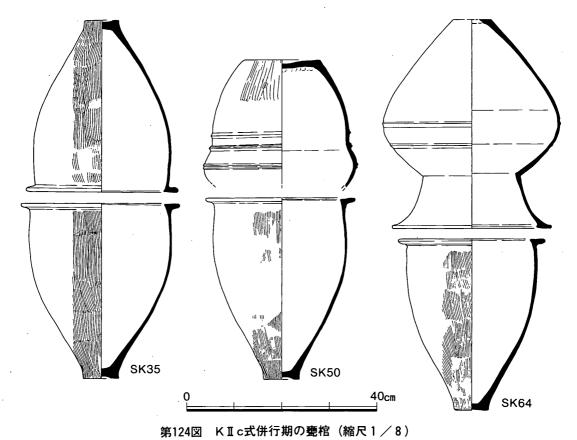


d. KⅢa式の甕棺 (第125図)

第 2 次調査においてはこの型式の甕棺はなく、第 1 次調査出土の K 10、 K 26がこの型式の甕棺としてあげられる。 K \blacksquare 期と K \blacksquare 期を大別する主要な要素の 1 つは口縁下に凸帯を貼付することであるが、 K 10 は K \blacksquare c 式の基本的形態を踏襲しながら口縁下に 2 条の凸帯を貼付している。口縁の外側への張り出しも大きい。 K 26下甕はいわゆる T 字形を呈し、外に低く傾斜し、口縁下がややすぼまり口縁下に凸帯を貼付するものである。この型式から胴部凸帯がコ字形を呈するものが出現するが、 K 10、 K 26ともに三角凸帯で、この型式内では古い要素をもつものといえる。この型式の甕棺は大型化したものが多く、器高100cm をこえるものが多くなる。これにつれて上甕に鉢・壺、または甕の胴上半を打ち欠いたものなどが使用される。上甕に使用される鉢の口縁は下甕とほぼ同様の形態を示し、口縁下に $1 \sim 2$ 条の三角凸帯を貼付するのが一般的であるが、 K 26の上甕には口縁下凸帯がない。



第123図 KIIc式の甕棺(縮尺 1 / 12)



3. 墓地の変遷

1) 時代的変遷と墓地の造営主体

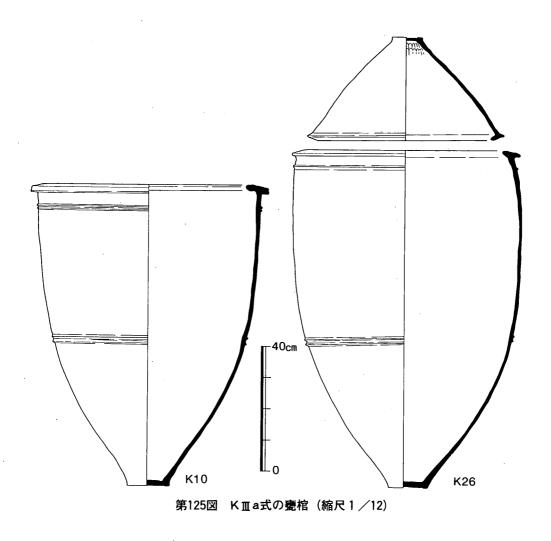
永岡遺跡出土甕棺を型式ごとに色分けした配置図を付図3に示した。K Ⅱ a 式に属する成人棺 S K 89および K Ⅱ a 式併行期の乳・幼児棺はすべてが墓域の北端に集中している。

K II b 式の成人棺は15基を数えるが、墓域の北端近くから第 2 次調査分すなわち墓域の北半に大半があり、第 1 次、第 3 次調査分すなわち墓域の南半に 3 基ほど分布する。 K II b 式併行期の乳・幼児棺は遺跡の北端から墓域の北半に集中しており、 1 基のみが墓域南端近くにある。

K II c 式の甕棺は墓域の北半にも散在して分布するが、大半は墓域の南半に集中しているといえる。K II c 式併行期の乳・幼児棺も成人棺と同様の分布を示す。

K Ⅲ c 式の成人棺は墓域の南半に2基が存在する。

墓域としては若干広がる可能性もあるが、ほぼ完掘に近い状態と考える。墓地としては、木



棺墓をも合わせ考えると、通常木棺墓は甕棺墓に先行することが一般的であり、永岡遺跡の北半部に分布する木棺墓は $K \parallel$ a 式もしくは $K \parallel$ b 式に併行するものと考えられる。したがって、まず木棺墓だけで墓地が形成され始め、次に木棺墓に $K \parallel$ a 式の甕棺が加わり、次に $K \parallel$ b 式の甕棺を主体とし木棺墓が若干残り、さらにはほぼ $K \parallel$ c 式の甕棺で構成され、 $K \parallel$ a 式の甕棺で構成され、 $K \parallel$ a 式の甕棺を主体とし木棺墓が若干残り、さらにはほぼ $K \parallel$ c 式の甕棺で構成され、 $K \parallel$ a 式の甕棺へと継続し、全体的には北側から南側へと墓地は形成されている。しかしながら墓域北端近くの春成氏のグループ分けした埋葬小群第 1 群にも $K \parallel$ c 式の成人棺があり、 $K \parallel$ a 式 $\to K \parallel$ b 式 $\to K \parallel$ C 式と推移したかにみえ、また、春成氏の埋葬小群第 2 群、第 3 群には $K \parallel$ b 式の古い形態を示す S K 40、S K 19 などがあり、この部分には木棺も存在し、これを考慮すればここでも $K \parallel$ a 式 $\to K \parallel$ b 式 $\to K \parallel$ c 式という順位的な変遷があり、春成氏のグルーピングもまた有効なものかと考えられる。ところが南半部においては $K \parallel$ b 式の甕棺は若干存在するが、

K Ⅱ a 式の甕棺もしくは木棺墓は存在せず、春成氏のいう埋葬小群としての第6群、第7群が 北半部と同時存在したとは認め難く、やはり全体的には北から南へと時間的に推移していった と把握すべきであろう。

木棺墓は乳・幼児棺との切合関係、祭祀土壙出土の土器から、中期初頭すなわち K II a 式甕棺と併行する時期に墓地造営が開始され、甕棺墓は K III a 式の古い形態の段階で終わっている。甕棺の一型式の期間は甕棺に副葬される前漢鏡、後漢鏡などの関係から約30年ほどと考えており、永岡遺跡における墓地造営の期間はおよそ100年前後のものと考える。永岡遺跡においては木棺墓20基、土壙墓12基、甕棺墓153基が発掘されており、成人用甕棺は44基、木棺墓・土壙墓で成人用と考えられるものは25基あり、約70人ほどの大人(若年以上)がほぼ100年間に埋葬されたものといえる。弥生時代には成人に達してからの死亡年齢は40歳前後が最も多い。12~13歳頃すなわち数え年15歳頃に成人の仲間入りをした場合、20数年、20歳頃から代変わりするとして20年前後、いずれにしても甕棺の1型式の期間よりも短い期間で世代交替が行われたといえる。したがって100年の間には4代~5代にわたるものと考えられる。この間に未掘部分(第1次調査区と第2次調査区の間、すでに道路で破壊されていた部分)を考慮して70数人が埋葬されたとして、1世代の大人は15~20人ほどと相定される。K II a 式の成人用甕棺は1基、K II b 式の成人用甕棺は1基、K II b 式の成人用甕棺は2基となっており、木棺墓と土壙墓を合せ考えれば K II a 式で成人棺15基前後、K II b 式で成人棺20基前後とみなされ、時期を追って若干人口が増加した傾向がみてとれる。

弥生時代には住居数棟が単位集団を構成するのが一般的であって、世帯共同体として認識されている。単位集団すなわち世帯共同体内で、1棟の住居にだれそれが何人住んでいたかという点には具体的に検証するには不明な点が多いが、弥生前期末頃から各住居に貯蔵穴が附属したり、ある住居跡は規模が大きく複数の貯蔵穴を伴い屋内貯蔵穴を持つ例があるなど、格差も生じている。これらのことから考えると、世帯共同体内で各個の住居が自立しつつあるといえる。したがって各住居には自立しつつある単位といえば大人の男女、つまり夫婦が生活し、その子供が同居するというのが通常の形態と考えられる。このような居住形態の場合、年長の子供が成人して婚姻関係を結んだ場合には、当時の死亡年齢の平均的年齢からいえば、親もまだおそい子供を出産・育児している年齢であり、婚姻関係を結んだ子供は別個の住居に独立していったものと考えられる。したがって1棟の住居には夫婦とその子供が居住したと考えるのが最も妥当である。以上のことからいえば、1世代すなわち同時に生存した大人が15~20人ほどとすれば、同時存在の住居は7~10棟ほどが考えられ、少なくて1個多くて2個の世帯共同体が100年前後にわたって造営した墓地ということができよう。丘陵地帯へと聚落が進出する場合は地形的制約などもあって、1世帯共同体が単位となって分村し、1聚落を形成する例もいくらか存在するが、大きな丘陵もしくは低地においては世帯共同体の複数のまとまりが世帯共

同体群として聚落を構成するのが一般的なことからいえば、永岡遺跡の場合は2個の世帯共同体による100年前後に及ぶ墓地とみなすのが妥当と思われる。

2) 二列埋葬の意味するところ

北部九州の弥生前期末頃から中期前半頃にかけて、木棺墓・甕棺墓が列状をなして埋葬される墓地が知られており、その典型的なものは二列に並び中間には墓道状の空地が、両側には祭祀土壙が伴い、二列埋葬として注目されてきた。永岡遺跡はほぼ完掘されたことと人骨の保存状態が良好なこともあって、二列埋葬を対象とした研究の好材料としてとりあげられてきた主要な遺跡である。筆者自身はこのような課題は不得手な分野ではあるが、報告書刊行の際さけて通れないと考えるので、あえてこの問題に言及することとした。

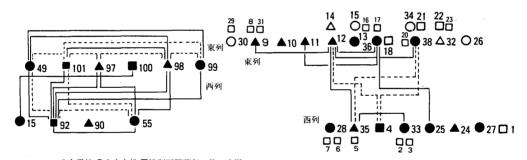
春成秀爾氏は福岡県甘木市栗山遺跡、永岡遺跡、福岡県春日市門田遺跡の二列埋葬墓地をと りあげ、「二列は時間的に併行して形成されており」、「被葬者群を2分する原理が背後にある」。 その2分原理は性・年齢・階層的なものとの一致も認められないことから、「それは親族組織 上の2分原理をおいて他にはない」が、「しかしそれを双分制社会というには北九州の弥生中 期社会には、2つの半族が存在するそれぞれの標章を象徴する形跡が認められない」とし、 「1集団内の構成員間の血縁関係の疎密に基づく可能性すなわちー列に墓地を有する集団の出 身者を、もう一列に他集団からの婚入者を埋葬している」と推定した。さらに「二列埋葬墓地 の中にはそれぞれ埋葬小群がある」とし、永岡遺跡の場合は6~7群の埋葬小群に分けた。そ して「この小群内では男女が排他的ではなく、同数とはいえないまでも、ほぼ近い数字を示し、 一方の列に男性が多い時は、もう一方の列には女性が多いというふうに相補する傾向がある」 とした。また「甕棺の細分型式にして2~3型式の間に永岡の1埋葬小群は10人前後からなる が他は6~8人であり、この埋葬小群は居住集団を構成する世帯と考える」とし、二列埋葬の 「それぞれの列には男女ともに含まれていることは、婚入・婚出ともに男女ともに存在し、す なわちこの社会が一種の選択居住婚であった」ことを推定し「弥生中期前葉の北九州における 選択居住婚は、夫方居住婚の抬頭による従来の妻方居住婚の崩壊渦稈に位置づけることが可 能」とした。

田中良之・土肥直美氏は春成氏の前述の提起を受け、栗山遺跡・永岡遺跡の出土人骨の歯冠計測値と頭蓋非計測的小変異を用いたいくつかの形質人類学的方法によって、春成氏の論説を検証した。田中・土肥氏によると、二列ともに血縁者とされるペアが存在し、列間においても認められることから、春成氏が推定した一列に墓地を有する集団の出身者を、もう一列に他集団からの婚入者をという、すなわち列が出身を表示するという考え方には否定的な見解を示し、婚後居住規定については、男女間に血縁者と推定されるペアが存在すること、また、頭蓋非計測的小変異を用いた累積類似度法が比較的高い値を示すことから選択居住婚もしくは要方に傾

いた選択居住婚とした。また、甲元眞之氏による山口県豊浦郡豊浦町中ノ浜遺跡に頭位を異にする2支群のうち一方の支群のみに小児墓が伴うことから、その支群にはその村の出身者が、他の一方には婚入者が葬られたとする分析を参考にして、永岡遺跡の小児棺を伴う成人棺と伴わない成人棺とに分け前者を集落の出身者、後者を婚入者というモデルを設定し、歯冠計測値を用いた血縁者推定法および頭蓋非計測的小変異を用いた累積類似度の結果から、小児棺を伴う成人棺被葬者がその村に出自をもつ成員であった可能性が強いとした。

いわゆる二列埋葬の列が出自を表示しているものでないことは、一列で列状をなす墓地が存在すること、また、三列をなすものもあることから確実といえる。同時に列状埋葬をなす同一遺跡内の同時期の墓地に、佐賀県吉野ケ里遺跡の墳丘墓もしくは筑紫野市隈・西小田遺跡の方形状の墓域(おそらく本来は墳丘墓であったものと考えられる)を形成し細形銅剣などを副葬するものなどがあり、列状埋葬をなす共同体の一般的成員の共同墓地と、墳丘などをもつ首長層の墳墓との間に社会的地位・階層差を示す厳然たる格差が存在することをまずみてとらねばならない。しかしながら、共同体の一般成員が何故列状をなす埋葬法をとるのかはまた別の大きな問題であり、春成氏、田中・土肥氏などの問題提起はこの課題に関する研究の1つの方法を示したものとして貴重な成果といえる。

したがってここで田中・土肥氏の成果に拠り永岡遺跡の血縁関係をみてみよう。



▲成人男性 ●成人女性 ■性別不明著年 ■ 幼~小児 Fig 2 歯冠計測値を用いた血縁者推定法による永岡 遺跡被葬者の血縁関係(2次調査分)

△成人男性 ○成人女性 □性別不明成人・若年 □幼~小児 (ベタは分析に使用した個体)

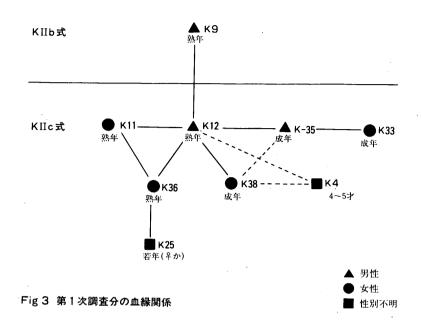
Fig 1 歯冠計測値を用いた血縁者推定法による氷岡 遺跡被葬者の血縁関係(1次調査分)

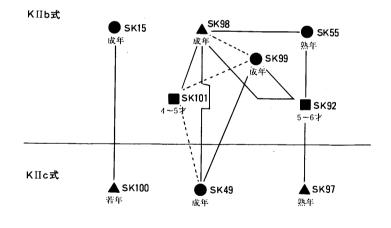
田中・土肥氏は Fig 1 、 2 のように東西列別および南北の配置を示す形で図示しているが、 S K 98、 S K 99は南北の配置が逆転しており、 S K 98の配置は S K 99よりも南側、春成氏の埋葬小群第 3 群に属している。したがって春成氏の第 1 群から第 3 群、第 5 群、第 6 群で複数の 埋葬小群に入り交って血縁関係が存在することとなり、永岡遺跡においてはグループ分けする

よりもやはり全体的に は北から南へと墓地が 形成されたと把握する のが妥当である。

いま田中・土肥氏が 列別、南北の配置で図 示したものを甕棺の型 式に合せて並びかえる と、Fig 3 、4 のよう になる。

これからみると K [[b式のK9は熟年の男 性、K II c 式の K 12は 熟年男性であり、年代 幅・被葬者の年齢を考 慮すると父と息子もし くは叔父と甥という関 係、K11 (孰年女性)、 K12 (熟年男性)、K 33 (成年女性)、K 35 (成年男性)、K 36 (熟年女性)、K 38 (成年女性) は兄弟姉 妹もしくはK9被葬者 の甥・姪として従兄弟 関係にあるものと考え られ、K II c 式の K 36 (熟年女性) と K 25 (若年・性別不明もし くは女性) との関係は 母・娘もしくは叔母・ 姪の関係、KⅡc式の K38 (成年女性) と K





男性

4 (性別不明・ $4\sim5$ 歳の幼児) との関係はK4がK12 (熟年男性) とも関係があることからいえば母子、もしくは叔母という関係を推定できる。K38とK33の被葬者は姉妹もしくは従姉妹という関係が考えられることから、K4の幼児は血縁者(叔母の可能性が強い)であるK33 に附随する形で埋葬されたとも推定できよう。

第2次調査分においては K II b 式の S K 15 (成年女性) と K II c 式の S K 100 (若年男性) は母と息子もしくは叔母・甥の関係、 K II b 式の S K 55 (熟年女性) と K II c 式の S K 97 (熟年男性) は母と息子もしくは叔母と甥、 K II b 式の S K 55と S K 92 (性別不明、5~6歳の幼児) は母と子もしくは S K 55 は S K 92の叔母、 S K 92と K II c 式の S K 97 は兄弟もしくは従兄弟の関係が推定される。 S K 92 はさらに K II b 式の S K 98 (成年男性)、 S K 99 (成年女性) とも強い関係にあり父・母もしくは叔父・叔母の関係が推定できる。 K II b 式の S K 98 (成年男性)、 S K 99 (成年女性) は K II c 式の S K 49 (成年女性) との間に強い関係があり父・母・娘もしくは叔父・叔母・姪の関係が推定される。また S K 98と K II b 式併行期の S K 101 (性別不明、4~5歳の幼児) は強い関係にあり、 S K 99と S K 101 は比較的強い関係にあり、 S K 101は K II c 式の S K 49と比較的強い関係にあり、 S K 98、 S K 99と S K 101は父・母・子もしくは叔父・叔母・甥または姪、 S K 101と S K 49は兄弟または従兄弟という関係が推定できる。 K II b 式の S K 55 (熟年女性) と S K 98 (成年男性) との間にも強い関係があり、 S K 99と S K 98とのあいだには比較的強い関係が存在する。

以上のように墓域の広範囲にわたって血縁者の可能性が高い関係が存在し、埋葬小群が認められないとすると、かなり血縁関係の強い親族集団を主体とした墓地であると考えられ、先にみた2個の世帯共同体からなる聚落の100年前後にわたる墓地とする推定は妥当なものと考えられる。

栗山遺跡の場合は春成氏のグループ分けしたA2群、A3群の間には明らかに空閑地があり グループ分けは可能と思われるが、田中・土肥氏によるとこのA1・A2・A3群の間で血縁 関係の可能性の高い被葬者が存在し、永岡遺跡同様血縁関係の強い親族集団を主体とした墓地 であるといえる。栗山遺跡ではグループ分けはできるようではあるが発掘面積が狭く墓域の全 容を把握するには若干無理な点もあるように思われる。

以上は田中・土肥氏の形質人類学的方法を用いた血縁関係推定法に拠っており、考古学者には検証し得ない側面もあり、この点に関しては、形質人類学者との共同研究による今後の検証がまたれるところである。春成氏は弥生中期前葉における北九州における選択居住婚は夫方居住婚の抬頭による従来の妻方居住婚の崩壊過程に位置付けられるとし、田中・土肥氏は選択居住婚もしくは妻方に傾いた選択居住婚と位置付けているが、筆者は前期末には首長権が成立し、中期前葉の福岡市金限146号甕棺に埋葬された6歳前の小児にゴホウラ製貝輪が伴ったことから世襲的要素の出現を推定した。このことからいえば細形銅剣・矛・戈、多鈕細文鏡などを副

葬し、ゴホウラ製貝輪を着装した被葬者が出現する、すなわち首長層が出現した前期末の段階 で基本的には母系制から父系制へと移行しているものと考えている。以上の点をも含めて今後 の課題としたい。

さて二列埋葬の列が出自を表示したものでないとすれば、他にどのような意味をもつのであろうか。1つは先にみたように首長層の墳墓ではなく、一般成員の共同墓地であることがあげられる。前期末にはすでに首長層は成立しており、この点からいっても首長層と一般成員の間に埋葬形態の差が存在することは当然といえる。また、列状埋葬の消滅する中期後半には三雲南小路、須玖岡本、立岩堀田などの副葬品を多量にもつ被葬者が出現している。前期末に成立した農業共同体は各水系ごとの地縁的結合の共同体であって、その後熾烈な衝突・抗争をくりかえしながら、さらに広域の地域的まとまりへと統合していく過程が中期前半から中期後半への時期であり、中期後半頃には末盧国、伊都国、奴国などで示される領域は基本的には成立しており、これらの盟主的首長が三雲南小路・須玖岡本などの甕棺内被葬者であることは明らかである。列状埋葬が前期末から中期前半に存在し、中期後半には消滅していることと時間的に符合していることからもこの点は補強される。

前期末~中期前半は土地争い・水争いによる聚落間の戦闘が最も激しく行われた時期であり、また、墓地の占地にも永岡遺跡では埋葬小群というグループ分けは否定したが、広域に調査された吉野ケ里遺跡、隈・西小田遺跡などでは全体的にみれば首長および共同体からの一定の規制が働いているとはみてとれるものの、それでもなお中期後半以降に比較してまず土地利用の面において大らかさが存在する。つまり、まだ利用できる土地が広大であったことから列状をなして面的に拡大できたものと考えられる。中期後半以降の土地利用には規制が強化され、さらに墓域が限定されることによって甕棺が密集して埋葬され、限定された墓域内では甕棺だと棺同士が切り合うわけにいかず、次第に土壙墓などの他の埋葬法を求めざるを得ず、甕棺葬終焉の方向へと進んだものと考えられる。

永岡遺跡においては埋葬小群は存在しないものと考えられるが、列状をなす埋葬遺跡を大局的にみれば世帯共同体を単位とする墓域の規制は存在し、墓域にはまた大小があり、墓地を構成した聚落の大小をも表している。また、最も大きな墓域は首長層が居住した拠点聚落の造営したものと考えられるが、首長層はその共同墓地には埋葬されず、突出して別区画の墓域に墳丘墓等を営んだものと考えられる。前期末に成立した農業共同体は水系を単位として新たにつくりあげられた地縁的結合の共同体であるが、それを構成する各聚落は永岡遺跡、栗山遺跡でみられたように血縁的紐帯で強く結ばれた親族集団からなっていた。

4. 弥生時代における戦闘を示す好資料

---銅剣嵌入人骨・外傷例など---

第1次調査において出土した K 10人骨の前額部から右眼窩上壁に達する大きな傷痕があり、しかも治癒機転の営まれた形跡もあり、右橈骨下端骨折の痕跡も認められた。他の人骨にも骨折・下顎関節異常などいくらかの痕跡が認められ、発掘・整理の時点からきわめて強い関心を抱いていた。幸いにも第2次調査にも関係するところとなり、銅剣切先の嵌入した人骨などの発掘に第1次調査に引き続き立ち会うことができた。筆者は弥生前期後半から中期前半に流行した副葬の一形態と考えられていた棺内出土の石剣・銅剣などの切先例を、福岡県嘉穂郡穂波町スダレK3人骨の第2胸椎右側椎弓板に嵌入した石剣を1975年に調査して以来、これらが副葬品ではなく、人を殺傷に及び刺突時のショックによって折損し人体内に残ったものと認識し類例の収集に努めてきた。スダレK3人骨例に加え、永岡遺跡第2次調査では銅剣切先嵌入例2例が出土し、銅剣が実用の武器であったことを証明することとなった。第1次・第2次調査出土人骨の銅剣切先嵌入例・外傷例を取りあげ、弥生中期前半における戦闘を示す実例について若干説明を加えたい。各々の形質人類学的所見については中橋孝博氏が詳細な観察を行っているので参照されたい。

K10はKⅢa式の成人棺で被葬者は熟年の男性である。発掘時の所見では前額部から右眼窩上壁に達するかなり大きな傷があり、眼窩上壁には一部骨の癒合が認められ、さらに右橈骨下端骨折の痕跡もあった。前額部の傷は細形銅剣・矛・戈などによる斬傷痕・刺突痕ではなく、もう少し刃部に厚みのある利器による傷痕という感じを受けた。鈍器でないことは明らかであるが、いまこの傷痕が如何なる利器によるものかにわかには決め難い。

K32はK II c式の成人棺で被葬者は熟年の男性である。この人骨の左橈骨下端に骨折痕が認められた。

K9はK II b式の成人棺で被葬者は熟年の男性である。この人骨の右第2中手骨に強度の変形治癒骨折例が認められた。

S K 95は K Ⅱ b 式の成人棺で被葬者は熟年の男性である。この人骨の右腸骨稜・上前腸骨突起のほぼ直下に青銅利器切先が右外側やや下方より斜め上方へと刺突された状態で嵌入していた。発掘時の所見では残存長14mm、幅13mm、厚さ2.5~3 mmを測り、この青銅利器が細形銅剣の切先であると考えられた。中橋氏はこの銅剣切先の周囲に少し骨増殖が認められるとしており、これが致命傷ではなかったことを示している。また、この人骨は保存状態はあまり良くはなかったが、頭蓋の部分が当初からなく、発掘時にも首を切られた可能性を考えたが、その時点(1980年)では類例がなく慎重にならざるを得なかった。今日では福岡県小郡市狐塚遺跡で後期初頭の甕棺内人骨に確実に首を切られた傷痕があり、永岡遺跡と同時代の筑紫野市隈・西

小田遺跡、佐賀県吉野ケ里遺跡では頭のない人骨および隈・西小田遺跡では頭骨だけを小形の 甕棺つまり通常の乳・幼児棺に埋葬した例があり、SK95人骨例も埋葬時点から首のなかった 可能性が強い。

S K 100は K Ⅲ c 式の成人棺で被葬者は若年の男性である。この人骨の左仙腸関節部に細形銅剣が後方から刺突され、仙骨左外側部に切込み、ほぼ仙腸関節の後端の位置に丁度関節を跨ぐ形で 6 mmほど先端が突き出ている。残存長は53mmを測る。人骨を取り上げると左大腿骨頭部付近から磨製石剣の切先が出土した。磨製石剣は凝灰岩質で残存長は135mm、幅33mm、厚さ10mmを測る。棺内出土の切先例の中で15mm内外のものと、5 cm前後以内のものとが存在するが、刺突の際骨に突き刺さったものはショックで短く折れ、腹部貫通など骨にあたらなかったものは15cm内外で折れたものと考えている。したがって、この石剣例はおそらく腹部に刺突されたものと考えられる。中橋氏の観察では骨が保存不良なため治癒機転の有無は確認することは困難だとされるが、おそらくは銅剣・石剣を同時に刺突され即死に近いものだったと考えられる。

S M11は木棺墓であるが、第 2 次調査区の中央部のやや南側に寄った位置にある。この木棺墓には人骨は残存していないが石剣の切先が出土した。石剣は粘板岩質のもので先端がつぶれており、残存長132mm、幅37mm、厚さ8~9 mmを測る。棺内出土の石剣切先および石鏃などで先端のつぶれた例は多く、この石剣も人体に刺突された際につぶれたものと考えられる。

K10・SK95・SK100の被葬者の傷および銅剣切先嵌入例は弥生時代に戦闘の行われたことを示す確実な例といえる。SM11の切先例も人体に刺突されたことは明らかであろう。また宝器・非実用品と考えられることの多かった細形銅剣・矛・戈が実用の武器であった確実な証拠を提供したものであり、重要な成果であったといえる。

橈骨下端骨折・中手骨骨折が戦闘における傷か否かについては決め手はないが、可能性も含めて説明を加えた。

これらの棺内から剣切先などとともに完形品の武器が同時に出土する例がいくらか知られている。これらについては戦闘において果敢に闘い、敵から剣などで刺されて死に至った被葬者の栄誉をたたえてその武器が副葬されたものと考えられる。また切先を欠失した銅剣・石剣などを副葬した甕棺・木棺などもあるが、この場合はこの被葬者は加害者であると同時に被害者でもあったと考えられる。つまり、戦闘によって切先を相手(被害者)の体内に刺突した加害者の側も、同時に瀕死の重症を負って死に至り、その栄誉をたたえられてその武器が副葬されたものであろうと考えている。したがって将来、切先と基部が合致するものが出土し、いずれの聚落間で戦闘が行われたか明らかになる場合があると考えている。加害者が無傷もしくは軽傷の場合は切先を欠いた銅剣・石剣などは当然のこととして研ぎ直されるものと考えられる。以上の観点から細形銅剣・矛・戈などをみなおすと、研ぎが加えられ先端が菱形を呈するもの、短くなったり、身幅が狭くなったりしたものがかなり多い。この点については機会を改めて論

じてみたいとは思っている。

弥生時代前期後半から中期前半を中心とした甕棺・木棺墓などからの切先出土例とその背景 および土地争い・水争いを通じて首長権が確立されていく過程は別稿で論じているのでここで は割愛したい。参照していただければ幸いである。

5. おわりに

永岡遺跡の甕棺および甕棺墓について所見を述べよとの依頼を筑紫野市教育委員会から受け、 気楽に引き受けはしたものの甕棺の分類のみならず、多岐の問題にわたってしまった。という のは、すでに二列埋葬などについては重要な問題提起がなされており、不得手な分野ではある がさけて通るわけにはいかなかった。この問題については隈・西小田遺跡、吉野ケ里遺跡など 広範囲に調査された遺跡の調査報告書が刊行されればさらに明確になる部分があると思われる。 これを契機として筆者もそれらの報告書が刊行されたら再度この問題に挑戦してみたいという 気持ちが湧いてきた。

以上をまとめるにあたり、筑紫野市教育委員会の草場啓一氏には隈・西小田遺跡について多くの御教示を受け、また若干の討論を行うなどお世話になった。記して感謝の意を表したい。

註

- 註1. 福岡県教育委員会『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第4集 1976 福岡県教育委員会『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第5集 1977
- 註 2. 筑紫野市教育委員会『永岡遺跡』筑紫野市文化財調査報告書第 6 集 1981
- 註3. 春成秀爾『弥生時代九州の居住規定』国立歴史民族博物館研究報告第3集 1984
- 註 4. 田中良之・土肥直美「二列埋葬墓の婚後居住規定」永井昌文教授退官記念論文集『日本民族・文化 の生成』 1988
- 註 5. 福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』 X X V 1978
- 註 6. 福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』 ХХХІ-中巻-1979
- 註7. 福岡市教育委員会『史跡金隈遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第123集
- 註8. 橋口達也「甕棺の編年的研究」福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』 X X X I - 中巻-1979
- 註 9. 春成秀爾「前掲書」 1984
- 註10. 橋口達也「前掲書」 1979
- 註11. 橋口達也「聚落立地の変遷と土地開発」岡崎敬先生退官記念論文集『東アジアの考古と歴史』中 1987
- 註12. 春成秀爾「前掲書」 1984
- 註13. 田中良之・土肥直美「前掲書」 1988

註14. 橋口達也「前掲書」 1987

橋口達也『「クニ」の成立と青銅器の生産・流通』季刊考古学27 1989

橋口達也・折尾学「小児骨に伴ったゴホウラ製貝輪ー福岡市金隈出土146号甕棺の調査」九州考古 学47 1973

註15. 橋口達也「前掲書」 1987

〃 「前掲書」 1989

註16. 永井昌文「出土人骨について」福岡県教育委員会『筑紫野市所在永岡甕棺遺跡』(本文編)福岡南 バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第5集 1977

註17. 穂波町教育委員会『スダレ遺跡』穂波町文化財調査報告書 第1集 1976

註18. 小郡市教育委員会『横隈狐塚遺跡』 Ⅱ-下巻 1985

註19. 橋口達也「聚落立地の変遷と土地開発」『東アジアの考古と歴史』中 1987 橋口達也『「クニ」の成立と青銅器の生産・流通』季刊考古学27 1989

Ⅵ 二列埋葬について

浜 田 信 也

二列埋葬という葬制形態の示す意味については、前章で橋口氏が詳しく論じているので、こ こでは列埋葬の推移の中で二列埋葬に言及してみたい。

二列埋葬を含む列埋葬の墓地は、これまで次のような遺跡で確認されている。

篠原新建遺跡(福岡県糸島郡前原町大字篠原)

舌状丘陵の先端に位置し、墓域を画する遺構から幅20m、全長60mの区域内に甕棺墓65、土壙墓68、木棺墓6で構成される墓地が形成されている。甕棺の形式や遺構の切り合い関係から、前期末から中期前半に造営されており、墓地全体の推移は北から南へ順時埋葬されていたと考えられている。当遺跡の特徴は、墓地の北側が土壙墓と甕棺墓がほぼ同数で密集して列をなし、棺の主軸方向をほぼ同じにするという状態であり、中央部分では棺の数こそ少ないが二列埋葬に近い墓列を呈し、さらに南側では成人棺を中心とした二列埋葬となっている。このように単なる列葬から二列埋葬への変遷過程が時間的にも把握される代表的な遺跡である。当遺跡での墓から副葬品の出土はない。(註1)。

吉武大石遺跡(福岡市西区大字吉武字大石)

吉武地区の圃場整備事業で発掘調査された吉武遺跡群では、10群以上で総数1200基をこえる 甕棺墓や木棺墓からなる弥生時代墓地が調査されている。これらは前期末から後期初頭にかけ て永々と造営され、群をなし帯状に分布しており、各群間にはその規模・内容に時期的な変化 がみられる。詳細な報告は未だであるが、当遺跡群の中で、大石遺跡は前期末から中期後半に 造営される群集墓地で、甕棺墓と木棺墓で構成される。墓地の南側において南西から北東へ延 びる列葬墓と考える一群がある。この群は整然とはしないが墓列間に空間域をもつ二列埋葬例 であるが、墓域を画したり、祭祀遺構はない。当遺跡の場合は、銅利器や玉類を副葬する棺や 磨製石剣の切先を出土した棺が3例ある。

なお、吉武遺跡群の中には、高木遺跡でも列葬と考えられる墳墓群がある。墓地の全体を完掘してはいないが、前期末に属す甕棺墓と木棺墓で構成され、主軸を同一方向に置き埋葬されている。特にこの群は多鈕細文鏡や銅剣、銅才、玉類など多くの副葬品が出土し、吉武地区遺跡群の前期末における首長層の墓地と考えられており(註2)、墓地形態が注目される。

赤井手遺跡(福岡県春日市大字小倉)

当遺跡では丘陵平坦部に集落跡が、南側斜面に墓地があり、区別されて造営されている。墓地は甕棺墓で構成されているが、墓地の全体は削平などにより完全には把握できない。しかしながら4基の成人棺が東から西へ列をなし、20基以上の小児棺が成人棺を重複するなどして埋

門田遺跡(福岡県春日市大字門田)

遺跡は小さな谷を挟んで北台地と南台地に遺存し、造営される墓地遺構も北台地は弥生時代前期と中期後半を主とし、南台地は中期初頭から後期初頭に至る時期とされ、造営が一時的に同時造営されるものの相違がある。

南台地では、平坦部に中期中頃から後半と後期初頭の甕棺墓がそれぞれ群をなし造営されているが、中期前半から中頃の甕棺墓は緩斜面に沿って列をなして群を形成している。二列埋葬で墓列間に墓道と考える空間域を設け、西から東へ順時埋葬されている。墓列は中央より西側で顕著であるが、東側では二列埋葬の規制が崩れている。墓域を区画したり祭祀を示す遺構はない。報告書は、当遺跡の二列埋葬は中期前半に始まり中頃には二列埋葬の規則性が薄れる一方で、中頃には密集型の墓地造営が始まると当遺跡の墓地構成から把握し、さらにその変化が、血縁相互の深い絆の上に成立した二列埋葬が、社会変革により崩壊したものとしている。

なお、当二列埋葬墓群中には、ゴホウラ貝製の貝輪を副装する成人棺、小児棺が各1基ある (註4)。

宗石遺跡(福岡県筑紫郡那珂川町大字今光)

河岸段丘に所在する遺跡であるため、遺跡の一部が河川の氾濫により消失し、墓地の一部も崩壊していると考えられる。墓地は中期中葉に属す甕棺墓群で成人棺25、小児棺35基が検出された。墓地は完掘されてないが、ほぼ南北方向に成人棺を二列に配し、墓列間には空間を設けるが、この間に小児棺が埋置される。墓域を示す遺構はないが、二列埋葬墓はさらに北へ延びると考えられている。この二列埋葬墓とは別に、同時期の少数の棺で構成するグループが列の両側に位置し、両者の関連が注目される。墓地からの副葬品の出土はない。(註5)。

松の木遺跡 (福岡県筑紫郡那珂川町大字松木)

当遺跡は宗石遺跡とは梶原川を挟んで対岸の河岸段丘上にあり、甕棺墓13基、木棺墓2基から成る小規模な墓地が遺存する。南北方向に全長14m、幅4mの範囲に前期後半に属す成人用甕棺墓と木棺墓が二列に並ぶ。墓列間には空間はなく、列は接しており、東側列をメインとした埋葬が行われた可能性がある。列埋葬ではあるが、墓列間の空間域がなく、墓域を示す遺構もないことから、いわゆる二列埋葬の段階までに達してはいないものと考える。副葬品の出土はない。

また、この墓地群とは別に隣接する地区で前期後半から終末期に属する甕棺墓群がある。その規模は全長約20m、幅4~5mの小規模なものであるが、成人棺を東西の二列に並べ、墓列間には幅2m前後の空間域を設ける。より二列埋葬の形態を示すが、ここでも墓域を画したり

祭祀を示す遺構はない。前者の列埋墓との関連性が注目されるところである(註6)。

隈・西小田地区遺跡(福岡県筑紫野市大字隈・西小田)

宝満川右岸に広く展開する丘陵上に弥生時代から古墳時代の遺構が広く遺存する遺跡である。 弥生時代遺構は集落跡と墓地から成る。墓地は前期末から中期後半の甕棺墓を主とする7~8 群の墓地群が確認され、調査が進められている。これらの群のうち、前期末から中期中頃に属 す列埋葬がある。丘陵稜線に沿って西から東へ向かって約200mの長大な列埋葬は、列の西側 では前期末の単列で、両側に祭祀を兼ね墓域を示す土壙墓を配す。これよりさらに東へは二列 埋葬となるが中期前半から中頃に属し、墓列の中央部ではさらに一列を加え三列となる部分が ある。

当遺跡の弥生時代墓地は、群集墓や列葬墓あるいは単一墓などの時期的な埋葬形態の変遷や加えて一般構成員と副葬品をもつ首長層の墓地が埋葬形態を異にして造営されており、明らかに社会的階層差が墓地造営に具現されている好例である。(註7)。

正原遺跡 (福岡県小郡市大字三沢字正原)

二列埋葬の墓地の一部が発掘調査されている。中期前葉に属する成人棺 6 基が東西の二列に 並べられている。削平を受けており小児棺の大半は消失しており、墓地の実態は把握しがたい が、墓列間に空間域を設けるものの、祭祀や墓域を画する遺構はない。副葬品の出土はなく、 出土人骨には特筆すべき特徴はない(註8)。

大木遺跡 (福岡県朝倉郡夜須町大字篠隈字大木)

宝満川の支流曽根田川左岸の河岸段丘の縁辺部に所在する遺跡である。 I・II 区に分けられる。二列埋葬は I 区で検出された。墓域を画するとされ東西に延びる溝があり、その南側に墓地が造営されている。墓地は東西に延び、さらに東へと連続するとされるが、85基の甕棺墓が検出された。これらは中期中葉を主とするもので、墓地の東側には、小溝や祭祀土壙などで囲まれる 6 号甕棺を中心とするグループがあり、このグループのさらに東にも1つのグループの存在が推定される。墓地のほぼ中央に列をなすグループがあり、このグループと 6 号棺を中心とするグループ間にも1つのグループがあるなど、4 群からなる墓地構成である。列をなすグループはほぼ東西に延び、北と南の二列に成人棺を配し、墓列間には空間を設ける二列埋葬である。二列埋葬の規模は全長約43 m、幅約16 mで墓列の外側には祭祀土壙あるいは土壙を配して墓域を画している。詳細な報告がないので、二列埋葬の実態は不詳であるが、遺跡の全体からみると二列埋葬と 6 号棺を中心とする方形に区画される墓域に密集するなど、埋葬形態を異にする墓地がほぼ同時期に併存することが注目される。墓地からの副葬品の出土はない(註9)。

東小田峯遺跡 (福岡県朝倉郡夜須町大字東小田字峯)

宝満川左岸の低台地上に位置する。遺跡は集落と墓地で構成される。弥生時代の墓地は、前期から後期初頭まで造営されるが、中期に属するものが大半を占める。前期は土壙墓であり、

台地の縁辺部にある。削平により全容は明らかではないが、深い溝で方形状に区画される墓域にあり、土壙墓の総数は不詳である。小形壷を副葬するものがある。中期前半から中葉になると墓地は、列埋葬の埋葬形態を呈す。ほぼ東西に延び、南北の二列に成人用甕棺墓が整然と並ぶ。墓列間には幅4mほどの空間を設ける。列の西端は台地の縁辺部まで続き、東端側は未調査区にまで延びており、その全長は不詳であるが、長さ約25mほどが確認されている。当列埋葬は削平により各棺とも下半部が遺存している状態であることから小児用棺はほとんどが消失したものと考える。墓列の外側には祭祀や墓域を画する遺構はない。

この列埋葬の東端に中期後半を主とする群集墓地がある。この群は周囲に浅い窪地をいくつか設けることにより、その内側区画を周囲より高く見せかけるようにしている。この群には前漢鏡などを副葬する首長墓とされる2つの大形甕棺があり、これを中心に構成される墓地である。

当遺跡内では、200mほど離れた位置にもほぼ南北に延びるもう1つの二列埋葬がある。墓列間に3mほどの空間を設けるが、墓列の外側には祭祀や墓域を画する遺構はない。この二列埋葬は一方の列にやや整然としないところがあるが、近接して遺存する同時期の甕棺墓との関係を明らかにして検討する必要がある列埋葬である。いずれにしても、当遺跡でも前期、中期前半から中葉、中期後半では埋葬形態が異なることが示されている。当遺跡の列埋葬の墓地からの副葬品の出土はない(註10)。

栗山遺跡(福岡県甘木市大字平塚字栗山)

弥生時代中期中葉から後期初頭に造営された墓地である。墓地の全体は完掘されていないが、三つの群に分けられ、このうち一群が二列埋葬である。成人棺を二列に並べ、列間には幅約4mの空間域を設け、墓列の外側に祭祀土壙を配し、兼ねて墓域を画している。小児棺の配置状況もあわせ、永岡遺跡とよく似ている。時期は中期中葉から後葉に属す。他の二群は、この二列埋葬より後出するもので、このうち一群は、祭祀遺構に囲まれ、その内側に密集する埋葬形態である。二列埋葬からの副葬品の出土はない(註11)。

前田山遺跡 (福岡県行橋市大字前田字前田山)

丘陵の稜線によって弥生時代の墓地が造営されている。木棺墓および土壙墓を主体とし、甕棺墓は小児棺のみで、前期末から中期前半に営まれている。前期末の時期では一応列埋葬であるが、単に主軸と同じくする程度のもので、それが中期前半に至ると二列埋葬という埋葬形態へと変化している状況が把握できる好例である。副葬品の出土はない(註12)。

四本黒木遺跡(佐賀県神崎郡神崎町大字城原字四本谷)

日の隈山麓の低台地上に位置する弥生時代の甕棺墓を主体とする墓地である。前期末から中期初頭の列埋葬とその北側に中期中葉に属す10基前後の小規模な一群がある。列葬墓は南北に延びるが全体は把握されていない。調査した限りでは、全長約25m、幅約10mほどで、この範

囲に甕棺墓79基、土壙墓22基、石棺墓7基、支石墓1基がある。密集して列をなしている状況であるが、東西二列を主列とし、両列に接して多数の棺が埋置されているため、列間の空間域は非常に狭くなっている。墓列の外側には祭祀土壙や土壙を配し墓域を区画する。区画される墓域内に列をなし埋葬されているが、いわゆる二列埋葬というよりは密集して列をなす状態であり、棺の重複状態から列埋葬を意識しながらも順時に適当な位置に埋葬するという墓地経営で、二列埋葬という埋葬形態が確立していない前段の遺跡と考える(註13)。

六本黒木遺跡(佐賀県佐賀市金立町大字金立字六本黒木)

金立山南麓から延びる舌状丘陵上に位置する。調査区の北東隅に17基の甕棺墓と1基の箱式石棺墓からなる弥生時代中期の墓地がある。南北に延びる二列埋葬で、その南端部が検出されている。墓列間には空間域を設け、墓列の外側には祭祀土壙を配し、兼ねて墓域を画している。列は成人棺を整然と配し、西側列の中央に石棺墓がある。副葬品の出土はない(註14)。

金立開拓遺跡 (佐賀県佐賀市金立町)

金立山麓の丘陵の稜線に沿って概ね南北に並ぶ甕棺墓群 (32基) である。弥生時代前期末から中期前葉に属すとされ、東西の二列に成人棺を並べ、列間には空間域を設けるが、墓列の外側には祭祀や墓域を画す土壙などの遺構はない。副葬品の出土もない(註15)。

東千布遺跡(佐賀県佐賀市大字東千布)

金立山南麓から派生する低丘陵上に所在する弥生時代の墓地を主体とする遺跡である。調査区は I・II 区に分けられ、 I 区において前期末に属す甕棺墓 7 基、土壙墓 9 基から成る列埋葬がある。中世代の遺構などにより遺存状態は良くなく、列埋葬は完掘されていないので正確には把握しがたいが、墓列は幅2.5 mの空間域を挟み東西二列に並べるが、東列は後世遺構の重複により不明な点が多い。墓列の外側には祭祀や墓域を画する遺構は、西側では南端側に土壙があるが、東側では同時期の土壙は見あたらない。副葬品の出土はない(註16)。

宝満谷遺跡 (佐賀県三養基郡北茂安町大字中津隈字宝満谷)

平野部にあって独立状を呈す低丘陵上に所在する。調査区中央におおむね南北方向に並ぶ甕棺墓群が検出された。弥生時代中期に属すとされる55基の甕棺で構成される二列埋葬である。 二列埋葬は完掘されており、全長約38mである。東西の二列に成人棺を並べ、列間には4~5mの幅の空間域を設ける。墓列の外側には祭祀土壙や墓域を画する土壙を配すが、東側は西側に比べ明確ではない。墓列の南端には土壙を配し区画するが、北端にはそのような遺構はない。

なお、墓列から離れて、列の両側に $1 \sim 2$ 基の甕棺がある。いずれの棺よりも副葬品の出土はない (註17)。

吉野ケ里遺跡(佐賀県神崎郡神崎町および三田川町)

田手川右岸の南北に延びる長大な丘陵上に弥生時代の環溝集落や大規模な墓地群が発見され、

その規模・内容は、これまでの弥生時代観をより充実させるものである。特に墓地は甕棺2000 基以上をはじめとする約2500基をこえる埋葬棺が検出されている。これらはいくつかの群をな し、ほぼ同時期に併存する。また、埋葬形態にも相違がみられ、弥生時代墓制ひいては社会構 造が検証できる貴重な遺跡である。

いわゆる二列埋葬は4群が確認されている。弥生時代前期末から中期中頃に属し、群集墓や墳丘墓と隣接して、かつ同時期に造営されている。二列埋葬のうち、調査された志波四の坪地区のものは、全長約600mにも達するもので、類例遺跡としては最大規模のものである。成人棺を二列に並べ、墓列間には2~5mの空間域を設け、墓列の外側には祭祀土壙を配している。墓列の中には、主軸方向の異なる棺が30~40m前後の位置であるとされ、この間をもって単位区分されるといわれているが、甕棺の型式や遺存する人骨の精査をまって将来は明確されると考えられる。当列埋葬においては相当数の甕棺墓があるが、副葬品をもつものは少なく、貝輪と若干の玉類が数基の棺から出土したにすぎない。それでも他遺跡に比べると多い方である。人骨は300体ほど検出されており、骨折・切傷のあるものや頭骨のないものがあるなど興味ある点が多々ある。

当遺跡の場合、二列埋葬と同時期に併存する群集墓や墳丘墓との係りが注目される。特に墳丘墓は青銅器や玉類を副葬する甕棺墓があり、棺自体の規模も大きく、首長層の墓地といわれ、このような副葬品の有無・内容や埋葬形態の相違は明らかに社会的身分差が埋葬形態の相違に直接的に表現されており、社会構造と埋葬との関係を把握するに貴重な資料が得られる遺跡である(註18)。

以上が二列埋葬と考えられる列埋葬の遺跡であるが、完掘された例が数少なく、かつ報告も 詳細な遺跡が少なく、充分に比較検討するに足りない。ここで筆者が当遺跡の第1次調査で報 告した二列埋葬の特徴を掲げると、

- 1. 成人棺は整然と二列に配置される。
- 2. 2つの墓列間には空間域があり、墓道と考えられる。
- 3. 墓列の外側には祭祀土壙などがある。
- 4. 小児棺は成人棺とは異なり、二列埋葬という規制の対象から外している。

としているが、3点目の祭祀土壙は墓域を画する遺構としての性格があり、土壙あるいは溝 状遺構である場合もある。

このような点から前述の遺跡例を見ると、特徴である4点をもつ遺跡はきわめて少ない。前期後半あるいは前期末から中期前葉の時期に造営される遺跡をみると、二列埋葬の特徴は十分に整っておらず、中には列葬墓(複数列状)に近いものや、二列ではあるものの、列が接して墓道と考えられる空間域をもたず、単列埋葬とおぼしきものがあるなど、二列埋葬としての形態が完成されていない。中期前半から中頃(一部後半)に造営される二列埋葬は二列に成人棺

が整然と並び、二列埋葬としての墓列形態は整うが、墓域を画したり、祭祀を行う遺構が必ず しも設けられてはいない。永岡遺跡を代表とするような二列埋葬は、篠原新建遺跡、門田遺跡、 隈・西小田遺跡、栗山遺跡、大木遺跡、宝満谷遺跡、吉野ケ里遺跡がある。このように列埋葬 の前期から中期への流れをみると、二列埋葬は前期末にはその兆しが現われるが、その埋葬形 態の完成は中期前半となり中期中頃には何らかの影響により終焉している。

この終焉の要因としては、二列埋葬に要する墓域の広大さに問題があると考えられる。墓域の規模については大小の差があるが、総体的には群集墓や墳丘墓に比べると二列埋葬に要する面積は相当広大なものであり、例示する遺跡でもわかるように、周辺には同時併存する何らの遺構もない例が多く、それだけ土地利用に相当余裕があったものと考えられる。しかしながら、稲作農耕という食糧基盤の安定・充実から人口が増加し、土地のより高度な有効利用を図るべく、墓地に要する土地の縮小化が考えられ、これを一つの起因として埋葬形態も変化したものと推察される。

二列埋葬を含む列埋葬からは数例を除き副葬品の出土はなく、併存する墳丘墓からは副葬品 を出土しており、このことから前者は一般構成員の墓とし、後者を首長層を葬る墓とされる。

こうした社会的身分差の埋葬形態は、隈・西小田遺跡や吉野ケ里遺跡で検証されているところであり、その相違は意識的に後世へと引き継がれるものと考えられる。中期後半に至ると一般構成員は狭少な墓域の中に密集して埋葬されることとなり、一方、首長層はより強力な権力の集約をもとに、墓地の規模や副葬品の内容などをより強力に誇示することとなる。三雲遺跡、須玖岡本遺跡、立岩堀田遺跡で示すとおり、広域的かつ強力な首長層が中期後半に現われ、中期後半に至ると大きな社会変革があったと想定される。その大きな変化は中期前半における墓地の埋葬形態が単に引き継がれることなく、何らかの影響による変化があって当然ともいえ、二列埋葬が土地の有効利用ということに起因するのみでなく、社会の大きな流れの中で終焉を迎えるものと考えられるが、はたしてより明快な埋葬形態の変遷の起因を示すことが今後の研究課題といえる。

註

- 註1. 前原町教育委員会「篠原新建遺跡」前原町文化財調査報告書第6集 1981年 前原町教育委員会「篠原新建遺跡Ⅱ」前原町文化財調査報告書第10集 1983年 前原町教育委員会「篠原新建遺跡Ⅲ」前原町文化財調査報告書第17集 1984年
- 註 2. 福岡市教育委員会「吉武高木」福岡市文化財調査報告書第143集 1986年
- 註3. 春日市教育委員会「赤井手遺跡」春日市文化財調査報告書第6集 1980年
- 註 4. 福岡県教育委員会「門田遺跡」山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書第 6 集 1978年
- 註 5. 那珂川町教育委員会「安徳・道善・片縄地区区画整理事業地内埋蔵文化財調査概報」那珂川町文化 財調査報告書第3集 1979年

- 註6. 那珂川町教育委員会「松の木遺跡 I」那珂川町文化財調査報告書第11集 1984年
- 註7. 筑紫野市教育委員会の草場啓一氏の御教示による。
- 註 8. 福岡県教育委員会「正原遺跡」九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書 X X X I 1979年
- 註 9. 夜須町教育委員会「夜須地区遺跡群 I」夜須町文化財調査報告書第 6 集 1984年
- 註10. 夜須町教育委員会の佐藤正義氏の御教示による。
- 註11. 甘木市教育委員会「栗山遺跡」甘木市文化財調査報告書第12集 1982年
- 註12、行橋市教育委員会「前田山遺跡」行橋市文化財調査報告書第19集 1987年
- 註13. 神埼町教育委員会「四本黒木遺跡」神埼町文化財調査報告書第6集 1980年 保存科学研究会編「四本黒木遺跡発掘調査報告書」新郷土刊行会 1977年
- 註14. 佐賀県教育委員会「六本黒木遺跡」九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書 1 1980年
- 註15. 佐賀県教育委員会「金立開拓遺跡」佐賀市文化財調査報告書第10集 1974年
- 註16. 佐賀市教育委員会「東千布遺跡」佐賀市文化財調査報告書第15集 1985年
- 註17. 北茂安町教育委員「宝満谷遺跡」1980年
- 註18. 七田忠昭「吉野ケ里遺跡の発掘現場から」読売スペシャル31『見えてきた古代史の謎』所収 読売 新聞社 1989年

佐賀県教育委員会「吉野ケ里遺跡」1989年 佐賀県教育委員会の高島忠平氏の御教示による。

Ⅲ 永岡遺跡出土の弥生時代人骨

中橋孝博

1. はじめに

北部九州では、かつて佐賀県の三津永田遺跡から我が国ではじめてまとまった数の弥生人骨が出土し、以後、現在に至る30数年の間に膨大な数の人骨資料が蓄積されて、その形態的特徴、地域差、時代推移などに関する知識も着実に深まりつつある。しかし同時にまた、資料の時代的、地域的偏りとそれに付随する疑問や問題点も指摘され、いわゆる「渡来系」弥生人の出現経緯や、他地域への伝播の状況など、未解決の疑問点も依然多い。福岡県内に限ってみても、縄文、弥生移行期の人骨をはじめとしてまだまだ資料の空白が多く、今後ともその欠落部分を補填する努力の継続と同時に、そうした形質上の問題に加えて、例えば墓地での埋葬状況、死亡年齢、世代交代の期間、村落の構成員の規模とその時代推移や人口動態、あるいは各種傷害と疾病、食性や環境と形質の相関、性差と自然、社会環境との関係など、弥生人社会復元のためにその知識を深めていくべき人類学上の課題は山積していると言えよう。今回ここに報告する永岡遺跡は、出土人骨数の多さもさることながら、その出土状況や人骨所見に幾つか興味ある内容を含んでおり、当地でのそうした様々な研究課題に対する好適の遺跡の1つになろうかと考える。筑紫野市教育委員会の御好意によってその資料を研究する機会に恵まれたので、以下に得られた結果を報告する。

2. 遺跡・資料

遺跡:永岡遺跡(筑紫野市大字永岡)は、福岡平野を南に下ってちょうど筑紫平野の入口にさしかかる辺り、東からは三群山系、西からは背振山系が迫って互いにその裾野を接する地域の低丘陵上に見いだされた埋葬遺跡である。1972年(浜田他、1977)、国道3号線バイパス(福岡南バイパス)の建設工事に伴う発掘調査を皮切りに、1980年(浜田、1981)、1988年と3次の調査が重ねられ、この間、計153基の甕棺墓、21基の木棺墓、9基の土壙墓などが検出された。なお、甕棺墓ではかなり整然とした二列埋葬がなされていたことも明らかにされている。

人骨資料:上記の墓地より、1972年度の第1次調査で28体(永井、1977)、1980年度の第2次調査で24体、そして1988年度の第3次調査で1体の、計53体が出土した。表5に一覧したように、1体の土壙墓人骨を除いて、全て甕棺墓から検出されたものである。また、表6に性、年齢構成を示したが、遺存していた人骨で見る限りは成人骨が41体とその大半を占め、未成人

表 5 永岡遺跡出土弥生人骨一覧表

番号	性	年 齢	時 代	保存 状態	赤色	身長(cm)	風習的 抜 歯	備考
K — 4	?	幼(4~5歳)	弥·中期前半	Δ		_	_	
K — 9	\$	熟年	"	0	0		なし	右第2中手骨に骨折痕
K -10	\$	熟年	グ・中期中頃	0	0	166.3(T)**	$(\frac{ \mathbf{l}^2 \mathbf{l}^2}{ \mathbf{l}^2})$	右眼窩上部に外傷痕、右橈骨遠位端骨折痕
K -11	우	成年	グ・中期前半	Δ		_	?	
K -12	\$	熟年	"	0		163.1	(なし)	
K -13	우	成年	"	Δ		147.9	?	
K -14	우	成年	"	Δ		145.4	なし	
K -15	우	老年	"	Δ		1	?	
K -18	?	幼児	"	×		-	-	
K - 24	\$	成年	"	0	0	162.7	なし	
K - 25	?	若年	"	Δ		_	?	
K - 26	우	成年	グ・中期中頃	Δ		154.9	?	
K -27	우	成年	グ・中期前半	0	0	151.4	?	·
K - 28	우	成年	"	Δ		_	?	·
K - 30	우	熟年	,	0		148.5	?	頭部に蓆付着
K - 32	\$	熟年	,	Δ			?	左桡骨遠位端骨折痕
K -33	우	成年	"	0	0	159.2	なし	蒂付着
K - 35	\$	成年	"	0		159.3	なし	
K - 36	우	熟年	,	0		154.1	なし	下顎関節異常
K -38	우	成年	"	0		-	なし	
K - 39	우	成年	"	0		153.6	なし	下顎関節異常
K-41	우	熟年	"	Δ	0	_	?	蓆付着
K -42	우	熟年	"	Δ		_	?	
K -44	우	熟年	"	Δ	0		?	
K -45	?	幼(5~6歳)	"	×				
K -48	\$	熟年	"	Δ		161.8	(<u> </u> <u> </u>)	
К —53	?	(乳~幼)	"	×				
D - 4	?	成年	"	×			?	
		·						(以上、1972年度調査)
S K -15	우	成年		Δ	0	150.8	?	
S K -19	(\$)	成人		Δ			?	
S K -20	우	熟年		×			?	
S K -21	우	成~熟年		Δ			?	
S K -30	우	成年		Δ			?	
S K -40	?	若年		×	0		?	
S K -49	우	成年		Δ			なし	右大腿骨に蓆付着

番号	性	年 齢	時	代	保存 状態	赤色 顔料	身長(cm)	風習的 抜 歯	備考
S K -55	우	熟年			Δ			?	
S K -56	?	(小児)			×			_	
S K -60	?	(幼児)			×				
S K 74	\$	成年			Δ			?	
S K -78	\$	成年			0		165.5	なし	
S K -87	?	幼(5歳位)			×			-	
S K -89	?	成人			×			?	
S K -90	\$	成年			Δ		164.4	なし	
S K -92	?	幼(5~6歳)			×			_	
S K -93	\$	熟年			0		158.6	なし	
S K -94	우	熟年			Δ			?	
S K -95	\$	熟年			Δ			?	右腸骨稜に後下方より銅剣切先嵌入、頭なし?
S K -97	\$	熟年			0		159	なし	
S K -98	\$	成年			\triangle	0	159.4	なし	
S K -99	우	成年			Δ		152.4(T)	?	·
S K -100	\$	若(17~18歳)			Δ			?	左仙腸関節部に後方より銅剣切先嵌入、他に石剣片もともなう
S K -101	?	幼(4~5歳)			×				
									(以上、1980年度調査)
B K - 1	\$	熟年			0			なし	膝関節部に蓆付着
									(以上、1988年度調査)

(保存状態)◎:ほぽ完全、○:良、△:不良、×:一部のみ残存 ※(T):脛骨最大長より推定

は幼児を中心に計12体に留まっている。しかし、遺跡全体における、いわゆる成人棺・小児棺 の構成では、主に乳幼児埋葬用の小児棺が逆に過半数を大きく上回っており、後述のようにこ の幼弱期での高死亡率が当遺跡の死亡状況における目立った特徴になっている。一方、成人骨 では、男性17体、女性23体でやや女性のほうが多く、特に比較的若い成年期で死亡している女 性の多さが目につく。当遺跡での幼弱期の子供の多さとの関連が注目されよう。

所属時代:主に甕棺の編年学的所見から、ほぼ弥生時代中期の前、中葉所属のもので、一部 中期後半に至る時代に営まれた墓地と考えられている。

伴出遺物: 2体の男性人骨(SK-95、SK-100)で、その骨盤部に銅剣の切っ先が嵌入 したまま見いだされた(後述、図版 $17-1\cdot 18$)。SK-100ではさらに石剣も伴っていた。ま た、遺骨の一部に、おそらく蓆と思われる繊維状のものが付着していた遺体が5例、赤色顔料 の付着が10遺体で確認された。

3. 観察・計測結果

(1) 頭蓋骨の形質

計測結果を表7に、また、男女 それぞれ比較群とともに表8、9 に示す。

1 脳頭蓋

男性では、まず全体的なサイズ の大きさが目につく。もともと、 北部九州弥生人の脳頭蓋は、現代

表一6 永岡遺跡出土弥生人骨の性・年齢構成

	年	齢	男 性	女性	生 不 明	計
-4-	乳	児	_	_	1	1
未	幼	児	_	-	7	7
成	小	児	-	-	1	1
^	若	年	1	_ 0	2	3
4	成	年	6	13	1	20
成	熱	年	9	9	0	18
	老	年	0	1	0	1
^	不	明	1	0	1	2
	計		17	23	13	53

人はもとより古代人の中でも大きめであるが、表 8 や第126図の偏差折線にも示したように、 永岡はその北部九州弥生人の平均をさらに上回る傾向を示しており、例えば頭蓋水平周 (535.3mm) でも、その大きさで知られる津雲縄文人の平均値(532.3mm)を凌いでいる。また、 頭高も現代人並みに高い。頭長幅示数は78.2で中頭型に属し、長高示数(75.4mm)、幅高示数 (96.2mm)もそれぞれ高頭、中頭型で形状的には近隣の弥生集団と同傾向にあると言えよう。 女性もまた男性に類似して、やや大きくて高い脳頭蓋を持つが、その水平周などに男性ほど 目立った傾向は見られない。

2 顔面頭蓋

顔面部もまた、脳頭蓋での傾向と軌を一にして全体の大きさが顕著であり、また眉間から眉弓部にかけての発達のよい男性が目につく(図版15)。その計測値について比較的例数の多い男性で見ると、表8あるいは第126図で明らかなようにいずれの計測値も北部九州の平均を上回っており、特に上顔高(77.0mm)、顔高(128.8mm)の際だった高さが目につく。各顔示数、上顔示数もまたこれに付随して高い値を示し、西北九州弥生人や縄文集団との差を一層顕著なものにしている。眼窩部や鼻部の計測値もそれぞれ最大で、各示数に見る形状でも、他地域の同時代人に較べて高眼窩、狭鼻傾向が明らかである。また鼻根部は著しく扁平でその鼻根彎曲示数は89.7と、これまで明らかにされてきた北部九州・山口弥生人としての特徴(北部九州・山口弥生人男性-88.5、中橋・永井、1989;西北九州-76.7、松下、1985)を明確に表している。なお、ここでは計測結果の表示は割愛したが、前頭骨、鼻骨、頬上顎骨の各平坦示数でみても、当弥生人は近隣の弥生人と同様、顔面の著しい偏平性を特徴としている。下顎骨については十分な計測値が得られなかったが、下顎頭間の広さ(134.6mm)、オトガイ高の高さ(37.4mm)下顎枝幅の大きさ(37.7mm)など、いずれも従来から知られている北部九州弥生人としての特徴に一致し、他の部分と同様、数値的にはなおその平均値(それぞれ132.9mm、35.7mm、37.4mm)を上回っている。

表-7 永岡遺跡出土弥生人骨・頭蓋計測値

		-		男					女	性	
		N	М	S.D.	Мах	Min.	N	М	S.D.	Max	Min.
1	頭蓋最大長	7	184.9	4.26	191 -	180	9	176.4	4:48	182 -	170
8	頭蓋最大幅	11	142.6	5.80	154 -	132	11	139.0	4.27	145 -	131
17	Ba-Br 高	8	139.5	5.18	149 -	134	5	131.8	3.56	138 -	129
8/1	頭長幅示数	7	78.2	2.81	81.9 -	74.4	9	78.6	2.47	82.0 -	74.4
17/1	頭長高示数	6	75.4	3.17	79.4 -	71.8	5	75.3	1.90	76.7 -	72.0
17/8	頭幅高示数	8	96.2	3.28	100.7 -	92.5	5	94.4	2.16	97.0 -	92.3
5	頭蓋基底長	6	103.7	2.50	106 -	99	5	96.6	2.51	101 -	95
9	最小前頭幅	9	93.1	4.65	101 -	88	7	93.1	3.93	99 –	86
23	頭蓋水平周	6	535.3	10.82	548 -	517	6	510.2	15.08	532 -	491
24	横 弧 長	9	318.2	10.77	336 -	301	7	308.9	10.92	331 ~	301
25	正中矢状弧長	5	382.8	12.03	392 -	368	4	369.0	13.83	383 -	350
40	顏 長	6	101.3	4.84	109 -	97	3	98.0	1.00	99 -	9.7
45	頰骨弓幅	11	140.5	4.72	147 -	132	3	135.0	5.57	141 -	130
46	中顔幅	9	106.0	4.03	114 -	100	3	100.0	5.20	106 -	97
47	顔 高	8	128.8	5.65	139 -	121	4	115.5	4.43	121 -	111
48	上顏高	9	77.0	3.24	82 –	73	4	70.0	2.45	72 -	67
47/45	顔示数 (K)	8	90.7	5.70	99.3 -	84.6	3	85.3	5.08	90.3 -	80.1
47/46	顔示数 (V)	7	119.8	7.04	132.0 -	112.3	3	115.3	9.10	124.7 -	106.6
48/45	上顏示数(K)	9	54.7	2.42	. 58.6 -	49.7	3	51.4	3.41	53.7 -	47.5
48/46	上顏示数(V)	8	72.2	4.06	78.6 -	64.0	3	69.5	5.68	74.2 -	63.2
51	眼窩幅 (左)	7	44.1	1.57	46 -	41	4	41.3	3.58	44 –	40
52	眼窩高 (左)	. 6	35.2	0.98	37 –	34	3	35.3	2.52	38 -	33
52/51	眼窩示数(左)	6	79.7	2.59	82.9 -	76.1	3	85.7	8.20	95.0 -	80.0
54	鼻 幅	10	27.6	2.17	32 -	25	4	27.0	2.45	29.0 -	24.0
55	鼻高	10	53.6	1.65	56 -	51	4	50.3	3.50	54.0 -	46.0
54/55	鼻 示数	10	51.5	3.82	60.4 -	46.3	4	54.0	6.94	63.0 -	48.2
50	前眼窩幅	9	17.8	3.01	23 –	14	3	16.7	2.31	18 -	14
F	鼻根横弧長	9	19.8	2.88	25 -	16	2	18.5	_	20 -	17
50/F	鼻根彎曲示数	9	89.7	.5.58	95.0 ~	77.8	2	86.2	_	90 -	82.4
57	鼻骨最小幅	10	7.2	1.97	10.7 -	4.8	3	8.0	5.09	13.7 -	4.0
72	全側面角	7	84.4	2.88	88 -	80	3	79.3	0.58	80.0 -	79.0
74	歯槽側面角	7	68.7	2.98	73 –	64	3	65.7	1.15	67 -	65
65	下顎頭間幅	5	134.6	5.13	143 -	129	1	133	_	_	
66	下顎角幅	-	_	_	-		1	96	_	, -	
68	下顎骨長	2	78.0	_	84 -	72	-	_		-	a-
69	オトガイ高	7	37.4	2.76	42 -	35	8	32.0	3.78	38 -	27
70	下顎枝高 (左)	1	66.0	. –	_		1	55	_	_	
71	下顎枝幅(左)	3	37.7	4.16	41 -	33	1	36	_	_	
71/70	下顎枝示数(左)	1	62.1	_			1	65.5	_	_	
79	下顎枝角	2	124.0	_	133 -	115	-	-	_	-	

表8 主要頭蓋計測値の比較(男性)

			 永岡 弥生)	l	———— 北部九州 弥生)		口 ¹⁾ 古墳)		上九州 ²⁾ 弥生)	広 (田 * ¹) 弥生)		・吉胡 ³⁾ 縄文)	1	有日本 ⁴⁾ 現代)
		N	М	N	М	N	М	N	М	N	М	N	М	N	M
1	頭蓋最大長	7	184.9	179	183.4	48	182.8	21	182.8	26	166.0	60	184.2	108	181.4
8	頭蓋最大幅	11	142.6	183	142.3	51	141.7	20	144.9	25	147.2	62	144.9	108	139.3
17	Ba-Br値	8	139.5	146	137.0	36	136.3	15	134.6	17	130.7	26	135.5	108	139.3
8/1	頭長幅示数	. 7	78.2	163	77.7	43	77.3	20	79.2	25	89.0	55	78.7	108	76.6
17/1	頭長髙示数	6	75.4	134	75.0	30	74.2	15	74.2	17	78.7	25	73.3	108	76.9
17/8	頭幅高示数	8	96.2	136	96.3	33	96.8	14	93.1	17	88.5	26	93.6	108	100.1
45	頰骨弓幅	11	140.5	147	139.8	39	140.2	12	138.4	7	137.7	16	141.0	106	134.5
46	中顔幅	9	106.0	160	104.6	48	104.8	17	105.0	10	99.6	31	103.8	107	99.9
47	顔高	8	128.8	107	123.2	31	123.7	14	117.1	11	109.9	25	115.7	66	122.2
48	上顔高	9	77.0	152	74.3	49	73.3	17	68.1	12	62.9	28	66.3	92	71.8
47/45	顔示数(K)	8	90.7	95	88.0	23	87.6	12	84.6	7	79.9	10	80.4	64	91.4
47/46	顔示数(V)	7	119.8	101	117.6	28	117.4	14	111.8	9	111.2	18	110.4	65	122.2
48/45	上顏示数(K)	9	54.7	129	53.0	34	52.4	12	49.3	7	45.6	10	47.0	90	53.5
48/46	上顔示数(V)	8	72.2	142	71.0	43	70.2	· 17	64.8	10	63.7	22	63.1	91	71.8
51	眼窩幅(左)	7	44.1	128	43.3	42	43.4	15	43.1	9	43.4	40	43.2	108	43.0
52	眼窩高(左)	6	35.2	134	34.5	49	33.9	15	32.8	9	31.8	38	33.2	108	34.4
52/51	眼窩示数(左)	6	79.7	124	79.7	41	78.2	15	76.2	8	74.2	-32	77.5	108	80.2
54	鼻幅	10	27.6	160	27.1	55	26.7	16	27.8	12	25.9	36	26.5	108	25.9
. 55	鼻高	10	53.6	158	52.8	51	52.0	16	51.0	12	45.5	30	48.1	108	52.2
54/55	鼻示数	10	51.5	154	51.3	51	51.6	16	54.4	11	56.4	27	54.7	108	49.8
72	全側面角	7	84.6	116	84.8	37	84.5	15	82.0	7	84.1	19	81.5	92	83.8
74	歯槽側面角	7	68.7	111	70.5	34	70.5	_		. 6	66.0	20	70.1	107	70.7

^{*:}広田+鳥ノ峯 (以下同じ) 1) 中橋・永井 (1989 a)、2) 内藤 (1971)、3) 清野・宮本 (1926) ;金高 (1928)、4) 原田 (1954)

表 9 主要頭蓋計測値の比較(女性)

			永岡 弥生)	(北部九州 弥生)		」口 古墳)		北九州	JŽ	、 田 弥生)		要·吉胡 縄文)		南日本現代)
		N	M	N	М	N	M	N	М	N	M	N	М	N	М
1	頭蓋最大長	9	176.4	132	176.7	37	175.6	15	178.1	22	159.7	46	176.1	57	172.8
8	頭蓋最大幅	11	139.0	135	137.9	33	137.3	15	139.3	23	144.4	49	141.5	57	134.0
17	Ba-Br高	5	131.8	104	130.0	30	129.6	7	127.3	8	127.1	21	129.7	57	131.3
8 / 1	頭長幅示数	9	78.6	117	78.0	28	78.5	15	78.2	18	90.2	41	80.3	57	77.6
17/1	頭長高示数	5	75.3	99	73.8	27	74.2	7	71.2	7	79.9	20	73.6	57	76.0
17/8	頭幅高示数	5	94.4	94	94.7	21	93.9	7	92.5	8	90.4	20	91.9	57	98.0
45	頰骨弓幅	3	135.0	94	131.4	27	131.2	6	130.2	4	126.0	10	132.6	57	123.9
46	中顔幅	3	100.0	100	100.0	31	100.4	11	95.9	6	91.8	23	99.7	57	93.4
47	顔高	4	115.5	71	115.1	15	110.4	9	104.9	4	105.3	14	105.1	14	112.9
48	上顔高	4	70.0	96	69.5	33	67.7	12	60.9	4	62.0	17	62.0	55	68.2
47/45	顔示数(K)	.3	85.3	59	87.5	13	83.8	6	81.7	3	81.1	7	79.2	14	90.8
47/46	顔示数(V)	3	115.3	65	115.3	12	109.2	9	109.5	4	110.8	13	106.8	14	119.0
48/45	上顔示数(K)	3	51.4	77	53.0	23	51.7	6	47.6	3	47.9	7	48.0	55	55.0
48/46	上顔示数(V)	3	69.5	86	69.5	27	67.7	11	63.5	4	65.3	14	62.3	55	72.9
51	眼窩幅(左)	4	41.3	98	41.6	31	41.3	10	41.1	4	39.3	22	41.7	57	40.5
52	眼窩高(左)	3	35.3	97	33.9	34	33.9	10	31.2	4	30.3	14	32.6	57	34.0
52/51	眼窩示数(左)	3	85.7	94	81.5	31	82.2	10	75.9	4	77.7	13	78.0	57	83.9
54	鼻幅	4	27.0	105	26.4	32	25.9	12	26.6	5	24.8	27	25.4	57	25.0
55	鼻高	4	50.3	104	49.6	32	48.5	12	46.3	4	44.0	21	44.9	57	48.6
54/55	鼻示数	4	54.0	100	53.3	30	53.8	12	57.4	4	58.0	20	56.1	57	51.4
72	全側面角	3	79.3	71	83.9	25	83.4	10	81.5	3	84.7	12	81.5	55	83.0
74	歯槽側面角	3	65.7	70	68.8	23	68.6	_	-	3	65.7	13	68.7	55	67.1

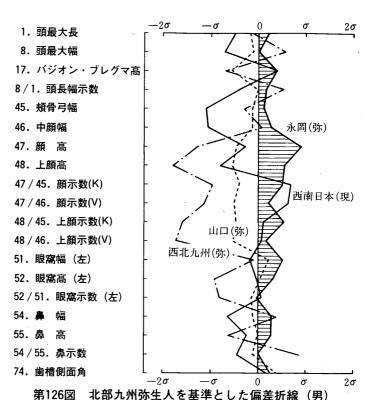
以上、永岡弥生人は特に 顔面部の高径を中心とする サイズの大きさ、それは北 部九州弥生人の主要な特徴 でもあるわけだが、その傾 向をより顕著に持つ集団と 言えよう。

(2) 四肢骨の形質

1 上肢骨

計測結果を、比較群とと もに、表10 (男性)、表11 (女性) に示す。

上腕骨:長く、また男性 はやや太い骨体を持ってい る。最大長を計測し得たの は男女とも数が限られてい るが、得られた数値にも、 当地域弥生人の一般的な特



みでとれる。また、骨幹謎径に比較難と較べて日立った**羊**

徴の1つである骨体の長さが明確にみてとれる。また、骨幹諸径に比較群と較べて目立った差 異は認めがたいが、男性ではやや太く、断面型に少し扁平性が窺われた。ただし、女性にはそ うした傾向は見られない。

前腕骨:上腕骨同様、やはり長径の大きさが目立つ。資料数の少なさにもよるのか、北部九州弥生人の平均値(中橋・永井、1988)には及ばないが、大友弥生人(松下、1981)や津雲縄文人(清野・平井、1928)よりは長い。また、断面型では、特に尺骨骨体が前後に薄い傾向を示し、津雲との隔たりなど、比較群との間に同様の親疎関係が見て取れよう。

2 下肢骨

計測結果を表12、表13に示す。

大腿骨:男女とも著しく長く、やや太い特徴を示している。特に女性の最大長 (410.4mm) は北部九州・山口弥生人を含めたいずれの比較群をも上回っている。骨幹諸径もかなり大きく、津雲縄文人や大友弥生人はもとより、概して頑丈な骨体を持つ北部九州弥生人の平均値に較べてもなお大きい。ただ、粗線の発達は縄文人ほどではなく、その断面示数で明らかなように、柱状性は認められない。

下腿骨:脛骨もまたその長さと太さが目立つ。特に女性では大腿骨と同様、北部九州・山口

表10 上肢骨計測値の比較(男性、左)

			永岡		北	部九州	Ц			て友 ¹⁾		世雲 ²⁾	l .	七州 ³⁾
			(弥生)		(弥生)	(弥生)	(1	弥生)	(縄文)	(現代)
		N	M	S.D.	N	М	N	M	N	М	N	M	N	M
上腕骨			ĺ											
1	最大長(mm)	3	300.7	-	22	302.6	29	305.3	11	291.4	15	283.3	106	295.3
2	全長	3	297.7	9.25	17	296.8	23	300.0	8	285.8	15	279.0	106	290.6
5	中央最大径	9	23.6	1.24	76	23.3	61	23.1	34	23.4	20	23.7	106	21.9
6	中央最小径	9	17.2	0.97	76	17.4	61	17.6	33	17.6	20	17.7	106	16.9
7	骨体最小周	8	64.5	2.00	81	63.9	66	63.7	33	63.5	21	64.7	106	61.8
.7 a	中央周	9	68.7	2.87	75	67.8	57	67.5	33	68.2	-	68.8	106	63.7
6 / 5	骨体断面示数	9	73.2	4.36	76	74.9	61	76.5	33	75.0	20	74.6	106	79.1
7/1	長厚示数	3	21.8	0.91	22	21.3	28	20.8	11	22.4	15	23.0	106	20.9
		Ì				į								
橈 骨														
1	最大長	5	233.8	8.23	37	236.5	27	236.9	6	231.5	11	233.3	64	219.9
2	機能長	5	219.0	6.20	28	220.0	24	222.4	9	215.8	11	217.5	64	208.2
3	最小周	6	43.8	1.72	78	43.1	51	42.5	15	44.7	17	43.6	63	40.1
4	骨体横径	6	16.8	0.98	79	17.2	51	17.4	25	17.1	17	16.9	63	16.0
4 a	骨体中央横径	5	15.8	1.30	50	16.0	33	16.0	25	16.4	-	· —	63	15.2
5	骨体矢状径	6	12.3	0.52	79	12.5	51	12.0	25	12.4	17	11.6	63	11.7
5 a	骨体中央矢状径	5	12.6	0.55	50	12.6	34	12.4	26	12.4	-	_	63	11.9
3 / 2	長厚示数	5	20.0	0.70	28	19.8	24	19.4	5	20.5	11	20.0	61	20.4
5 / 4	骨体断面示数	6	73.4	3.95	79	72.6	51	69.6	25	72.3	17	68.8	60	71.4
5 a /4 a	中央断面示数	5	80.1	6.60	50	78.6	33	77.8	25	75.2	-	_	-	-
ļ														
尺骨					}									
1	最大長	2	251.0	_	12	253.2	26	258.5	9	249.6	7	247.9		236.2
2	機能長	2	221.0	_	15	224.7	21	226.2	13	222.9	12	219.5	64	209.2
3	最小周	4	38.0	0.82	63	37.4	35	38.2	22	37.2	15	38.9	65	35.8
11	矢状径	. 9	13.0	1.13		13.2	49	13.2	26	15.0	19	14.2	63	12.8
12	横径	9	18.2	1.16	l .	17.6	49	17.2	26	17.2	19	16.2	1	16.5
3 / 2	長厚示数	2	17.2	_	15	16.8	21	17.2	13	16.8	12	17.8	1	17.0
11/12	骨体断面示数	9	71.6	7.83	100	75.4	49	77.2	26	88.0	19	87.8	63	74.9

¹⁾ 松下 (1981)、2) 清野·平井 (1928)、3) 專頭 (1957)、4) 溝口 (1957)

表11 上肢骨計測値の比較(女性、左)

			永岡		1	部九州		<u> </u>	1	大友	į.	津雲	l	九州
			(弥生)		<u> </u> `	弥生)	(弥生)	(弥生)		縄文)	_	現代)
	·	N	M	S.D.	N	M	N	M	N ·	M	N	M	N	M
上腕骨														
1	最大長	2	278.0	_	11	283.2	31	284.4	4	262.3	13	261.2	36	271.7
2	全長	2	275.0	_	8	282.3	29	279.4	4	257.8	13	257.3	36	268.6
5	中央最大径	8	20.3	1.67	35	21.0	43	20.4	20	21.0	25	19.7	36	19.8
6	中央最小径	8	15.3	0.89	36	15.3	43	15.4	20	15.8	22	13.9	36	14.8
7	骨体最小周	6	55.3	3.67	47	56.9	49	56.0	19	57.6	24	54.5	36	54.8
7 a	中央周	8	59.3	3.96	33	60.7	41	59.1	19	61.8	_	56.7	36	56.9
$6 \nearrow 5$	骨体断面示数	8	75.5	3.83	35	73.2	43	75.9	20	75.9	21	70.8	36	75.3
7 / 1	長厚示数	2	19.8	1.82	11	19.8	31	19.6	1:1	22.4	15	23.0	106	20.9
橈 骨						,								
1	最大長	. 2	227.5*	_	17	215.1	21	219.1	2	207.0*	16	207.2	12	199.2
2	機能長	1	227.0*	-	11	204.3	20	208.2	2	194.0*	17	195.6	12	187.0
3	最小周	5	11.0*	0.71	52	37.9	36	37.4	9	40.4	20	36.5	12	34.7
4	骨体横径	5	16.6 *	1.67	56	15.7	39	15.4	11	16.4	19	14.6	12	14.5
4 a	骨体中央横径	2	16.5*	_	24	14.3	28	14.2	11	15.9	_	_	12	13.5
5	骨体矢状径	5	11.0*	0.71	56	10.9	39	10.4	11	11.2	19	9.8	12	9.7
5 a	骨体中央矢状径	2	11.5*		24	10.8	28	10.6	12	10.9	_	_	12	9.7
3 / 2	長厚示数	1	18.5 *	_	11	17.7	19	17.9	1	19.7 *	17	18.4	11	18.1
5 / 4	骨体断面示数	5	66.6 *	5.10	56	69.3	39	68.1	11	68.7	19	67.7	10	68.3
5 a /4 a	中央断面示数	2	69.9*	_	24	75.7	28	75.2	11	69.7	-	_	-	_
尺骨														
1	最大長	1	265.0 *	_	6	236.5	24	236.9	1	223.0	10	226.0	12	215.0
2	機能長	2	216.0*	_	8	207.6	25	208.0	2	207.0	10	197.6	12	189.2
3	最小周	5	35.4	3.29	34	34.4	30	34.2	7	33.9	17	32.9	12	32.1
11	矢状径	3	11.0	1.00	54	11.2	41	11.3	12	12.8	21	10.8	12	10.9
12	横径	3	17.3	1.53	54	16.0	41	15.5	11	15.9	21	13.2	12	13.9
3 / 2	長厚示数	2	16.9*	-1	7	16.5	25	16.4	2	16.7	9	16.4	12	16.8
11/12	骨体断面示数	3	63.5	1.13	54	70.4	41	73.4	11	82.0	21	81.0	12	77.5

*右側

表12 下肢骨計測値の比較(男性、左)

			永岡			部九州		Li 🗆	l	 大友	Ÿ	丰雲 ¹⁾	7	七州 ²⁾
			(弥生)		(弥生)	(弥生) 	(弥生)	(縄文)	(現代)
		N	M	S.D.	N	M	N	M	N	M	N	М	N	M
大腿骨														
1	最大長	9	431.2	13.77	60	430.9	37	434.4	15	420.1	11	415.2	59	406.5
2	自然位長	-	_	_	18	427.7	26	432.8	17	413.9	11	411.3	59	403.2
6	中央矢状径	11	30.5	2.45	162	29.7	72	29.1	41	28.6	20	28.9	59	26.5
7	中央横径	11	29.1	1.73	166	28.0	72	27.2	42	26.4	20	25.5	59	25.6
8	中央周	11	93.6	4.87	161	90.8	72	88.9	41	87.0	20	86.6	59	82.4
9	骨体上横径	8	33.9	2.43	115	32.6	74	32.7	38	31.6	19	30.4	59	29.4
10	骨体上矢状径	8	26.5	1.35	115	26.2	74	26.0	38	25.2	19	24.8	59	24.3
8 / 2	長厚示数	-	_	-	18	21.4	26	20.5	16	21.4	11	21.1	59	20.4
6/7	中央断面示数	11	105.0	10.82	162	106.4	72	107.6	41	108.6	20	113.2	58	103.8
10/9	上骨体断面示数	8	78.5	6.56	115	80.5	74	80.0	39	80.1	19	81.7	58	82.8
脛骨														
. 1	全長	3	351.3	11.02	27	345.6	19	350.5	10	345.3	10	337.0	61	320.3
1 a	最大長	7	355.0	6.56	52	350.5	21	356.9	11	354.8	10	343.0	60	326.9
8	中央最大径	8	33.1	1.72	74	32.0	36	30.6	43	31.0	21	31.7	61	27.8
8 a	栄養孔位最大径	12	37.7	2.35	153	36.5	60	35.7	35	34.5	19	34.7	60	30.6
9	中央横径	8	23.6	1.57	75	22.9	36	22.3	43	21.4	21	19.7	61	21.1
9 à	栄養孔位横径	13	25.0	1.80	153	25.3	59	25.1	36	23.3	19	21.5	61	23.7
10	骨体周	8	89.3	2.12	74	86.5	36	83.6	41	83.4	20	82.5	62	78.4
10 a	栄養孔位周	13	98.6	4.95	151	96.9	58	95.5	34	92.6	19	90.7	61	88.9
10 b	最小周	12	79.3	5.13	122	78.4	63	75.4	38	75.6	17	75.6	60	71.3
9/8	中央断面示数	8	71.4	6.10	74	72.2	36	73.0	43	69.1	21	62.4	61	76.1
9 a /8 a	栄養孔位断面示数	13	66.5	5.38	152	69.5	59	70.5	35	67.7	19	62.0	60	77.5
10 b /1	長厚示数	3	23.9	1.06	26	22.7	19	21.5	10	21.9	10	22.9	60	22.4
腓骨														
1	最大長	-	-	-	8	347.9	14	343.6	-	- (8	333.3	58	322.9
2	中央最大径	4	17.3	1.50	46	17.0	34	16.8	-	_	19	17.5	59	14.5
3	中央最小径	4	11.3	0.50	46	11.6	34	11.4	_	_	19	12.1	59	10.0
4	中央周	4	47.3	4.16	47	47.2	34	47.2	-	_	19	50.7	59	41.5
4 a	最小周	-	-1		24	39.7	25	40.1	_	_	18	41.8	59	35.6
3/2	中央断面示数	4	65.5	3.93	46	68.3	34	67.9	_	_	19	69.3	59	69.5
4 a /1	長厚示数	-	-		8	11.0	13	11.8	_	_	8	11.8	58	11.1

¹⁾ 清野・平井(1928)、2) 阿部(1955)、鑄鍋(1955)

表13 下肢骨計測値の比較(女性、左)

			永岡		1	部九州	Ц			大友		津雲		九州
			(弥生)		(弥生)	(弥生)	(弥生)	(;	縄文)	(.	現代)
L		N	M	S.D.	N	M	N	M	N	M	N	M	Ν	M
大腿骨		.												
1	最大長	8	410.4	19.22	34	405.5	30	403.9	5	386.8	16	385.4	13	380.1
2	自然位長	1	436	_	11	403.0	26	399.5	4	378.3	16	379.9	13	375.9
6	中央矢状径	14	26.6	1.50	112	25.7	50	25.5	30	25.5	24	25.3	13	23.6
7	中央横径	14	27.0	1.36	112	26.3	50	26.2	30	25.2	24	24.1	13	23.2
8	中央周	14	83.6	3.41	111	81.5	50	80.9	29	80.4	24	77.8	13	74.2
9	骨体上横径	10	30.8	2.10	86	30.5	50	31.0	30	29.7	25	28.5	13	27.5
10	骨体上矢状径	10	23.0	1.33	86	23.2	50	23.0	30	22.7	25	22.0	13	21.3
8/2	長厚示数	1	20.0	-	11	20.8	26	20.2	4	20.3	15	20.6	13	19.8
6 / 7	中央断面示数	14	98.9	7.55	112	98.3	50	97.5	31	102.1	24	105.6	13	102.0
10/9	上骨体断面示数	10	74.9	6.04	86	76.4	50	74.5	30	76.5	25	77.4	13	77.1
脛骨								1	(,					
1	全長	4	335.5	13.40	20	324.3	20	326.8	3	313.0	10	317.5	14	301.0
1 a	最大長	7	337.9	12.31	30	329.3	23	331.0	4	324.8	10	321.9	14	306.6
8	中央最大径	8	27.3	2.38	46	27.0	31	26.9	24	27.6	23	27.1	14	24.7
8 a	栄養孔位最大径	13	31.4	2.14	97	30.8	42	30.5	19	30.4	21	30.5	14	28.1
9	中央横径	8	20.4	1.51	46	20.4	31	19.1	26	19.7	23	17.7	14	18.8
9 a	栄養孔位横径	13	21.8	1.88	98	22.3	42	21.6	20	21.1	20	19.2	14	21.1
10	骨体周	8	78.1	4.49	46	74.5	30	72.6	23	75.3	23	72.7	14	70.1
10 a	栄養孔位周	12	83.9	3.40	96	83.2	42	82.2	18	81.6	20	81.6	14	78.2
10 b	最小周	10	69.0	3.68	82	68.6	44	67.5	24	68.3	17	67.1	14	63.6
9/8	中央断面示数	8	75.2	8.08	46	75.7	31	71.1	23	72.1	22	64.7	14	76.3
9 a /8 a	栄養孔位断面示数	13	69.7	7.88	97	72.4	42	71.2	18	70.4	21	63.0	14	74.9
10 b /1	長厚示数	4	20.6	1.94	20	21.3	20	20.3	3	21.4	10	21.3	14	21.2
腓骨														
1	最大長	-	_	_	2	328.0	17	324.0	-	_	5	315.4	14	300.6
2	中央最大径	3	15.7	1.53	34	14.7	29	14.8	-	_	20	14.8	14	12.9
3	中央最小径	3	11.3	1.53	34	9.8	29	9.6	-	-	20	9.7	14	8.6
4	中央周	3	40.3	5.13	34	40.7	28	41.0	-	-	20	43.0	14	36.8
4 a	最小周	-	_	-	8	35.6	21	37.3	-	-	17	36.0	14	32.3
3/2	中央断面示数	3	73.4	16.93	34	67.3	29	65.2	-	_	20	65.5	14	67.6
4 a /1	長厚示数	-	_	-	2	10.8	17	11.6	-	-	5	11.6	14	10.8

弥生人の平均値より長い。骨幹の諸径でも、そのほとんどで比較群中最高値をとっており、当 弥生人が全体的にかなり頑強な下肢の持ち主であったことを表わしている。また、断面型では、 栄養孔位の示数値がやや低く、北部九州の平均値に較べるとやや扁平傾向をうかがわせるが、 縄文人ほどの強度なものではない。

腓骨では、長径は計測できなかったが、その骨幹径を見る限り、おおむね北部九州・山口弥生人の値に類似している。ただ、津雲縄文人の中央周径より下回っている点が上で見てきた下肢での比較関係と異なっており、後述のように脛骨の太さとの関係で、縄文・弥生間の時代差の一端が示されている。

3 長径比・周径比

長径比:北部九州弥生人は縄文人や西九州弥生人に較べて、上腕に対する前腕、大腿に対する下腿の長さが相対的に短いという特徴を持っていることが明らかにされているので、やや例数が不足するものの、永岡弥生人でもその点を検証してみると、表14のような結果となった。さほど明確とは言えないが、やはり上・下肢の遠位部が比較的短い傾向がうかがわれ、一応、北部九州弥生人の一員としての特徴を保持していると言ってよかろう。

周径比:上腕骨と大腿骨および脛骨と腓骨の周径比を同じく表14に示した。北部九州・山口 弥生人は縄文人などに較べて、上、下肢では上肢が、脛骨と腓骨では腓骨が相対的に細いとい

表14 四肢骨の長・周径比の比較(男性・左)

			橈骨	最大長	胫骨	最大長	上腕旬	骨最小周	腓骨	中央周
			上腕骨	最大長	大腿[骨最大長	大腿包	骨中央周	胫骨	中央周
			N *	М	N	М	N	М	N	M
永	圌	(弥生)	3	77.8	7	82.3	8	68.9	4	53.0
北部:	九州	(弥生)	30	78.2	56	81.3	121	70.4	61	54.6
Ш		(弥生)	28	77.6	30	82.2	69	71.7	. 35	56.5
大	友	(弥生)	9	79.4	13	84.5	37	73.0	_	· –
広	H	(弥生)	. 5	83.8	8	84.6	24	77.8	. 7	54.0
津	雲	(縄文)	13	82.4	11	83.4	21	74.7	20	61.5
吉 胡	1)	(縄文)	28	80.2	23	82.5	54	74.7	57	62.3
吉母	浜 ²⁾	(中世)	16	77.1	15	83.2	20	71.2	19	55.4
西南	日本	(現代)	84	74.5	62	80.4.	83	75.0	61	52.9
畿内	3)	(現代)	30	76.1	30	80.2	30	76.9	30	52.0

各平均値より算出 (*例数の平均)

1)大場 (1935), 石沢 (1931) 2)中橋·永井 (1985) 3)宮本 (1934)

表15 推定身長の比較

う特徴を持つが、ここ に見る永岡弥生人の数 値も明らかにそうした 傾向を示している。

4 推定身長

主に大腿骨最大長に ピアソンの推定式を適 用した算定結果を表15 に示した。男性は 162.1cm、女性は152.2 cmで、かなりの高身長 集団といえる。

(3) 抜歯

抜歯の有無の確認で きる18体のうち、2体 に風習的抜歯を疑わせ る歯槽閉鎖が見られた。 以下に順次その歯式を 示す。

		男	性	女	性
		N	М	N	М
永 岡	(弥)	10	162.1	11	152.2
北部九州・山口	(弥)	129	162.6	87	151.3
北部九州	(弥)	80	162.1	52	151.2
(福 岡)		20	163.0	20	151.1
(春 日)		15	162.3	7	150.8
(太宰府・筑紫野)		17	162.4	16	151.8
(小郡・甘木)		8	160.7	3	150.7
(飯 塚)		2	161.6	2	150.9
(佐 賀)		15	162.1	4	150.2
山口	(弥)	49	163.3	35	151.4
(土井ケ浜)		36	163.7	24	151.1
西北九州	(弥)	16	158.8	8	147.9
大友	(弥)	15	159.1	2	149.0
広田	(弥)	14	154.0	10	142.8
北部九州	(縄)	8	159.2	6	150.5
津雲	(縄) *	13	159.9	16	147.3
吉胡	(縄)*	22	158.9	18	147.7
北部九州・山口	(古)	40	162.8	15	150.2
吉母浜	(中)	18	159.7	22	146.5

* 右大腿骨最大長の平均値より算出

K-10号 (男性・熟年)

(×:歯槽閉鎖 ○:歯槽開放 △:歯根のみ /:欠損)

一応、上顎の左右側切歯と右中切歯の歯槽が閉鎖している。閉鎖部は、風習的抜歯でよく観察されるような鋭く滑らかな稜線状ではなく(大多和、1983)、かなり不整で厚みのある鈍円状を呈し、また、隣接の両犬歯(特に左)はやや近心側に傾斜している。一方下顎の対向歯部では、右側切歯から犬歯にかけての咬耗が弱く、咬合面が少し突出し、左側でも弱いながら類似した変化が認められる。なお、現状ではこの下顎咬合面の突出部に上顎犬歯がかみ合った形になっているが、それは上下犬歯とも、それぞれの隣接歯の脱落によって、上顎犬歯は近心側へ、下顎犬歯は遠心側へと傾斜した結果によるものである(図版17-2)。

この男性は、後述のように右前頭骨に外傷痕を持ち、右橈骨には骨折痕が見られるなど、生前の生活が平穏なものではなかったことをうかがわせており、その意味ではここに見る歯槽閉鎖をそうした外傷による脱落の結果と考えてもさほど不自然ではないかもしれない。ただ、下

顎中切歯の咬耗の強さから考えて、上顎右中切歯の脱落は比較的最近のことと推察されるのに対し、上記のように下顎側切歯から犬歯にかけての咬耗の弱さや、あるいは上顎犬歯の近心への傾斜状況などから判断して、上顎左右の側切歯はかなり以前に脱落していた可能性が強い。つまり、生前のある時期、この男性は上顎左右の側切歯を欠いた状態で生活していたことがうかがわれる。

最初に述べたような歯槽閉鎖部の観察所見から考えてみても、この状況でこれを風習的抜歯によるものと判断することは困難である。しかし、北部九州弥生人の中にも、少ないながら明らかに抜歯と思われる事例が存在し、しかもその多くが上顎側切歯を対象にしたものであること、また、上顎側切歯の先天的欠如の頻度(0.57%;住谷、1959)などを考え合わせると当例もまた風習的抜歯である可能性は否定しきれないように思う。

K-48号 (男性・熟年)

上顎の左側切歯に歯槽閉鎖が見られた(図版16-3)。残念ながら骨の遺存状態が悪く、下 顎歯などの観察はできないが、閉鎖部は比較的鋭い稜線状を呈し、隣接の犬歯は近心側へ傾斜 している。当例もやはり明確な抜歯例とは言いがたいが、その可能性はある事例と考える。

以上、ここで示した2例はいずれも明確な例とは言いがたいが、一応、風習的抜歯を疑わせるものであり、ごく低頻度ではあるが、少なくとも当地の弥生時代中期前半頃にはまだこの風習が残存していた可能性を示すものと考える。いずれにしても全体の頻度からみて、おそらくその意図も変容しながら、この風習が急速に廃れていった状況がうかがわれる。

(4) 外傷・病変例

表 5 に示したように、当集団では 3 体に外傷、骨折痕が、 2 体の顎関節に異常が認められた。 $\mathbf{K} - \mathbf{10}$ 号(男性・熟年)

右眼窩内半部、眼窩上切痕近くから内側上方へ約15mmの長さにわたってゆるいS字状の傷痕が見られる(図版17-2)。眼窩上縁部には一部癒合が認められているが、傷の上端部は開離したままで、前頭洞を覗かせている。また、眼窩上壁にも亀裂が残り、その奥に膿瘍によるものと思われる約7mm大の孔が開いている。傷は前頭骨内板には達していない模様だが、前頭稜から約15mm右方に、やはり1cm弱の膿瘍孔が開き、前頭洞を介して前記の眼窩上壁の孔と交通している。亀裂部は既に新生骨の付加、あるいは溶融によって鋭利な断面を失っており、一部に癒合が始まっていることからもうかがわれるように、受傷後、ある程度の期間は生存していたものと考えられるが、膿孔の存在から考えて、傷はその後化膿し、炎症は一方で眼窩上壁から眼窩内へ、さらにもう一方で前頭骨内板を融解して頭蓋内へと及び、これによって死に至っ

た可能性が考えられる。ただ、この傷が何に因るものかは明らかではない。上記の傷痕はゆるい S 字状になっており、これを見るかぎりでは、例えば銅剣のようなもので切り付けられた創傷とは考えにくい。あるいは、元々もう少し広かった傷口がその後の治癒過程でやや変形したものであろうか。ただ、鈍器による打撲傷とは明らかに異なり、何か鋭利な刃物のようなもので印された傷であることは確かかと考える。様々な利器との照合など、さらに検討を加えて改めて報告したい。

また、当人骨の右橈骨遠位端に骨折痕が認められた。かなりの骨増殖が見られ、橈骨手根関節面は手背側に傾斜していわゆる Colles 氏骨折の状況を呈している。なお、これに類似した骨折痕が、K-32号、男性、熟年人骨の左橈骨にも観察された。

K-9号 (男性・熟年)

右第2中手骨に、強度の変形治癒骨折例が見いだされた。手根関節面から約1.5cmの位置で骨幹が下方に屈曲し、遠位部の断面はまだ鋭利な破面を見せて突出している。ただ、骨折部の骨増殖も著しく、中手骨骨幹が交差したまま癒合して、強度の変形治癒骨折例となっている。 K-36号(女性・熟年)・K-39号(女性・成年)

下顎関節突起が全体的に退縮し、下顎頭も前後に薄く変形、縮小している(図版16-2)。また、おそらくこの変化に関連して、筋突起は通常より良く発達し、筋突起先端部の後内側に副突起の形成が認められる。一方、下顎窩中央にも、この下顎頭の変形に合わせて、深さ約3mmの溝が穿たれている。K-36号では両側に、K-39号左側(右側は欠損)でもやや軽度ながらこれに類似した変形が確認される。おそらく顎関節の酷使に因っておこった、いわゆる顎関節症の1例と考えられる。

(5) 銅剣切先嵌入例 (図版18)

SK-95号 (男性・熟年)

右腸骨稜、上前腸骨棘より約3cmの位置に銅剣切先(長さ12mm)の嵌入が見られた。銅剣は、右外側やや下方より斜め上方へと突き刺され、腸骨稜部を貫いてその先端を腸骨内面にわずかに覗かせている。この部分には太い動脈や、後に重大な傷害を残すような神経、筋肉もないので、これによって直ちに落命したとは考えにくく、また、切先の周囲に少し骨増殖も認められるので、どの程度の期間かは不明ながら、受傷後も生存していたことがうかがわれる。

なお、当人骨では、やや不良ながら体部骨はほぼ全部位を確認できるが、頭骨だけは1片も見あたらなかった。軸椎など、上位頸椎もなく、全体の遺存状況から判断して、通常は最も残りやすい頭骨片が(Nakahashi & Nagai、1986~7)存在しないことは不自然である。同じ筑紫野市の隈・西小田遺跡(未発表)や小郡市狐塚遺跡(松下、1985)など、近在の弥生時代の遺跡から明らかに首を切った遺体を埋葬した例が報告されており、さらに、隈・西小田遺跡では小児棺に男性の頭蓋だけを入れた例(未発表)も存在することなどを考え合せると、少なくと

も一部にそうした風習が存在したことは確実である。残念ながら当例は骨の破損が著しく、切 断面などの確認は困難だが、そうした1例である可能性は十分考えられよう。

SK-100号 (男性・若年)

左仙腸関節部に後方より、53mm長の銅剣先端部が嵌入している(永井、1983)。まっすぐに立った姿勢を想定すると、正中部より約5cm左側、第1後仙骨孔の高さでほぼ矢状方向に、後方やや下から斜め上へと差し貫かれ、先端部だけが折れ残った状況である。当部位は、腸骨でも最も厚い(約2cm)上後腸骨棘にあたるが、銅剣はそれを貫いて、仙骨左外側部上面に切り込み、その後縁から約1.5cmのほぼ仙腸関節の後端の位置で関節を貫き通して、さらにその先端を約6mmほど仙骨前面に突き出して止まっている。大殿筋など、筋肉の厚みも考えると、相当に強い力で突き刺されたものと考えられ、また、その先端突出部は総腸骨動脈などの走路にも近く、特に腰、仙骨神経叢を構成する諸神経が密に分布しているところでもある。骨の遺存状況がやや悪く、治癒機転の有無を確認することは困難だが、こうした傷の位置、深さから考えて、これが致命傷になったと考えても不自然ではない。

また、当人骨では、左大腿骨頭部付近に、石剣切先も見いだされており、おそらくこの近辺 に突き刺さっていたものと考えられる。つまり、このまだ未成年の男性は左腰に銅剣と石剣の 2本の切先を突き刺されたまま埋葬されたことになる。

4. 総括・考察

福岡県筑紫野市の永岡遺跡において、1972年以降、3次にわたる発掘調査が実施され、総計53体の人骨が出土した。1体の土壙墓人骨を除いて、全て甕棺墓に見いだされた人骨で、その考古学的所見より、ほぼ弥生時代中期前半の遺骨と見なされるものである。計測、観察所見に基づく比較検討の結果を以下に総括する。

〈頭蓋骨の形質〉

- ・脳頭蓋の各水平径、高径、周径はいずれも大きく、北部九州弥生人の平均を上回っている。 頭長幅示数、長高示数、幅高示数はそれぞれ中、高、中頭型で、近隣の弥生人と大差ない。
- ・顔面もまた全体的に大きく、特に上顔高(男77mm、女70mm)をはじめとする各高径の高さが 目立つ。したがってその示数も、例えば Kollmann の上顔示数は男女それぞれ54.7、51.4(中 上顔型 mesèn)に達し、強い高顔傾向を示している。
- ・眼窩、鼻部もそれぞれ高眼窩、狭鼻傾向が明らかで、また鼻根部および前頭部や頰上顎骨の 偏平性も著しい。なお、歯槽性の突顎は認められない。

〈四肢の形質〉

- 上肢はいずれも長径の大きさが目立ち、男性では骨幹諸径もやや太い傾向が見られる。
- 男性上腕骨の骨体断面は軽度の扁平傾向を示すが、前腕の各断面示数には、縄文や西九州弥

生人との間に明確な差が認められる。

- ・下肢もまた長く、頑丈な特徴を示し、男女とも、他地域、時代の集団はもとより、近隣の北部九州弥生人の平均をも上回る傾向を見せる。
- 大腿骨の柱状性は弱く、脛骨の扁平性も顕著なものではない。
- 縄文や西北九州弥生人に較べ、前腕、下腿とも各近位部より相対的に短い。
- 上肢に対して下肢の頑強さが目立ち、また、脛骨の太さに対して腓骨は相対的に細い。
- 推定身長は男性162.1cm、女性152.2cmで、ともに高身長である。

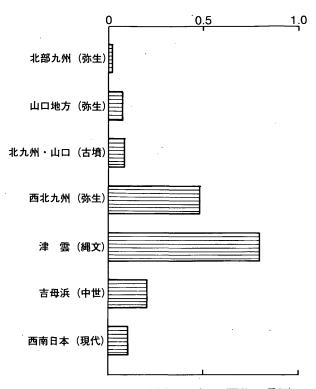
〈その他〉

- ・2体の男性熟年人骨(K-10・K-48)に、上顎左右側切歯および上顎左側切歯の風習的抜歯を疑わせる歯槽閉鎖が見られた。
- 1 体の男性熟年人骨(K-10)の右眼窩上部に鋭利な刃物による、おそらくは致命的な傷痕が見られた。
- ・2体の男性人骨(SK-95・SK-100)において、1例は右腸骨稜部に、1例は左仙腸関節部にそれぞれ後下方より銅剣切先嵌入。後者はさらに石剣切先も伴っていた。
- ・ 2 体の男性人骨($K-10\cdot K-32$)の橈骨遠位端、別の 1 体の男性人骨(K-9)では右第 2 中手骨に骨折痕が認められ、また、 2 体の女性人骨($K-36\cdot K-39$)には顎関節症の兆候が認められた。

以上に述べてきた永岡弥生人に関し、まずその形態的特徴については、これまで近隣の弥生 集団で明らかにされていたことからも容易に推察されるように、著しい高顔と高身長を特徴と する、いわゆる「渡来系」弥生人の一員としての特徴を明確に示すものであった。顔面諸径、 特に高径の大きさ、高眼窩、狭鼻傾向、鼻根部をはじめとする顔面の扁平性、長い手足、骨幹 断面の柱状性と扁平性の弱さ、前腕、下腿の相対的な短さ、やや華奢な上肢に対する下肢の頑 丈さ等々、いずれについても縄文集団や西北九州弥生人との間に大きな隔たりを示す特徴とな っており、そうした当集団の位置付けについては、例えば男性頭蓋9項目を用いたペンロース の形態距離の計算結果にも明らかである。(第127図)。

ただ永岡弥生人で目立つ特徴の1つとして、北部九州一帯に広がる同系集団の中でも、永岡は頭蓋全体のサイズの大きさ、特に顔面の高さで際立っている点があげられる。ちなみに、第128図は、同じ福岡県下では最大の人骨集団である福岡市金隈遺跡の各個体および西北九州や縄文人の中に永岡を入れて主成分分析を行ったものである。この図ではほぼ、右上にいくほど全体のサイズ、特に顔面高径が大きく、また右下にいくほど広、低顔傾向が強いという関係になっており、その中でまず金隈や永岡弥生人が西北九州や縄文人と明確に分離されていることが見て取れよう。そして永岡は一応金隈の分布域には入っているものの、かなり上方に、つまり大きく、高顔傾向の強い位置にまとまっていることがわかる。

同じ「渡来系」とされる弥生人の 中でも、土井ケ浜を代表とする山口 県地方の弥生人と北部九州の甕棺出 土の弥生人では幾つか異なる点が見 られるし、また北部九州内でも、そ の中心部と周辺部、あるいは沿岸部 と内陸部といった地域間にやや形質 上の差異がうかがわれることも次第 に明らかになりつつある(中橋他、 1985;中橋・永井、1989 a)。当地域 弥生人に見る特異とも言うべき形質 の由来を大陸に求める立場からする と、おそらくは土着の人々との接触 の密度とも相関した、そうした地域 差をより明確にしていくことは、渡 来人の遺伝的影響を追跡するうえで の重要課題となろう。筆者らはこの 点に関して、福岡平野の南部からこ



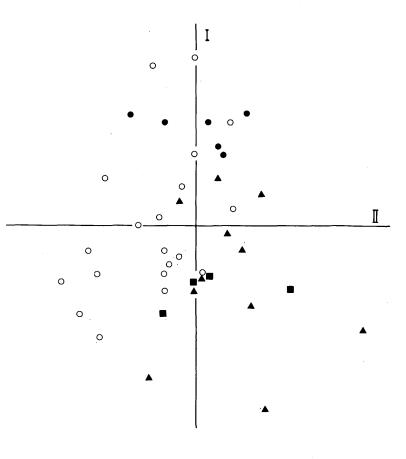
第127図 ペンロースの形態距離(男・頭蓋9項目)

の筑紫野市あたりにかけての弥生人に、高顔性という、「渡来系」弥生人を代表する形質が特に顕著にみられることを指摘してきたが(中橋・永井、1987)、永岡弥生人はその傾向を端的に表す集団と言えよう。こうした同系集団内における微妙な差異を問題にするにはまだ資料が十分とは言えないが、しかし現在、同じ筑紫野市内の隈・西小田遺跡からもこれをはるかに上回る数の弥生人骨が出土しつつある。上記の地域性が何を要因として生み出されてきたのか、その答えを求めることは、おそらく永年議論の続けられている渡来人問題やその遺伝的影響を探ることと直結した課題になるはずであり、今後、そうした新たな資料に関する結果が得られた時点で、改めて考察を加える必要があろう。

また、当弥生集団では、2例の男性人骨に銅剣切先が嵌入したまま見いだされ、他にも前頭部におそらくは致命的な傷を受けた男性や、首が最初から無かったと思われる遺体も検出されたが、この遺跡の立地とも関連して、当時の弥生人社会の実態を如実に示す実例として興味深い。橋口(1986、1987)はこうした利器の嵌入例や供伴例を列記し、弥生前期後半から中期前半にかけて、北部九州一帯の稲作を生業とする弥生人社会も、その人口増加に伴って土地不足や水争いなどに発する武力衝突が頻発するようになったことを指摘している。ここにみる例はそうした当時の不穏な社会環境を端的に示す好例と言え、それはまた、当遺跡が北の福岡平野

と南の筑紫平野の境界域 に位置することとも無縁 ではない筈である。

もう1点、当弥生集団 で指摘しておきたいのは、 遺存人骨でみる限りは明 らかではないが、甕棺の いわゆる成人棺、小児棺 の割合で考えると、未成 人期、特におそらくは乳 幼児期に死亡した割合が 非常に高いという点であ る。先に筆者らは北部九 州弥生人の寿命について 少し考察を加えてみたこ とがあるが(中橋・永井、 1989 b)、永岡遺跡は北 部九州に点在する弥生遺 跡の中でも特にこの小児 棺の割合が高い集団のよ うであり(少なくとも



●永岡、○金隈、■西北九州弥生、▲縄文第128図 主成分分析(男,頭蓋9項目)

60%以上、中型棺を小児や若年用と仮定すると、未成人死亡者は70%前後に達する)、上記の受傷人骨の多さとともに当遺跡のおかれていた生活、社会環境の厳しさが、この死亡状況にもはっきり示されている。そして、その多くの小児棺が、二列に配置された各成人棺に寄り添うように埋められていることも、当時の人々の幼くして死亡した子供達への心情をうかがわせるようで興味深い。残念ながら、当遺跡では小児骨の遺存状況がきわめて悪く、詳しい寿命などの計算は困難だが、仮に上記のように成人に達するまでに、70%が死亡したと仮定すると、その平均寿命は著しく短くなり(10歳代前半)、人口の維持すら困難な状況が浮びあがってくる。

弥生社会全体としては人口増加期にあったとしても、受傷例の多さや地理的条件等も勘案すると、こうした集団も一部に存在した可能性は十分あり得よう。ただ言うまでもなく、この状況をもって当地域の弥生社会を代表させる訳にはいかず、当然、遺跡や時代によってかなりの差異・変化があったものと考えられ、当時の人口動態については、まだまだ今後の研究に待つべきところが多い。幸い、同市内ではより大規模な埋葬集団を含む遺跡の発掘が続けられてお

り、いずれこうした点についても、さらに詳細な考察も可能になるものと期待される。

謝辞: 当人骨を研究する機会を与えていただき、色々と御教示下さった筑紫野市教育委員会の 皆様並びに、福岡県教育委員会の橋口達也先生に深謝いたします。

文 献

阿部英世(1955): 「現代九州人大腿骨の人類学的研究」人類学研究 2

浜田信也(1977): 「福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告書 5」筑紫野市所在永岡甕棺遺跡、福岡

県教育委員会

浜田信也(1981):「永岡遺跡」筑紫野市埋蔵文化財調査報告書 6、筑紫野市教育委員会

原田忠昭(1954):「現代西南日本人頭骨の人類学的研究」人類学研究 1

橋口達也(1986):「犠牲者」弥生文化の研究 9、雄山閣

橋口達也 (1987) : 「集落立地の変遷と土地開発」東アジアの考古と歴史 同朋社

Howelles, W. W. (1973) : "Cranial variation in man" Pap.Peabody Mus. Archaeol. Ethnol., vol. 67, Harvard Univ.

鑄鍋勝登(1955):「九州人下腿骨の研究」人類学研究 2

石沢命達(1931):「吉胡貝塚人骨の人類学的研究 第3部 下肢骨の研究」人類学雑誌 46

金高勘次(1928): 「吉胡貝塚人骨の人類学的研究」人類学雑誌 43

清野謙次・宮本博人 (1926) :「津雲貝塚人人骨の人類学的研究 第2部 頭蓋骨の研究」人類学雑誌 41

清野謙次・平井隆 (1928) : 「津雲貝塚人骨の人類学的研究 第3部 上肢骨の研究」人類学雑誌 43 清野謙次・平井隆 (1928) : 「津雲貝塚人骨の人類学的研究 第4部 下肢骨の研究」人類学雑誌 43

Martin-Saller (1957) : "Lehrbuch der Anthropologie" Bd.l. Gustav Fischer Verlag. Stuttgart.

松下孝幸(1981):「佐賀県大友遺跡出土の弥生時代人骨」大友遺跡 佐賀県呼子町文化財調査報告書

_松下孝幸(1985):「福岡県小郡市横隈狐塚遺跡出土の弥生時代人骨」横隈狐塚遺跡Ⅱ 小郡市文化財調 査報告書 27

宮本博人(1934):「現代日本人人骨の人類学的研究」 人類学雑誌 39

溝口静夫(1957):「現代九州日本人前腕骨の人類学的研究」人類学研究 4

内藤芳篤(1971):「西北九州出土の弥生時代人骨」人類学雑誌 79

永井昌文(1977):「出土人骨について」福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告書 5

永井昌文(1983):「弥生人骨における異物嵌入例」解剖学雑誌 58 (抄)

永井昌文教授退官記念論文集・九州大学医学部第2講座資料集成(1988):「日本民族・文化の生成」六 興出版

中橋孝博・永井昌文(1985):「山口県吉母浜遺跡出土人骨」吉母浜遺跡 下関市教育委員会

中橋孝博・永井昌文(1987):「北部九州地方の弥生人について」解剖学雑誌 65(抄)

中橋孝博・永井昌文(1989 a): 「弥生人の形質」弥生文化の研究 1 雄山閣 中橋孝博・永井昌文(1989 b): 「弥生人の寿命」弥生文化の研究 1 雄山閣

T. Nakahashi & M. Nagai (1986~7) : "Preservation of human bone in prehistoric and historic sites of western Japan" Asian Perspectives 27:15~27

中橋孝博・土肥直美・永井昌文(1985):「金隈遺跡出土の弥生時代人骨」史跡 金隈遺跡 福岡市埋蔵 文化財調査報告書 123

大場秀夫(1935): 「吉胡貝塚人骨の人類学的研究、 4 上肢骨の研究」人類学雑誌 50

大多和利明 (1983) : 「広田弥生人の所謂風習的抜歯 特にその抜歯痕の検討」九州歯学会雑誌 37

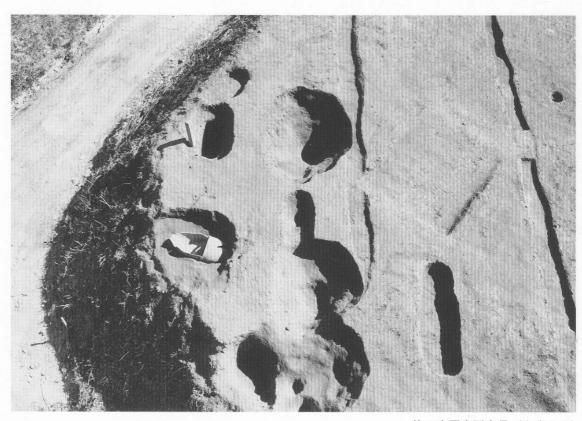
専頭時義(1957): 「現代九州日本人上腕骨の人類学的研究」人類学研究 4 住谷靖(1959): 「日本人における歯の異常の統計的観察」人類学雑誌 67

义

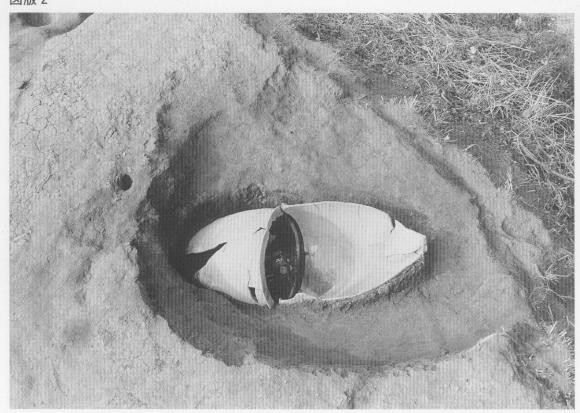
版



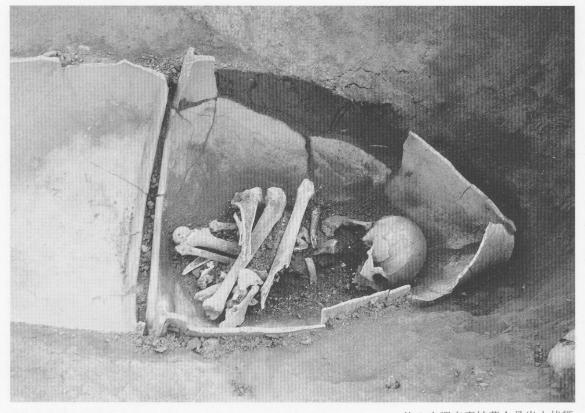
第2次調査区全景(上空から)



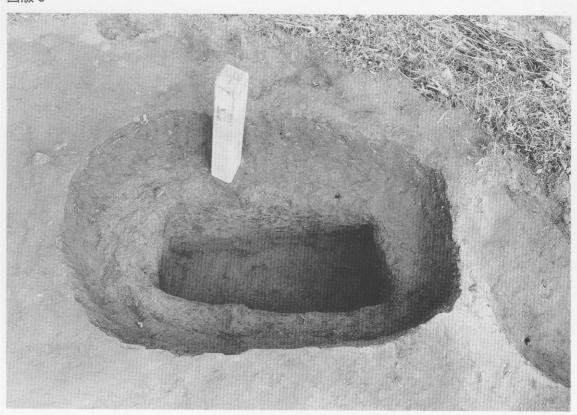
第3次調査区全景(上空から)



第3次調查甕棺墓(BK-1)



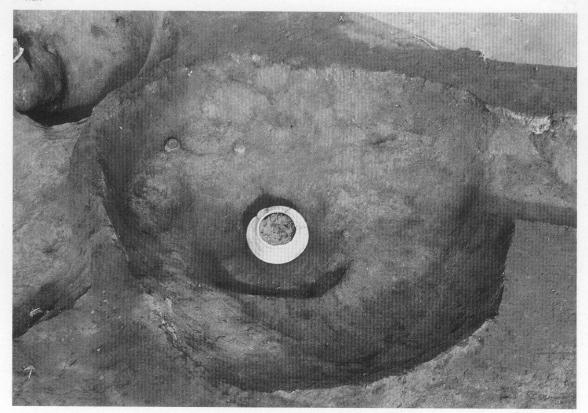
第3次調查甕棺墓人骨出土状態



第3次調査木棺墓



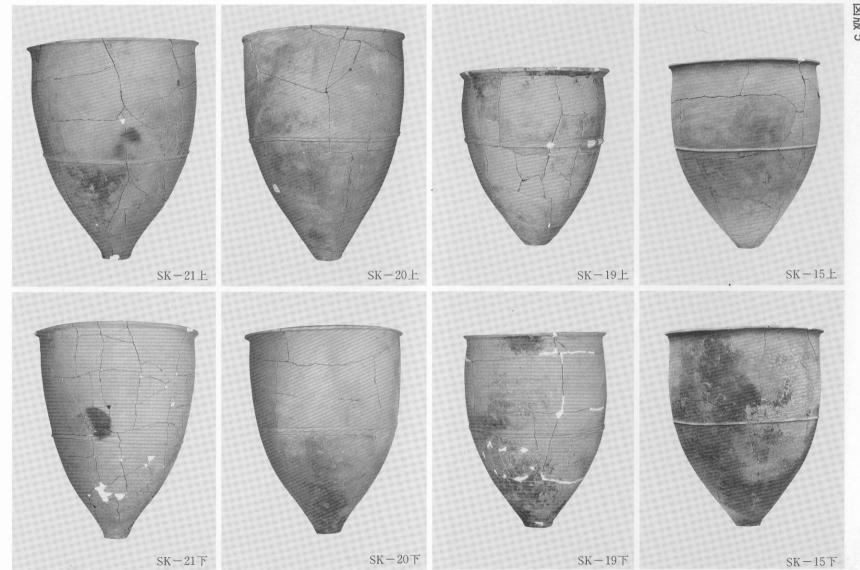
第3次調查1号祭祀土壙

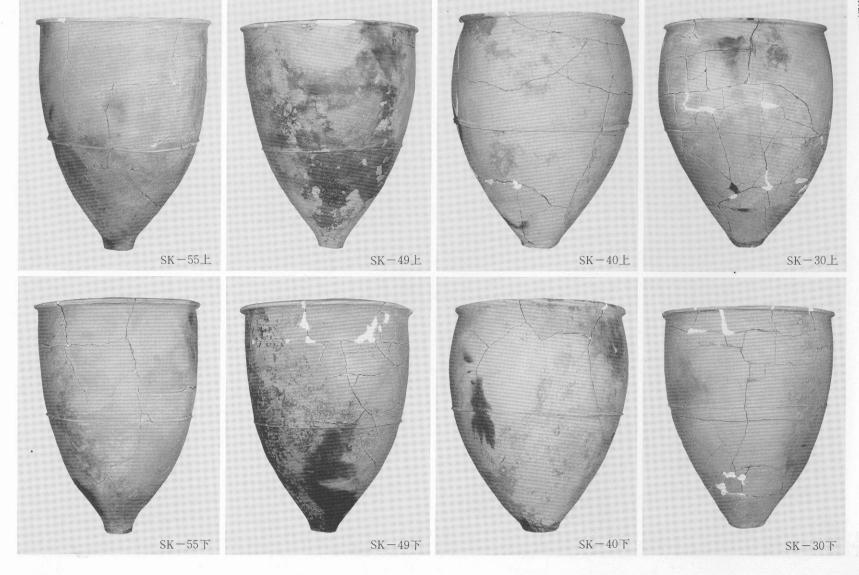


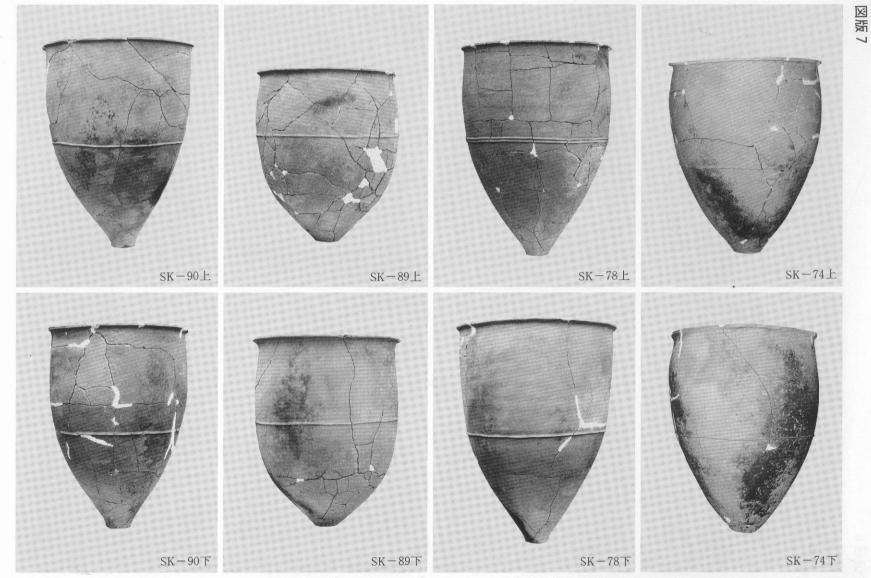
第3次調查2号祭祀土壙

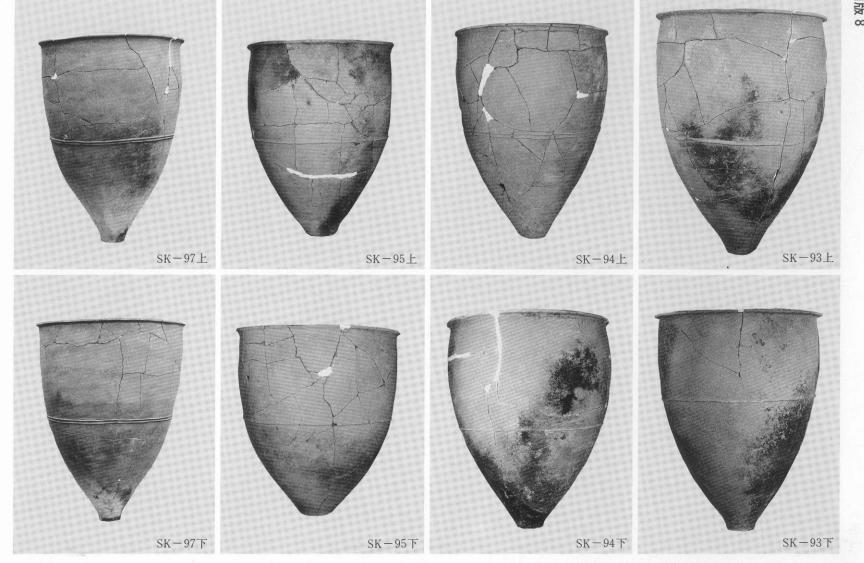


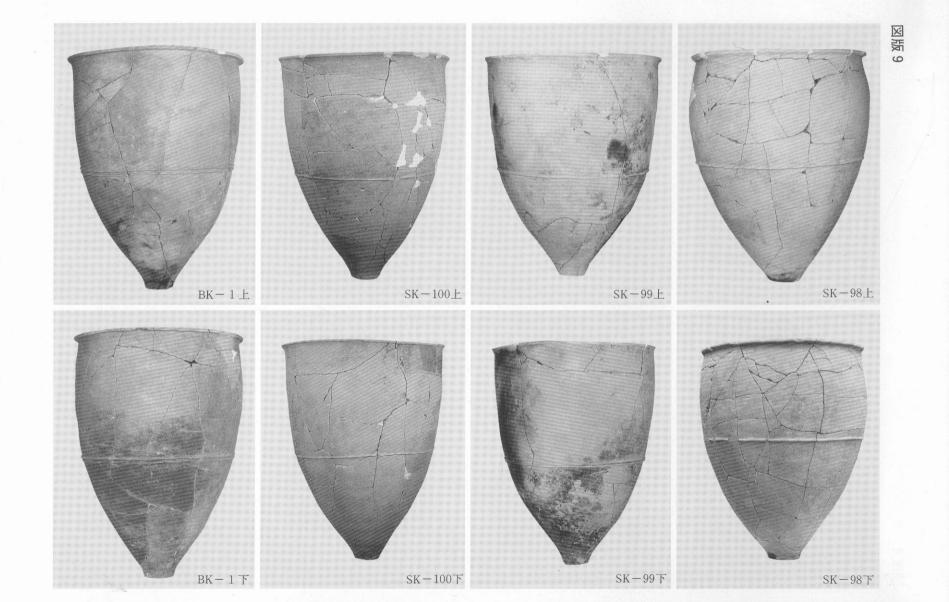
第3次調查3号祭祀土壙

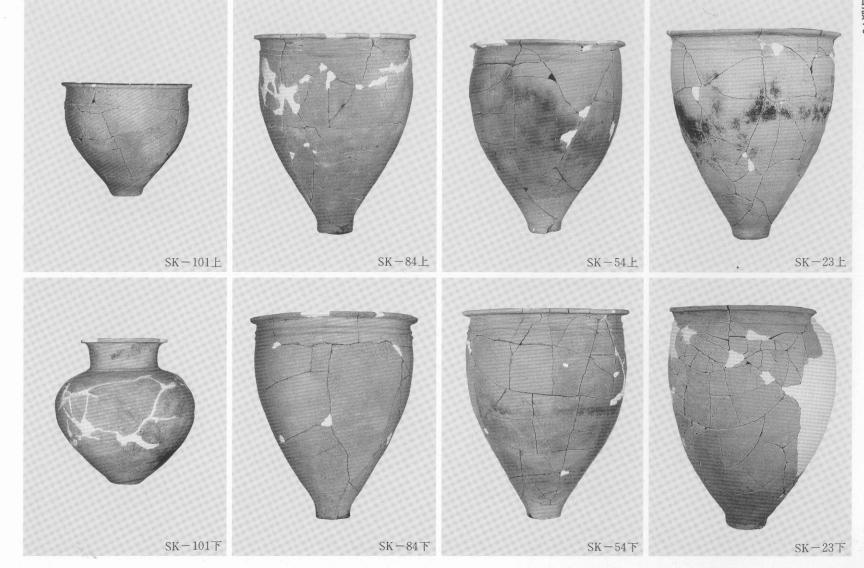


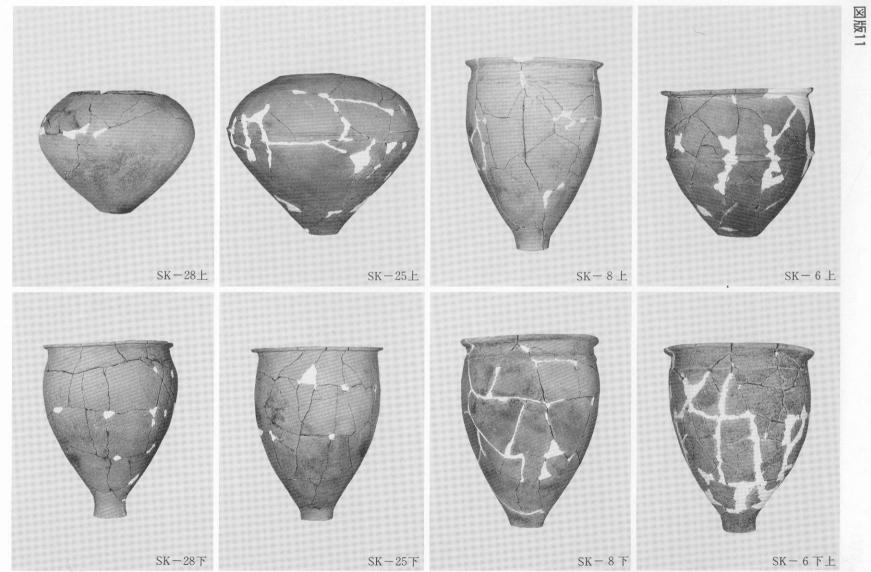


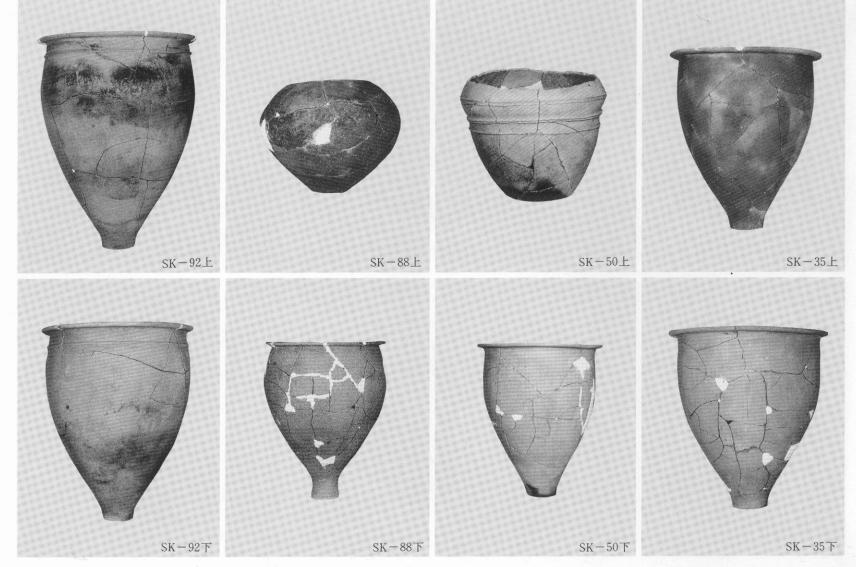


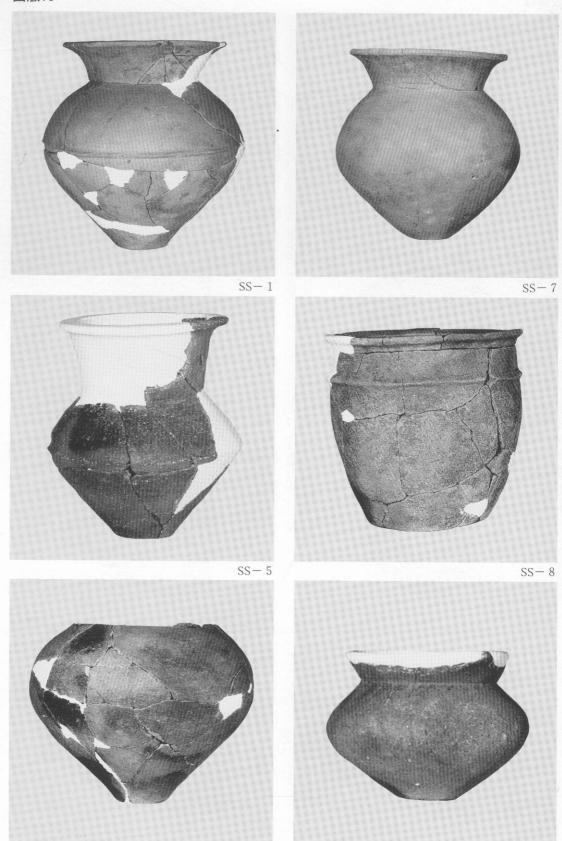












SS-5

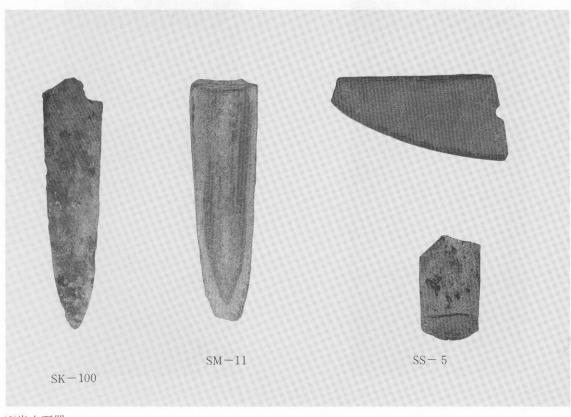
SS-9



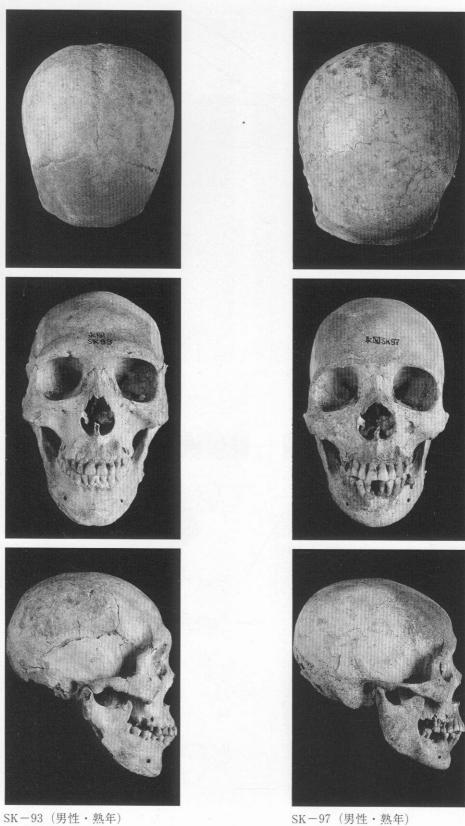
(1)祭祀土壙出土土器

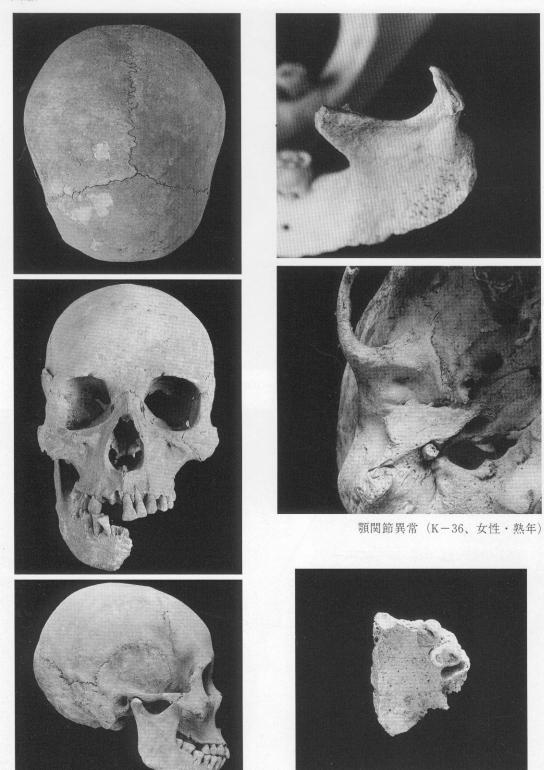


SS-153次調查1号祭祀



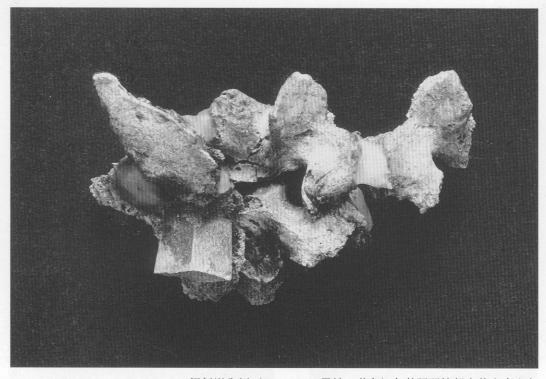
(2)出土石器



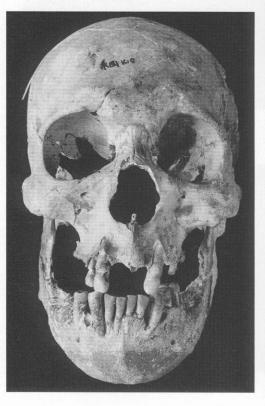


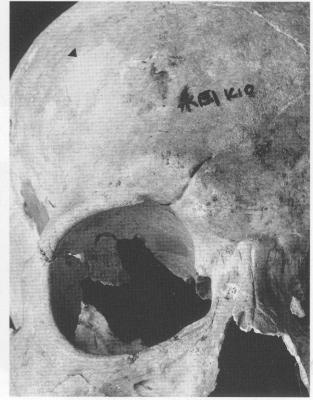
<u>I2</u>の抜歯 (K-48、男性・熟年)

K-38 (女性・成年)

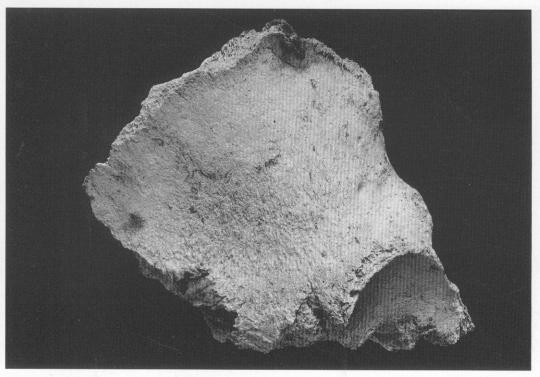


銅剣嵌入例 (SK-100、男性・若年) 左仙腸関節部を後上方より

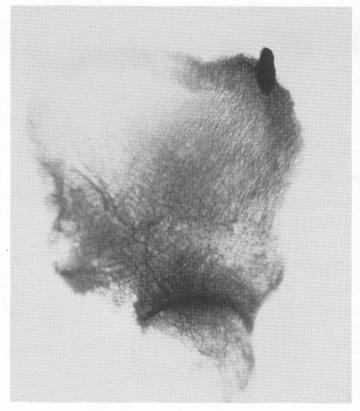




右眼窩上部に傷痕のある人骨 (K-10、男性・熟年)



右腸骨外側面





X線像 銅剣切先嵌入例 (SK-95、男性・熟年)

永 岡 遺 跡 Ⅱ

筑紫野市文化財調査報告書 第26集

発行 筑 紫 野 市 教 育 委 員 会 福岡県筑紫野市大字二日市753-1

印刷 瞬報社写真印刷株式会社 下関市大字清末1328番地

